

---

# 魔法少女リリカルなのは～正義の味方～

土屋 ハヤト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜正義の味方〜

### 【Nコード】

N9994M

### 【作者名】

土屋 ハヤト

### 【あらすじ】

いたずら大好きで正義感の強い少年、雨宮楓が7つの能力を得て、なのはの世界に転生。彼は自分の正義を貫けるか。10代の最強を決める闘いインターミドル編開始です。現在誤字・脱字・物語のバランスのチェック中です。

## プロローグ（前書き）

こんにちは。土屋 ハヤトと申します。

まずこの物語は主人公最強です。

こうというのが苦手な方は読むことをお勧めしません。

また私の文才が無いのでそこは目をつぶってもらえると幸いです。

駄作ですがよろしく願いいたします。

## プロローグ

正義の味方になりたかった。

家族を事故で失った俺は友達の家に住むことになった。

俺はオタクだった。

自分自身でやり繰りもしてたからお金の心配はなかった。

しかし、昔からそのせいでいじめられた。

だけど俺を助けてくれた4人の友達。

その友達のおかげで俺にも仲間が出来た。

みんなは俺にとって正義の味方だった。

みんなのお陰で俺は幸せだった。

しかし、その幸せは長くは続かなかった。

高校2年生のある日学校に殺人犯が立てこもった。

その日みんな死んだ。

生き残った僕は家に居づらくなり旅にでた。

全てを失った。

そして、俺は世界を回り人を助け回った。

正義の味方になるために。

人を助けた。

でも同じだけの人が死んでいった。

戦争や紛争。

理不尽な殺人。

災害や事故。

助けても人は死んでいった。

でも、俺は目指した。

正義の味方を。

「若造。ここじゃ見かけない顔だな」

「オッス。ホームレスのオツちゃん」

「そんなに荷物を持って何しに来たんだ」

「旅してる」

「若いのに大変だね」

「まあな」

旅に出て2年たった。

日本は東南アジアなどに比べたらかなり平和と言ってもいいだろう。

ふと道を眺めていた時一人の男の子がボールを取りに道路に出た。

俺は危ないと男の子に注意をしようとベンチからたった。

気づいたときには遅かった。

トラックが猛スピードで子供に近づいていた。

考える暇もなく、俺は走り出した。

ギリギリだった。思い切り男の子の体を歩道に突き飛ばした。

俺が憶えてるのはそこまでだ。

## プロローグ（後書き）

感想をお願いします。

## 主人公設定（ネタバレ含み）（前書き）

更新できずにすみません。いろいろ課題とか課題が忙しくて。

また、今回は主人公設定なので多少ネタバレを含むので読みたくない人は戻ってください。



## 主人公設定（ネタバレ含み）

名前

雨宮楓

年齢

199

容姿

GOD EATERの雨宮リンドウ

性格

お人好しな性格だが自分の正義を曲げないためになのはやシグナムと衝突する事がある。

バリアジャケット

fateのアーチャーとおなじ赤い外套を着ている。

デバイス

・アクイラ

GOD EATERの神機と同じように剣形態・銃形態・補食形態がありオリジナル形態も存在する。

・??????

楓のユニゾンデバイス。詳しくは非公開。

魔力ランク

B

魔力光

ティアナ・ランスターの魔力光より透き通ったオレンジ。

魔力変換資質

修行すれば能力で全て使えるが、かなり困難。

しかし、元からの魔力資質「凍結」がある。

リアルキル<sup>II</sup>神から貰った能力

・創造  
クリエイト

楓が知っているアニメ・漫画・ゲーム・特撮に出てくる武器なら宝具でも作れるがレベルが高い武器ほど肉体に負担をかける。

・能力  
アビリティ

楓が知っているアニメ・漫画・ゲーム・特撮に出てくる能力を殆ど再現出来るが強い能力ほど肉体に負担をかける。(ただし、神の力

により蘇生は出来ない)

・肉体限界

自分の肉体を常に最強の状態にする。(この能力に魔力も含まれる)

・??????????

????????????????????????????????

・??????????

????????????????????????????????

・??????????

????????????????????????????????

・??????????

????????????????????????????????

### 備考

高校2年の時に友達を亡くしてしまい同じような犠牲を生み出したくないため旅にでる。事故で死ぬが本来は死ぬはずの人間では無かったため神により転生させて貰う。しかし、その代償として前の世界の寿命しか生きることが出来ず、本来の寿命が尽きると神の刺客が命を奪いにくる。

楓：何で本編を書かずにこれを書いた。

作者：いろいろ大変なんだよ。課題とか課題とか課題とか……

楓：全部お前の私情じゃねえか！！

作者：すみません！！だから、そのデバイスは仕舞ってください！！

楓：で、上の????は何だよ。

作者：1つめはまださすがにみせられないもの。そしてもう1つは……

楓：もう1つは……

作者：すみません……思いつきませんでした。えへ

楓：キモイ。そして果てる。

作者：酷いわ。

楓：とにかく早く書けよ。

作者：頑張ります。善処します。お願いですからデバイスを仕舞ってください。

楓：ちつ、次回「神様だって失敗するんだよ」だ。

作者・舌打ちしたよね。最初から扱いひどくね？

主人公設定（ネタバレ含み）（後書き）

頑張ります。

1話 神様だって失敗するんだよ(前書き)

更新したいですが、10日ほど田舎に帰るので更新が出来ません  
ほんと申し訳ないです。

## 1話 神様だって失敗するんだよ

ここは何処だろう？周りが全部白い。

やばいな。天地がつかめないから気持ち悪くて吐きそう。

「うぬ！来たのう」

声をかけられたとたん俺は恐怖した。今まで真っ白で何も無かった空間。しかも自分の前に急に出てきたのだ。白髪に白い髭のじいさんがいたのだ。

「あんた、神か？」

「おお。すごいのう。今までお前の様な因果を持った者を見てきたが神といきなり見抜いた者は珍しいぞ」

関心するようにじいさんは言うがそんなこと今関係ない。

「君の言う通りワシが神じゃ」

「で、その神様が死んだはずの俺に何の用なんだ？」

「さすがじゃのう。自分が死んでることにさえ気づいてるとわ」

当たり前だ。思い出せないはずがない。俺はトラックに跳ねられた。  
.....

「じつはあの事故はホントは起らないはずだったんじゃ」



「どごゆごごだよ」

「本当は、あの事故は明日トラックと誰も乗っていない軽自動車と起きるはずだったのだ」

「じゃあ、何であんなことに」

「それはワシが事故の予定を間違えてしまったのじゃ」

「は!?!」

じいさんはそう言うのが納得いかねえ。

「友達と将棋してたら、事故ってそろそろだなと思ったら明日だったんじゃ」

「オイ……」

「うぬ?」

「てめえ!!そこに座りやがれ!!」

「ウヲオ!!」

（数分後）

「だから何回も謝っているじゃろ」

こいつ分かってねえ。

「俺がキレてるのは、お前があんな事故を起こしたってとこだ。俺のことはどうでもいい。だがな・・・もしもあのガキが怪我でもしたらどれだけの人が悲しむと思っているんだ」

「それは・・・」

「まあ今回のことで死んだのが俺だけだったからよかったから許してやるけど」

俺には家族も悲しんでくれる人もいない。

「そのことなのじゃが」

突然じいさんが切り出す。

「おぬしは本来は死ぬはずの無い人間じゃ。じゃからおぬしに新たな命を与えねばならない」

「それって転生か」

「その通りじゃ」

転生って憧れるじゃねえか。

「ならばFateの世界に転生させてくれよ」

アーチャーに会いたいんだ。

「それがのう、そうも行かないんじゃない」

「と、言いますと?」

「ワシが管轄しているアニメ世界は4つしか無いのじゃ」

「何だと?ならFateの世界には行けないのか?」

「その通りじゃ。だから次の世界から選んでくれ」

1 しまじろう

2 ハム太郎

3 ドラえもん

4 魔法少女リリカルなのは

まじかよ。なのは以外ろくなのがないじゃねえか。

「じゃあ、なのはで頼む」

「分かった。それとお詫びとしてお主には7つの力を与えてやる」

「じゃあ次のやつ頼む」

クリエイト  
・創造

俺が知っているアニメ・漫画・ゲーム・特撮に出てくる武器なら宝具でも作れる。

アビリティ  
・能力

俺が知っているアニメ・漫画・ゲーム・特撮に出てくる能力を殆ど再現する。

・肉体限界

自分の肉体を常に最強の状態にする。(この能力に魔力も含まれる)

・答えを出す者  
アンサー・トーカー

金色の魔物のパートナーの能力と同じ。

「それだけで良いのか？」

「後の3つは向こうで頼んでいいか」

「まあいいじゃろう。しかし答えを出す者は能力でも使えるんじゃないか？」

「そっちの方が楽だろ」

「しかし、力が強すぎるから制限はするぞ」

「制限って？」

「お主が成長するにつれて創造と能力を使えるようにする」

「何でそんなめんどくさいことするんじゃないか？」

すると神はまじめな顔になった。

「お主は前の世界の残りの寿命しか生きられないのじゃ」

はあ、だから都合が良すぎたのか。

「まあ、それはいいけど、家とか金とかデバイスはどうするんだよ」

「それは、私が用意しよう」

マジで？ラッキー。

「それなら家は1期でフェイトが住む家の隣にしてくれ」

「なんでじゃ？」

「そっちの方が、将来的に動きやすいだろ」

「なるほど」

「デバイスは神機のような物にしてくれ。あとユニゾンデバイスも頼む」

「ユニゾンデバイスは時間がかかるがいいか」

「ああ」

「それじゃ話は決まりじゃ。行ってこい」

「え？」

俺の足元に黒い穴が開く。

「やっぱりこんな展開か！！」

それにしても気持ち悪い。

ちゃんとたどり着けるのかな？

2話 能力使ったら大変なことになりました(前書き)

ギリギリ投稿出来ました。

## 2話 能力使ったら大変なことになりました

問1 今どこにいる？

雨宮楓の答え「空」

問2 今どんな状況？

雨宮楓の答え「落ちてる。すんげえ速さで落ちてる」

問3 これからどうする？

雨宮楓の答え「うん。どうしよう……」

楓です。落ちてます。

さてどうしよう。まだ魔法の勉強とかしてないから空飛べないし。そう考えると一番のチートってなのはだな。将来は魔王になってるし。ともかく能力を使って何とかするか。

「縛道の三十七！吊星」

ひとまず吊星をはって落下を止めた。

「これで何とか？鼻血？」

なぜかは知らないが鼻血が大量に出てくる。別に変なこと考えてないぜ……！



「とにかくここから地上まで30mはあるな。肉体強化されてるけど大丈夫かな？」

しかし、あのじいさん。ヒモなしバンジーさせるならデバイスくらい渡しとけよ。

『私ならここにいますよ』

おかしいな？空の上で鮮明に誰かの声が聞こえた。

『マスター聞いてますか』

すまん。誰がマスターだ？

『あなた以外に誰がマスターだと思うのですか』

「ですよね」

声の主は右腕についで腕輪だった。

「で、君の名前は何？」

『私にはまだ名前がありません』

「なら、お前の名前はアキラだ」

『アキラですか。いい名前です』

「よし！アキラ。バリアジャケットは展開できるか？」

『ええ。いつでも』

俺は吊星から地上に向けて飛んだ。

「いくぜアキラ」

『はい。マスター』

「アキラ！セットアップ！」

『Stand by ready・set up.』

俺をオレンジの光が包む。

光が消えたときには俺はFateのアーチャーと同じ服装。左手には巨大な大剣を握りしめていた。

「うお。かつけー」

『マスター。関心している場合じゃありません』

「そうだな。創造を使うかアキラひとまず待機モードに戻ってくれ」

『はい、マスター』

「創造、×グローブ」

俺は家庭教師ヒットマンリボンの×グローブを展開する。×グローブなら空を飛べる。

俺は地面に向けて死ぬ気の炎を放出しながら減速して地面に足を付ける。

「なんとか地上に着いたな、創造解除。グウ」

その時だった。何か胸を突いた痛み戸惑いながら俺は口に手を当てた。

「なんで血が出るんだよ。いきなり重傷かよ」

『マスター大丈夫ですか』

「これが大丈夫に見えるかよ……………」

俺は痛みを耐えきれず意識を失った。

### 3話 ユニゾンデバイス（前書き）

昨日帰ってきました。田舎はいいです。それより僕の町で1STの公開が決まりました。八神家好きな僕としてはあれですが、クロノくんにとれだけ出番があるか期待します。

### 3話 ユニゾンデバイス

「目を覚ますと知らない天井だった」

『何を言っているのですかマスター』

「一度言ってみたかったんだよ」

気がつく俺は知らない場所にいた。

「アクイラ。俺どうなったんだ？」

『神が言っていたと思いますが、あなたは神に力を大幅に制限されています』

「それってリミッター？」

『そう考えて間違いではありません』

つつことは、吊星は鼻血ですんだが、Xグローブはまだ実用段階じゃないってことか。

「ホント、私が助けなかったら大変だったんだから」

「あんた誰？」

他の部屋から出てきたのは銀髪の高校生くらいの女性。話し方はア

リサに近いな。

「フフフ……。何を隠そう、あるところでは融合機。またあるところではユニゾンデバイス。その正体は美しい美少女レイリルよ」

（何かめんどくさそうな奴だな）

（そうですねマスター）

（自分で美人とか言ってるし）

（そういう人に限って性格悪いんですよね）

（分かるかアキラ。さすが俺のデバイスだ）

（いいえ、それほどでも）

「あんた達……。聞こえてるわよ全部」

「『嘘』」

「あんた達ねえ」

痺れを切らしたのかレイリルが話し出す。

「これでも私有能なのよ。独立でも戦えるし、私がユニゾンしたら魔力値がCからニアAになるくらいよ」

「微妙」

『微妙です』

「くうう。そこを突かれると反論出来ないわ」

レイリルを打ち負かして俺はアクイラと心の中で喜びあうが、まず気になることをレイリルに聞いてみた。

「ここってさ、詳しくは海鳴市の何処な訳？」

「私たちの家。詳しく言うならフェイトの住むことになる部屋の隣ね」

確かに部屋の内装は違っけどテレビで見たような造りだ。

「でもユニゾンデバイスを送るのは時間がかかるとか、あの神<sup>バカ</sup>言っ  
てなかったか？」

「詳しいことは私も知らないけど神<sup>バカ</sup>だから、たぶん何でも有り何じ  
やない？」

まあ確かにそうだけどレイリルにまでバカって言われてる神乙。

「で、今は時期はどれくらいなんだ？」

「君の体は7歳。明日から小学校だから。ちなみになのはちゃんと  
同年よ」

なに明日！？てことは、土郎さんイベントは無しですか？いきなり、  
あの3人娘と対面ですか。

「はあ、士郎さんイベントやりたかったな」

「無茶言わないで恭也くんなら勝つまでとは行かないけど肉体強化で互角に戦えるけど、士郎さんの怪我を治す道具も技もあなたの方じゃまだ使えないわよ」

「現実って厳しいな」

「そうね。でも、ちゃんと鍛えれば無印開始までには魔力Aランクになって鬼道も50番代までならなんとかなると思うわ」

「そうだ。鍛えればいい。仲間を守れるくらい強くなればいい。」

「アクイラ。レイリル。力を貸してくれるか。俺の正義（偽善）を貫く為に」

『マスターのお望みならば』

「付き合ってやるうじゃない」

まずは静かに生活しといて、なのはとアリサの喧嘩に介入するか。いじめは絶対に許せねえからな。



### 3話 ユニゾンデバイス（後書き）

次回はなのはとアリサの喧嘩に介入です。

#### 4話 珍獣が来る日なの？（前書き）

すみません。

前回なのはとアリサの喧嘩に介入すると言ったのですが、かなり大変なため止めました。

楽しみにしてた方本当にすみません。

なのはとアリサの話は本編か番外編でやるつもりなのでまっという  
ください。

#### 4話 珍獣が来る日なの？

sideなのは

この広い空の下には

幾千、幾万の人がいて

いろんな人が願いや思い抱いて暮らしていて

その思いは時に触れ合って

ぶつかり合って

だけど、その中の幾つかは

きつと繋がっていきける

伝えあっていていける。

私、高町なのは。

私立聖祥大付属小学校に通う、小学3年生。

ここ高町家においては3人兄弟の末っ子さんです。

高町家の両親はまだ新婚気分バリバリです。

お兄ちゃんとお姉ちゃんもとっても仲良しです。

愛されてる自覚はありますがなのはは、もしかして非常に浮いてる  
かもしれません。

「おはようございます」

学校に行くためにバスに乗ります。

「なのはちゃん」

「なのは、こっち、こっち」

「すずかちゃん。アリサちゃん」

「おはよう」

「おはよう、なのはちゃん」

「おはよう」

アリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんとは一年生の時から  
同じクラス。

今年からは同じ塾に通ってるの。



あれからご都合主義で2年たちました。

この2年間は地獄でした。

修業したり、恭也さんとOHANASIしたり大変でした。

実はなのはと友達になって何度か試合をしたんですが、子供に神速なんて使いますか？肉体限界がなきゃ死んでますよ。

夜はずっと能力の修行だし。精神と時の部屋みたいな時間の流れが違う空間を作れる能力使えればいいけど、レイリルが言うには「あんたバカ。発動した時点でまたこの世から、さようならよ」だそうです。

だからこの2年間は地道に寝る間も惜しんで修行していました。

しかし今日でその努力が報われます。

珍獣がやっと来たんです。念話来たけど一方的に無視してますハイ。

「将来か。アリサちゃんとすずかちゃんもう結構決まってるんだよね」

「私はお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して、ちゃんと跡を継がなきゃくらい فقط」

「私は機械系が好きだから。工学系で専門職がいいと思ってるけど。楓くんは」

「どうせ聞いたっていつもと同じで正義の味方でしょ」

「悪いかよ」

「あんたも子供よね」

お前方がおかしいんだよ。

「お前らが大人っぽいだけだよ。おじさん悲しいよ」

「私たち同年よね……」

いや、精神年齢はもうすぐ22です。

「楓くんはともかく2人ともすごいよね」

なのは、俺はともかくなのかよ。

「でも、なのはは、喫茶翠屋の2代目じゃないの？」

白い悪魔です。

「うん。それも将来のビジョンの1つではあるんだけど、やりたいことは何かあるような気がするんだけど、今はそれがはっきりしないんだ」

魔王です。

「私特技も取り柄も特にないし」

「バカちゃん」

アリサがスライスレモンをなのはに投げつける。目に当たったら痛いぞアリサ。

「自分からそう言うこと言うんじゃないの!」

「そつだよ。なのはちゃんにしか出来ないこときつとあるよ」

「そつだ。きつと………あるよ」

「あんたはちよつと黙ってなさい!」

だつてなのはから魔法取つたら何も無いじゃん。

「大体あんたと楓、理数の成績はこの私よりいいじゃないの。それで取り柄がないとはどの口で言うわけ」

アリサがなのはを押し倒して口を引つ張る。すずかもあわててベンチから立ち上がるがオロオロしている。

「あああああ、だつてなのは文系苦手だし、体育も苦手だし」

「俺は文系も得意だし、体育も得意だし」

「楓はもうしゃべるな」

「2人とも駄目だよ。ねえねえつたら。楓くんも止めてよ」



〜放課後〜

「今日のすずかドッチボールすごかったよね」

「うん。かつこ良かったよね」

「そんなことないよ。楓くんなんか少しも動かずに内野を全滅させてたもん」

「いつ見ても楓くんすごかったよね」

「さすが俺」

「楓が化け物なだけでしょ」

「化け物とは失礼だな。俺はれっきとした異常性だよ」  
アブノーマル

「同じじゃない」

そもそも肉体限界を使っている俺に同年代の普通の小学生が勝てるはずないんだ。

「ワンワンワン」

「be quiet」

アリスさん。なぜに吠えてくる犬に向かって英語で吠えるのですか？

「こっちこっち。ここを通ると塾に行く近道なんだ」

「そうなの？」

「ちょっと道わるいけどね」

「楓くんはどうするの？」「こまま帰るの」

「俺もいくよなのは。今日はいつもと違って暇だし」

「あんたいつも暇そうに見えるけど」

なにせ珍獣が見れる日だけ。今日の修行くらいレイリルも許してくれるさ。

森を少し歩いていると突然なのはが止まった。

「どうしたの？」

「なのは？」

「何してんだ？置いてくぞ」

「うん。何でもない、じめん、じめん」

「大丈夫？」

「さあ行いじー」

すずかやアリサには聞こえなかった。ただろうがなのはが「まさかね」

と言ったのが聞こえた。俺の聴力なめるなよ。

「なのはちゃん」

「置いてくぞマジで」

「うん」

(助けて)

歩いていると珍獣ことユーノ・スクライヤの念話が聞こえてきて、  
なのはがまた足を止めた。

「なのは?」

「今何か聞こえなかった?」

「何か?」

「なんか声みたいな」

「別に」

「聞こえなかったかな?」

「俺はそのオッサンの幽霊の声しか聞こえなかった」

「」「」「幽霊いるの!?!?」「」「」

(助けて)

声がしてなのはが走り出した。

「なのは

「なのはちゃん

「アリサ。すずか。追いけるぞ

「うん

「当然

よし、追いついた。

「どづしたのよなのは急に走り出して

「見て、動物？怪我してるみたい

「う、うん。どづじよづ

「獣医のところ連れて行くぞ

「この近くに獣医さんなんてあったっけ

「知らん

「待つて。家に電話してみる」

「さすがが電話を掛けた。」

（獣医院）

「怪我はそこまで酷くないけど、衰弱してたみたいね。きつと、ずっと一人ぼっちだったんじゃないかな」

「院長先生ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

「先生これってフェレットですよ？どこかのペットなんでしょうか」

「アリサ、彼はフェレットじゃなくて珍獣です。」

「フェレットなのかな？変わった種類だけど。それにこの首に付いているのは宝石なのかしら」

「院長がユーノに触ろうとすると危険を察知したのかユーノが起きあがった。」

「起きた」

「ユーノがなのはを見つめてる。仲間になりたそうだ。」

「なのは撫でて」

「えっと、えっと」

なのはの指をなめやがった、この珍獣。PT事件が終わったらOH ANASIIしないといけないな。

すると、俺の殺気でユーノが倒れた。きっと疲れていたんだろう。絶対そうだろう。

「安静にしておいたほうがいいわね。一晩預かるわ」

なんか、なのはたちがこっち見てくる。怖w。俺も言えと？

「「「「よろしくお願いします」「」「」

「良かったらまた明日も様子を見に来て」

「「「分かりました」「」

「都合がなければ」

「わ、やば、塾の時間」

「ホントだ」

「じゃあ院長先生すみません。また明日来ます」

「じゃあなのは、アリサ、すずか」

「「「じゃね」「」」

爆裂三人娘の姿は夕日に消えていった。

「さてと先生」

「どうしたの」

「これ、治療費です。足りませよね？」

「ええ。でもいいの。あの子達に言わなくて」

「正義の味方ですから。それにすずかやアリサが金持ちでも「ごうい  
うのは男の仕事でしょ？」」

「そっね」

「先生また明日」

「アクイラ。とうとう来たな。介入の時が」

『「そうですね。それはそうとマスター。レイリルさんからメールで  
『す

「なんだったって？」

『修行をサボったことわすねないでね だそつです』

「アキラ逃げていいか？」

『駄目です』

「理不尽だろ！！！！！！！！！！」



5話 図書館へGO!! (前書き)

テスト前日に書いてるバカです。

誰か慰めて……

## 5話 図書館へGO!!

なのはが初めて魔法少女になった次の日です。

介入？まだしてねえよ。昨日はレイリルと朝までオールナイトでO  
HANASAIしてたから。

「おはよう」

「なのは。夕べの話聞いた？」

「え、夕べって」

「昨日行った病院で車の事故かなんかがあったらしくて壁が壊れち  
やったの」

「見てきたけどありゃ酷かったな」

「フェレットが無事かどうか心配で」

「アリサが心配してる。明日は雪かグボラ!？」

蹴ることないじゃないか。

「その件、に関してはその」

言い逃れするな共犯。

「そっか」

「なのはの家にいるんだ」

「でもすごい偶然だったね。たまたま逃げ出してたあの子と偶然会  
うなんて」

「「ねえ」」

「はははは……」

なのはの笑顔が苦しいな。アリサとすずかにはれそうだぞ。

「ああ、で実はあの子飼いフレットじゃみたいで、当分の間家で預かることになったよ」

「そうなんだ」

「名前付けてあげなきゃ」

「足利・リーヌ・クリオーラ・？世にしようぜ」

「却下」

「そんなバカな」

「なのは、もう決まってるの?」

「うん。ユーノくんって名前」

「ユーノくん?」

「うん。ユーノくん」

「へー」

「いや! やっぱり足利・リーヌ・k「」却下」「」そんな! ? なのはとすずかまで……」

↳放課後↳

帰りにすずかの家まで行って、そこでなのはとアリサと分かれた。

なぜかと言つと。

「オッス。元気にしてるかはやて」

「あ、楓くん」

今日は図書館に来ている。

はやてとは2年前に、はやてが車に轢かれそうになっていたところを助けた。闇の書事件では八神家サイドに就こうと思ってる俺にはタイミングがよかった。

「はやて、今日は何を借りたんだ」

「今日は神話の本や」

「はやては本がホントに好きなんだな」

「そう言う楓くんこそ」

「そうだな。本は俺の知らないことをいくつも教えてくれるからな」

「楓くん。今日はどうするの」

「今日は帰るかな。すんげえ眠いんだ」

「正義の味方やからな。頑張らなきゃあかんよ」

はやては俺の正義の味方を応援してくれている。2人の内の1人だ。

「じゃあまた来るからな」

「また」

side はやて

楓くんは私の一番大事な友達。

そして、わたしの……

5話 図書館へGO!! (後書き)

はやてフラグです。

ちなみに楓の介入は温泉の話からなのでもう少しお待ち下さい。

5・5話 マジでプールで大ピンチなの（前書き）

すません。この話を書くのをすっかり忘れていました。

今回後半はなのはメインです。

なぜかとゆくと

続きは本編で。

5・5話 マジでプールで大ピンチなの

「レイリル」

「俺今日帰り遅くなっから」

「なんでよ？」

「今日なのは達とプールに行くんだ」

「そう。楽しんできなさい」

レイリルにしてはソフトだな。

「帰ってきたらみっちり修行だから」

「はい」

泣いてもよかですか？

（放課後）

「授業終わり」

「準備OK」

「それじゃあ待ち合わせの場所に出発」

このテンションが無駄に高い俺の親友3人。



「午前中授業だと楽でいいわね。放課後いっぱい遊べるしよ」

成績優秀？元気満点のアリサ・バニングスと

「そうだね。今日のプール楽しみ楽しみ」

しっとり、優しく、暖かな月村すずか。

「ちゃんと水着持ってきた？」

「もちろん」

「泳ぐの好き！好き！」

そして我らが高町なのはだ。

「俺の水着はビキニタイプだぜ！！」

「楓くんのビキニは好きじゃないかも」

冗談だよ。

「……………」

「冗談だから。アリサもすずかも無言でこっちを見るのは止めてくれ」

「楓の冗談はいつものこととして、私は美由紀さんかノエルさんに泳ぎ教わらなきゃ」

「俺が教えようか？」

「いいわよ。あんたに教えて貰ったら負けだと思っし」

「浮き輪、使っていいみたいだからファリンに持ってきてもらえは？」

「それナイス」

「浮き輪でぶかぶかもいいな」

「浮き輪で寝たら気持ちいいだろうな」

「浮き輪で寝るの!？」

「なのは。俺たち昼寝教の信者のモットーは早く寝る・何処でも寝る・いつでも寝るだけ。どうだなのはも？」

「やめとくの・・・」

歩いていると一台の車だ止まった。

「すずかちゃん」

「ファリン」

「アリサお嬢様。なのはお嬢様。楓坊ちゃま。お向かいに上がりま

したよ」

「ノエルさん」

「ありがとうございます」

「ノエルさん。何度も言ってますけど、その坊ちゃまってゆづの止めてくれませんか」

「かしこまりました。楓坊ちゃま」

改める気ないなこりゃ。

すずかの家のメイドさん。ノエルさんとファリンも今日は一緒らしい。

「美由紀さんは現地集合ですか」

「はい。ユーノくんと一緒に」

「つつかペット同伴でプールっていいのよ」

「お兄ちゃんがなんとかしてくれたの」

ほんとあの妹溺愛者シスコンはなのはの為ならなんでもするな。

「なのはユーノとすっかり仲良しね」

「じゃはは」

「ユーノくん賢い子でいいよね」

「うん」

「はい。すみません。まわりに気をつけてくださいよ」

いやがった。妹溺愛者。

「恭也さんだ」

「アリサ早いな。一番乗りだな」

「恭也さん。俺がいるのを忘れてませんか」

「ああ。影が薄くて忘れてたよ。ええっともみじくん？」

「楓です」

ワザと間違えてやがるこの野郎。

「楓。恭也さんに突つかからない。なのはとすずかはまだ着替えます」

「そうか」

アリサと俺の対応の違いすぎるだろう。見てるよいつか神速絶対破つてやるから。

（現在） 47勝47敗26引き分け

「恭也さん。なんか監視員姿似合いますね」

「そうか」

「楓くん、アリサちゃん、お兄ちゃん」

「恭也さん、こんにちは」

「こんにちは恭也様」

「みんなおそろいだな」

「うん。お姉ちゃんとユ一ノくんももつすべ」

「おまたせ。おお、恭ちゃん監視員姿似合っ」

「キユ」

「今年初のみんなの水着姿」

「決めてみました」

「ええっとその」

「セクシー？」

「セクシーにはいろいろ特に胸がたりなあぶは！？」

「殺すわよ」

能力使ってないのに何で血が流れるんだ!?

「ここすごいね。飛び込みプールあるし、流れるプールあるし」

「こっちはお風呂もありましたよ」

「それはすばらしい」

「ノエルお風呂好きだもんね」

「恭也さん、あれ何ですか?あのお立ち台みたいなの」

「そのまんまだよ。希望者が歌って踊れるステージなんだ」

「……えええ……!」「……」

何?そこって驚くところ?

「こんな場所で歌ですか?」

「それが結構人気あるんだよ。ついさっきまで女の子達が踊ってたし」

「大きいお友達には人気でしょうね……」

「プールで歌とゆうと水着だらけの水泳大会とゆう感じですね」

古い!?何時の時代の番組だよ。知ってる人いるの?

「お姉様何ですかそれ」

「昔そうゆうテレビ番組が」

「ノエルさんってホントに24歳ですよね？」

「えへへ、誰か歌う？」

「私はいいよ」

「私も」遠慮

「美由紀さんどうですか？」

「駄目駄目、私歌下手」

「私なんかもつとです」

「俺なんか窓が割れるぜ」

「あんた何処のガキ大将よ」

「やはりここは言い出した方が先陣を切られるべきでは？ね、アリ  
サお嬢様」

「アリサの歌を聴いてみたい人」

『ハイ』

全員一致。（アリサ除く）

「ええ！？やぶ蛇だわ。これは何かの罠！？」

「フフフ。計画通り」

「楓くん顔が怖いよ」

「ほら受付はあっちだぞいっついでアリサ」

「頑張つてアリサちゃん」

「イエーーーーイ」

「ファイト」

「いいわ。泳ぎの前の景気付け気合い一発やってみせようじゃないの」

「イエーーーーーイ」

「うわあすごい」

「かわいかった」

「ちょっと気持ち良かったかも」



「M?ぶるぎゃー!」

「さてそれじゃあ」

「せっかくのプールですから」

「泳ぎますか」

『オーーーーー!』

「波のプール行ってみようよ」

「うん、しっかり準備運動しなくちゃね」

「ねえ、ユーノは泳げるの」

「キユ」

「うん、一樣泳げるって」

「へ」

「めはぶ」

「じゃははは」

「気持ちいい」

「ゴフアゴフア水飲んだ」

「すずかちゃん泳ぐの得意なんだよね？あっちで競争してみようか」

「いいですよ負けません」

「じゃあ私が見学兼審判です」

「いやファリン俺が審判やるよ。ファリンは解説でもやっといてくれ」

「わかりました」

「では、位置について」

緊張が流れる

「よーい」

そして

「ドーン」

2人が動く

「と言ったら始めて下さい」

2人が沈んだ。

「楓くん、ちゃんとやってよ」

「楓くんのことだからやるとは思ってたけど」

「じゃはは」

「そのごまかし方なのはちゃんみたいですよ」

「ごめんごめん」

そして2人がもう一度構える。

「それでは、位置について」

2人が息を吸い込む。

「よーい、ドン」

2人が一誠にスタートした。

「ゴール直前すずかちゃん追い上げる。美由紀さん逃げきれるか。すずかちゃん早い早い。ゴール直前後3m、2mゴールは」

{ピーーーーピーーーー}

俺がM Yホイッスルを吹く。

「美由紀さんの勝ちっす」

「残念」

「危なかった」

「お姉ちゃん、すずかちゃんお疲れ」

なのはいつからいたの？

「がんばったよ」

「はい、タオル」

アリサさん君たちは気配を消す技でも使えるんですか。

「ありがとう」

「ありがとう」

「しっかすずかちゃん本当に早いね。手足の長さもこんなに違うのに。水泳ちょっと真面目にやるのかな？筋肉柔らかくなりそうだし」

「それはいいかもしれませんね」

「フフフとゆうことで敗者には罰ゲーム」

「ええ、聞いてないよ」

「今アリサと話し合って、さっきのステージで歌ってもうことになったんだ」

「アリサちゃん・・・」

「オッホホ行ってらっしゃい」

「良かった。勝ってホントに良かった」

「では、すずかお嬢様。受付へ」

「恥ずかしいよ・・・」

「まあまあ。きっと楽しいよ」

「そうそう結構気持ちいいよ」

「そうだけ。あのアリサにもできたんだから」

「そ、そうだけど・・・」

「その会話が成立してるのが、非常に腹立たしいわ」

「がんばです!」

「えっと。それじゃあ、行ってきます」

俺が言うのも何だが、すずかの背中に悲しい何かを感じるのは気の

せいだろうか？

「じゃ頑張っ行っていいでね」

すずかが歌い終わりしばらくしたとき水がうねり出し実体をもった。

何だ、ジュエルシールドが発動でもしたか。

・・・・・・・・・・・・・・・・アクイラは更衣室の中だ！！

「明らかにモンスターかなんかだろこれええ！！」

「何々何なのこれ」

「水着を脱がそうとして」

「イヤアア、嫌らしい動きするな」

「脱がされちゃう」

「アリサ、すずか今助ける」

今はできることをやるしかない。

「必殺“脳天ぶちまけキックーーーーー”」

よし手応えは……………

やっぱ水だからないか。

「クソなら、他の能りよ *gush*」

くそ……沈められた……

やばいな。急なことだったから息吸ってねえ。

肉体限界でしつかり息をすえば12時間は持つんだが。

意識なくなってきたわ。ホントどうしよ……

*side*なのは

「危険って訳じゃなさそうだけどあれ何？どうなってるの」

「見てはいけない。見てはいけない……………」

「ユーノくん？」

「えっと、あの、想像なんだけど、あのジュエルシードを発動させた人間はたぶん捕まったってゆう更衣室荒しの願いと心が形になっ  
たんじゃないかって」

「ええ？」

「つまり、女の子の服を集めたいって願いだから」





『バリアジャケット』

すぐにバリアジャケットを纏う。

「趣味や興味は人それぞれですが、人様に迷惑をかける変出的行動は良くないと思います。と、ゆうわけで」

レイジングハートを構える。

「リリカルマジカル。封印すべきは忌まわしき器ジュエルシード。ジュエルシードシリアル・・・あれ番号が読めない？」

「そ、そんな」

ああ、もう。

「とにかく読めないけど封印」

『シリアル』

そして、弾けるような音がして

「止まった」

「あ、あれ大量の水着と下着と楓くんは出てきたけどジュエルシードが出てこない」

「でも、反応は消えてない。まさか分裂してるのか？」

「ええ!？」

「とりあえず反応の方に」

「う、うん」

ユーノくんが倒れる。

「ユーノくん!？」

「だ、大丈夫。少しくらっときただけ」

「魔力の使いすぎ? そうだね。ユーノくん、ボロボロになるまで  
ジュエルシードを探してて、怪我だって治ったばかりで」

「乗って」

「え?」

「肩」

ユーノを肩に乗せる。

「私の肩は今日からユーノくんの指定席。行くよユーノくん」

「うん」

「ウオオオオオオオ!」

「うわ。たくさんいる」

「分裂して増殖している。止めて封印しないとまた増えちゃう」

「どうすれば？」

「大型の魔力放射法で強制停止なんてなのはにはまだ無理だし、複数系のロックオン魔法なんて用意してないし」

「うっ」

「ちっ、僕があいつらの動きを止めてなんとか1つにまとめるから、そしたらそこを」

「駄目だよユーノくん。そんなふらふらな体で無茶したら」

「でも」

「動きを止めて、1つにまとめるんだよね。ちょうど今朝習ってた魔法の応用編だ。やってみるよ」

そして目をつぶる。

「イメージを魔力に乗せて」

「ウオオオオオオオ！！」

「こっちに気づいた。なのはを狙ってる。空に一度回避を」

「残念ユーノくん。空飛ぶ魔法はまだ教わってない」

「ああ、そうだった」

悶えるユーノくん。

「でも大丈夫」

「なのは魔力が一気に収束して」

「捕獲の魔法。．．．リリカルマジカル捕獲、そして固定の魔法。  
デストリップロック」

「ウオオオオオオオ」

「大小の完全固定。収束系の上位魔法」

「で、そのまま固まってて。行くよレイジングハート」

「スキヤニングバディ」

「リリカルマジカル今度こそ．．．」

「出てきた。??番」

「うん。ジュエルシードシリアル??番封印」

「成功？」

「うん。今度はバッチリ」

『モウプリーズ』

「ありがとうレイジングハート」

『グッドバイ』

「はあ」

「服と水着が戻ってく」

「魔法が解けたから持ち主の所に戻るんだ」

「そっか良かった。でもこれでジュエルシードも4つ。後17個だね」

「うん」

「どうしたのユーノくん？ぐったりして疲れた？」

「うん」

「バリアジャケット解除しなきゃ」

「この姿を見られたら困るもんね。」

「できた、お疲れユーノくん。バスケットの中で休憩しててね」

「うん。ありがとう」

side 美由紀

「わふ」

「んん、2人とも起きた」

「お二人とも良くお眠りで」

「寝てた？」

「はしゃいでたから、きっと疲れたんですね」

「どれくらい寝てた？」

「30分位ですよ」

2人は恥ずかしそうに顔を隠す。

「なのはは？」

「あそこ」

「お二人がお眠りでしたので、浮き輪でぶかぶかのんびり背泳ぎ」

「だそうです」

「さすが目覚めた？」

「うん。もうバツチリ」

「せっかく来たんだし。もうちょっと遊んで来ようか」

「そりゃ」

「ええい」

「にゃあ」

「ごめんね寝ちゃってて」

「プール遊びはこれからが本番」

「うん」

「みんな元気です」

すると恭ちゃんが歩いてきた。

「あれ恭ちゃんどうしたの？びしょ濡れだ」

「ボイラー室を見回ってたら派手な水漏れがあってお湯の濁流に飲まれた」

「フワヤヤ。大けがとかありませんか？」

「ああ。それは大丈夫なんだが廊下がびしょ濡れで、俺はこれから

掃除の手伝いを」

「大変ですね」

「残業代はでるらしいし、まあ良しとするよ。それよりそのそれは何してるんだ」

恭ちゃんが楓くんを指さす。

「遊び疲れたんだろうね。さっきからぐっすり寝てるよ」

「そうだといいいんだが、俺から見たら気絶してるようにしか見えな  
い」

side out

「で、なにも出来ずに帰ってきたと」

「はい……申し訳ありませんレイリル様」

「無事だったんだからいいじゃないの」

「あらがとついでいます」

レイリルの心が寛大で助かった。



「それよりも」

「ん？」

「今日は訓練10倍だから」

「ギヤヤヤヤヤヤヤ」

「こうして俺のプールは終わった。」

**6話 これが超次元サッカーだ！！（前書き）**

今回のテストは赤点がないことにテンションが上がってます。

今回はサッカーのお話です。

感想・ご指摘お願いします。

明日forceの発売日なんだよな……

## 6話 これが超次元サッカーだ！！

俺は、はやてのことが心配だったのかもしれない。

俺の両親は俺が小学2年生の時に交通事故で死んだ。

その時の俺は幼すぎて全てを理解できなかった。

みんなと会った日まで。

だからこそ家族が。

友達が掛け替えないことを俺は知っている。

だから、俺は闇の書が起動するまではやての友達になることを決めた。

はやてを支えたいと思ったから。

では本編をどうぞ。

『始まってなかったんですか！？』

（楓家）

「空はなぜ青いんだろう」

『マスター 正気を取り戻してください』

昨日の修行はきつかった。

高AMFでフルドライブだぜ俺を殺す気か!!

すると携帯がふるえ出す。

「もしもし、新聞はいりません」

「携帯に新聞の押し売りをする人は少ないんじゃないかな」

「この声は、ま、まさか土郎さんですか」

「どう突っ込めばいいかわからないけど土郎です」

電話の主はご存じ翠屋のマスター高町土郎さんだ。

「今日はどうしたんですか？なのはが翠屋でも燃やしましたか？」

「演技でもないことないこと言わないでくれるかい」

「で、今日は何のサッカーの依頼ですか？」

「やっぱり君は超能力者かなにかなのかい？」

「正義の味方です」

「.....」

会話がとぎれる。畜生——。

「とにかくお受けしますよ」

「本当かい？」

「河川敷のグラウンドでいいですよね」

「そうだよ。じゃあ頼むね」

さあ、サッカーしようぜ。

く河川敷グラウンドく

俺は今、土郎さんがオーナー兼コーチをしている翠屋JFCの助っ人として入っている。

「楓、何突っ立ってるんだ」

ハイハイ分かりましたよエキストラA。

「いくぜ！！アイスグラウンド」

俺が技を使うと地面と相手側のFWが凍り付いてボールを手に入れることが出来た。

「ナイスだ楓！！」

「さすが楓だぜ」

「さすが異常性！！」

「俺と結婚してくれ!!」

たまに練習に来ては技の特訓をしてるので翠屋JFCのみんなは全然驚かない。

まあ、相手チームとベンチに座っている3人娘は口を金魚みたいに  
して驚いてるけども。

「か、楓決めなさい!!」

「楓くんシュートしてなの!!」

「楓くん頑張っつて!!」

分かりましたよ。やればいいんですよ。

「これが俺の必殺技!!エターナルブリザード」

俺が構えるとボールが氷につつまれてそれを俺は蹴る。

「なんだこのシュートは」

「GOOL!!試合終了3対0で翠屋JFCの勝利です」

「これが超次元サッカーだ」

「楓っつて何なのかしら」

「何なんだろう」

「分からないの」

（翠屋）

「それにしても、改めて見るとこの子フェレットとは違わない？」

「そういえばそうかな？動物病院の先生も変わった子だねって言うてたし」

「そういえば、あの院長は無事なのかな病院あんなになっただけ。」

「うわ、ええっと、まあちょっと変わったフェレットとゆうことで。ほらユーノくんお手」

「キユ」

「しゅおお」

「うわああかわいい」

「賢い賢い」

「ならユーノおちんちん」

「キユ」

「どうだ出来るのか？出来ないのかクフフフフ……」

「キユ……」

プライドも捨てたようだなユーノ。その涙忘れない。

『うちそうさまでした』

「みんなもいじできたぞ。これからまたしっかり練習頑張つて次の大会も頑張ろうな」

『はい』

「暇だったら技教えてやるからな」

「そうしてくれ楓くん。それでは解散。気をつけて帰るんだぞ」

『ありがとうございます』

「お疲れ様」

「お疲れ様」

マネージャーが彼氏のところに走っていく。

さてとジュエルシードの発動でもこっそり見に行くか。

「キュキュ」

「面白かった」

目を回したユーノ見たら。



「さて、私たちも解散」

「うんそうだね」

「そっか今日は楓くん以外は午後から用があるんだよね」

「お姉ちゃんとお出かけ」

「パパとお買い物」

「いいね。月曜日にお話聞かせてね」

「みんなも解散か」

「お父さん」

「今日はお誘いいただきましてありがとうございます」

「試合格好良かったです」

「俺？」

「調子に乗らない」

「でも楓くんも格好よかったよ」

「アリサちゃんもすずかちゃんもありがとな応援してくれて」

「士郎さん。例の計画は」

「大丈夫」

「フフフフフフ……」

俺と士郎さんのイナズマ計画。

「なのははどうするんだ」

「お家に帰ってのんびりするの」

「そうか。お父さんも家に帰ってひとつ風呂浴びてお仕事再開だ。  
一緒に帰るか？」

「うん」

やっぱりなのはと士郎さんは仲がいいな。俺も士郎さんみたいなお父さんが欲しいな。

「楓くんはこれからどうするんだい？」

「俺は新しい技の修行がありますから」

まあ、本当はジュエルシードの暴走を見に行くんですが。

「そうか。休憩はこまめに取るんだぞ」

「ハイ」

「「「じゃあね(な)〜」「」

「また明日」

さてと準備するか。

## 7話 偶然フェイトと会いました

現場の楓です。

ただいまジュエルシードが発動してる付近のビルの屋上で待機してます。

しかしキモいな今回のジュエルシード。人間がジュエルシードを発動させるでこれだけ違うとは。やっぱり一番怖いのは人間なのだよね。そう考えてる間に向こうでなのはサーチ魔法を掛ける。つうかホントにでかいな魔力。

『マスターの魔力が低いだけですよ』

「それを言わないでくれ。今の俺の一番のコンプレックスなんだから」

あんな遠距離から封印かよ。

『マスターじゃマネ出来ませんね』

「スクラップにするぞ」

（マンション）

『しかし、今回は見るだけでつまらなかったですね』

「そうだな。でもそろそろだろ。フェイトが来るの」

そう言えば気になることがある。

「アキラ、俺の部屋ってホントにフェイトの部屋の隣なんだよな」

『そのはずですが』

「俺って気配とか読めないけどホントに住んで」「こんにちは」「こんにちは……」

フェイトいたあああああああ！！

間違いないフェイトいたよ。とうとう俺の介入も間近ってことか……

sideフェイト

さっきの人一人で話してたけど、そうゆう趣味の人なのかな？

side out

楓はすごく勘違いされてた様だ。

10000アクセス記念(前書き)

movie 1stマジ泣きました。

リボンの交換泣きました。

本編？

もう少しお待ちください。

## 10000アクセス記念

なのは「10000アクセス記念!!」

フェイト「出張番」

作者「楓の」

楓以外「」「拷問室」「」

パフパフパフ

楓「まてえええ!？何これ?何なのこの企画」

作者「この企画はそのうちやる後書きコーナーのプロトタイプです」

楓「それは分かってる。タイトルだ!タイトル!!」

作者「楽しそうでドキドキするだろ」

楓「恐怖でガクガクしてるぜ」

作者「では今回のゲストは将来は魔王、高町なのはといつまでも守ってあげなきゃあげなきゃ系のフェイト・テストロツサさんです」

なのは「魔王じゃないもん」

フェイト「えへへ。そう言ってもらつと嬉しいな」





なのは「能力は微妙なの」

楓「それは言わないでくれ」

フェイト「それより楓は今の時点でどれくらい強いのか？」

楓「魔力はクロノ以上なのは&フェイト以下だ」

フェイト「微妙だね」

なのは「やっぱり微妙なの」

楓「言いたいこと言いやがって」

作者「事実を受け止めたまえ」

楓「くそ。言い返せない」

フェイト「でも、そんなに微妙な能力で後半大丈夫なの？」

楓「問題ねえ。俺も毎日レイリルの拷問・・・否、修行で強くなっ  
たんだ」

なのは「拷問って言ってたけど大丈夫なの!？」

楓「問題ない」

作者「さてお送りしてきた、楓の拷問室も今日はここまで」

なのは「意外と早かったの」

フェイト「そうだね。こうしていると時間とかも忘れちゃいそうだな」

作者「ただいま楓の拷問室では、感想、質問、疑問、拷問を大募集しています」

フェイト「お願いします」

楓「拷問はお願いするな!!」

楓以外「それじゃみんな、バツピー!!」

楓「いつ決めたのそれ？」

楓「最後のは何だ!？」

なのは「宛先は感想からお願いします」

10000アクセス記念(後書き)

お願いいたします。

8話 猫かわいよいよお持ち帰りいゝ  
(前書き)

今回はアクイラの新たなシステムが登場。

8話 猫かわいいよ〜お持ち帰りい〜

「土郎さんシユークリーム30個ください」

現在俺は翠屋に来ています。

「今日はいつもより多いね」

「自分用じゃないんで」

「贈り物かい？」

「今日、すずかの家と呼ばれてて。なのはと残念なことに恭也さんも呼ばれてるはずですよ」

「あはは、恭也と喧嘩はしないでくれよ」

「大丈夫ですよ。今日は忍さんがいますし。じゃあありがと〜いぢやいます」

「楽しんでおいで」

〜月村邸〜

いや〜何回見てもでかいなこの家。

「楓様いらっしやいます」

インターホンを鳴らすとノエルさんが出てきた。俺ノエルさん苦手なんですよね。

「こんにちはノエルさん」

「どうぞこちらです」

少し歩くとテラスの様なところに着く。

「楓くん」

「オッスすずかといいでにアリサ」

「何で私がついでなのよ」

「楓くんいらっしやい」

「よっファリン今日も元気だな」

「楓くんこそ」

「忍さんもこんにちは」

「ええ、こんにちは」

「すずか。なのははまだか？」

「うん。まだ見たい」

「それよりも楓。あんたの持ってるの翠屋シュークリームよね」

「ああ、フェリン俺にもお茶」

「かしこまりました」

いい匂いがするわ。さすが月村家。

ドアが開くとなのはとシスコンが入ってきた。

「なのはちゃん。恭也さん」

「すずかちゃん」

「キユ」

フェレットって肩に乗るもんなのか？

「なのはちゃん。いらっしやい」

「恭也。いらっしやい」

「ああ」

見つめ合うシスコンと忍さん。

何なの？彼女いない歴〃年齢の俺に見せつけてるの？

「お茶をご用意いたしましょう。何がよろしいですか」

「任せるよ」

「なのはお嬢様は？」

「私もお任せします」

「かしこまりました。ファリン」

「はい、了解です。お姉さま」

忍さんがシスコンの手を引く。

「じゃあ私と恭也は部屋にいるから」

何なんですか。部屋でとらは的な展開でもあるんですか？

「はい。そちらにお持ちします」

「なのはこっち来て座れよ」

「うん」

猫をどけてなのはが座る。

「おはよ」

「うん、おはよ」

「相変わらず、すずかのお姉ちゃんとなのはのお兄ちゃんはラブラブだよね」

「うん。お姉ちゃん。恭也さんと知り合ってからずっと幸せそうだ」



「よ」

それもそうだよな。

月の一族のことを受け入れるができるところだけは結構尊敬してる。

「うちのお兄ちゃんはどうか？でも昔にくらべてなんだか優しくなったかな」

なのはがそう言うとユーノが床に降りた。

「よく笑うようになったかも」

「そうか？」

「楓くんお兄ちゃんがいたのによく静かにしてたね」

「士郎さんに言われてるからな」

「じゃはお父さん」

「そういえば、今日は誘ってくれてありがとうね」

「ごっつちこそ来てくれてありがとう」

「今日は元気そうね」

「俺が？」

「なのはよ」

「なのはちゃん最近少し元気なかったから。もし何か心配事があったら話してくれないかなって」

「2人で話してたんだけど」

「俺はぶられた!？」

「すずかちゃん。アリサちゃん」

「キュウウウウウウウ!!」

「ユーノくん」

「アイン駄目だよ」

ユーノの逃走劇が今始まった。

「ハイお待たせしました」

やばいな。歩くリアルドジっ娘来た。

「苺ミルクティーとクリームチーズクッキーと翠屋のシュークリームです」

「キュウ」

「ニャ」

「アワワワ」

傍観しているとこじゃない。早く押さえないと。

「ファリン危ない」

「うん」

「届けえええええ」

俺となのはとすずかが同時に走り出す。

ガシャンと綺麗な音がする。

「セーフ」

「すずかちゃん、なのはちゃん、楓くんごめんなさい」

「はあ」

場所は変わって庭園。

「しかし、すずか家は猫天国よね」

「えへ」

「でも子猫たちかわいいよね」

「うん」

「かわいいよ〜お持ち帰り〜!!」

「キモイわよ」

嘘だ!!ごめん言ってみただけ。

「里親が決まってる子もいるから、お別れもしなきゃならないけど」

「そっか。ちょっと寂しいね」

「別れは何時だって寂しいさ」

「うん。でも子猫たちが大きくなってくれるのは嬉しいよ」

「そっだね」

急にいつものジュエルシードの感覚が訪れた。

なのはも同じみたいだ。見ただけで分かったわ。

しかし、それに気づかないはずかとアリサのことを僕は本気で心配です。

「ユーノくん？」

ユーノが走り出した。

「ユーノどうかしたの」

「何か見つけたのかも。ちょっと探してくるね」

「一緒に行くか？」

「大丈夫。すぐ戻ってくるから待っててね」

そして、なのはもジュエルシードの所に向かった。

「アリサ、すずか。なのはなら大丈夫だから待ってようぜ」

茶を飲んでもと結界が発動した。おおよそ分かるがユーノだろ。

「（ぼそと）アクイラあの変態に貰ったあれ発動してくれ」

「ハイマスターAMB起動」

今使ったのはアンチ・マジック・ギアAMGだ。

システムは殆どAMFと同じで、魔法の影響を弱くする。

「しかしいいのですか行かなくても」

「ああ。今行っても分が悪い」

そう俺は魔導師の力じゃなのはやフェイトには勝てない。

「結界が消えたらなのはの回収に行くぞ」

「ハイ」

Sideなのは

私が目覚めたのはもう空が夕暮れに染まる頃でした。

ユーノくんが偶然私を捜してた楓くんを連れてきてくれて。

私はユーノくんを探してる内に転んで気絶たと、少しだけ嘘をついて。

みんなにすごく迷惑を掛けてしまつて。

でも楓は

「転んで気絶つてハハハマジベタだなハハハWWW」

でも

「これくらいの怪我でホント良かったよ」

と言つてくれたけど、ごめんなさいの気持ちでいっぱい。

でも不思議なほどに怖くはなくて、でも何だか悲しいような、そんな複雑気持ちでした。

Side out

「ふう。これが今の限界か……」

「しょうがないわよ。今回はユニゾンも出来ないんでしょ」  
俺のつぶやきにレイリルが答える。

「お前はベルカ式の融合機だからな。今なのはたちにベルカ式を知られるのはまずい」

『今回は銃形態だけで行かれるのですね』

「ああ。手がないときは創造でなんとかするさ」

温泉の話が俺にも来た。

俺の運命が始まった。

8話 猫かわいいよ〜お持ち帰りい〜 (後書き)

楓の拷問部屋

楓「ねえタイトル変えない？」

作者「それ却下です」

楓「それはいいとして、イヤ良くないけど。俺の介入は次回か？」

作者「そのつもりだ」

楓「やっとだ。やっと俺の……」

作者「でもお前の力じゃ……」

楓「うるさい気にしてるんだ」

作者「次回から楓本格的介入開始」



9話 楓武力介入開始（前書き）

自分の文才の無さに泣きそつです。



「！」

ユ一ノがこつちを見ながら叫んでる。

でもね。君の飼い主はなのはなんだよ。

それを受け止めなさい。

「じゅん楓くん」

なのはが壁にもたれかかっている俺に謝ってくる。

「確かに女の風呂は長いって言うけどさ」

「謝ってるからいいじゃないの」

「たく。しょうがねえ」

ため息をつきながら俺たちは歩き出した。

「そつだ温泉に来たんだから、卓球しない」

「イヤよ。どうせ楓が勝つんだから」

「まあ、そつだな。なら俺となのはが組めば＋・０じゃないか？」

「じゃあ、私とアリサちゃんとすずかちゃんVS楓くんは？」

「それでも勝てる気しないわ」

「ハァーイ。ちびちゃん達」

俺たちに声をかけてきたオレンジの髪の女性。まあアルフだ。

「君かねうちの子をあれしてくれてるのわ」

アルフは屈みながらなのはの顔を見つめる。

「ええ？」

「あんま強そうでも賢そうでもないし。ただのがきんちよに見えるんだけどな」

「確かに僕もそう思いますよ。アルフさん」

S i d eアルフ

なんだい。この子。

フェイトが言った子はこの女の子だと思っただけど。

「楓、この人お知り合い」

金髪の子が言うにはこの子は楓と言っらしい。

「そうだ。アルフさんちょっと顔貸して貰ってもいいですか」

「あああ」

こいつが誰だか分からないけど管理局の可能性だってあるんだ。フ  
ェイトを危険な目に遭わせる訳にはいかない。

少し歩き森の方にでた。

「あんた誰なんだい」

「初めまして。俺の名前は雨宮楓。好きな物は甘い物。将来の夢は  
正義の味方。よろしく」

「そうゆうことじゃないよ。あんたは管理局なのかい」

「そこをストレートに言うんですか。もっと俺を焦らして管理局か  
聞き出したり」

「あんたは私を知ってる口調だった。なら焦らす意味ないだろ」

「さすがだ。フェイトを支えるだけはある」

「やっぱりフェイトのことも知ってるんだね」

「ああ。大体な」

「なら、これからあたしがする事もわかってるんだよねえ!!」

あたしはこのガキに向かって拳を放った。

パシンと綺麗に決まった。

と思った。しかし、あたしの拳は片手で受け止められていた。

「やっぱり少しはヒリヒリするな」

「あんた何で」

「言い忘れてたけどあんたと俺の相性最悪だから」

まずい。さっきの拳でだめなら、変身するしかないけど。

「安心してくれ。俺はあんたの敵じゃない。むしろあんたの味方だ」

「そんなこと言って動揺させる気・・・」

「俺の目的を先に教えようか」

「目的？」

「プレシア・テストロッサの更正とフェイトの保護だ」

プレシアのこともしってるなんて。

「信用出来ないね。第一あんたにメリットがあるなんて思えないし」

「まあな。でもある人に頼まれたんだ」

「ある人？」

「アルフさんも知ってる人だぜ」

「だれなんだい」

そして、楓はあたしの耳元に口を近づけた。

「」

!!!!!!!!!!!!!!

「そんなわけ!?!」

「不可能じゃない。元々死にかけてただけだ。このことはフェイトには言うなよ。プレシアにばれたら色々面倒だからな」

「だけどそんなことが」

「まあ不可能だ。俺のレアスキルでも俺の部屋に留めておくので限界なんだ」

「会わせてはくれないんだろうね」

「ああ。会わせたいんだが都合が悪すぎる。でもそのうち会わせるこいつが言ってることがホントならフェイトも。」

「でも、証拠はあるのかい……」

ここで信じるほどアタシもバカじゃない。もしもがあっっちゃ駄目なんだ。

「俺の家に来ればいい。何なら今からでもいいぜ？」

この自信・・・やっぱり・・・

「アタシはどうすればいいんだい・・・」

「あんたはフェイトを支えてくれるだけでいい」

「それだけでいいのかい？」

アタシは拍子抜けした。こんなことを言ってくるのだからもっと大きな要求をしてくるのだと思ったのだ。

「今のところな。あと俺のことはライルってよんでくれ。偽名の方が動きやすい」

「わかったよ」

「なら俺は行くから。また夜に。それとフェイトにあんま無理させるなよ」

何なんだろうっていつは。でも嘘をついてる様には見えないんだよね。

Side out

「楓くんはまだ、寝ないのかい」

士郎さん達と飲んでると士郎さんが聞いてきた。

「俺にあそこで寝ると言うんですか。緊張して寝れませんよ」



それに、さっきからシスロンが恨めしそうにたむぐるじ。

「まあ、そのうち行きますよ。」

「そうしてね。なのはもきつと喜ぶし」

俺たちが飲んで（俺はファン グレープ）いると子ども部屋からフアリンがそつと出てきた。

「ファリン。なのは達は寝たか」

「もつぐつすり」

「さてと。ファリン、忍さん。ゆっくりと明日の寝起きドッキリの準備するか」

「はい」

「そつしましょう」

「お前達は何をする気なんだ」

恭也一人そうつぶやいた。

少し時間がたった時だった。

「きたか……」

「どっしたんですか」

ファリンと忍さんとドッキリの準備をしているとジュエルシードが発動したのに気づいた。

「いや〜トイレに行きたくなって。ちょっと行ってきますわ」

そうやって俺はジュエルシードの発動した地点に走り出した。

「（楓。ジュエルシード見つけたよ）」

森に入るとアルフから念話があった。

「（連絡サンキューアルフ）」

「（どうするきなんだい）」

「（今回のジュエルシードは俺が見つから今はフェイトに連絡しろ）」

「（貰っちゃって）」

「（勘違いするなよ。今回のジュエルシードはプレシアへの土産だ）」

「（ビックリしたよ）」

「（今から準備に入るから念話切るぞ）」

No side

「うほーすごいねこりゃ。これがロストログアのパワーってやつ  
?」

「ずいぶん不安定で不完全だけど」

「あなたのお母さんは何であんな物ほしがってるんだろっね」

「それはわからないけど、そんなの関係ないよ。母さんが欲しが  
てるだから手に入れないと」

そして、フェイトはバルデッシュを起動させる。

それを見つめる一人の男。

「派手にやってんなオイ」

『マスターもあんなもんじゃないですか』

「俺のはもつとシンプルで大胆で・・・」

『シンプルなのか大胆なのかはつきりしてください』

「アクイラ。フェイトが封印を始める集中しろ」

『先にふざけたのはマスターですよね?』

「封印するよ。アルフ、サポートして」

「へい、へい」

「二つめ」

「頂き!!」

フェイトがジュエルシードを取ろうとしたときに何か横切った。

「ジュエルシードが!?!」

その時ちょうど到着したなのはとユーノも驚いていた。

「誰だあれ」

「3人目の魔導師なの!?!」

月をバックに立っていたのは、暗いバイザーと青いスリッドをした青年だった。

S i d e  
楓

「皆さんこんにちは。ジュエルシードは俺が貰っていくんで諦めて」

「渡さない」

そう言いながらフェイトが斬りかかってきた。

「いきなり斬りかかってくるなんて酷いな」

「あの、何でジュエルシードを持つてるか知らないんですけど、それはユーノクンの落とし物なんです。返してください」

「い・や・だ」

『ハーケンセーバー』

黄色い閃光が俺となのはの間を横切った。

「だから、いきなり攻撃するなよフェイト・テストロッサ」

「何で私の名前……」

「フェイトちゃん？」

「じゃあ俺は逃げるんで」

「まって。せめて名前だけ聞かせて」

「ライル。ライル・ディランディ」

「ライルさん」

「逃がさない」

「しつこいな……」

『エンシエントバス ター』

アクイラから放たれたオレンジの光がフェイトに直撃した。

「（楓！！）」

「（大丈夫だ。少し足止めしただけだ）」

「フェイトちゃん！？何であんなことしたの」

「しつこいから」

「レイジングハート」

『デイベインバスター』

やば。逃げ切れない。

「当たった？」

「当たってねえよ」

瞬間移動ショートジャンプ使つてなきゃ、直撃だった。

「どうしたんですかその右手」

なのはが驚くのも分かる。さっきの瞬間移動の反動で俺の右手は失血で赤くなっていた。

「なんでもねえよ。それよりしつかり受け止めるよ」

『エンシエントバスター』

「えっ」

俺のエンシエントバスターはなのはに直撃した。

「さてと帰るか」

俺は反撃が来る前にその場を後にした。

Side なのは

「なのは大丈夫!？」

「なんとかそれよりフェイトちゃんは」

ユ一ノくんをむける先にフェイトちゃんがいました。

「フェイトちゃん大丈夫」

「何しにきたの私たちは敵だよ」

「なんでそんなこと言っの」

「帰るよアルフ」

「まって。私高町なのは。聖祥大付属小学校3年生」

「・・・今度はあの人にもあなたにも手加減できないかもしれない」

から」

そう言つてフェイトは飛んでいきました。

Side out

「いてええええ」

『マスター大丈夫なんですか』

「大丈夫じゃねえよ。マジ泣きそう」

『能力、使わなければ良かったじゃないですか』

「無理に決まつてるだろ」

俺には力が足りない。なのはやフェイトみたいな天才でもない。だから多少の無理をしてもやらないといけないんだ。

『たいした怪我じゃなくて良かったじゃないですか』

「もっと酷かったら、なのはにばれるからな」

さてと、部屋に戻つてドツキリの準備するか。

現在の勢力

・なのはチーム



なのは（レイジングハート）

ユーノ

・プレシアー派

フェイト（バルデッシュ）

アルフ

プレシアー

・楓の一団

・アクイラ  
楓

・レイリル

・アルフ（協力者）

・??????

・??????

## 9話 楓武力介入開始（後書き）

楓の拷問室

楓「今回は遅かったな」

作者「いろいろ大変だったんですよ」

楓「それにしても文才ないな」

作者「なさけないです」

楓「それにしても今回の俺強くないか？」

作者「でも、あれが楓のほぼ限界です」

楓「限界！？」

作者「必殺技を使ってないだけ」

楓「ちなみに必殺技の威力は？」

作者「スターライトに負けるくらい」

楓「弱いじゃないか」

作者「そのためのチートじゃないか」

楓「チートって血が出てたよね？怪我してたよね」

作者「フェイトも本気だしてなかったし」

楓「結論俺の存在価値ってなに？」

作者「次回はついになのは達と楓の出会いの秘密が明らかにお楽しみください」

現在、楓の拷問室では感想、疑問、こんな企画やってみたら、ご指摘、拷問を大募集しています。よろしく願います。

10話 喧嘩するほど怒ってるよアリサ（前書き）

テストの時期になりました。

皆さんはどうかやって勉強をしています（ました）か？

私は数学が数？と数？、数Aと3つあるのであたふたしています」。

なので来週の後半まで更新を止めます。

感想や疑問などは受け付けているのでよろしく願いします。

今回楓の拷問室はお休みです。

## 10話 喧嘩するほど怒ってるよアリサ

「いい加減にしなさいよ!」

アリサが怒りを露わにしたのは介入の翌日だった。

なのはの席を囲み、正面にアリサ、右側にすすか、そして左側でなのは達に背を向けて俺は窓の外を見ていた。

「この間から、なに話しても上の空でぼーっとして」

「ごめんねアリサちゃん」

「ごめんじゃない。私たちと話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもぼーっとしてなさいよ!」いくよ、すすか、楓」

「アリサちゃん」

アリサはかなり切れてるな。

「なのはちゃん」

「いいよすすかちゃん。さっきのはなのはが悪かったし」

「そんなことないと思うけど」

「俺は十分アリサの気持ち分かるぜ。ただそれを言ったってどうにもならないからいわなかつたけどな」

「そうだけど」

「ひとまずアリサのここに行くぞ、すずか」

「ごめんね」

なのはのつぶやきは心を重くした。

「見つけたぜアリサ」

アリサがいたのは階段の踊り場を少し降りたところだった。

「なによ」

「何で怒ってるのか、何となく分かるけど、駄目だよあんまり怒っちゃ」

「だってむかつくわ。悩んでるの見え見えじゃない。迷ってるの、困ってるの見え見えじゃない。なのに何度聞いても教えてくれない。悩んでも困ってもいないなんて嘘じゃん」

「仲良しの友達でも言えないことはあるよ。なのはちゃんが秘密にしたいなら待ってあげるしかないんじゃないかな」

「そうだ。俺だって、すずかだって、なのはだって言えないことがある」

「でも、少しは役にたってあげたいのよ」

「どんなことでもいいから、何もできないかもしれないけど、少なくとも一緒に悩んであげられるじゃない」

「ホント、アリサは不器用だよな」

「そんなことないわよ」

「屋上にも行くか。今日も天気良さそうだ」

屋上に着くまで口を閉じていたアリサが語り始めた。

「あの子がいたから私は一人ぼっちじゃなくなったんだ」

「そうだね。わたしもだよ」

「そっぴゃ、俺の最初の友達もなのはだったかな」

「なのはちゃんがいたから私たち友達になれたんだよね」

そして、すぐに時間がたち放課後になった。

「じゃあなのはちゃん。ごめんね。今日私たちが稽古の日だから」

「俺は図書館に用があるから」

「夜遅くまでなんだよね。行ってらっしゃい。頑張ってるね」

アリスはさすがにそう言おうと無言で歩いていった。

「じゃあな、なのは。いくぞぞぞぞか。早くしねーと置いていかれるぞ」

「ごめんなのはちゃん」

「ありがとうすずかちゃん」

今リムジンに乗ってるんだけどさ。いつもならテンションが上がる俺も話しくいほど空気が重い。

「初めて会った頃わさ、私、今よりずっと気が弱くて思ったこと全然言えなくて誰に何言われても反応出来なくて」

「俺は変わったのかな。昔も今も面倒ごとは嫌いだ。だけど人が傷つくのも嫌いだった。だから力で何とかしようとしてた。必要以上の力はただの暴力なのにな・・・」

「私は我ながら最低な子だったかしらね」

「そうだな」

「自信家で、わがままで、強がり。だからクラスメイトをからか



ってバカにした。心が弱かったからね」

「私も弱かったから、何も言えなかった。それは大切な物だから返してって」

「止めなよって言われても聞かなかった。他人の言うことを聞いたら、何かに負けちゃうと思ったから」

「そして、我慢の限界になって俺とアリサが取っ組み合いになったんだよな」

そして、なのは俺とアリサにビンタをした。

「あの時なのはちゃん何って言ったんだっけ」

「痛い？でも大切な物を取られちゃった人の心はもっともっと痛いんだよ」

「楓くんも暴力で解決しようとしたらこのこと同じだよ。ってな」

「そうだったね」

「その後、三人で大げんかになったよな。しかも、それを止めたのがことの発端のすずかで」

あれから三年つるんでるが、すずかがあれほどの声を出したのを俺は知らない。

「あの時は、だって必死だったんだよ」

「それから俺たちは友達になったとき。めでたし。めでたし」

「確かにめでたしね。で、すずかはそんな昔話を持ち出して私に何をさせたいわけ？」

「分かってるくせに」

「だな。にひひひひ！」

「私たちに心配させたくないってことくらい、分かってるわよ。たぶん私たちがじゃあの子の助けにならないってことも。待っててあげるしかできないなら」

アリスが言いたいことは俺もすずかも分かっていた。

「じゃあ私は怒ったまま待ってる。気持ちを分け合えない寂しさと、親友の力になれない自分に」

「いじつぱり」

「まあそれでこそアリスだ！」

「フンだー！」

「なあはやて？友達ってなんだと思う？」

はやてはその質問に少し戸惑った。

「どないしたん？急に」

「友達が喧嘩してな。喧嘩するのはいいことじゃないとは思ってるけどさ。支え合つのが友達じゃん？」

「私は楓くんしか友達がおらへんから分からないけど。たぶん違ふと思うよ」

「どんな風に？」

「支え合つことも大事やけど、それだけじゃ強くはなれへん。時には突き放すことも大事やと思うんよ」

「ってことは、俺が何かあったときは、容赦なく突き放すってことか」

「そや」

「はあ。コアラは自分の子どもにハチミツを塗ったくってライオンの巣に放り込むって言うけど、はやても酷いな」

「それは最強の骨法コアラや」

はやてが車いすを少し動かした。

「楓くん。夕食はどないすんの？」

「はやて様の手料理が食べたいな」

「へへーん。どないしよう？時には突き放しことも大事やし」

「お願いしますはやて様。今日は飯がないんだ！..」

「冗談。はよ帰ろ。楓くん、夜に用事があるんやろ」

「サンキューはやて。それじゃあはやての家までレッツ ゴー  
ー.....」

「ゴ.....」

俺ははやての車いすを押しながら夕暮れの空のしたを歩いていった。

番外編 楓の一日 平日編 1

6:00 起床

「ああ、だるい。ごめんレイリル拷問は止めて!!」

6:30 修行（肉体系）

「体が引きちぎれるうううううう!!」

8:00 登校

「.....ZZZZZZZZZZZZZZZZZZZZ」

13:00 昼食

「アリサてめえ!!俺の卵焼き取りやがったな!!」

14:00 授業中

「雨宮。この問題の答えは?」

「64/23 です」

「円周率を使ってください」

17:00 なのはたちと帰宅

「止めるなのは。お前の家に泊まると絶対シスコンがなんかしてくるから」

18:00 翠屋

「土郎さん・・・男ってつらいですね」

「楓くん。何があつたんだい？」

20:00 修行（能力系）

「痛い。血でただんだけど。無視!？」

24:00 就寝

「死ぬ。マジ死ぬ」

楓の一日

完

11話 走る楓となのはの気持ち(前書き)

テスト3日前です。

もう赤点なんか気にしません。

感想があれば………クスン。





外部系は外に攻撃をズババーンってやったりドドドーンってやる能力だ。

外部系の能力は今度にして、今回は俺の得意な内部系にしよう。

内部系の中にも色々種類があり、前回使った瞬間移動は特殊能力系と呼ばれるものだ。

特殊能力系は体を人間離れさせる能力で、悪魔の実もこっちに入る。

そして、俺の得意な能力は強化系だ。

「いくぜ、我、契約文を捧げ、大地に眠る光の聖獣を宿す」

俺の体を赤い光が螺旋を描いた。

すると俺の動きは先ほどの数倍速くなった。

強化系は自分の能力を高める。

つまり、肉体限界ですでに高い肉体能力を持つてるためチートの力が少ないのだ。

ここまで長い説明を読んでくれてありがとう。

『マスター！マスター！』

「おっと、すまねえ。考えごとしてた」

早く行かねえと。次元震が起こる前に。

S i d e なのは

私はフェイトちゃんと向き合っていた。

ちゃんとお話を聞かせてもらえるように。

でも、どうしてそんなに悲しい目をしてるの。

「ええい」

フェイトちゃんが私に斬りかかってきた。

私はそれを飛んで回避する。

そして、私は打って、フェイトちゃんが斬る。

そんなことが続いた。

「フェイトちゃん!!」

「ん!？」

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ、なにも変わらないって言うだけど、ただど、話さないと言葉にしないと伝わらないことがきつとあるよ」

私が伝えたいこと。

「ぶつかりあったり、競い合ったりすることは、それはしょうが

ないのかもしれないけど、だけど何も知らないままぶつかり合ったりするのは、私嫌だ」

私は話したいだけ。

「私はジュエルシードはユーノくんの捜し物だから、ジュエルシードを見つけたのはユーノくんで、ユーノくんはそれを元通りに戻さないといけないから、私はそのお手伝いで。お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意志でジュエルシードを集めて、自分の暮らしてる町や自分の周りの人達に危険が降りかかったらいやだから」

私の大事な人。

お父さんやお母さん、お兄ちゃんやお姉ちゃん。

アリサちゃん、すずかちゃん。

そして、楓くん。

大事な人を守りたい。

「これが私の理由!!」

そして、フェイトちゃんは悲しそうな表情をして口を開いた。

「私は「フェイト!!」答えなくていい!!」

しかし、フェイトちゃんの使い魔がそれを遮ってしまった。

「優しくしてくれる人たちのところで、ぬくぬく甘ったれて暮らして  
るようなガキンちゃんになんか何も教えなくていい。私たちの最優先  
事項はジュエルシードの捕獲だよ」

そして、フェイトちゃんはまた構える。

「なのは!!」

「大丈夫」

ユーノくんの言葉で現実に戻される。

そして、フェイトちゃんがジュエルシードに向かって飛び始め、私  
も全力で追いかける。

そして、ジュエルシードを2人で触れたとき。

「なのは!! フェイト!!」

バイザーの男の子の声が聞こえた。

Side out

「なのは!! フェイト!!」

クソ!! ギリギリ間に合わなかった。

なのはとフェイトの魔力に耐えられずジュエルシードにひびがはい  
った。

「キヤーーーーー！！！」

「うっ！！！」

なのはとフェイトが巻き込まれた。

このままじゃ俺も巻き込まれる。

『マスター！！！』

「駄目だ。答えを出す者でも答えがみつからねえ」

『どうするのですか』

「防御してダメージをいくらか減らすしかない。衝撃に耐えるアク  
イラ」

『Yes、マスター』

「ああああああああああ！！！」

そして光は俺とアクイラを包みこんだ。

11話 走る楓となのはの気持ち（後書き）

楓の拷問室

楓「作者。大丈夫か」

作者「テストやだテストやだ」

楓「本格的に壊れてるな」

作者「数学がやばいのさ」

楓「勉強しろ」

作者「気持ちを切り替えて新コーナー!!」

楓「なんだそれ!?俺聞いてないぞ!?!」

作者「言ってるないもん」

楓「言えよ。主人公だぞ」

作者「いつでも主人公が待遇されると思うなよ」

楓「待遇されたことなんか、一度も無いんだが」

作者「気にするな」

楓「で、このコーナー何?」

作者「このコーナーは楓が使ったチート技が分からない人に説明しようって企画だ」

楓「確かに知っていると知らないじゃイメージは変わるよな」

作者「それでは今回のチートはこれ」

・エスタブル魔法

・出典

伝説の勇者の伝説。

・発動条件

詠唱「我、契約文を捧げ、大地に眠る光の聖獣を宿す」

・概要

スピードや体術をアップさせるような魔法。

楓「あっさりとしてるな」

作者「俺の力じゃこれが限界だ」

楓「自分の力が分かってるなら言いや」

作者「ほめてるの？けなしてるの？」

楓「で、次の投稿はテスト後だろ」

作者「すみません。どうかお待ちください」

楓「なら今回はここまで」

楓の拷問室では皆さんの感想、疑問・質問、ご指摘、何でも受け付けています。どうか、よろしく願います。



12話 バカは嫌いじゃねえ (前書き)

テスト終わりますた。

これで執筆に専念できます。

是非とも感想・疑問・ご指摘お願いします。

## 12話 バカは嫌いじゃねえ

ジュエルシードの光は柱となり消えていった。

『マスター！！マスター！！』

「うるさい、聞こえてる」

なのはとフェイトも無事みたいだ。

「戻ってバルデツシュ」

フェイトがバルデツシュを待機モードに戻した。

そして、フェイトはジュエルシードに向かい高速で飛んだ。

「取らせねえーよ」

俺はアクイラの峯でフェイトの腹に一撃を加えた。

「フェイト」

「フェイトちゃん」

「どうせ素手で封印でも無茶なことしようと思ったんだろ」

「どっしって」

フェイトが腹を押さえながらこちらを見てくる。

「自分のことを考えてないバカがやりそうなことなんて想像が付く」

「私わ……………」

「お前のそんなとこ嫌いじゃないぜ。でも」

そして、俺は空を見て

「俺も結局そのバカの一人だ。アクイラ……………封印」

「了解マスター封印」

ジュエルシードを光が包み込み俺は糸が切れた人形のように倒れ込んだ。

Side 三人称

封印と同時に楓はその場に倒れた。

(倒れた？きつとさっきの次元震のせいだ)

(フェイト。ここは引こう)

(でも、あの子は少なくとも2つのジュエルシードを持って今なら)

(フェイト!!！)

フェイトは楓の倒れて場所に近づく。

「駄目！！フェイトちゃん」

楓に近づこうとするフェイトを止めに入った。

「じゃましないで。私はジュエルシードを手に入れなければならない  
い」

「でも、気を失った人から取るなんて」

（なのは）

（ユーノくん？）

（僕も彼女の言ってることは間違ってるんじゃないと思う）

（ユーノくんまで）

「早くどいて」

「駄目だよ。どうして話し合わないの。どうして・・・」

「話したって意味ないよ」

「そんなの」

「どいてもう手加減しないって言ったよね」

「その必要ないんじゃない」

2人の会話に割り込んできたのはレイリルだった。

「あなたは!？」

「私、レイリル。よろしくねなのはちゃん」

「ああ、はい。よろしくお願いします」

急に言われて律儀に返すなのは。

「あなたは誰なんですか！」

ユーノがレイリルに問いかける。

「だからレイリルだって」

「いや、そうじゃなくて」

「なら、どっちの味方が言って欲しいの？私はそこで自分の限界考えてないバカマスターのまあ仲間？」

そう答えると、フェイトがレイリルと向き合う。

「どいてください」

「嫌と言ったら？」

「力づくd……」

フェイトの言葉が止まった。

「調子に乗らないで欲しいな。デバイス無しで何が出来る」

(どうして足が動かない)

「フェイト行くよ!!」

アルフが膝が固まって動けないフェイトを抱えて逃げる。

(何だよ。聞いてないよ。あんな化け物みたいな殺気を放てる奴がいるなんて)

「なのはちゃん」

「はい。ごめんね。まだ目的はどうしても放せないの」

「教えてもらえないんですか」

「ええ。でもこの子がそのうち話すから」

「約束ですよ」

「保証するわ」

レイリルが楓を抱える。

「じゃあね、なのはちゃん」

なのはに手を振ると飛んで言ってしまった。

「ごめんねユーノくん」

「気にすることないよ」

「話してくれたらいいね」

「うん」

「帰ろうかユーノくん」

そして、なのはも歩き出した。ゆっくらずい。

13話 接触！！楓とフェイト 迫る管理局の影

Side ユーノ

(レイジングハートはかなりの大出力にも耐え揺るデバイスなのに)

ユーノが見つめる先には傷ついたレイジングハートが置いてある。

(それを一撃でここまで破損させるなんて)

ユーノは先の戦いを思い返す。

(なのはとあの子の魔力の衝突、いや、それじゃあ説明がつかない。  
あれはやっぱりジュエルシードの・・・)

トントン

ドアを誰かがノックした。

「ユーノくん。レイジングハート、大丈夫？」

入ってきたのはお盆にビスケットと水を載せて持ってきたのはだ  
った。

「うん。かなり破損は大きいけど。きつと大丈夫。今、自動修復機  
能をフル稼働させてるから、明日には回復すると思っ」

「うん」



「なのはは大丈夫？」

「うん。レイジングハートが守ってくれたから。ごめんねレイジン  
グハート」

なのははレイジングハートそう言ったけど今のレイジングハートに  
は届かない。

S i d e アルフ

楓の峰打ちだっけ？をくらったため、フェイトは今ソファアに横に  
なっている。

「ごめんねアルフ」

「大丈夫フェイト」

「うん。あの子手加減してくれてみたい。一時的なダメージだか  
ら」

「でも、ゆっくり休んだほうがいいよ」

「そうだね。明日は母さんに報告に行かないと行けないから」

「報告だけなら、あたしが行ってこれればいいんだけど」

「母さんアルフの言うことあまり聞いてくれないもんね」

あたしはプレシアが嫌いだ。実の子どものフェイトにこんな酷いこ

とをさせて。

「アルフはこんなに優しくていい子なのにね」

「まあ、明日は大丈夫さ。こんな短期間でロストロギア、ジュエルシード2つも手に入れたんだし」

「ほめられることはすれ、叱られるようなことはないもんね」

「うん。そうだね」

Side レイリル

楓はベットに横たわってる。

『マスター大丈夫でしょうか？』

「正直いい状態じゃないわ」

最近の戦いや修行。楓にかかっていた負担は計り知れなかった。

「ひとまず彼に連絡したから、数日で体調は万全になるはずよ」

『私は彼は嫌いです』

「レイリル解体されそうになるもんね」

静かな部屋が一層静かになる。

『マスターはなぜ全てを抱え込むのでしょうか？』

「分からないわ。でも、私たちはそんなバカをただ支えることしかできないの。ねえあなたもそう思うでしょ」

レイリルは暗がりにいる彼女に話しかける。

「私も知ってます。全てを一人で抱え込む大馬鹿者を」

Side out

「正義の味方？俺が？面白いこと言うな楓」

「でも、誠は僕のことを助けてくれたし」

「お前が俺を正義の味方と思うならそうなんだよ」

「どつゆうこと？」

「正義の味方ってゆうのは誰かに認めて貰ったとき、初めてなれるんだ」

「僕にもなれるかな？」

「楓ならなれるさ。楓は優しいし、お人好しだし、人の言うことに逆らえないからな」

「うん」

誠が言ってることが今なら分かる。

正義の味方を目指したのはその日からだったと思う。

あと、バカにされたことも今なら分かる。

S i d e   なのは

4月27日AM6:15

「あれ？なのは」

私が道場で一人しているとお姉ちゃんがジョギングから帰ってきた。

「あっ、お姉ちゃん」

「どつしたの？すっごい早起きさんだ」

「あははは。うん。ちょっと目が覚めちゃって」

「そうなんだ」

「あれ？お兄ちゃんは」

いつもは大体一緒にいる兄の姿がいなかった。

「うん。今日は父さんとちょっと遠くまで走りに行ってる」

お姉ちゃんが壁に掛かっている木刀を一振り取る。

「あの」

「ええ？」

「お姉ちゃんの練習、お邪魔じゃなかったら見ていてもいい？」

「あはは、あんまり面白いものじゃないと思うけど」

そういつて、木刀を投げて手に取り構える。

「いいよ別に」

「うん。ありがとう」

お姉ちゃんが構えを確認し始める。

「(なのは)」

「(ユーノくん?)」

「(どうしたの?こんな朝早くに)」

「(ちょっと目が覚めちゃったから)」

突然のユーノくんから念話に答えた。

「(それでねユーノくん。私考えたんだけど。私やっぱりフェイト

ちゃんとライルくんのが気になるの)」

「(気になる?)」

「(フエイトちゃんはすごく強くて、すごく冷たい感じがするのに、  
だけど綺麗で優しい目をしてて、なのに何だかすごく悲しそうなの

」

ユ一ノくんはそのことを考えているのか返事がない。

「(きつと、何か理由があると思うんだ。ジュエルシードを集めて  
る理由。だから私あの子と話がしたい。だからそのために)」

私は……………

Side フェイト

同日AM8:17

遠見市住宅街マンション屋上

「お土産はこれで良しと」

「甘いお菓子か。こんなものあの人が喜ぶのかね」

「分かんないけど、こういうのは気持ちだから」

「喜ばないと思っぜ、俺は」

急に後ろから声が出た。

「誰!？」

「そう、身構えるなって」

「お隣さん？」

立っていたのは以前見たお隣に住んでる少年だった」

「何であなたがこんな所に」

「フェイトもう少し敏感になった方がいいぞ。1時間もつけられないのに気づかないなんて」

1時間!? 気づかなかった。ってことはケーキを買う前から。

「アルフは気づいてたよな」

「ああ、最初は気づかなかったけどね」

「俺のミスディレクションは感覚の高い奴には気づかれやすいからな」

「ホント規格外だよ」

あれ、何でお隣さんとアルフが仲良く話してるんだろう。

「アルフなんでその人と仲良く話してるの? その人は誰なの?」

「それは……」

「アルフ俺が言う。まあ何だ。ライルって言えば分かるかな」  
ライル！？バイザーの少年。

私はいつでも戦えるように構えた。

「だから、身構えるなよ」

「何が目的」

「目的か。プレシアさんと話すことかな」

「母さんをどうする気なの」

「だからただ話すだけだって。信用出来ないならこれやるよ」

彼が何かを投げてきた。

「これは・・・ジュエルシード！？どうして」

「プレゼントだよ。本物だろ」

確かに。

「納得したようなら自己紹介だ。俺の名前は雨宮楓。海賊王になる男だ」

「海賊王！？」



海賊って何だろう？

「ありややや。ボケが通じないパターンか」

「ボケ？」

「さっきのは冗談だ。気にしないでくれ」

「フェイト。楓は悪い奴じゃないんだよ」

「アルフが言うなら」

「そろそろ行こうぜ。時の庭園」

「あなたも行くの」

「プレシアさんに渡す物があるから」

しょうがないか。

「じゃあ行くぜ」

「座標分かるんですか？」

「大体な。えくと876c4419331めんどくせえ。以下略」

「「ええ！？」」

そして、私たちはオレンジの魔力光に包まれた。

No Side

同日 同時刻

次元空間内

:

次元空間内に一隻の戦艦が浮かんでいた。

操縦室で幾人かの人々がモニターを眺めていた。

「みんなどう？今回の旅は順調？」

ドアが開き入ってきた翠の髪をした女性が入ってきた。

「はい。現在第三船側にて走行中です。目標地点には今からおおよそ160ベクサ後に到達の予定です」

眼鏡を掛けたオペレーターが答える。

「前回の小規模次元震以来、とくに目立ったようすはないようですが、2組の探索者が再度衝突する可能性は高いですね」

もう一人のオペレーターが続いて答えた。

「そう」

「失礼します。リンディ提督」

「ありがとね。エイミィ。」

リンディと呼ばれる女性にエイミィと呼ばれる少女がお茶を持ってきた。

「そうね、小規模といっても次元震の発生は・・・」

リンディは紅茶に手を付ける。

「ちょっと厄介なものね。危なくなったら、急いで現場に行っても  
られないと。ね、クロノ」

クロノと呼ばれた少年は上を向いた。

「大丈夫。分かっていますよ艦長」

そして、クロノは一枚のカードを構える。

「僕はそのためにいるんですから」

クロノは自信ありげにそう答えた。

13話 接触！！楓とフェイト 迫る管理局の影（後書き）

楓の拷問室

作者「ヒヤヤヤヤハアアアアアア！！」

楓「どれだけテンション高いんだよ」

作者「テストが終わったんだ。テンション上げたいだろ」

楓「でも今月末テストだろ」

作者「それを言わないでくれ」

楓「それよりそろそろクライマックスだな」

作者「次回君は逃げる」

楓「誰から」

感想・疑問・ご指摘お待ちしております。

楓「だから何から！！」

14話 お出かけの際には  
を忘れない(前書き)

感想・疑問・ご指摘お願いします。

14話 お出かけの際には

を忘れずに

俺たちを纏っていた光が消えて、目の前には見たことがない光景が広がっていた。

「ここで合ってるかフェイト？」

「うん。ここが時の庭園だよ」

「しかし、ここ庭園じゃなくて宮殿か、もしくは要塞じゃねえか」

「そうだよね。あの人のセンスだと思うけど」

「前の家もこんなデザインだったし、母さんはこんなデザインがすきなんだよ」

「そうなのかな？」

「アルフ、母さんのところに行こ。あなたはどつするんですか」

「俺も行く……………」

「楓どつしたんだい」

「なあフェイト・アルフ……………」

「どつしたんですか」

俺は青い顔をしたまま言った。



「たった3つ。これはあまりにも酷いわ」

フェイトの母親。プレシア・テストロッサの部屋の中心でフェイトはポロボロになり、両手をバインドで封じられて吊されていた。

「はい」

フェイト声はすでに弱々しいものとなっていた。

「ごめんなさい。母さん」

プレシアが立ち上がり、フェイトが吊されている部屋の中央に向かう。

「フェイト。あなたは私の娘。大魔導士プレシアテストロッサの一人娘。不可能なことなどあつては駄目」

プレシアは弱りきったフェイトのアゴを上げる。

「どんなことでも成し遂げなければならぬの」

「はい」

「こんなに待たせておいて、上がってきた成果がこれだけでは、母さんは笑顔で迎える訳にはいかない。分かるわよねフェイト」

「はい。分かります」

「だからよ。だから憶えて欲しいのもう二度と母さんを失望させな



いように」

プレシアは手に持っていた杖型のデバイスを鞭に変えた。

そして、フェイトにたたき付ける。

「ああ！！」

フェイトの叫びが部屋の外まで響きわたる。

それを部屋の外からアルフは聞いてた。

「いったい、何なんだよ。あんまりじゃないか。あの女。」

アルフは聞くに堪えなくなって扉に走り出し手を突いた。

（あの女の、フェイトの母親の異常さとかフェイトに対する酷い仕打ちは今に始まったことじゃないけど、今回はあんまりだ。いたい何なんだ。あのロストロギアは、ジュエルシードは、そんなに大切な物なのか）

その時、アルフの頭に手が載せられた。

「大きな力や大きな目的はどんな人間も変えてしまう」

その手はアルフを撫でる。

「でも、それでも人間は変わらない。立ち向かえる心さえあれば」

「楓……」

アルフは泣きながら見つる。

プレシアがフェイトに最後の一撃を打とうとする。

バシッ

部屋に鞭の音が響いた。

「あなた何」

しかし、鞭が当たったのはフェイトではなかった。

「楓・・・・・・・・」

フェイトが弱々しく楓の名を呼ぶ。

「悪いなフェイト。トイレから出た後、この場所が分からなくて迷っちゃった」

バリン

楓はバインドをアクイラで斬りフェイトを受け止める。

「あなた。何をしにきたの」

「プレシア・テストロツサあんと話にきた」

遂に楓とプレシアが対面した。

14話 お出かけの際には

を忘れずに(後書き)

楓の拷問室

楓「久しぶりだなこのコーナー」

作者「忙しかったからな。テストで」

楓「赤点なかったんだろ」

作者「これで心おきなく小説に集中出来るぜ」

楓「それよりテストが終わって1週間もたったのになにしてたんだ」

作者「秋の新アニメに忙しくて」

楓「書けよ!!」

作者「だって、禁書目録、そらのおとしもの、俺の妹、面白くないね?」

楓「確かにそうだが」

作者「川田まみさんのNo buts!と黒崎真音さんのMagi world、最高だろ」

楓「その熱をこっちに回せ」

作者「ごめんなさい」

楓「これからはしっかり書けよ」

作者「はい……………」

楓「それでいい。なら次回予告だ」

遂に対峙する楓とプレシア。

楓はプレシアに1つの提案をする。

そして、現れる管理局。

次回『取引』夢を目指して走り続ける！！

15話 取引（前書き）

長いです。今回無駄にながいです。

よければ感想お願いします。



「（なんで）」

最近がちボケがなかったからぼけてみた。

「（まあ大丈夫だ。お前は今日の晩飯でも用意してな）」

「あなたたち話は終わった？」

痺れをきらしたのかプレシアが話かけてきた。

「晩飯の相談してただけっすよ」

「ちゃんと晩飯用意しとくからちゃんと帰ってきなよ」

アルフはフェイトを連れて消えていった。

「あなたの目的は何なの？」

「ジュエルシードを集めるのを止める」

「それで止めると思ってるの」

「こんなことして幸せになる奴がいるのか？」

「いるわよ。私が」

「フェイトを不幸にしてアリシアを選ぶか」

「なんでアリシアのことを！？」



プレシアは初めて動揺を露わにする。

それもそのはずだ。十年ほど前に亡くした娘のことを知ってる人間がいるとは思わないだろう。

「アリシアのことを知ってるのね。なら私のしたいことも分かるでしょう」

「アリシアを蘇らせるんだろ」

「なら邪魔しないで」

やっぱりこいつは言わないと駄目だ。

「ハッキリ言わせてもらう。アリシアは蘇らない」

「さっきから言わせておけば。勝手なことを言わないで。アルハザードに行けばアリシアも蘇るの！！」

プレシアが激怒する。

「アルハザードか。確かに死人を蘇らせる方法ならあるぜ」

「そつでしょう。あるのアルハザードには」

「だがなアリシアは生き返らない」

「何ですって」

「アルハザード、ガレアの冥王イクスヴェリアは死人をある意味蘇

らせることができる。兵器としてだけどな」

「そのことは知ってるわ。でもアルハザードなら他にもあるはずよ」

「俺の知り合いにアルハザードの科学者のクローンがいるが彼の限界がプロジェクトFだ」

「そんな」

「結局あんたの描いてるのはただの夢妄想だ」

プレシアと俺の間に一時の静寂が流れる。

「私は信じないわ!!」

プレシアは杖から紫の雷を放つ。

「このわからず屋」

俺はそうつぶやき肉体限界をフルに使いよけていく。

「何で!!何で当たらないのよ」

プレシアはさらに雷の数を増やす。

「避けきれない」

なら雷には雷だ。

「第6の術ライザルク」

俺の体を黄色い光が包んだ。

「なに!？」

俺はさらにスピードを上げるが次第に雷がかすり始める。

「グッ・・・」

一発の雷が俺の左手を掠める。

するとプレシアが攻撃の手を止めた。

「なぜ攻撃をしてこないの？私の攻撃を避けれるほどの力があるなら反撃できるんじゃない？」

「残念ながら避けてる訳じゃありません。攻撃を読んでるんです」

「攻撃を読む？」

「僕は自分の死を読めます。あなたの攻撃は強力です。だから僕には届かないんです」

「私の周りは死の気配がする。だから攻撃しないってこと？」

「怖いほどに頭の回転が速いんですね」

そろそろ潮時か。

「プレシアさん。あなたには2つの選択肢。更正してフェイトとア

ルフと静かに暮らすか。もう一つはジュエルシードを集めて身を滅ぼすかだ」

俺は転送状態に入る。

「何処行くきよー!」

「忠告はしときましたから」

「なにを言つて……?」

「最後に選択するのはあんただ」

俺はそう言つて俺の景色はマンションの俺の部屋に移つた。

「楓!?大丈夫!」

台所で夕飯を作っていたレイリルが抱きついてくる。

「痛え!!!久々のデレは嬉しいが抱きつくな!!!」

「すまない」

レイリルのデレとツンの切替が激しいのは今に激しいことは今に始まったことはないが。

「それで大丈夫?」

「左手をやられた。殺傷設定だったからしばらく本気だせねえ」

『私が治癒をかけていますが』

「2、3日は素手じゃ戦えねえな」

「気合いで治せ」

「無茶言つな！！さっきまで心配してたお前は何処に行った！！」

俺は手に包帯を巻いてドアを開けた。

「アルフの所に顔出してくるわ。後……」

そして俺は台所にいるもう一人の女性に言う。

「プレシアには言った。後はあいつの決断次第だ」

「プレシアは変わるのでしょうか？」

「長い知り合いのお前がわからないなら俺がわかるわけねえよ」

俺はフェイトの部屋に向かった。

ののだがどうしよう……俺学校忘れてた……

「すみません遅刻しました！！」

「楓くん。今何時だと思ってるの」

先生が俺に顔を近づけてくる。怖いです……

「できるなら8時だと思いたいです」

「12時よ！もうすぐ授業終わりますよ。今まで何してたんですか」

「実は道で倒れていたおじいちゃんが急に産気づいて……」

「……………」おじいさんが！……………」

「……………」

クラス一同ツッコミありがとう。

「もういいわ。早く席に着きなさい」

「ういっす」

俺は席に着いてまじめに……

すっません。寝ました。調子に乗ってすみません！！

「楓くんどうしたの？」

「寝坊だよ。いいよな。すずかの家にはファリンってメイドがいて

「そつでもないよ」

「ファリンドジだから」

すつぱり言ったな……

「楓くん左手どうしたの？」

「ベッドから落ちて傷めただけだ。それより、お前は自分のこと心配してる」

「ふえ？」

「ふえ？じゃねえよ。まだ仲直りしてないんだろ」

「うん」

「早く仲直りしろよ。つつかアリサの視線が怖えんだよ。お前睨んでんじゃん……」

時よりこつちを睨むアリサ。

「嘘着くなとは言わないけど何か話とけよ。お前は人一倍優しいけど不器用なんだから」

俺はなのはの頭を右手で撫でる。

「ったくよ。お前は……」

「ずるいなのはちゃんだけ撫でるなんて」

すずかがほづを膨らませる。

「ハイハイ。すずかも撫でてやるよ」

「すずかちゃん。今はなのはが撫でてもらってたのに!!楓くんも  
う一回」

「もう一回って……」

怖い!!こいつら何?どんだけ撫でて欲しいの?そしてアリサが今  
度は俺を睨みはじめたし。

アリサだけじゃねえ男子全員だ!?

殺されるな俺……



クラスの男子たちから逃げた俺は海鳴臨海公園に向かった。

「死ぬかと思った」

「マスターあれがいわゆるフラグですか？」

「あんなフラグならいらねえよ。全部死亡フラグじゃねーか」

すると俺のもたれかかっていた木でいきなりジュエルシードが発動した。

「ちょっといきなりですか？俺聞いてない！！」

俺はすぐにバリアジャケットを着る。

「封じ結界展開」

やってきたユーノが結界を張る。

「ライルさん！？」

「挨拶なら後にしろ。俺今怪我してるんだ！！早く倒しやがれ倒してください」

「分かりました」

なのはがレイジングハートを構える。

すると黄色い閃光が降り注ぎ木はシールドを張る。

「生意気にバリアまで張るのかい」

「うん。今までのより強いね」

フェイトとアルフが冷静に分析する。

「お前ら和んでないで早く倒せ。つか倒してくださいー!!」

「（楓その腕）」

「（フェイト体の調子はどうだ）」

「（助けてくれたんだよね。ありがとう）」

「（礼なんていらさないさ。助かったならそれで十分だ）」

「（大丈夫なの?）」

「（俺の心配するくらいならあの木の化け物倒してくれや）」

「（分かった）」

「アークセーバー行くよバルディッシュ」

なのはは空を飛び、フェイトはアークセーバーを展開した。

なのはもシューティングモードで構える。

「行くよレイジングハート」

フェイトはアークセイバーを放ち木は切れて、なのはのディバインシューターでシールドにあたる。

「貫け光雷!!」

木は防ごうとするが押され木は実態を保てなくなる。

「ジュエルシードシリアル？」

「封印」

封印されるジュエルシードが光を放つ。

「まぶしっ」

『マスターはバイザーしてるんですから嘘ですよね!?!』

「アキラくん。この世界には口にはしてはいけないこととゆづも  
のがあるんだぜ」

俺たちがくだらない話をしてる間にも話は進む。

「ジュエルシードには衝撃を与えちゃいけないみたいだね」

「タベみたいなことになったら私のレイジングハートもフェイトち  
やんのバルデッシュも可愛そうだもんね」

「だけど・・・譲れないから」

「私はフェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど」

2人はデバイスを通常モードに戻す。

「私が勝つたら。ただの甘ったれた子じゃないって分かってもらえたら。お話ししてくれる」

2人は構えてデバイスを構え振りかざし光が2人を包んだ様に見えた。

「ストップだ!!!」

そこに立っていたのは2人のデバイスを受け止めている少年だった。

「ここでの戦闘は危険過ぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラオウなんだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか」

役者は出そろったか……

俺は今どうするかを考えていた……

## 15話 取引(後書き)

「楓の拷問室」

作者「誰か助けて」

楓「どうしたんだ」

作者「ネタが……ネタが」

楓「ネタ切れか？」

作者「StrikerSのネタしか思いつかない……」

楓「今のネタ考えろ」

作者「いいさ。早くこんな茶番終わらせるぞ」

楓「茶番ってなんだ!!」

作者「気にするな。次回予告行くぞ」

やってきた管理局。

フェイトを逃がす為に楓が右手で立ち向かう。

楓は立ち向かえるのか？

無理です。

楓「無理って何だ!!」

そして、珍獣ついに人間に。

次回『アースラへ』

16話 不利な状況 そしてアースラへ（前書き）

タイトルを変更しました。

## 16話 不利な状況 そしてアースラへ

まずいな。利き手が動かない状況でどこまでやれるか。

ユーノがいる木の下から見ると、フェイト達が地面に降り立った。

「もし戦闘を続けるようなら」

「（アルフ牽制しろ！！俺がフェイトを逃がすから撤退しろ！！）」

「（分かったよ！！）」

クロノが気づきアルフの放った魔法をプロテクションで防ぐ。

「フェイト撤退するよ」

今だ！！

俺はクロノに向かって走り出した。

「オオオオオオオオオ！！」

俺は思いっきり右拳をたたき込む。

「何！！」

クロノもそれに合わせてプロテクションを張った。

しかし、俺がプロテクションに触れると濁いた音を立ててプロテク



シヨンが消えた。

「何!?!」

クロノの体は中を舞う。

「(フェイト逃げろ)」

「(でも)」

「(でもない。今は逃げることを考える!!)」

「(うん。うまく逃げてね)」

フェイトはアルフと逃げていった。

その時俺に向かってステインガーレイが放たれた。

さっきと同じ音を立ててステインガーレイが消えた。

「ステインガーレイが消えた!?!」

「いきなりあいつらの喧嘩に割り込んで無粋な奴だな」

「お前!?!自分が何してるのか分かっているのか!?!」

「説明いただきたいね」

「お前がやっているのは公務執行妨害だぞ」

「公務執行妨害だ？警察どこ？」

「ふざけているのか！！執務官に手を出したらどうなるか分かっているのか」

「管理局だか執務官だが知らないがここは俺の世界だ。干渉する権利があるのか？」

「それで管理局が納得する思ってるのか！！」

「ここは管理外世界なんだろ」

「それは」

クロノが突然暗くなる。

「お前らが管理することない世界でお前らの有益になるロストロギアが見つかったらその時だけ管理か」

「うるさい！！投降しないならこちらから行くぞ！！」

クロノがステインガーレイを打つ。

「何度やっても同じだ」

俺はクロノの杖を蹴る。

それと同時にクロノは杖を捨てて俺を殴る。

「効いた！？」

俺は口から出た血を拭く。

「痛え……」

クロノが杖を取る。

「行くぜ!!グア……」

俺が殴りに行くとカウンターを決められる。

「肉弾戦は効くようだな……」

感づかれたか。

俺の使ってるのは幻想殺し。

能力は全ての異能力を打ち消す力。

ただこの能力は俺もあまり使いたくない。

俺のチートも打ち消すから……

だから幻想殺しを使ってる時は空も飛べないし、肉体限界すら解けてしまう。

つまり諸刃の剣だ。

俺はクロノに一方的に殴られる。

「これで止め！」「ストップよクロノ」「艦長!？」

突然俺とクロノの前に魔法陣が現れ、映像が映る。

「リンディ・ハラウンか……」

「私のことを知ってるのね」

「まあね……風の噂だよ……」

「クロノ。彼とその女の子を連れてきて」

「艦長!？」

「クロノ。彼はたぶん今回の事件の重要参考人よ」

「ですが」

「艦長命令」

「分かりました」

リンディさん言われてクロノは渋々納得する。

「あなたたちはいいかしら」

「は、はい」

「茶と菓子を用意してくれるならいいぜ。あと治療用のベッド」

「ええ、用意しておくわ」

そして、俺となのはは、アースラに転送された。

## 16話 不利な状況 そしてアースラへ（後書き）

（楓の拷問室）

楓「やつと更新か」

作者「大変だったぜ」

楓「昨日は24？歩いたんだろ」

作者「しかも、山だし」

楓「しかし、今回の俺弱くない？」

作者「元から弱いんだ」

（今回のチート）

・幻想殺し

・出典

とある魔術の禁書目録

・発動条件

特に無し

・概要

あらゆる異能の力を打ち消す。

（ただし、楓の力もすべて消える）

楓「ある意味この世界じゃチートだよな」

作者「だけど、お前の力が全部消えるがな」

作者「では、次回『ライルの正体これからの方針』」

感想待ってます。

17話 ライルの正体これからの方針(前書き)

そろそろ番外編入れたいな



## 17話 ライルの正体これからの方針

俺たちはとうとうアースラへやってきた。

「あれ、ライルさん、なんで左手以外の傷がなくなってるんですか？」

「なのはくん。ギャグマンガでは次の週には怪我が治ってるのはお約束だよ」

「ギャグマンガ？」

「深く考えるな。頭が痛くならあ」

そのままなのはがあたりを見渡す。

「（ユーノくん、ライルさんこっつて一体？）」

「（時空管理局の時空航行船だね）」

「（簡単に言えば次元世界を渡れるすんげー船）」

「（本当に簡単だね。でも彼の言った通りだよ）」

「（簡単じゃないかも……）」

やっぱなのはにはまだ分からないか。



ユーノが指を頭に当てて思い出し始める。

「あああああー!! そうだ、そうだ、ごめん、ごめんこの姿まだ見せてなかった」

「だよね、だよね良かった」

「話が終わったなら早く行こうぜ。執務官殿も痺れ切らしてんぞ」

「ちょっと待て」

「どうした」

「君もバリアジャケットを解除したまえ」

「ええええええ」

「えええええじゃない!! 可愛い子ぶつても駄目だ」

「どうしても?」

「どうしてもだー!!」

しょうがないな。

「でもやっぱり早く解除しろ!!」へいへい……」

俺はいつもの私服に戻る。

「これでいいかい？執務官殿？」

「ええええええええええええ!!」

俺を見て驚くのはとユーノ。

「どうした。そんな敵か味方が分からない不思議な人物が、実は自分の幼なじみだったみたいな反応は」

「そうだよ!!今そんな気持ちなの」

「どうして楓が!?!」

「成り行き？」

「でもでも教えてくれたって。何で正体を隠してたの」

「なのは決まってるだろ。それは……」

「それは……」

「そっちの方が面白そうだったから」

なのはとユーノがアニメの様に転ぶ。あっ、元はアニメか。

「あのちよつといいか。君たちの事情はよく知らないが艦長を待たせているから早めに話を聞きたいんだが」

「あっ、はい」

「すみません」

「ではこちらへ」

少し歩きドアが開くとそこは日本庭園の様な部屋だった。

「艦長きて貰いました」

「お疲れ様。3人ともどうぞどうぞ楽しんで」

「じゃあ遠慮なく」

「楓くんが遠慮してるとこなんてみたことないかも」

「してるぞちゃんと。士郎さんだけ」

「どござ」

お茶と羊羹を出される。

「なるほどそうですね。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「それで僕が回収しよう」と

「立派だわ」

「同時に無謀でもある」

「あのロストロギアって何なんなんですか」

「まあ、異質世界の遺産って言っても分からないわね」

「簡単に説明するだな。進化しすぎて自分達の身を滅ぼしてしまった世界の技術で作られた物だ。」

「使用すれば世界を滅ぼせる物もある」

「しかる手続きをもつてしかるべき場所に保管されていなければならぬ品物。あなたたちが探しているジュエルシードは次元干渉型のエネルギーの結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば空間内に次元震を起こし、最悪の場合次元断層を引き起こす危険物」

「君たちと黒衣の魔導士がぶつかったときに発生した振動と爆破。あれが次元震だよ」

「しかし、たった1つであれだけの威力だ。全部集まったら大変だつてことだろ」

「聞いたことがあります。旧暦の462年次元断層の起こったときのことを」

「あああれは酷い物だった」

「隣接した次元世界がいくつも崩壊した。歴史に残る悲劇」

リンディさんが緑茶に砂糖を入れる。

「（楓くん。リンディさんお茶にお砂糖入れちゃったよ!?間違ってるよね!?!）」

「リンディさん俺にも砂糖ください」

「（楓くんも!?!）」

「これよりロストログア。ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「「えっ」「」

「君たちは今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも、そんな」

「次元干渉に係わる事件だ。民間人に介入できるレベルじゃない」

「でも」

「急に言われても気持ちの整理ができないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて3人で話し合って、それから改めてお話ししよう」

「送っていいこう。元の場所でもいいね」

「執務官殿。俺はここにいる。いいかいリンディさん」

「ええ。構わないわ」

クロノとなのは。ついでにユーノが部屋を出て行き俺とリンディさんは2人きりになった。

「私と2人きりになって何する気」

「変な表現しないでください」

「うふ、ごめんなさい。あなたもゆっくり考えてちょうだい」

「その必要はない俺の答えは決まってる」

「決断が早いわね」

「あんたらに協力してやるよ」

俺は入ってきたドアの前に立ち笑いながら言う。

「ただな、俺の親友に汚いマネをしたら……殺す」

俺は全力の殺気をリンディさんに放った。



「そんじゃあ、明日また来ます」

そして俺は帰路についた。

Side リンディ

「艦長戻りました」

「お帰りクロノ」

「どうでしたか彼」

「食えないわね。あの子」

「彼の監視は始めました」

「悪い子じゃないとは思っただけどね」

しかし、何だったのかしらあの子の殺気の強さは。

17話 ライルの正体これからの方針（後書き）

楓の拷問室

作者「十一月だね」

楓「いきなりどうした？」

作者「どうやら遅めの五月病みたいだ」

楓「やる気がないだけだろ」

作者「えへへ」

楓「気持ち悪いわ」

作者「にやはは」

楓「作者がこの調子だから俺が次回予告を」

ついに始まる決戦。

なのはとフェイトが対峙。

今までで以上に空気の楓。

次回『決戦開始』

楓「なんか次回予告で俺の扱い酷くない？」

感想・疑問・質問・ご指摘・楓にやって欲しいチート技待ってます。

18話 最悪の選択(前書き)

すみません。

話の設定から次回予告から変更しました。

## 18話 最悪の選択

俺たちがアースラに乗り込んで数日が経過した。

ジュエルシードも順調に回収できてるみたいだしいいペースだ。(回収してるのは主になのは)。

しかし、学校に連絡入れるの忘れてたけど大丈夫かな？

そんなこんなで今なのはとユーノと飯もといクッキーを食べてます。

「今日も空振りだったね」

「こりゃあ長くなりそうだな」

「楓くんは何もしてないの」

「この腕で何ができる」

俺は包帯ぐるぐる巻きの左手を見せる。

「なのは、ごめんね」

「えっ」

突然ユーノがなのはに話かける。

「寂しくない？」

「俺にその言葉はないのか？」

「楓は元気そうだから」

「寂しいよ、すすかにも会いたいな」

【何で私の名前がないのよ！！】って聞こえた気がするけど気のせいだよな？

「私はちつとも寂しくないよ。楓さんとユーノくんが一緒だし、一人ぼっちでも結構平気」

「食いながら話な」

「ごめんごめん。ちつちやい頃は一人ぼっちだったから」

なのはの表情が暗くなる。

「私がまだちつちやい頃ね、お父さんが仕事で大げがしちやって、しばらくベットから動けなかったことがあるの」

士郎さんって何してたんだけ・・・SPだったよな。この世界がとらはの系脈を受け継いでるかは知らないけど。すすかや忍さんに詮索したことなかったし。

「喫茶店も始めたばかりで今ほど人気がなかったからお母さんとお兄ちゃんはいつも忙しくて、お姉ちゃんはずっとお父さんの看病でだから私わりと最近まで家で一人でいること多かったの。だから結構なれてるの」

「そっか」

「お前も大変なんだよな」

「そう言えば私ユーノくんの家族のことってあまり知らないね」

「僕は元々一人だったから」

「そっなの?」

「両親はいなかったんだけど部族のかたに育てて貰ったから。だからスクライアのみんなが僕の家族」

「そっか」

「珍獣も大変なんだよな」

「珍獣って何?」

「なのは達と一緒に温泉に入ってたくせに」

「あつ、楓!!!よくもあの時は見捨てたな!!!」

「何のことやら」

「そっだ、楓くんの家族のことって聞いたことなかったよね?」

「俺?強いて言えばレイリルとアクイラかな」

「そう言えばレイリルさんって楓くんのお姉さん?」

「正しくは同居者かな？最初に会ったのも聖祥に入学する前の日だったし」

「ご両親は？」

「死んだよ」

「えっ！？」

「交通事故。俺たちが5歳の頃事故が起きてみんななくなった」

「ごめんね」

「気にすんな。今は仲間がいるから」

過去の仲間。今の仲間。それが俺の宝物だ。

「楓くん、ユ一ノくん。色々片づいたら、もっと沢山いろんな話しようね」

「うん。色々片づいたらね」

「なら、さっさと片づけようぜ」

ビービービー

突然アラートが鳴り響いた。

「エマージェンシー。捜査区域の海上にて大型の魔力反応を感知」



「行くぞなのは、ユーノ!!」

俺たちは走ってリンディさんとクロノの所に行った。

「フェイトちゃん。私急いで現場に」

「その必要はないよ。放っておけばあの子は自滅する」

モニターにフェイトの姿がうつしだされる。

「仮に自滅しなかったとしても力を使い果たした所で叩けばいい」

「でも・・・」

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

「私たちは常に最善の選択をしなくてはいけないわ。残酷に見える  
かもしれないけどこれが現実」

「でも」

「現実かそうだな・・・」

「楓くん!？」

「あなたは分かってくれるのね」

「分かるさ。これが最悪な選択ってことがな」

「お前何をいって」

「あんたらは現実から逃げようとしてるだけなんだ。自滅？ふざけるな！！あいつはフェイトは運命の暗い闇に飲み込まれようとしてるんだ。あいつは助けを求めてるんだ。なににあんた達は見捨てようとしてる！！それが最悪の手なんだ」

「これが組織なのよ。あなたにはこの船のクルーを全員助けられるでも思うの？多くの人を助けるには小を切り捨てないと行けないの。あなたには全てを守れるとでもいうの？」

「全てを守れると思ってないさ。俺は失ってばかりさ。家族を友達を失った。だからその意味は分かる。だけど俺には一人を見捨てることはできない。だからどんな暗闇だろうと手を伸ばし続ける。もう失いたくないから」

俺は包帯を取る。

「ユーノ」

「うん」

「行くぞなのは！！」

俺となのはが転送ポートに乗り込む。

「雨宮楓」

「高町なのは」

「指示を無視して勝手な行動を取ります」

「あの子の結界内へ転送」

それとなのはは空に飛び出した。

「行くよレイジングハート」

“風はは空に 星は天に 輝く光はこの腕に 不屈の心はこの胸に  
レイジングハート”

「始めようぜアキラ」

“空よ輝け 海よ輝け 輝く希望はこの手の中に 正義の心はこの  
胸に アキラ”

「set up」

18話 最悪の選択（後書き）

楓の拷問室

作者「すみませんでしたああああああああ

楓「全く次回予告とまったく違うじゃないか」

作者「時間と内容でかなりの変更が」

楓「次回予告詐欺か」

作者「否定できません」

楓「俺は別に活躍できたからいいけどな」

作者「自分がでれたら別いいんだ」

楓「まあな」

作者「次回予告だ」

楓「使い回しだけどな」

ついに始まる決戦。

なのはとフェイトが対峙。

次回『決戦』

感想・疑問・質問・ご指摘・楓にやって欲しいチート技待ってます。

## 19話 決戦

「楓!？」

「楓がどうしてあの子といるんだい!？」

「言っただるアルフ。俺の目的は2つフェイトの保護とクソババアの更正だ。そのためなら俺はなんだってするさ」

「楓……………」

「考えるのは後だフェイト。俺とユーノ、アルフで封印のサポートをする。お前はなのはと2人で封印しろ」

ユーノがバインドで竜巻を縛る。

「アイスロツク」

俺はアクイラで達巻に向かい魔力弾を打ち込むと竜巻が凍り付く。

「フェイトちゃん手伝って。2人でジュエルシードを止めよ」

なのはがフェイトに魔力を渡す。

「2人できつちり半分こ」

竜巻の勢いが強くなり俺の氷が割れ始め、ユーノが飛ばされそうになる。

「ユーノ!!!」

その時、俺たちの後ろからオレンジのバインドが竜巻を縛りあげた。

「楓ちゃんとユーノちゃんとアルフさんが止めている内に」

なのはが攻撃の準備を始める。

「デイベインバスターフルパワーいけるね。レイジングハート」

『ハイマスター』

フェイトも同じく構えた。

「せーの!!!」

「サンダーレイジ!!!」

「デイベインバスター!!!」

黄色の閃光と桃色の砲撃が竜巻を貫いた。

俺となのは、フェイトは封印されたジュエルシードの前に立った。

「なのは。お前フェイトに言いたいことがあるんだろ」

「うん。友達になりたいんだ」

その時空が紫の閃光に飲まれた。

「母さん!？」

まさか!？

「なのは!!フェイト!!俺の後ろに隠れる」

紫の光は俺たちのいた場所に降り注いだ。  
Side ユーノ

「何だあれは……」

楓が立っていた所にはいくつもの骨を模したシールドが張り巡らされていた。

「SYSTEMA・C・A・I……」

「楓くんすごいの」

「ありがとう楓」

「……」



「どうしたの楓く……………」

その時だった楓が力を失い落ちていく。

それを追いかけるのはがフェイトのそばを離れた時だった。

「アアアアアアアアアアアアアアアア！」

フェイトに紫の光が降り注いだ。

「フェイトちゃん」

「フェイト……………」

アルフが人間状態に戻りフェイトを受け止めてそのままジュエルシードを取りに行く。

ガキン！！

クロノがSU2で

「邪魔するなああああああああああ！…！」

クロノを打ち倒したがクロノが3つのジュエルシード奪っていた。

「……………」

アルフが海に魔力弾を放ち消えていた。

Side out

「指示や命令を守るのは個人のみならず、集団のルールです。勝手な行動や判断があなたたちだけでなく、周囲の人達も危険に巻き込んだかもしれないということ。それは分かっていますか」

「はい……」

「……」

「本来なら厳罰に処す所ですが、私たちも楓くんの言葉を聞いて反省しました。よって今回は不問とします」

「はい」

「すみませんでした」

「……」

「大変なのはこれからよ。クロノ、事件の大本について何かこころあたりが？」

「はい。エイミィ、モニターに」

「ハイ、ハイ」

俺たちの前に球体のモニターにプレシアが映し出される。

「あら」

リンディさんが見覚えがあるように声をあげる。

「僕らと同じミッドチルダ出身の魔導士プレシア・テストロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導士でありながら違法研究と事故にあって放逐された人物です。さっきの攻撃の魔力波動も一致しています。そして、あの少女フェイトはおそらく」

「フェイトちゃんあの時母さんって」

「親子ね……」

「その驚いてたってより、なんだか怖がってる感じでした」

「プレシアはジュエルシールドを手に入れられないフェイトに肉体的虐待を行ってる」

「どうしてそんなことを知っているんだ!？」

「アルフに聞いた……」

「エイミー!プレシア女史についてももう少し詳しいデータを出せる?放逐後の足取り、家族関係、その他何でも!」

「ハイハイ。すぐ探します」

少し時間がたちエイミーから報告が入った。

「プレシア・テストロツサ。ミツドの歴史で26年前は中央技術開発局の第3局長でしたが当時彼女個人が開発していた次元航行稼働路【ヒュードラ】仕様のさい、違法な材料をもって行い、失敗。結果的に中規模次元震を起こしたことで中央から地方に移動になりました。随分もめたみたいです。失敗は原因に過ぎず、材料には違法性はなかったと。辺境に移動後、数年間は技術開発に携わっていました。しばらく後、行方不明になってそれっきりですね」

「家族と行方不明になるまでの行動は？」

「その辺のデータは綺麗さっぱり抹消されています。今本局に問い合わせ調べて貰ってますので」

「時間はどれくらい？」

「一両日にわと」

「プレシア女史もフェイトちゃんもあれほどの魔力を放出した直後では早々動きはとれないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし」

そう言いながらリンディさんは立ち上がった。

「あなたたちは一休みしておいた方がいいわね」

「ええっ、でも」

「特になのはさんと楓くんはあまり学校を休みつぱなしじゃ良くないでしょう。一時帰宅を許可します。それに楓くんは先ほどの戦闘でダメージを受けたのでしょう。ご家族と学校には少しは顔を見せておいた方がいいわ」

「なのはお言葉に甘えようぜ……」

「うん……」

今俺はリンディさんと高町家に来ている。

「ってそんな感じの十日ほどだったんですよ」

「あら〜そうだったんですか」

「（リイディさん見事なごまかしというか真っ赤な嘘というか）」

「（すごいね）」

「（ここまできるともはや尊敬に値するな）」

「（ご家族に本当のことは言えないですから？ご心配を掛けないための気遣いと言ってください）」

「（ハハ……物は言い様だな……）」

「でもなのはさんは優秀なお子さんですし、もうホント内の子も見習わせたいくらいで」

「あらあら。またまたそんな」

よくある主婦の井戸端会議だ。

「内のクロノはどうも愛想がありませんで」

「なのは今日明日くらいはいられるんでしょう？楓くんも」

今日と明日は高町家にお世話になることになっている。

そのせいで、妹溺愛純情最大主教の目が痛い。

「アリサちゃんとすずかちゃんも心配してたぞ。もう連絡はしたか」

「うんさっきメール出しといた」

「俺もポケベルで」

「古いよ！？誰も持ってないよ」

「すずかには通じたけど？」

「嘘！？」

さすが工学系に進みたいことはあるぜ！！

（翌日）

俺はあの後土郎さんと話したり、恭也と喧嘩したり、美由希さんの部屋で楽しく談笑したり、恭也と殴りあったり、桃子さんの料理をおいしく食べたり、恭也と斬りあったりした。

そのせいで、ボロボロに疲れ切った俺たちはすぐに床についたのだが……

「何なんですかこの状況……」

俺は動けなかった。なぜなら……

「むにゃむにゃ……楓くん……」

なのはにホールドされていた。

「そんな……駄目だよ……」

落ち着け！！K O O Lになるんだ雨宮楓！！

「……いいよ楓くんなら」

「止めろおおおおおお！！俺を殺す気かああああああ！！

「！

まずいぞ。土郎さんなら話し合いでなんとかなるが、恭也に見つかったら殺される……





## 19話 決戦（後書き）

楓の拷問室

作者「特に書くこと無し!」!

楓「いきなり敗北宣言!」?

作者「いつでも書くことがあると思っなよ」

楓「いくらでもあるだろ………何か?」

作者「思いつかないだろう」

〈今回のチート〉

・ S I S T E M A C ・ A ・ I

・ 出典

家庭教師ヒットマンリポーン

・ 発動条件

大空の7属性。嵐の炎を匣に注入する事で発動可能。

・ 概要

骨を模したシールドを展開することができる。またホバーとしての使用かのう。

次回予告

向き合うことを決めたなのは。

お前がやりたいようにしろ。

俺は見守ってやるから。

次回『俺の携帯はスタイリッシュ』

楓「予告関係ねえじゃん!？」

20話 俺の携帯はスタイリッシュ（前書き）

A・S編予告が拷問室にあります。

感想などお待ちしています。

## 20話 俺の携帯はスタイリッシュ

俺たちは久しぶりに学校にやってきました。

「なのはちゃん、楓くん！！よかった元気で」

「うん。ありがとう、すずかちゃん」

「すずかよ。どこからどう見たら俺が元氣に見える？」

俺は前回の戦いで体中に包帯を巻いてる。

「アリスちゃんもごめんね。心配かけて」

「まあ、よかったわ。元気で」

「そっかまた行かないといけないんだ」

「うん」

「大変だね」

「でも大丈夫楓くんもいるし」

「俺は大変だけどな」

「楓くんの意地悪」

「俺の友達でまともなのはさすがただかもんな」

「待ちなさいよ！！私はまともじゃないの！？あと、楓携帯持ってたの！？私聞いてないわよ！？」

「そりゃ言ってないから」

「何だよ」

「めんどくさいから」

「もう！！今すぐ携帯出さない！！アドレス交換するわよ」

「ええ」

「早く！！」

「しょうがないな」

俺はズボンの右のポケットから赤と黒のカラーの携帯を取り出す。

まあハッキリ言うと仮面ライダー555のファイズフォンだ。

それはアリサは無言でファイズフォンを見つめる。

「アリサどうした？」

「楓のことだからおかしな機能がついてるきがして。光線がでたり」

「ハツハツハ。ソナコトアルワケナイジャナイデスカ」

「何で片言!？」

アリサ君は超能力者か？

「それより、放課後少しくらいなら一緒に遊べる？」

ナイスすずか!??うまく話がそれる。

「うん。大丈夫」

「俺もOK」

「じゃあ家にくる?新しいゲームもあるし」

「本当」

「行く。絶対いく」

「楓くんはゲーム好きだもんね」

「それより昨夜怪我してる犬を拾ったの」

「犬？」

「すごい大型で何か毛並みがオレンジ色でおでこに赤い宝石が付いているの」

「そして、肩には大砲。背中にはフロートユニットを搭載。足にはローラーがついてて」

「そうそう。って違うわよ!!何よその機動兵器!?!」

「ナイスノリッツコミ!!」

「(楓くん。その犬って)」

「(おそろくな)」

アリサの家に行くと怪我をしたアルフがオリの中にいた。

「(やっぱりアルフさん)」

「(あんたか……)」

「(元気か?ってきつそうだな)」

「その怪我どうしたんですか?それにフェイトちゃんは?」

アルフが後ろを向く。

「あらあら、元気なくなっちゃった。どうした大丈夫」

「傷が痛むのかも？そっとしてあげようか？」

「うん」

「ああ！」

すずかの腕からユーノが飛び出す。

「ユーノこら危ないぞ」

「大丈夫。ユーノくんは」

「（なのは、楓。僕が彼女と話すから、なのはと楓はアリサちゃんたちと）」

「ねえお茶にしない？おいしいお茶菓子がある」行く絶対行く」

「楓くんって甘い物に目がないよね？」

「にゃははは・・・」

アルフは全部話した。自分達のことを。



「（なのは、楓聞いたかい？）」「

「（ちょっとゲームで忙しいから待って）」「

「（君は何やってるんだ！？）」「

「（冗談だよ。ゲームなら片手でもできる）」「

「（君の優先事項はゲームなのか！？）」「

「（冗談だよ。全部聞いた）」「

「（君たちの話と現場の状況、彼女の使い魔アルフの証言と現状を見るにこの話に嘘や偽りは無いだろうな）」「

「（どうなるのかな）」「

「（ここまできたならプレシアの捕縛に移行してもいいだろうクロノ？）」「

「（ああ。アースラを攻撃しただけで逮捕にはお釣りがくるからね。艦長の命令がありしだい僕らはプレシア・テストロッサの逮捕に任務を移行する）」「

「（君たちはどうする。高町なのは。雨宮楓）」「

「（私は、私はフェイトちゃんを助けたい。アルフさんの思いと私の意志。フェイトちゃんの悲しい顔は私もなんだか悲しいの。だから助けたいの悲しいことから。それに友達になりたいの。その返事をまだ聞いてないしね）」「

「（俺の目的は元々プレシアの更正とフェイトの保護だ。別にそれはお前らがいなくてもやっていった。俺は友達を助けたい。ただそれだけだ）」

「（分かった。こちらとしても君の魔力と楓の能力を使わせて貰えるのはありがたい。フェイト・テストロツサはなのはと楓に任せるそれでいいか?）」

「（楓となのはだったね。頼めた義理じゃないけど、だけどお願いフェイトを助けて。あの子今ホントに一人ぼっちなんだよ）」

「（うん、大丈夫まかせて）」

「（泥船に乗ったつもりで任せる）」

「（楓。その船は沈むんじゃないか?）」

「（そこを気にしちゃ駄目ですよクロノさん）」

そこでなのはが部屋に帰ってきた。

「遅いよなのは」

「ほら、楓くんがラスボスの攻撃避けながら待ってたんだよ」

「今の今まで!?!」

「（予定通りアースラへの帰還は明日の朝）」

「クリアーーーーー！！！」

「（それまでにフェイトと接触した場合は）」

「（うん。分かってる）」

夕方になり俺たちは茶を飲みながら座っていた。

「楓の一人勝ちだったわね」

「でも、なのはちゃんと楓くんのいたほうが楽しいよ」

「たぶんもうすぐ終わるから。そしたらもう大丈夫だから」

「違っだろ。終わらせるんだ」

「なのは。なんか吹っ切れた？」

「どうだろう？」

「心配してた。ってか私が怒ってたのはさ。なのはが隠し事をしてることよりも考え事してることでもなくて、なのはが不安そうだったり、迷ってたりしてこと。それでそのまま私たちの所に帰ってこないんじゃないかって思っちゃうような目をするこ

「行かないよどこにも。友達だもん。どこのもいかないよ」

「俺たちは帰ってくる」

夜外でなのはといると。

「いい顔になったな。迷いは消えたか？」

「お父さん？」

「士郎さん」

「なのはが迷ってたこと知ってたの？」

「そりゃそうだ。お父さんはお父さんだからな」

士郎さんはやっぱりすごいな。

「明日は朝早くから出かけるんだろ」

「ご心配をおかけします」

「なのはは強い子だからな。楓くんもいるし、お父さんは心配してないよ」

「士郎さん譲りの強さを持ってますからね」

「頑張ってるよ。しっかりな」

「うん」

これでなのも完全に吹っ切れたな。

〈AM5:55〉

俺となのはとアルフとおまけ（ユーノ）はクロノと最初に戦った海鳴臨海公園についた。

「ここならいいね。出てきてフェイトちゃん」

静寂が流れる。

振り向くとフェイトが街灯の上に立っていた。

「フェイト止めよう。あんな女の言うこと聞いちゃ駄目だよ。フェイトこのままじゃ不幸になるだけじゃないか。だからフェイト!!」

フェイトは顔を横に振る。

「だけどそれでも私はあの人の娘だから」

なのはが俺の顔を見る。

「手はださねえよ。お前のしたいようにしろ」

「ありがとう」

なのはもバリアジャケットを装備する。

「ただ捨てればいいって訳じゃないよね。逃げればいいって訳じゃもつとない。きっかけはきつとジュエルシード。だから賭けよう。お互いの持つてる全部のジュエルシードを」

2人が全てのジュエルシードを出す。

「それからだよ全部それから」

なのはがレイジングハートをフェイトにむける。

「私たちの全てはまだ始まってもない。だから本当の自分を始めるために」

なのはが息を浅く吸う。

「始めよう。最初で最後の本気の勝負」

## 20話 俺の携帯はスタイリッシュ（後書き）

楓の拷問室

楓「今回はバトルがなかったな」

作者「次はバトルメインだからな」

楓「それよりお前テスト近いんだろ？」

作者「それを言うなよ……………」

楓「今回は次回予告後にA、S編の予告が入ります」

作者「お楽しみください」

・次回予告

互いの思いを

互いの気持ちを

伝えるために

2人の少女は

次回『なのはVSフェイト 最初で最後の本気の勝負』





21話　なのはVSフェイト　最初で最後の本気の勝負（前書き）

感想・疑問・ご指摘よろしくお願ひします。

21話　なのはVSフェイト　最初で最後の本気の勝負

Side　クロノ

「戦闘開始みたいだね」

僕は2人の戦いをエイミィとモニターを見ている。

「ああ」

「しかしちょっと珍しいよね？クロノくんがこういうギャンブルを許可するなんて」

僕はエイミィのアホ毛が気になりスプレーを手に取り振る。

「まあ、なのはが勝つにこしたことはないけど、あの2人の勝負自体はどちらに転んでもあまり関係無いからね」

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれているうちに、あの子の帰還先追跡の準備をしておく。ってね」

僕はスプレーをかけて櫛でとく。

「頼りにしてるんだからね。逃がさないですよ」

「オウ、任せとけ！！」

でも、アホ毛は立つようだ。

「でも、あの事なのはちゃんと楓くんに伝えなくていいの？」

エイミィが髪を手で直す。

「プレシア・テストロッサとあの事故のこと」

「楓は知ってたよ」

「そうなの!？」

「ああ。だから楓の目的はプレシア一派の捕縛じゃなくプレシアの更正とフェイトの保護なんだ」

僕はモニターに近づく。

「勝ってくれるにこしたことはないんだ。今はなのはを迷わせたくない」

Side out

なのはとフェイトの戦いは続いていた。

クロスレンジやロングレンジの応酬。

フェイトが切ろうとすればなのはが守り魔力弾を操り狙う。

そして、フェイトがそれを防ぐ。

2人の戦いで激しい光が起こる。

2人の戦いはほぼ互角だった。

戦いの最中フェイトが止まると、なのはの周りにいくつもの魔法陣が現れる。

その時フェイトの周りに魔力が構成され、なのはがバインドに捕らわれた。

「(まずい。フェイトは本気だ!!)」

「(なのは今サポート「止める!!」楓!?)」

「これはあいつらの喧嘩なんだ!!」

「(楓くんの言う通り。これは私とフェイトちゃんの一騎打ちだから)」

「(でも、フェイトのそれはホントにまずいんだ)」

「平気」

フェイトが詠唱を始めると全ての魔力弾がなのはに降り注ぐ。

「なのは!!」

「フェイト!!」

「.....」

フェイトが残った魔力を手に集める。

すると、フェイトの攻撃で起きた煙が消えた。

そこにはギリギリで防いだなのはがディバインバスターを打ち出した。

フェイトも残った魔力を放つがなのはのディバインバスターにかき消される。

フェイトはプロテクションで防ぐ。

その時なのはは遙か上空にいた。

「受けてみて。ディバインバスターのバリュエーション」

なのはの前にミッド式の魔法陣が現れそこに魔力が集まる。

「バインド!？」

フェイトは逃げようとしたが、気がつくともバインドを仕掛けられていた。

「これが私の全力全開!!スターライト・ブレイカー」

極太の魔力がフェイトの体を巻き込む。

そして、全てを受けたフェイトは静かに海に落ちた。

「フェイトちゃん!!」

なのはフェイトを助けに海に飛び込みフェイトを助けて出てくる。

「ん……」

「気づいたフェイトちゃん。ごめんね。大丈夫」

加害者のセリフか？

「私の勝ちだよね？」

「そつみただね」

「飛べる？」

その時雷がフェイトを打ち抜いた。

「フェイトちゃん」

早い！？早すぎる。

ジュエルシードが消える。

俺はフェイトの元に飛ぶ。

「フェイト大丈夫か？『キュア』」

俺の手から光が出る。

「ありがとう楓……」

「なのは。ひとまずフェイトを連れてアースラに戻れ」

「俺もすぐに戻る。アルフお前もこい」

「でも、フェイトが!？」

「頼む……」

「……分かったよ」

数分後俺となのははアースラで合流してブリッジに向かった。

「お疲れ様。それとフェイトさん初めまして」

リンデイさんが挨拶をするがフェイトは俯いたままだ。

「(母親が逮捕されるのを見るのは忍びないわ。なのはさん、楓くん彼女をどこか別の部屋に)」

「(はい)フェイトちゃんよければ私の部屋・」総員玉座の間に侵入、目標を発見。」「

俺たちの前のモニターに玉座に堂々と座るプレシアがいる。

あんたはそっちを選んだのか……

「プレシア・テストロツサ。時空管理法違反。及び管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します」

「武装を解除してこちらへ」

そういつて、局員たちがプレシアを囲む。

その時局員は見つけてはいけない物を見つけた。

「へえ!？」

なのはからも声が出る。

当たり前だ。モニターに映ってるのは生体ポットに入っているフェイトのオリジナルのアリシアだった。

その時、一人の局員が空を舞った。

「私のアリシアに近寄らないで!!」

局員は攻撃を仕掛けるが全く効果がない。

プレシアが右手を上げた。

「危ない!!防いで!!」

空からの雷が局員たちに降り注いだ。

「いけない!!強制送還を」



「了解!!」

「アリシア……」

フェイトの口から声がこぼれる。

エイミイたちが局員を送還するとプレシアが話し始めた。

「もう駄目ね。時間がない。たった9個のロストロギアではアルハザードにたどり着けるかどうか分からないけど。でももういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間を。この子の変わりの人形を娘扱いするのを」

その言葉を聞きなのはとフェイトが目を見開く。

「聞いていてフェイト。あなたのことよ。アリシアの記憶を上げたのにそっくりなのは見ためだけ。役立たずでちつとも使えない。私のお人形」

「それがてめえの選択か!!!!!!プレシア!!!!!!」

俺は今まで押さえていた怒りを爆発させた。

「あの子はアリシアじゃない。あんな役立たずの人形必要ないわ」

「てめえ……」

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘アリシア・テストロッサを失っているの。彼女が最後におこなった研究は使い魔とは異なる、使い魔を越える人造生命の精製」

「そして、フェイトって名前は当時あのクソババアが研究していた開発コードなんだ……」

「よく調べたわね。まあそのクソガキは最初からそこまで理解してたのだからけど。だけど駄目ね。ちつともうまくいかなかった。作り物の命は所詮作り物。失ったものの変わりにはならないわ。アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々わがままも言ったけどあたしの言うことをとてもよく聞いてくれたわ」

「止めて……」

なのはが弱くつぶやく。

「アリシアはいつでも私に優しくかった。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽物よ。せつかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃ駄目だった」

「止めて!!止めてよ!!」

「アリシアを蘇らせる間に私に慰みにだけ使うためのお人形。だからあなたはもういらないわ。どこへなりとも消えなさい」

「お願いもう止めて!!」

「アハハハハハハハ!!」

駄目だ!!悪いもう押さえ切れねえ!!

約束破るかもしれねえ。

俺はこいつをぶち殺すかもしれない。

「いいこと教えてあげるわフェイト。あなたを作り出してからずっとね私はあなたが大嫌いだったのよ」

その言葉を聞きフェイトはバルディッシュを落とし気を失った。

「フェイトちゃん!!」

「フェイト・・・」

「大変です。屋敷内に魔力反応多数」

「何だ!?何が起こってる!?!」

モニターにいくつもの傀儡兵が映る。

「庭園内に魔力反応。いずれもAクラス。総数60・・・80まだ増えています」

「プレシア・テストロッサ。いったい何をするつもり!?!」

プレシアがジュエルシードを取り出す。

「私たちは旅立つの忘れられた都アルハザードへ!?!」

「まさか」

クロノが気づく。

「この力で旅立って取り戻すのよ。全てを!!」

アースラが揺れる。

「次元震です。中規模以上」

「振動防御。ピストンシヨンシールドを」

「ジュエルシールド9個発動。次元震さらに強くなります」

「転送可能距離を維持したまま影響の薄い区域に移動を」

艦内では戸惑いが続く。

「アルハザード……」

「バカなことを」

「クロノくん!!」

「僕が止めてくる。ゲート開いて!!」

クロノがブリッジを飛び出す。

倒れたフェイトを運んでいるとクロノと出くわした。

「クロノくんど」へ」

「現地へ向かう。現況を叩かないと」

「私も行く」

「僕も」

「もちろん俺もだ・・・」

「分かった」

「アルフはフェイトに付いててあげて」

「う、うん」

「アルフ。あれの使い方分かるな」

「もちろん」

「あれがフェイトの心を蘇らせる最後の希望だ・・・」

「行くぞ」

「うん」

「ああ!!」

「クロノ、なのはさん、ユーノくん、楓くん。私も現地に出ます。あなたたちはプレシア・テストアロツサの逮捕を」

「「「了解!」」」

時の庭園に移動した俺たちの前に大量の傀儡兵が待ちかまえる。

「いっぱいいるね」

「まだ入り口だ。中にはもっというよ」

「クロノくん。この子たちって」

「近くに敵に攻撃をするただの機械だよ」

「そっか。なら安心だ」

俺はなのとはクロノを止める。

「ここは俺がやる。お前らが魔力を使う必要はない」

「だが」

「クロノ……任せろ」

レイリル

「（レイリル!）」

突然マスターか念話がかかる。

「（どうしたのマスター）」

「（プレシアが暴走した）」

「（やっぱりね。で、マスターはどうしたいの？）」

「（半分力貸してくれ相棒）」

「（あなたは私のマスターなのよ）」

「もちろん力を貸すわ」

レイリルは懐から赤いドライバーとUSBメモリのようなものを取り出す。

『CYCLONE!』

そしてドライバーにそれを差し込んだレイリルは倒れた。

Side out

「楓くん？」

俺の腰にレイリルがつけたドライバーが現れる。

「いくぜ」

俺は黒いUSBメモリを取り出す。

『JOKER!』

「変身」

USBメモリを挿した瞬間機会音が流れ、俺の体を風がまとった。

「さあ、お前らの罪を数えろ!!」

黒と緑の戦士だった。



21話　なのはVSフェイト　最初で最後の本気の勝負（後書き）

（楓の拷問室）

楓「ついに最終決戦が始まったな」

作者「早く書きたいのにテストがあるし」

楓「まあ頑張れ」

作者「早くA・S編書きたいし」

楓「予定では後何話で無印編は完結だ？」

作者「あと2話で完結のつもりだよ」

楓「とにかくお前はテスト頑張れよ」

作者「・・・ハイ・・・」

・次回予告

少女は友達になるために戦う

少年は自分の責任のために

少年は悲しみを持つ彼女のために

少女は大事な人のために

彼女は大事なことを知る

そして、少年はその手でつかみ取ることができるか

次回『宿命が閉じるとき』

・A・S予告

「楓ホントにやるのか？」

「ああ」

「お前がそう決めたなら俺は止めないにや」

「ありがとな」

「では、魔法少女リリカルなのは〜正義の味方〜A・S編近日公開  
だにや〜」

22話 宿命が閉じるとき(前書き)

長いです。

後、感想などお願いします。

## 22話 宿命が閉じるとき

Side 楓

「何だその姿!？」

俺を見てクロノが驚く。

「やっぱり変な感じだな」

「そうねユニゾンの方が気分いいわ」

「その声レイリルさん!!」

「あらなのはちゃん久しぶり」

「一人の体に二人の人間が!？」

「さすがユーノ。お目が高い」

「そんなこと言ってる場合じゃない」

クロノが制止する。

「そうだな」

俺たちはサイクロンメモリを青いトリガーメモリに。ジョーカーメモリをルナに換える。

『TRIGGER!』

『LUNA!』

俺たちの姿が青と黄色に変わり手に青い銃トリガーマグナムが現れる。

「色が変わっただと」

俺はトリガーメモリをトリガーマグナムのマキシマムスロットに挿入する。

『TRIGGER! MAXIMUM DRIVE!』

俺たちはトリガーマグナムを構える。

「トリガーフルバースト!!!」

放たれた無数の青と黄色の弾丸は全ての傀儡兵を打ち抜いた。

そして、俺たちはサイクロンジョーカーに戻る。

「なのは、ユーノ、クロノ早く行くぞ」

「楓くんすご過ぎるかも・・・」

「僕もそう思っよ」

「もう君は何でもありだな」

俺たちは建物の中に侵入した。

通路には幾つかの穴があいている。

「その穴黒い空間があるところは気をつけて」

「ええ」

クロノが言ってることになのはが疑問を抱く。

「虚数空間。あらゆる魔法がいつさい発動しなくなる空間なんだ！」

「飛行魔法もデリートされる。もしも落ちたら重力のそこまで落下する。楓はどうか知らないが君が落ちたら二度と戻れないよ」

「気をつける」

「俺は無敵か！？俺だって無事じゃすまねえよ」

「そうなのか！？」

「あの空間は人間の生命エネルギーの発動を止めるもんだ」

「生命エネルギー？」

ユーノが聞いてくる。

「この世界には魔法の他に、霸気やらチャクラやら剉やら靈圧つうエネルギーがあるんだ。俺の力は魔力にそれを組み合わせてるんだ」  
「そうなんだ」

「マスターは雑魚雑魚だから大きな力は使えないけどね。本来はこの力も私がいないと使えないのよ。ホント駄目駄目よね」

「この姿じゃなければ殴ってたな」

巨大なドアをクロノが蹴破ると大量の傀儡兵がいた。

それより何でお屋敷とかの門って無駄にでかいの？

「ここから二手に分かれる。君たちは最上階にある駆動炉の封印を」

「クロノくんは？」

「プレシアの元へ行く。それが僕の仕事だからね」

「なら俺も!!」

「君は二人を守ってくれ」

「……分かった。クロノ俺はプレシアを救いたいと思ってるだから」

「分かってる。罪を犯した人間を更正させるのも僕の仕事だからね。さあ、道を開いたら」

「ああ！！」

クロノが砲撃魔法を打ち込む。

俺となのはは飛行する。

「クロノくん。気をつけて」

「クロノ頼んだぞ！！」

Side ????

フェイトはまだ意識を取り戻さない。

「あの子たちが心配だから私もちょっと手伝って来るね。すぐ帰ってくるよ。そしたら私の大好きなフェイトに戻ってね。これからはフェイトの時間はフェイトの好きなように使っていいんだから」

アルフが部屋を出ていくとフェイトの顔が少し動く。

「ちゃんと動けるじゃないですか」

「・・・誰」

「もうお忘れですか。あれほど私はあなたに尽くしてきたというのに。ちよっと薄情じゃないですか？フェイト」

「・・・どうして」



「どうしてって言われたら事情は長くて時間がかかりますがそれでもいいならお話しますよフェイト」

フェイトの目から涙がこぼれる。

「リニスー!!」

「あなたにしては甘えんぼですねフェイト」

フェイトは少し泣いて落ち着いた。

「リニス。どうしてここにいたの」

「楓のおかげです」

「楓の?」

「私がプレシアに契約の終了を告げられた少し後のことです。

〈回想〉

私は行く当ての無い旅をしてました。

しかし、私の魔力はその時すでにほとんど枯渇していました。

そして私はある無人世界で生涯を終えようと思いました。

- 第47管理外世界オレイク -

「そろそろ、ですかね。」

私はもう五感のほとんどが機能していませんでした。

「プレシアはどうしてるんでしょうか……」

プレシアは変わってしまいました。昔の彼女はとても優しかったと思います。

「アルフは元気でしょうか……」

最初フェイトが使い魔の契約をしたと言った時は心配しましたが、やんちゃですがとてもいい子でした。

「フェイト……」

フェイト……

また会いたい……

またフェイトに会いたい……

死にたくない……

「死にたくないなら俺についてこい」

「あなたは？」

「俺か？俺は？」

そこに立っていたのが

「正義の味方だ」

楓でした。

Side 楓

俺となのはは駆動炉に向かって走っていた。

その時地面が揺れる。

「危ない!!」

俺がなのはを押した時なのはのいた所は瓦礫で埋もれてしまった。

「楓くん!?大丈夫!?!」

「問題ない。俺は別ルートから合流する。先に行け!!」

「分かったの!!」

なのはの足音が遠ざかっていく。

「さてと俺は道を切り開くかな・・・」

別ルートと思われる道には数体の傀儡兵がいる。

「レイリル」

「言われなくても分かってるわよ」

俺たちは黒と緑のメモリを抜き。

『HEAT!』

『METAL!』

赤と銀のメモリを挿す。

『HEAT・METAL!!』

俺たちの姿は右半身が赤。左半身が銀に変わる。

「「さてとお片づけだ!!」」

俺の背中に一本の棒メタルシャフトが現れる。

「さてやるぜって!?!」

俺の右半身が勝手に動く。

「壊れる!!!!!!」

レイリルが一人で棒を振り回し数体を一撃で葬る。

「止めるレイリル!!その関節はそっちには曲がらない!!」

「マキシマムドライブ行くぞ」

「無視か?無視なのか?」

レイリルがメタルシャフトにメタルメモリを挿す。

『METAL! MAXIMUM DRIVE!!』

メタルシャフトが炎を纏う。

「メタルブランディング!!!」

爆発が収まると、俺たちの目の前にいた傀儡兵が全て藻屑と化した。

「レイリル……」

「何だマスター」

「メタルシャフトはもう使うな……」

きつと明日は筋肉痛だ……

Side リニス

「あの後私は楓の力で命を取りとめました」

「どごちゃって?」

「私の中には宝具と呼ばれるものがあります」

「宝具?」

「はい。零時迷子。零時に私の魔力を全快に戻す道具です」

「それで無事だったの？」

「はい」

私はフェイトに微笑みました。

「フェイトは……」

「フェイトはどうなのですか？」

「え？」

「フェイトはどうだったのですか？」

フェイトはポカンとした顔をしていた。

「フェイトが何をしていたかです？」

「生きてる意味は母さんに認めてもしかたから。母さんに認めてもらえないなら生きていけないだと思ってた。私はずっと母さんに縋り付いてたのかもしれない。私は母さんに喜んでほしい。そう思ってた。でもあの子に会って。楓に会って。分かったんだ」

「何がですか？」

「逃げればいいって訳じゃない。捨てればいいって訳じゃない」

「だから？」

「私は母さんに今の気持ちを伝えたい」

「そうですか……成長しましたねフェイト」

「ありがとうリニス」

フェイトは微笑む。

「私始めるよ。このまま終わるのは嫌だから」

フェイトはバルディッシュを持つ。

「そうだよね。バルディッシュ」

『イエスサー』

バルディッシュが光り出しひび割れが消えていた。

「私たちの全てはまだ始まってもない」

フェイトがバリアジャケットをつける。

「だからホントの自分を始めるために。今までの自分を終わらせよう」

フェイトも私に微笑みかける。

「行って来ますリニス」

「いつてらっしやいフェイト」

そう言つてフェイトは消えた。

Side なのは

私は楓くんと分かれた後、まるでガーゴイルのような傀儡兵と戦つていました。

「数が多い」

アルフさんは狼形態で噛み付いて攻撃しています。

「だけならいいけど」

「何とかしないと・・・」

ユーノくんもチェーンバインドで押さえていますですが壊れてきています。

「なのは!?!」

私の前では傀儡兵の剣が振り落とされようとなりました。

しかし、傀儡兵を黄色い閃光が貫きました。

私を上を向くとそこにいたのはフェイトちゃんでした。

「サンダーレイジ」



傀儡兵がフェイトちゃんの魔法で倒されました。

「フェイト!?!」

私とフェイトちゃんが見つめ合っていると壁から巨大な傀儡兵が出てきました。

「大型だ。バリアが強い」

「うん。それにあの背中の」

傀儡兵の背中にはキャノン砲がついていました。

「だけど二人でなら「二人じゃない。四人だ」楓!?!」

声のした方向を見上げると楓くんがたっていました。

「うん。うんうんうん」

「行くよバルディッシュ」

「こつちもだよレイジングハート」

「やるぜ!?!レイリル」

「ええ!マスター!?!」

『JOKER! MAXIMUM DRIVE!?!』

「サンダーバッシュ!?!」

「デイベインバスター!!」

私たちの攻撃はバリアに阻まれています。

「ジョーカーエクストリーム」

楓くんたちが分裂して傀儡兵を貫きました。

Side 楓

「レイリルここまででいい」

「分かったわマスター」

俺がメモリをドライバーから抜き取ると風が俺を包んでいつものバリアジャケット姿に戻る。

「フェイトちゃん」

「フェイト、フェイト、フェイト」

アルフがフェイトに抱きつく。

「アルフ。心配かけてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ。本当の自分を」

俺たちはエレベーターのある広間についた。

「あのエレベーターから駆動炉を迎える」

「うん。ありがとう」

「フェイトちゃんはお母さんの所に」

「うん」

なのはがレイジングハートを置きフェイトの手を握る。

「私うまく言えないけど頑張って」

「ありがとう」

「いつまで見つめ合ってるんだ？」

「いいじゃないか？」

「まあそうだな」

ユーノがどこからともなく走り出してきた。さっきまで一緒にいたよね？

「今クロノが一人で向かっている。急がないと間に合わないかも」

「フェイト」

「うん」

「フェイト俺も行く」

「楓!？」

「リニスとのもう一つの約束を果たしに行く」

「ユーノ」

「楓」

「なのはを守ってくれ」

「もちろんだ」

俺たちは走り始めた。

side 三人称

プレシアは一人アリシアのケースに寄り添っていた。

「プレシア・テストロツサ。終わりですよ。次元震は私が押さえています」

突然現れた声の主は妖精のような羽が生えたリンディだ。

「駆動炉は私が押さえています。駆動炉も時期封印。あなたの元には執務官が向かっています。忘れられた都アルハザード。そしてそこに眠る秘術は存在するかどうかも曖昧なただの伝説です」

「違うわ。アルハザードへの道は次元の狭間にある。時空と空間が

砕けたときその間にある滑落の輝き。道は確かにそこにある」

「ずいぶんと分の悪い賭だわ。あなたはそこに行って何がしたいの？」

リンデイは冷めた様に言った。

「失った時間と犯した過ちを取り戻す」

「そうよ。私は取り戻す。私とアリシアの過去と未来を」

プレシアはアリシアの生体ポットにふれる。

「取り戻すの。こんなはずじゃなかった世界の全てを」

その時壁が魔力に貫かれ、傷だらけのクロノが煙から現れる。

「世界はいつだって、こんなはずじゃないことばかりだよ!!!  
ずっと昔からいつだって誰だってそうなんだ」

「クロノの言う通りだ!!!」

クロノが言い終わると同時に楓とフェイトとアルフが上階から降りてくる。

「俺たちは悲しみを背負ってる。俺は旅の中で家族・友・仲間の命を失った。クロノは家族を失ってる」

楓はプレシアと向き合う。

「俺には生まれるはずの妹がいた。俺と三歳違いの妹だ」

「だった？」

「俺は3歳事故にあった。それで家族を全員失った。俺はできるなら妹を蘇らせた。でもそんなこと意味ないんだ」

「そうだ。こんなはずじゃない現実に立ち向かうかは個人の自由だ」

「だけどな。自分の悲しみに他人を巻き込む権利は何処の誰にもありやしねえんだよ!!」

俺たちがそう言うのとプレシアが急にせき込み血を吐く。

「母さん!!」

フェイトが急いで駆け寄ろうとそばに寄る。

「何しに来たの・・・消えなさい。もうあなたに用はないわ」

「あなたに言いたいことがあって来ました」

プレシアはすでに杖を持たないと倒れそうなようだった。

「私はアリシア・テストロッサではありません。私はあなたが造ったただの人形なのかもしれません」

「フェイト・・・」

「だけど私は、フェイト・テストロッサはあなたに生み出して貰っ

て、育ててもらったあなたの娘です」

「アハハハハハハ!!」

プレシアが笑い出す。

「だから何？今更あなたを娘だと思えと言っの？」

「あなたがそれを望むなら。あなたがそれを望むなら世界中の誰からも、どんな出来事からもあなたを守る。私はあなたの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだから」

フェイトが手を差し伸べる。

「くだらないわ」

プレシアは地面を杖でたたくと巨大な魔法陣が現れる。

「まずい!!」

「クロノくんたち!!早く脱出して。もう時間が無いの」

エイミイから連絡が届く。

「了解した。楓。フェイト・テストロッサ」

しかし、フェイトは動こうとしない。

「フェイト」

「私は向かうアルハザードへ。そして取り戻す過去も未来もたった一つの幸福も」

「あの馬鹿親子」

そして、プレシアが次元の断層に落ちた。

「くそつたね。大人って結構重いんだぞ」

デリカシーのない言葉をはきすてた楓が握っていたのはプレシアの右手だった。

「どうして」

「依頼なんでね」

「何で」

「フェイトが悲しむからに決まってるからに決まってるんだろ」

「フェイトは……」

「確かにフェイトはアリシアのクローンだよ。その事実は換えられない。だがアリシアにとってフェイトは何だ？ 妹みたいなものじゃ



ないのかよ！？アリシアの最後の願いはなんだ？」

「妹……」

プレシアの瞳に涙が零れる。

「そうね。私のしないといけないことは決まっていたのね」

「……分かったか馬鹿」

その時、手が抜け落ちた。

「プレシア！？」

「こんな顔じゃアリシアにもフェイトにも顔向けできないわ。ごめんね。ありがとう。私に気づかせてくれた正義の味方楓と私の大切な娘フェイト」

「母さん……！！！！」

「プレシア……！！！！」

そして、プレシアは虚数空間に消えた。

同時に瓦礫が俺たちの乗ってた地面とアルフが乗っている地面を切り離れた。

「フェイト……！楓……！」

「くそ……！！」

「フェイトちゃん。楓くん」

間一髪でなのはが飛んできた。

「飛んで!!こっちに」

「飛ぶぞフェイト!!」

楓はフェイトを抱きかかえ右足に力を込めて飛んだ。

Side 楓

結果的に俺たちは助かった。

結論はどうあれ。

「あれ?フェイトちゃんは」

「護送室だよ。彼女はこの事件の需要参考人だからね。しばらく隔離になる」

「そんなイテテテ・・・」

「なのはじつとして」

なのはの足に包帯を巻いてるユーノに怒られる。

「今回の事件は一步間違えれば次元断層さえ起こしかねなかった重大な事件なんだ。管理局としては関係者の処遇は慎重をきっしなきゃならないそれは分かるね」

「まあアルフもいるし大丈夫だろ。あいつもついてるしな」

あいつのことを知らないなのはの頭には？の文字が浮かんでいた。

で、俺たちは次元震の余波が収まるまでアースラで過ごすことになったわけで、その後のことだ・・・

「あとは偉い人たちにその事実をどうやって理解してもらおうかだけなんだ。でもその辺にはちょっと自信がある心配しなくていいよ」

「クロノくん」

「母親のために一生懸命だった子を罪にとつほど時空管理局は冷徹な集団じゃないから」

「クロノくんってすごく優しい」

「クロノくん大好き」

「気色悪い!!」

「次元震の余波はもうすぐ収まるわ。これからなのはさんたちの世界にだから明日には帰れると思う」

「良かった」

「ただミッドチルダ方面の航路はまだ空間が安定しないの。しばらく時間がかかるみたい」

「そうですか」

ユーノが心配そうに答える。

「数ヶ月先か、半年か。安全な航行ができるまでそれくらいはかかりそうね」

「そうですか。まあその内の部族は遺跡を探して放浪してるひとは分かりですから、急いで帰る必要も無いには無いんですが、その間ここにお世話になるわけにはいかないし」

「じゃあ家にいればいいよ。今まで通りに」

「なのはいいの?」

「うん。ユーノくんさえよければ。ね、楓くん」

「そうだな。住んじまえよー！」

「それじゃあ、お世話になります」

「うん」

クロノとエイミィも合流する。

「あの人が目指そうとしていたアルハザード。ユーノさんと楓くんは知っているわよね」

「はい。聞いたことがあります」

「旧世界の秘術が眠る場所だろ」

「だけどとつくの昔に次元断層に落ちて滅んだって言われてる」

クロノが腰に手をあてて説明する。

「どんな技術でもあるなんてねえ」

「プレシア女子が探してたんだからホントに見つけたのかもしれないわ  
いわ」

「アルハザードへの道。今じゃあつたかどうかも分からないな」

「食事中に長話してごめんなさいね」

「大丈夫っすよリンディさん。俺食べながら聞いてたんで」

「楓くんずるい〜」

「なのはにとつてもアースラでの最後の食事になるからね」

「素直になればいいのに。クロノくんの照れ屋さん」

「ってかツンデレ？」

「何を!？」

「なのはちゃん。ここには何時でも遊びにきていいんだからね」

「はい。ありがとうございます」

「エイミィ!!アースラは遊び場じゃないんだぞ」

「まあまあいいじゃない。どうせ巡航任務中は暇を持て余してるんだし」

「艦長まで!!」

そして俺たちの帰る朝

「それじゃ今回はホントにありがとう」

「協力に感謝する」

クロノが手を差し出す。

「俺は自分の正義を貫いただけさ。でも、楽しかったぜ」

俺はクロノと握手を交わす。

「フェイトの処遇は決まり次第連絡する。大丈夫さ。悪いようにはしない」

「ユーノくんも帰りたくなったら連絡してね。ゲートを使わせてくれる」

リンディさん。それって職権乱用でわ？

「はい。ありがとうございます」

「そろそろ」

「じゃあ」

「またねクロノくん、エイミーさん、リンディさん」

「近いうちにまた会おうな」

そして、手を振る三人に手を振られ俺たちは日常に帰るのだった。

## 22話 宿命が閉じるとき（後書き）

（楓の拷問室）

作者「書き終えた」

楓「テスト前なのによくやるな」

作者「えへへへ」

楓「あとどれくらいで完結なんだ？」

作者「最終回とエピソードで無印は終わりだよ」

楓「それじゃあ次回予告行くか」

・次回予告

遂にくる別れの時

終わりじゃない

俺たちの始まりの歌

次回『なまえをよんで』

感想・疑問・ご指摘などお願いします。



23話 なまえをよんで(前書き)

無印編完結です。

### 23話 なまえをよんで

アースラから帰った俺はなのはに引きずられるまま高町家に連れていかれ、そのまま休まずに学校へと拉致された。

く昼休みく

「あゝ眠い」

俺は屋上のベンチに腰を下ろして大きなあくびをする。

「それが今まで寝てた奴のセリフ？」

「まだ4時間しか寝てねえ」

「楓くん寝過ぎだよ……」

さすがが苦笑いを浮かべる。

「でも、こうやってみんなでまたお弁当を食べるのは嬉しいね」

「そうだな」

俺は茶飲みで茶を啜る。

「ああゝ緑茶美味しいな」

「どこからそんな物だったのよ!？」

俺とアリサが話してる横でなのは顔が苦しくなる。どっせらリン  
ディさんの秘伝リンディ茶を思い出したようだ。  
美味しいのにな

「でも、こうして平凡に過ごせるのは幸せだな」

「そうだね」

「そうね」

「みんなお祖父さんみたいなの・・・」

こうしてだだの日常に戻れたのも幸せだと思う。

平和なんてほんの少しのことで崩れ落ちてしまっけど、この時の  
場所でこうして過ごせる今を守りたい。

「みんな俺頑張るからな」

「何よいきなり」

「楓くんは頑張ってると思うの」

「そっだよ」

「とにかく頑張るんだよ。色々とな」

（数日後）

朝から俺の携帯が否応なしになり響いた。

「・・・・・・・・ZZZZZZZZ」

『マスターなってますよ!!』

「後5時間32分17秒」

『寝過ぎです。しかも細かすぎませんか!?!』

「ふあ〜」

俺は目をこすりながら携帯を手取る。

「もしもし、保険ならもう24個ほど加入してるのでいらなです」

「クロノだ!!」

「朝からそんなに怒鳴るなんてカルシウムが足りてない証拠だぜ。」

牛乳飲め。そしたらお悩みの身長も伸びると思っぜ」

「余計なお世話だ!!」

「でも実のところカルシウムをとっても身長は伸びず骨が太くな」  
止める「チエ!!」

俺は話を止めクロノの話を聞く。

「朝早くになんだ？」

「早くないぞ……」

「で、なんなんだよ」

「ああ、さっき正式に決まったんだがフェイトの身柄を本局に移動して裁判と事情聴取を行うことになった」

「そうか」

「でも、ほぼ間違いなくフェイトは無罪になるよ」

「そりゃ良かった」

「でも聴取と裁判は結構時間がかかるんだでその前に少しだけはなせるんだが」

「なのはには言ったのか!？」

「これからだよ。フェイトもたちに会いたがっている」

「そうか。もちろん行かせてもらうよ」

俺はそう言って電話を閉じた。

「レイリル!?!」

「どうしたんだ？」

エプロン姿のレイリルがキッチンの方から出てくる。

「今からフェイトに会ってくる」

「フェイトちゃんによろしくね」

「ああ!!」

俺は制服に着替えてなのはを迎えに行った。

～海鳴臨海公園～

公園に着くとみんなの姿が見えた。

「フェイトちゃん!!」

なのはが走り出す。

「オツスクロノ」

「楓も元気そうだな」

「俺から元気をとったらギャグパート持たないでしょ」

「そうだね」

アルフが頷く。

「あまり時間は取れないんだが3人でしばらく話すといい。僕らは向こうにいるから」

「ありがとう」

「ありがとう」

「サンキュウーな！」

クロノとアルフとユーノが離れる。

なのはとフェイトが見つめ合いながら笑う。

だからレズって言われるんですよ。

後、時よりちらっと見てくるフェイトの顔がまぶしくて見えません。

「なんだかいっぱい話したいことが有ったのに変だね。フェイトちゃん顔見たら忘れちゃった」

「フェイトのことをいいわけにするな。実際文系苦手だろ」

「それは言っちゃ駄目なの〜」

「私は……そうだね。私もうまく言葉にできない」

フェイトにはボケないぞ。

「だけど嬉しかった」

「え？」

「真っ直ぐ向き合ってくれて」

「うん。友達になれたらいいと思ったの」

なのはは笑顔で答えたが急にシュツと悲しい顔になった。

「でも今日はこれから出かけちゃうんだよね」

「そうだね。少し長い旅になる……」

「このての事件だから早くて半年ってところだろ」

「また会えるんだよね？」

「うん」

フェイトは小さく頷く。

「少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから」

その言葉を聞いてなのはの顔に笑みがこぼれる。

「来て貰ったのは返事をするため」

「え？」

「君が言ってくれた言葉友達になりたい」



「うんうんうんうん」

返事し過ぎだ。

「私にできるなら私でいいならって」

「そんなそんけんするなよ」

「私どうすればいいかわからない。だから教えて欲しいんだ。どうしたら友達になれるか」

「簡単だよ」

「スンゲー簡単だ」

「名前を呼んで」

「初めはそれだけでいいの。君とかあなたとかそうゆうのじゃなくて、ちゃんと相手の目を見てはつきり相手の名前を呼ぶの」

「俺だって自己紹介から始めたろ」

「私高町なのは。なのはだよ」

「じ存じ雨宮楓」

「なのは・・・楓・・・」

「うん。そう」

「ああ」

「なのは・・・楓・・・」

「うん！」

「なのは、楓」

「うん！」

フェイトが出した手をなのはが両手で握む。

「ありがとうなのは、楓」

「うん」

「どういたしまして」

風が俺たちの間を通っていく。

「君の手は温かいねなのは」

なのはが涙を零す。

「少し分かったことがある。友達が泣いてると同じ様に自分も悲しんだ」

「フェイトちゃん」

なのはがフェイトに抱きつく。

「ありがとうなのは。今は離れてしまっけどきつとまた会える。そうしたら君の名前を呼んでもいい？」

「うん」

「会いたくなったらきつと名前を呼ぶ。だからなのはも私を呼んでなのはに困ったことがあったら今度はきつと私がなのはを助けるから」

俺は入り込むすぎがないと思いきろノたちのベンチに腰を落とす。

「なのははホントにいい子だね。フェイトがあんなに笑ってるよ」

「二人ともいい顔だ」

クロノが立ち上がり二人の所に行く。

「時間だ。そろそろいいか？」

「うん」

「フェイトちゃん」

なのはがリボンをほどく。

「思い出にできるのみんなのしかないんだけど」

「じゃあ私も」

フェイトも自分の黒いリボンをほどこく。

「ありがとう、なのは」

「フェイトちゃん」

「きつとまた」

そして、リボンの交換をする。

「フェイト」

「楓」

俺はフェイトに三角形のペンダントを渡す。

「これは？」

「ただの何の力もないペンダント。仲間の絆を繋いでくれるペンダントだ」

「ありがとう」

「ついでになのはも」

「うん。ありがとう」

するとアルフがなのはの肩を叩く。

「アルフさんも元気でね」

「リニスによろしくな」

「色々ありがとね。楓、なのは、ユーノ」

「じゃあ僕も」

「クロノまたな」

「またね」

「ああ」

三人の足下に転送ポートが現れる。

「バイバイ。またね。クロノくん。アルフさん。フェイトちゃん」

俺たちは手を振った。

三人は消えていったのだ。

「なのは」

「なのは帰るぞ」

「うん！ー！」

この日の空は美しい青空だった。

翌日

（職員室）

「雨宮くんどうしたの朝から？」

「いや、全員そろっていて良かったですよ」

先生たちがポカンとしている。

「先生たちが全員いないと証拠の隠滅できませんでしたから」

「雨宮くん、いい加減にしないで。いったいどうしたの？」

俺は一本の刀を。

「先生方さよならです」

「雨宮くん！！」

「碎ける鏡花水月」

Side なのは

「ねえなのは？」

「どうしたのアリサちゃん」

「楓今日も遅刻かな？」

「にははは。そうかもね」

「でも、心配だよね」

「どうせ朝寝したとかでしょ」

アリサちゃんとすずかちゃんと話していると先生が入ってきた。

「皆さんに朝から悲しいお知らせがあります」

私には先生が何と言ったか分からなかった。

「雨宮楓くんがご家族の理由で転校しました」

その時には分からなかった。

## 23話 なまえをよんで（後書き）

（楓の拷問室）

作者「無印終わったー」

楓「てめえまだ期末試験中だろ」

作者「なのはのブルーレイ買ったらさテンション上がったちゃって」

楓「お前な……」

作者「まあとりあえず込み合った話は次回にしよう」

楓「次回？」

作者「今回は出張版楓の拷問室です」

楓「これまでの話やこれからの話が」

作者「good です」

楓「それじゃあまたな」

・A・S予告編

？「君たちも待ち望んでいたのだろう。私の登場を……」

楓「お前そこまででないぜ」



? 「なんとゆうことだ。君の周りには研究材料がたくさんあるのに  
-----!!!」

? 2 「楓こいつどうしたんだにゃ？」

楓 「気にするな」

? 2 「ん？じゃあそっさせてもらいますにゃ」

こんなメンバーで大丈夫か？ A・S 編お楽しみに。

感想・疑問・質問・ご指摘・コメントお願いします。



楓「バカだけど気配つつか、存在感が強いんだ」

なのは「そう言えば楓くん」

楓「どうした？」

なのは「楓くんの力でまだ使っていないのがあるよね？」

楓「答えを出す者か？」

なのは「うん」

楓「答えを出す者はある意味最強だろ」

はやて「確かにこっちの手の内が知られてたら怖いな」

楓「だからこれを使うと脳に強いダメージがくるんだ」

フェイト「つまりかなりのピンチの時しか使えないってことだね」

## 第2話

なのは「この頃は能力にダメージがあるなんて知らなかったんだよね？」

楓「ああ。だから極力弱い能力からならしていくようにしているんだ」

## 第3話

フェイト「レイリルさんの初登場の回だね」

なのは「楓くん。レイリルさんって最初よりイメージが変わったよね？」

楓「俺の修行につき合う間にSに目覚めたんだ……」

はやて「だから家に帰りたくなさそうに夜まで家にいるんやね」

なのは「私の家に泊まってくればいいのに」

楓「嫌だ（凜ッ！！）」

#### 第4話

なのは「この日は私とユーノくんが出会った時だね」

作者「ここで楓の地味な正義が」

楓「地味言つな……」

#### 第5話

はやて「ここが私の記念すべき初登場の回や……」

なのは「ホント仲が良さそうだね。楓くん、はやてちゃん……」

フェイト「そうだね。お仕置きしないとね……」

楓「あのなのはさん、フェイトさん。その手の縄と鞭は何なんですし

ようか？さすがにコーナーのタイトルが拷問室だからってそりゃくべらねhshhっsjdj!!」

はやて「ごめん楓くん……………」

作者「魔王と悪魔は止められないのさ……………」

#### 第5・5話

作者「これはドラマCDの話だな」

はやて「みんな楽しそうやな」

作者「大丈夫さ。そのうち海にでも連れて行くから」

はやて「おおきにな作者さん」

#### 第6話

はやて「楓くんってサッカーも得意なんやな。前の世界でもやってたん？」

楓「前の世界じゃ天文学部に入って」

なのは「楓……………」

フェイト「まだお話は終わってないの……………」

楓「はやて助け……………」

## 第7話

フェイト「これは私の初登場の回だね」

はやて・作者「お帰りなさいませテスタロッサさん!!」

フェイト「どうしたの?急に」

## 第8話

なのは「これは私がフェイトちゃんに負けちゃった回だね」

フェイト「ごめんね」

なのは「謝らないで!?!」

## 第9話

作者「この回は楓の戦闘パートなんだけど楓は気絶してるな……」

┌

なのは「楓くんの魔法は綺麗なの」

フェイト「確かエンシエントバスターだったよね?」

作者「エンシエントバスターは集束30%砲撃70%なんだ」

なのは「なんだかすごいかも……」

フェイト「魔力バランスが上手いからできる技だね」

第10話

なのは「この時はアリサちゃんに悪いことしたの」

作者「アリサから手紙が来てるよ。『別に怒ってないわよ。いつまでも引きずってたら、また怒るからね』って」

なのは「アリサちゃん」

第11話

作者「この辺はなのはが多いな」

なのは「にやはは この時私はフェイトちゃんと友達になりたいと思っただ」

フェイト「ありがとうなのは」

なのは「うんフェイトちゃん」

はやて「相変わらずラブラブやな」

第12話

なのは「この時の楓くんかっこよかったよね」

フェイト「でもこの時のレイリルさん怖かったな」

なのは「殺意がすごかったよ」

作者「レイリルは実力的にはクロノやシグナムと同じ位戦闘能力もあるからな」

### 第13話

作者「ここでフェイトは楓の正体を知るんだよな」

フェイト「うん。楓がライルさんって知ったときはびっくりしたんだよ」

楓「すまないな……」

はやて「楓くん大丈夫なんか？」

楓「全然」

### 第14話

楓「次からトイレにはちゃんと行っておいっ」

はやて「嫌な教訓やな」

### 第15話

フェイト「楓。母さんを初めて見たとき、どう思った？」

楓「スンゲー怖かった」

なのは「昔のプレシアさんって優しかったんだよね？」



フェイト「うん。母さんはとっても優しい人だったんだよ」

楓「この時俺がもつと伝えれたら」

フェイト「大丈夫だよ。きっと」

## 第16話

はやて「この時、楓くんはクロノ君に勝てる作戦はなかったん？」

楓「利き腕の右腕をもっていかれてたし、体力的に創造は使うには力がたりなかつたしな」

はやて「そうなん？」

楓「違う戦い方もできたんだぜ」

なのは「苦しいいいわけなの」

## 第17話

なのは「これは私たちが初めてアースラに行ったときの話なの」

楓「今となつたらいい仲間だな」

なのは「でもお砂糖ミルク入り緑茶は止めて欲しいの」

楓・フェイト「おいしいのに」

なのは「フェイトちゃんも!？」

## 第18話

作者「ここは楓の選択の話だな」

楓「俺は思ったんだ。失っていいものなんてない。俺はどんな状況だろういが手を伸ばし続ける」

フェイト「ありがとう楓」

楓「別にお前にだけに行ってる訳じゃないんだからな!！」

なのは「楓くん照れてるの」

楓「うるさい」

## 第19話

はやて「そういえば楓くんって銃形態しか使ってへんよね?」

楓「理由があるんだよ」

はやて「理由?」

楓「剣形態はベルカ式なんだ」

作者「ちなみにアクイラはミッド式とベルカ式のハイブリッドタイプだ」

楓「ちなみA' S編では剣形態の他にも新たな形態が登場するぞ！  
」

## 第20話

なのは「これは私が決意を固めた日だね」

楓「俺が問答無用にシスコンにやられた日だな・・・」

## 第21話

楓「決戦編前編だな」

フェイト「なのは。この時は私に思いを伝えてくれてありがとう」

なのは「私は伝えなかったただけだから」

フェイト「なのは・・・」

なのは「フェイトちゃん!!」

楓「次行くぞ。次」

## 第22話

楓「俺は実感したよ力が足りないって」

フェイト「楓・・・」

楓「だから俺はあの人のように誰も俺の手の届かない所に行かせな

い  
「

なのは「楓くん」

楓「だからみんなもこれからよろしくな」

### 第23話

作者「長く続いたこの話もこれで最後です」

なのは「この話はみんなの始まりの話なの」

フェイト「私は自分を始められた」

はやて「……………」

楓「どうした？」

はやて「私でてない……………」

作者「そんなはやてさんに朗報です」

はやて「何や？作者さん」

作者「A、S編では楓とはやてさんは同棲します」

はやて「ほんまか!？」

作者「では皆さん。A、S編を」

作者・はやて「お楽しみに〜」

なのは「楓くんとはやてちゃんと同棲だつて」

フェイト「お仕置きが必要だね」

楓「不幸だあああああああああああああああああ！！」

・次回予告

あの話から半年がたった

平和な日常を過ごしていたなのはの元に現れる襲撃者

現れる友達

そして……………楓は……………

次回「襲撃者は正義の味方」

24話 襲撃者は正義の味方(前書き)

A・S編スタートです。

## 24話 襲撃者は正義の味方

No Side

雨の降るバラ庭園。そこで一人の銀の髪の女性が紅茶を飲んでいた。

「私はまた同じことを繰り返さないといけないのだろうか」

また女性は紅茶を一口飲む。

「客人か……」

少年は女性の向かい側に座る。

「私はまた騎士たちにつらい思いをさせてしまうかもしれない。特にヴィータにはつらい思いをさせなければならぬ……」

「それがお前の意志か夜天の書……」

「私の名前を知る物はいつ以来だろうか……」

「夜天の書……」

「主と騎士たちをよろしく頼む」

「違うな……」

「違う?」

そして少年は……

「俺がお前ら全員を救う！！もう誰も失わないために！！俺の正義に賭けて！！」

12月1日 AM6:35

海鳴市 桜台

朝早く。少なくとも楓なら夢の中にいる時間に少女は一人……いや、一人と一機と行った方がいいかもしれない。

「それじゃあ今朝の練習の仕上げシュートコントロールやってみね」

『わかりました』

「リリカルマジカル」

少女がそう唱えると足下にピンクの魔法陣が現れる。

「福音たる輝きこの手に来れ。導きの元鳴り響け」

少女は持っていた空き缶を空に放る。



「デイベインシューターシュート!!」

少女から放たれたピンクの光は空き缶を何度も弾く。

「コントロール」

少女の持つ宝石型のインテリジェントデバイスレイジングハートが  
時を刻む。

「アクセル」

魔力の弾が早さを増し。

『100』

少女は力を一度抜く。

「ラスト」

少女は魔力の弾を空き缶にてる。空き缶はゴミ箱に当たるが入らな  
かった。

「はあ〜」

『よい出来ですよマスター』

「あはは、ありがとうレイジングハート」

少女の名前は高町なのは。割と最近までは平凡な小学3年生だった

が、春に起こったある事件がきっかけで魔法使いになった。

「今日の練習、採点すると何店？」

『約80点です』

「そっか」

Side なのは

私に魔法と勇気をくれたみんなとは今は少し離ればなれ。

でもきつとまた会えるから。

私がキッチンに着くとお兄ちゃんが来る。

「なのは。郵便が来てるぞ」

「ホント」

「海外郵便。差出人はフエイト・テストロッサ」

「ありがとう。お兄ちゃん」

私はお兄ちゃんから封筒を受け取る。

「いつものあの子だね。またビデオメール？」

お姉ちゃんがさりげなく聞く。

「きつとそつ」

「その文通ももう半年以上になるよな」

「フエイトちゃん今度遊びに来てくれるのよね。来てくれたらお母さんうーうーんと歓迎しちゃう」

「うん」

「ユーノもホントの飼い主見つかってめっきり寂しいし」

「お前は特にかわいがってたしな」

「でもまた預かることになるかもだよ。その飼い主さんしだい」

「だといいな」

「そう言えばあいつがいなくなって半年か」

「お兄ちゃんライバルがいなくなって寂しいの」

「バカ、美由紀。別にそんなんじゃねえーよ」

「楓くんは今何をしてるんだろうね」

「お父さんが新聞を読みながら思い老ける。」

「大丈夫だよ。きつと楓くんは帰ってくるよ。きつと……」

私の胸には楓くんに貰ったペンダントが今も光っている。

No Side

夜のオフィス街叫び声とともに二人の魔導士が倒れた。

「ぞこいな。こんなんじゃたいした足しにならないけど」

赤いゴスロリのような服を着た少女が倒れた二人の前で本を開く。

すると、うめき声とともに魔導士から光る玉が現れる。

「お前らの魔力闇の書の餌だ」

「餌って怖／＼／＼／＼」

暗がりで見えないがそれは少年の声だった。

「とにかくはやてが心配すつからヴィータ帰るぞ」

「わかったよ」

そして二人は暗がり消えた。

12月2日PM7:45 海鳴市市街地

「どうだヴィータ。見つかりそうか？」

ヴィータの隣で藍色の狼ザフィーラが話しかける。

「いるような、いないような・・・こないだから時々出てくる妙に

巨大な魔力反応。あいつが捕まれば、いっきに20ページ位はいきそうんだけどな」

「分かれて探そう。闇の書は預ける」  
は

「OKザフィーラ。あいつもずっと探してるんだ。あんたもしっかり探してよ」

「心得ている」

そう言うとザフィーラは消えて、ヴィータはなのはたちとは違う形の三角形の魔法陣を出した。

「封鎖領域展開」

海鳴は結界に包まれた。

（高町家）

結界が展開されたときののはは勉強の最中だった。

『警告、緊急事態です』

「へっ、結界!？」

（海鳴市市街地）

所変わってヴィータは魔力サーチをしていた。

「魔力反応。獲物みつけ!!!行くよグラーフアイゼン」

『了解』

ヴィータの愛機グラーファイゼンが答えるとヴィータ移動を始めた。

（高町家）

またまた場所は戻り、なのはは、訳が分からず窓の外を眺めていた。

『対象、高速で接近中』

「近づいてきてる？こっちに？」

なのはは迷うが決意を決める。

『来ます』

なのはが外にでるとレイジングハートが何かの襲来を告げる。

空が赤く光りなのはも構える。

『誘導弾です』

飛んできた誘導弾をプロテクションで防ぐ。

「テートリヒシューラーク！！」

反対側から突如現れたヴィータからの襲撃に残った手で防ぐ。

「ああー!!」

しかし、防ぎきれずビルから落ちる。

「レイジングハートお願い!!」

なのはの体をピンクの光が包みバリアジャケットを装着する。

しかし、ヴィータの相手が無防備に変身してるところを待つほどバカじゃない。そのままヴィータは鉄球をピンクの光に打ち込んだ。

「ウラアアアアアア!!」

そして、追い打ちをかけるが煙から出てきたなのはそれを避ける。

「いきなり襲いかけられる覚えはないんだけど?どこの子?いったいなんでこんなことするの?」

ヴィータは話を聞かずに手に弾を用意する。

「言ってくれなきゃ分からないってば!!」

なのはは遠隔操作している魔力弾を後ろから撃とつとする。

「あっ」

気づいたヴィータはうまく避け最後の1つをグラーファイゼンで受け止める。

「このやるおおおおおおおおお!!」

切れたヴィータはグラーフアイゼンで殴りかかろうとするが、すかさず避けるのは「

「話を聞いてつてばあああああ!!」

デイベインバスターを撃つのは。話をホントに聞きたいのだろうか？

避けたときにヴィータの帽子が壊れるとヴィータの元々鋭い目つきがさらに鋭くなる。

「グラーフアイゼン。カートリッジロード」

そうするとグラーフアイゼンの形が根本的に変わり、小さいハンマーがガンハンマーのような形になる。

「ラケーテン!!」

ハンマーの一方からジェットガ噴射されるのはプロテクションでガードしたがビルのまどにぶつかりビルの中に入る。

「ゴホン!!ゴホ!!」

咳き込むのは。

ヴィータはさらに追い打ちをかける。

『プロテクション』



とっさにレイジングハートがシールドを張るが押し込まれる。

「ぶち抜けー！！」

『了解』

そしてなのはは壁にぶつかる。

ヴィータがなのはに近づく。

なのはが覚悟を決めた。

その時。

キンと金属音が鳴り響いた。

なのはが目を開けると目の前にいたのはフェイトだった。

「ごめんなのは遅くなった」

ユーノはなのはの肩に手を置き謝罪をする。

「ユーノくん？」

「仲間か!？」

「友達だ」

ヴィータの問いかけにきつぱりと答えるフェイト。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

「あうんだ!?! てめえ!?! 管理局の魔導師か?」

「时空管理局囑託魔導師フェイト・テストロッサ。抵抗しなければ  
弁護の機会は君にはある。同意するなら武装を解除して」

「誰がするかよ!！」

ヴィータはそう言ってビルから飛び出す。

「ユーノ。なのはをお願い」

フェイトもヴィータを追いかける。

「ユーノくん?」

なのはに回復魔法をかけながらユーノが語り出す。

「フェイトの裁判が終わってから、みんなでなのはに連絡しようとしたんだ。そしたら通信は繋がらないし、局の方で調べたら広域結界が発動してるし。だから慌てて僕達が来たんだよ」

「そっか・・・ごめんね・・・ありがとう」

「あれは誰？なんでなのはを？」

「分かんない・・・急に襲ってきたの・・・」

「でももう大丈夫。フェイトもいるしアルフもいるから」

「アルフさんも？」

「バルデツシュ」

フェイトはアークセーバーを打ち出す。

「グラーファイゼン！！」

ヴィータも負けじと4つの鉄の球を打つ技、シュワルベフリゲーションで対抗する。

それをヴィータは障壁で防ぎ、フェイトは飛びながら回避する。

「バリアブレイク」

フェイトに気を取られていて下にいたアルフに気づかずとっさに障壁を張るが粉々に砕け散る。

しかし、ヴィータその体勢から打撃を打ち込み障壁ごとアルフを飛

ばす。

そのままヴィータとフェイト・アルフの攻防が続く。

先に攻めたのはアルフだった。バインドをヴィータに掛ける。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えて貰うよ」

フェイトがそう言ったその時だった。

「なんかやばいよフェイト」

アルフがそう言うとフェイト前をオレンジ斬撃を横切り、ピンクの髪的女性が剣でフェイトを押し返す。

「シグナム？」

「ウオオオオオ！！」

それに続いて人間形態のザフィーラがアルフに殴りかかる。

そして片手に巨大な剣を付けた少年がヴィータの前に立った。

「え〜と何だっけ？名前と出身世界だったっけ？」

それはフェイトたちのよく知る人物だった。

「俺の名前は雨宮楓。出身世界は第97管理外世界地球。目的は言えるかよバカ」

そう楓だった……

## 24話 襲撃者は正義の味方（後書き）

（楓の拷問室）

楓「オイ！！新章なのに俺の出番少なすぎるだろ！！」

作者「やめる！？アキラで切ろうとするな！！ちゃんと次回からはお前の出番ばっかりだから」

楓「ホントか？」

作者「ああ。次回からはお前がこの半年間何をやってたかの回想だ」

楓「でも今週から修学旅行だろ？」

作者「旅にでて一回り強い男になって帰ってくるよ」

楓「事故にあつて頭を打てばいい」

作者「酷いな」

楓「次回予告だぜ」

・次回予告

鏡花水月 の反動により重傷を負った楓。

10日後目を覚ましたのはあの男のラボだった。

次回「登場変態科学者」

「とうとう私の登場か・・・」

25話 変態科学者登場（前書き）

修学旅行で遅くなりました。

後書きにて企画があります。



## 25話 変態科学者登場

（楓が鏡花水月を使って10日後）

「ふあ〜？よく寝た」

・・・あれ？

・・・あれれれれ？

「ここどこだっけ？俺何してるんだっけ？」

目を覚ますと俺は体中に包帯を巻かれていた。ミイラ？

「頭までおかしくなったか？」

「レイリル？」

『ぐっすりお眠りになられてましたよ』

「アクイラ……あと9時間寝せて」

『まだ寝るきなんですか!?!』

「もちろん」

その時、俺の目の前に剣が振り落とされた……

「さつさと起きろ……」

「I s i r。レイリルさん……」

俺は急いで私服に着替える。

「なあ、あいつは研究室のほうか?」

「ええ」

「じゃあ行ってくるわ」

ベットの脇に置いてある松葉杖を突きながらドアを出て周りに生体ポットが並んでいる廊下に出る。

「相変わらず趣味悪いな……」

ゆっくりと進み大きなドアの前に着く。

「オイ、いるか?」

『入ってくれ』

ドアが開く紫の髪をした男ジェイル・スカリエツティとその娘ウーノとチンクが現れる。

「やあ、遅いお目覚めだね」

「ぐっすりと寝ていてもう起きないかとおもったぞ」

「心配かけてごめんなチンク」

「そのまま死んでも私は構わないのだけど」

「あの〜ウーノさん。少しは発言をオブラートに包んでくれませんか？」

ああ・・・泣きそう。

「まあ、落ち込まないでくれ。ウーノだって本気でやっている訳じゃないんだ」

ありがとうジェイル。その言葉だけでご飯3杯いけるよ。

「あれ？ドゥーエはともかくクアットロとトーレは」

「トーレはトレーニングルームでトレーニング中でクアットロは別室で作業中よ」

「ジェイル。俺が寝てる間にクアットロに何かされてないか？」

「それなら大丈夫よ。ドクターとチンクが必死に止めてたから」

俺はすぐに2人と厚い抱擁を交わした。チンクは逃げようとしてたけど。

「端末を飛鳥に繋げるか」

「問題ないよ。しかし今彼は授業中だと思っただが」

ジェイルがそう思うのもそのはず。今は5時間目の真っ最中だ。

「たぶん大丈夫」

俺は手慣れた手つきで機械を操作する。

「こちら楓。こちら楓聞こえますか」

するとモニターに金髪のいかにも不良という少年が映る。

「こちら飛鳥聞こえてるにや」

「思った通り昼寝中か」

「ちょっといいか？」

「どうしたんだにや」ジェイル？

「飛鳥。君はまだ授業中ではないのかい？」

「何言ってるんだにや」ジェイル。飯食って、こんなに天気の良い

日に昼寝しないなんて昼寝の神さまに怒られるにゃ〜そうだとる楓

「確かにそうだな」

「本当に君らは仲がいいな」

「まあな。で、楓どうした？」

「俺がいなくなってどうなったか知りたくて」

「かなり荒れてたぜ」

飛鳥が突然まじめな顔になる。

「高町と月村は5日は学校を休んでた。今も学校には来てはいるが、かなり落ち込んでるぜ」

「やっぱりな……」

「バニングスは無理矢理に元気ぶってはいるがかなりギリギリな状態だ」

「あいつらしいってことか……」

「後、楓ファンクラブの女子たちがかなりの召喚儀式を始めてる」

「なんだファンクラブって！？いや、あつたらあつたで嬉しいけどさ。ってか召喚って俺は悪魔か！！」

「後、お前がいなくなったことにより男子たちがモテようと必死だ」

「必死だなオイ！」

「だから俺も忙しいんだにや」

「お前もか!？」

飛鳥がまじめな顔になる。

「ともかくお前がいない間の八神の監視は俺がやっておく。だから、お前はさっさと戻ってこい」

「ああ・・ひとまず闇の書起動までにまでには戻る」

俺はモニターを閉じる。

「ジェイル用意はできてるか？」

「君の注文通りAMFが充満している部屋を作っているよ。しかし何をすべきなんだい？」

「あそこで魔力を期限ギリギリまでそこあげとレイリルとのユニゾンの安定化を目指す」

俺は拳を握る。

「PT事件じゃ俺は何もできなかった。だけど今回は・・今回だけは諦めたくない」

「なら僕や娘たちも全力でサポートさせてもらおうよ」



## 25話 変態科学者登場（後書き）

（楓の拷問室）

作者「みなさんにお問い合わせがあります」

楓「突然どうした？」

作者「オリキャラの募集をします」

楓「飛鳥みたいな？」

作者「そう楓の仲間になってくれるオリキャラを考えてください」

例

・名前

・偽名&あだ名

・性別

・レアスキル（無くてもいいです）

・魔力変換（無くてもいいです）

・外見（漫画・アニメ・ラノベ・特撮のキャラにたとえてくれると助かります）



・トラウマ&問題

・概要

作者「送ってくれた方には楓・レイリル・飛鳥をいつでも無許可で使ってやってください」

楓「感想やメッセージから送ってくれたら幸いです」

作者「唐突ですみませんが是非お願いします」

・次回予告

始まった修行。

そして回想始まっていきなりかなりの月日が流れた。

次回「修行と八神家」

## 26話 修行と八神家

「よし、始めるか」

俺は何もないトレーニング室の中心に立つ。

「楓ちよつといいかい？」

部屋のスピーカーからジェイルの音声が流れる。

「何だ？」

「アクイラに黄色いボタンが付いてるだろ？それを押してみたまえ」

気がつくとアクイラには言われた通り黄色いボタンが付いている。

「これか？」

ボタンを押す。

「右手がサイコガンになる」

「なんで!?!？」

「はっ！」

「楓、大丈夫か魔されていたぞ」

「夢か？」

夢でした・・・・・・・・・・・・・・・・

俺とチンクがトレーニングルームに着くと先客がいた。

「トーレ元気か？」

「楓か。トレーニングか？」

「修行と言ってもらいたいね」

「そういえば楓、レイリルはいないのか」

チンクが周りを見渡す。

「レイリルならいないぜ。この修行はユニゾンデバイスのあいつに  
とっては辛すぎる」

「それはどういうことだ？」

俺はバリアジャケットを展開する。

「ジェイル始めてくれ」

「分かった」

どこからからジェイルの声がすると思うと俺たちに重力とは違う何  
かが体にかかる。

「何なのだこれは!？」

チンクは戸惑う。

「これはEDフィールドだ」

ジェイルの声が流れる。

「ドクターEDフィールドとは何なのですか」

平然とトーレが聞く。しかし、なんでこの状態でそう平然としてい  
られるのですか？

「EDフィールドとは人間の生命エネルギーを低下させるものだ」

「生命エネルギーを低下させる？」

「トール試しにISライドインパルスを使ってみたまえ」

トールは体に力を入れて動くがなにも起こらない。

「ライドインパルスが発動しない!？」

トールのISはライドインパルス。簡単に言えば高速移動だ。しかし、今はそれが発動してない。

「この空間では人間の生命エネルギーがすべて押さえられる。並みの人間なら生命エネルギーが低下して命を失う危険性があるくらいだよ」

「それはすごいな。しかし、ドクター、それを実戦に用いればかなりの力になるな・・・」

「チンクそれは無理だよ」

「そうだけ。確かにこいつは万能だ。だが万能ゆえの欠点がある」

「欠点？」

俺はチンクが疑問を抱く。

「これを使えば敵の戦力は下がる。だが自分の戦力もな」

「味方も？」

「僕も開発を進めているんだが生命力をさらに低下させることはで

きるが、それを防ぐことは今の、いや未来の科学力でも実現は不可能だろうな」

「今ここにいるメンバーだから俺たちは無事なんだ。俺はこの数年間修行で死にかけた（本当に）。戦闘機人のお前らも同意だ」

俺は壁に向かって魔力弾を打つが壁に当たる前に消えてしまう。

「だから体の構成の魔力が多いレイリルはここで存在が難しい。だからレイリルは別室での修行をしている」

俺はチンクとトーレの方を向き構える。

「ここでの修行でまた一段と強くなる。強くならなきゃいけないんだ。俺の目の前で誰も死なせないように。誰も殺させないように。もう手を離さないように」

俺はここで強くなる。もう誰も失わないように。

2ヶ月後

「はやて！！俺をここに住まわせてくれ！！」



## 26話 修行と八神家（後書き）

楓の拷問室はお休みです。

現在オリキャラ募集をしております。詳しくは25話の楓の拷問室をご覧ください。



**番外編 1年前のクリスマス（前書き）**

クリスマスにちなんでクリスマス話です。

## 番外編 1年前のクリスマス

これはフェイトと会う半年前のクリスマス、つまり闇の書事件の1年前の話だ。

（翠屋）

翠屋に俺やなのは・すずか・アリサ・美由希さん・土郎さん・桃子さんがそろっている。ちなみにクソシスコン野郎は月村家で熱い夜を過ごしてるらしい。

「みんな今日はお腹いっぱい食べてくれ」

「……いただきます!!」「」「」

土郎さんの掛け声で俺たちはテーブルの上の料理を食べ始める。

「やっぱり翠屋のケーキは美味しいわね」

「土郎さん美味しいです」

「ありがとね、すずかちゃん」

「ねえ？楓くん。ケーキばかり食べてないで少しはお話に加わろうよ」

「ぶばびぶだがばじょうばがいばろ（うまいんだからしょうがない

だろ」

「ちゃんと呑み込んでからはなしてなの」

ゴクッ！

「世界とは矛盾した混沌としたものなのさ」

「さっきと言ってることが違うの」

「そつだ俺お前らにプレゼントを持ってきたんだ」

「『『『『プレゼント!?!?!?!』』』』」

「まず美由希さん」

「私!?!?!」

俺は美由希さんに長方形の箱を渡す。

「なんだろうな」

美由希さんが箱を開けると中には黒い竹刀が。

「カーボン使用特殊竹刀『黒閃』です」

「楓、美由希さんだって女の子なの。よそなので喜ぶわけ……」

「ありがとう楓くん。これ欲しかったんだ」





「へろへろ……」

「結局爆弾じゃない」

「気にするな」

「気にするわよ」

「次はお前だから」

「また爆弾じゃないでしょうね」

「さすがに3回目はないかも」

なのは復活。

「そつだよ。そんな分かりやすいこと楓くんでもしないよ」

すずか復活。

「あんたたち何時復活したの」

「気にしちゃダメなの」

「そつだよ」

「そつだよ」

「」「」「楓（くん）（）が言えないの……」

そんな突っ込みをスルーして箱を箱を渡す。

「これは何よ」

箱の中に入っていたのは気持ち悪いぬいぐるみだった。

「なによこのキモイ人形」

「キモイ人形とはなんだこのウンジャラゲゴライアス人形を」

「何よウンジャラゲゴライアス人形って」

「よつするに」

俺はナイフをアリサに投げる。

「楓くん!？」

「アリサちゃん」

そしてナイフが刺さった。

ウンジャラゲゴライアス人形に。

「これは身代わりになってくれる人形なんだ」

「ははは………ありがとう」

アリサは恐怖で顔が強張っていた。

なのはたちにちゃんとしたプレゼント（なのはにはロケット・すずかには腕時計・ありさにはウンジャラゲゴライアス人形）を渡すとなのはたちがこちらを向いてきた。

「実は楓くんにプレゼントがあるの」

「時間かけて選んだんだからね」

「気に入ってくれるかな」

渡されたのはスパイクだった。

「楓くんよくサッカーするから」

「なのは……すずか……アリサ……ありがとう……大切に  
するよ」

「えへへ楓くん。スパイクに赤いボタンがあるでしょ。押してみて」





そして俺はクリスマスの夜に分かったんだ。

人にいたずらすると自分に返ってくるって。

Side はやて

クリスマスの夜。楓くんからのプレゼントが届いた。

『はやてへ

メリークリスマス。今日のはやてに会えないのでプレゼントを贈りました。

まず大きい箱を開けてください。これ絶対！！小さい箱は最後に開けてください』

「この箱の中身なんやろ」

私が箱を開けると銀色の箱が入っていました。

「きれいな箱や。開けてみよ」

『P・S・大きな箱の中身は爆弾です』

目覚めた時にはもう朝でした。そして小さい箱には白いブレスレットが入っていました。

番外編 1年前のクリスマス（後書き）

（楓の拷問室）

楓「なんか今日の拷問室は明るいな」

作者「クリスマスだからな」

楓「ちなみにクリスマスの話後3つ案があつたんだろ？」

作者「ああ。一つは楓と幼馴染たち全員を集めたクリスマスパーティー。二つ目はスカリエッティのラボでのシユールなクリスマス。三つ目は楓とサンタの物語」

楓「二つ目は絶対にごめんだな」

ジェイル「それはないんじゃないか楓」

楓「お前は引つ込め」

~~~~~

楓「オリキャラ応募企画」

作者「今回は楓の仲間の定員です」

楓「オリキャラはなんとか形ですけどな。仲間の店員は約15人だ」

作者「その際、二つのキャラの設定を融合させたりする可能性もあります」

楓「融合させたくない場合は一言お願いします」

作者「また、月光閃火様、紅 幽鹿様、フロントム様、オリキャラの応募ありがとうございます。これらのキャラをうまく使わせていただきます」

楓・作者「それでは皆様メリークリスマス!!」

~~~~~

次回予告

ついに楓が

あの楓が

禁忌を犯す

楓「もうお嫁にいけない」

いったい楓に何があつたのか!?

そしてついに闇の書が起動する

シグナム「貴様何者だ・・・」

楓「正義の味方兼闇の書の主はやての親友、雨宮楓だ」

次回『ゴスロリとケーキと闇の書 起動』

27話 ゴスロリとケーキと闇の書 起動(前書き)

風邪がきつい……………

27話 ゴスロリとケーキと闇の書 起動

6月3日

庭を見みてお茶を飲みながら春か夏か分からない微妙な季節を楽しんでいた。

「うまいな〜」

「ホンマヤね〜」

「なんか忘れてるような〜」

「そやね〜」

「ああ〜今日は学校か〜」

「そつなんや〜」

「まあいいか〜」

「そつやね〜」



「ってようない！！早く行って！！」

楓は家から追い出される。

「じゃあない。はやて、今日誕生日のケーキ買ってくるから」

楓は手を振り、その手を制服のズボンに突っ込みながら歩き始めた。

「で、追い出されたのかい？」

「はやてはルーズなのか厳しいのかわからねえよ。まあそれがはやてのいいところであるんだがな」

「今日はどうするんだい？」

楓はアクイラに時間を聞く。

「今は11時から3時まで修行するわ」

「飛鳥君が『は』だるい。午後そっち行くわ』だそつだ」

「サボりかよ」

「お前もある意味サボりだろ」

レイリルがドアから入ってくる。

「俺は今フリーの学生だぜ」

「フリーの学生って何だい？」

「気にするな。それより今日から本格的にユニゾン状態での修行を始めたんだが」

「そんなに私と合体したいなんて楓そんなに欲求不満・・・」

「変な言い方すんじゃないよ。俺は連続婦女暴行犯か!！」

「違うのか？」

「ああ、もう突っ込むのもめんどくさくなってきた」

「修行するならさっさとしろ。先に行くぞ」

「お前の所為だぞ。ああ、なんでだよ」

楓はレイリルと修行部屋に向かった。

「死ぬ・・・絶対に死ぬ・・・」

「これくらいの修行で根を上げるなんて」



「でもそのまま行ったらあなたの正体がばれるんじゃないの？」

「あつ、考えてなかった」

「あなたは考えることだけ考えて、後は何も考えて無いわよね」

「それなら楓。着ぐるみを着ればいいのではないか？」

「レイリル。間違えたら捕まるぞ」

「ちっ。なら」

「『ちっ』じゃないだろ！！俺、本当にお前マスターだよな！！」

「なら変身はどうだい？」

ジェイルの言葉を聞き、楓は悩み始める。

「変身か・・・でもあれはしたくないんだよな。男として」

するとレイリルとジェイルが後ろに立つ。

「オイ、まさか！！」

レイリルには手にゴスロリをジェイルは手にメイク道具のたくさん入っていた箱を楓に向けた。

「えっ！！ちよつと待て！！落ち着いて話せばわかるる、ああああああああああ！！」

「もうお嫁に行けない……………」

部屋の中心に髪で右目を隠した少女がたたずんでいる。

「諦めるんだ君は今日から貞子だ」

「何だよ！！俺と接点0だろ！！誰がそんな名を付けたんだよ！！」

「私だが！！」

「レイリル貴様か！！」

Side はやて

「石田先生こんにちは」

お昼御飯を食べて一息入れていると主治医の石田先生から電話が着た。

「こんにちは、はやてちゃん」

「石田先生。今日はどうなさったんですか？」

「明日はやてちゃん誕生日ですよ。だからディナーでもどうかなって思ってた」



医者いらずつてのは分かるけど正義感つて？

「彼ね、3年前に病状が不明の患者が運ばれてきたの。私たちも諦めかけていたわ。その時、トイレと手術を間違えて入ってきたの」

『楓くん何してるの？』

『あれ？何だここトイレじゃないんですか？』

『早く出て、今忙しいの！！』

『まあ、いいですけどそこまで忙しい状況ですか？』

『そうよ』

『そこまで酷い病気じゃないっすよ。しかも、悪化もしてない。おそらく病気が何かしらの薬品で効果が増加されてるだけですよ』

『えっ』

「つてことがあってね。その患者麻薬を使ってて、病気にその薬物が過剰反応してたのよ」

「何というか楓くんって何なんですかね？」

「私も分からないわ。でも、はやてちゃん彼は手ごわいわよ。彼が入院してるときに女の子が3人もお見舞いに着てたのよ」

「3人も？」

「そうよ。まあ、はやてちゃんも頑張つてね。先生応援するわよ」

「ありがとうございます。石田先生。負けませんよ」

「じゃあ楓くんにもよろしくね」

「はい 失礼します」

No Side

（翠屋）

高町桃子がカウンターにいた。

今はまだ客の来る時間帯ではなく彼女比較的に暇だった。

「あの、すみません」

「えっ!？」

客がいないと思っていた桃子は声をあげる。

そこには長い前髪で左目を隠した少女がいた。

「ショートケーキホールいただけますか？」

桃子は一瞬楓と見間違えるほどの少女だったが、楓と大きく違うのはやはり性別もあるがやはりその服装だった。



楓の基本の服装は白がベースだ。理由は正義の味方なら赤い外套か白い軍服でしょと言う簡単な理由だが、彼女の服装は黒いゴスロリだった。

「あの……」

「へっ？」

「私の顔に何かついてるのでしょうか？」

桃子は意識しすぎて彼女の顔を見つめていた。

「ごめんなさい。感じが知り合いに似ていたの」

「よく言われます」

彼女はゆっくりと流す。

「近所の子？」

「はい。先日引越してきました。聖祥大付属小に通っています」

「そうなの内の娘も通ってるのよ。高町なのはってゆづのよ」

「高町さんのお母様ですか？」

「知ってるの？」

「聖祥の生徒で彼女のことを、いや、彼女たちのことを知らない人

はいないでしょう」

少女は少しケーキを見渡した。

「高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずか。彼女たちは有名な人ですから」

ケーキを受け取りながら少女はほほ笑む。

「あなたお名前は？」

「親子って奴なのですね。風子です」

そう言つて風子は翠屋を後にした。

く八神家近辺

「フフフフン」

風子が鼻歌を歌いながら裏路地に入る。

すると風子の前に銀の壁が現れる。

「ったくよ、めんどくさいな女の子って」

さっきの口調から変わる。

「まあケーキ変えたからいいか」

そして銀の壁を通り、現れたのは

「帰るか」

もちろん楓だった。

「Side 楓」

「ただいま」

ちゃんと制服に着替え直し、八神家へ帰宅する。

「お帰り楓くん」

玄関に上がるとリビングの方からはやてがおたまを持ちながら出てくる。

「この匂いはカレーか？」

「今日は石田先生と長電話してて」

「そうか。ケーキ2ホール買ってきたぞ」

本当は3ホールなのだが、残りは俺のカロリー補給用だから秘密にしておく。

PM 11:58

俺ははやての部屋に来てた。

「誰かと一緒に夜を過ごすなんて久しぶりなんよ」

「昔の俺と同じだな」

両親を失った時の、親友を失った時の俺と同じだ。

P M 1 1 : 5 9

「でも、俺たちは今こうしてる。そんな小さい物でもいいんだよ幸  
せてのは」

「そやね」

俺はみんなを幸せにする。

それが俺の正義だ。

だから始まる。

A M 0 : 0 0

棚に置いてあった闇の書が光ると同時に鎖が始めとんだ。

ページがめくられて、閉じる。

『起動』

その起動音ともにはやてのリンカーコアが現れる。

するとミッドチルダ式の魔法陣が現れる。

そして、二人の美人と一人の成人男性。

ロリが「誰がロリだ!!」少女がいた。

「闇の書の起動確認しました」

「われら闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士にてごじえます」

「夜天の主の元に集いし」

「ヴォルゲンリッター。何なりと命令を」

「あゝ」

「何でしょうか主?」

俺が声をかけるとシグナムが答える。

「そうじゃなくて。そこで気絶してるのが主なんだが」

「!?!」

案の定はやてが俺の横で目を回しながら気絶している。

「（みられた!?!）」

「（大丈夫だ私がやろう）」

そして、俺がはやてをひとまず横にしよつとしたとき。

刃が俺に向けられた。

ガキン！！

静かな金属音を立て、俺とシグナムは向き合っていた。

シグナムはレバンティンを俺はアクイラで防いでいた。

（私の不意打ちを受けて無事だと！？）

「貴様何者だ……」

「烈火の将シグナムが不意打ちとはね。まあ状況が状況だし」

俺は身の丈ほどある刀身を肩に乗せてめんどくさそうに言う。

「そんなことは聞いていない」

「正義の味方兼闇の書の主はやての親友、雨宮楓だ」

「……」

「こうなると思ったよ馬鹿野郎！！」

「正義の味方……」

「さすがに……」

「痛いな……」

泣きそう。いや、泣いてた……

「スゲーじゃん」

「……えっ」「」「」

「カッコいいじゃん!!」

予想外です。

「ヴィータちゃんどうしたの？」

シヤマルが心配そうに声を上げる。

「だって正義の味方だぜ!!」

ヴィータが思った以上に興奮してる。

「じゃあ、俺は病院にはやてつれていくからsee you again  
ain英語分かる？」

「はやてちゃん。よかったわ。なんとも無くて」

ベットの上で横になっているはやての所に石田先生が歩み寄る。

「すみせん」

「しかし、はやてはこの時が幸せだと気付かなかった」

「縁起悪いわ!!!」

「楓くんありがとね」

俺はベットのそばに置かれたパイプ椅子に腰をかけ足を組みながら週刊スウィーツ天国を読んでいた。

「居候ですから。家主の一大事には働きますよ」

「で、誰なのあの人たち。楓くんの知り合い？」

俺たちが入口を見つめると守護騎士が先生たちに取り囲まれている。

「いくらなんでも怪しい人」俺って結びつけるのはやめてくれませんか」

「そうねごめ「俺の知り合いで怪しい人は90人位しかいませんよ」

「

「いるんや!!!90人もおるんや」



「もちろんはやても含む」

「なんでやねん!」

「はい夫婦漫才はそこまで。で、あの人たち誰なの？春先とはいえ寒いにはやてチャンに上着も掛けずに運びこんできて」

「すみません。勿体なかったんで、上着は俺が着ました」

「変な格好してるし、言ってることは訳わからないし」

「ええつと何と言うか……」

「（ご命令を頂けばお力になれますが、いかがなさいましょう）」

「ええ?」

「（思念通話です。心で念じていただければ）」

「（心だ。心で感じるんだ!）」

「（楓くん!）」

俺の念話に驚く。

「（ええつと、まあ、ともかく、命令とゆっかお願いや。ちょう私に話あわせてな）」

「（はい）」

「ええつと、石田先生。実はあの人たち私の親戚で」

「親戚？」

「遠くの祖国から私のお誕生日をお祝いに来てくれたんですよ。そんでびつくりさせようと仮装までしてくれてたのに、私がそれにびつくりしすぎたとゆうか、そんなかんじでな」

「そうなんですよー！」

「その通りです」

「ハハハハハハ……」

苦しい、苦しいぞ。

「石田先生。不安なら俺が赤で宣言しますよ」

「楓くんは魔女なの？」

魔法使いですとはさすがに言わなかった。

まあ、そんな感じで守護騎士たちは俺たちの元に訪れた。

27話 ゴスロリとケーキと闇の書 起動（後書き）

（楓の拷問室）

楓「うん？」

作者「どうした楓？」

楓「いやさ、この前、紅幽鹿さんの魔法少女リリカルなのは紅にゲスト出演させてもらったんだが、なんかさ俺の未熟さを知らされるさ」

作者「確かに幸夜くんはかつこいいからな」

楓「取り柄もないし……」

飛鳥「そんなこと言うんじゃないぜ」

ジェイル「そうだ」

楓「そうなのかな？」

作者「お前の取り柄は……」

飛鳥「……」

ジェイル「……」

作者・飛鳥・ジェイル「次回予告行ってみよう」

楓「流された!？」

・次回予告

守護騎士がやってきた八神家

買い物に行ったり、シグナムに俺のことを説明したり、大忙し

しかし、俺やはやて、シグナムとヴィータに最大の危機が

次回「買い物に行こう、説明もしとこう」

オリキャラ募集行っています。

28話 買い物に行こう説明しよう(前書き)

新年初投稿です。

## 28話 買い物に行こう説明しよう

俺たちは守護騎士の服の資料を探しに近場のおもちゃ屋といざるすに来ていた。

「確かにここならそれっぽい資料がありそうだな」

「そうやる」

しかし、この世界に来ておもちゃ屋に来るのは初めてかもしれない。

すると、俺たちはヴィータが立ち止まっていることに気づいた。

「ヴィータちゃんどうしたの？」

シャマルが声をかけるがぬいぐるみを見つめているヴィータの耳には入らない。

「はやて。俺ってば珍しくいいこと思いついたんだが」

「考えてることは同じみたいやな」

「」「」「」

俺とはやては笑う。

「後はやて」

「なに？」

「あのぐっすり超快眠低反発枕買ってきてもいい？」

「勝手に行きなさい」

「いい風ですね」

「ホンマや。いいお散歩日和やな」

「昼寝したいぜ」

「夕方ですよ？」

俺たちが他愛のない会話をしてる後ろでヴィータが紙袋を持って歩いている。

「ヴィータ開けてもええで」

「つつか、早く開ける」

ヴィータが紙袋を開けると中にはヴィータがとぎざらすで見ていたウサギの人形が入っていた。

「うああ はやて、楓ありが……」

グイータはありがとうと言おうとしたが俺たちは先に言ってたため聞こえないのだろうと思いつめた。

楽しい日常は長くは続かないこの後俺たちの前に悪魔が降り立った。

「なあはやて……」

「どづしたんや?」

「この夕食は何でしょうか?」

「シヤマルお手製のカレーライスや」

俺たちの食卓に上がっていたのは黒い何かだった。





ヴィータの声を聞きながら俺の意識は途絶えた。

気がつくと俺は自分の部屋で横たわっていた。

「ここは……シャマルの料理（毒）で気を失ったか」

コンコン

「入っていいですよ」

ドアの向こうには守護騎士一同がいた。

「楓大丈夫だった」

「うん。はやてが別の料理作ってくれてたから」

まさか、はやてはこうなることをすでに予見して、俺にあれを処理させ自分たちは美味しい料理を食べる算段だったのか……

「あのチビ狸……」

「楓どうしたの？怖い顔してるけど」

「ヴィータはあんな悪い大人になるなよ」

「あたしは大人だ！！」

俺が笑い終わると急に守護騎士たちがまじめな顔になる。

「俺が誰で何をしたいか聞きたい。そうだとシグナム」

「ああ。聞かせてもらえるか」

「話すって言ったしな」

俺は立ち上がり近くの椅子に腰をかける。

「まず何が聞きたい？」

「お前は何者だ？」

「雨宮楓。魔導騎士だ。術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッドだ」

「お前の目的はなんだ」

ザフィーラがそう言う。

「俺の目的？いかれた魔導書を治すことだよ」

「……!?」「」「」

4人（3人と1匹？）は驚きを露わにする。

「私たちをからかっているのか」

侮辱されたように思いシグナムは切れる寸前に来ていた。

「シグナム俺から質問いいか？」

「何だ言ってみる……」

「闇の書を完成させるとどうなる」

「それは……!?!?」

答えられなかった。いや、思い出せなかった。

シグナムはヴィータとシャルルの顔を見るが自分と同じ顔をしている。

すると一人だけ落ち着いてるザフィーラが歩みよる。

「ザフィーラは分かったみたいだな」

「ああ。闇の書には不正なプログラムが施されている」

「ビュンゴ」

俺は驚いてる3人を無視して話を続ける。

「ザフィーラの言う通り闇の書には致命的なバグがある。闇の書を完成させた時、闇の書は主を取り込み暴走する」

「なら集めなきゃいいんだ」

「残念だがヴィータそれは駄目だ」

「何で!?!」

俺はシグナムたちに考える時間を与える。

「はやてちゃんの足!?!」

一番最初に口を開いたのはシャマルだった。

「そうだ。闇の書のマスターは募集をしない限り体が侵されていく」

「それでは主の足は」

シグナムたちの顔が沈む。

「楓、はやてを助けられないの?楓は正義の味方なんですよ」

「ヴィータちゃん無理よ」

シャマルの言葉に一段と沈む。



「何だよザフィーラ。あたしにも教えるよ」

「そうか彼女ね」

シヤマルも分かったように顔を明るくさせる。

「ヴィータはあの子と仲が良くないからな」

「えっ」

「ヴィータ以外は分かったようだな」

「官制人格」

ザフィーラが声を低く言う。

「俺は官制人格を呼びさまして、はやての権限で闇の書とバグを切り離させる」

それが俺に出来る最善の手段。

「できるのか？」

「できるさ。俺に協力してくれたらな」

シグナムは他の騎士の顔を見る。

「少し考えさせてくれないか。私たちも少し考えたいんだ」

「分かった。でも早めに頼む……」

俺は窓を開けて空を見てるとシグナムが俺に聞いてきた。

「最後に聞かせてくれお前は味方なのか」

「決まってるじゃねえか。俺ははやての親友で正義の味方だ」

そして俺たちは9月に行動を開始した。

はやてを守るために。

その日から人間（雨宮楓）としての最後の戦いの幕開けだった。



## 28話 買い物に行こう説明しよう(後書き)

〔楓の拷問室〕

楓「あけましておめでとーじーぞーいます」

作者「もう始まって1週間だぞ」

楓「うるせえ」

作者「最後のセリフから回想編は今回で終わりです」

楓「本編に戻るのか？」

作者「そうだけど」

楓「俺の最後のセリフが物騒なんだが。もしかして紅幽鹿様の幸夜くんみたいに悪魔とか神の血が流れたりするの？」

作者「いや、だってお前そんなことしたら死ぬだろ？」

楓「リアルだ……」

作者「次回予告にいくぞ」

・次回予告

続く戦い。

それぞれの戦い。

そして、なのはは決死の必殺技を放つ。

「次回『楓VSクロノそして楓の成長』」

## 設定A、S編（前書き）

28話までのオリキャラの設定です。

## 設定 A' S 編

名前：雨宮楓

好きなもの：甘いもの、楽しいこと、寝ること

嫌いななもの：めんどくさいこと、人が傷つくこと

概要：神の手違いで転生した哀れな少年。過去の世界で大切な人たちを失い正義の味方を目指す。彼にとつての正義は自分は手を伸ばすことらしい。実はファンクラブがあるらしいが本人は気付いて無かった。答えを出す者で最善の手段を知ってるが、それは楓にとつて最悪の展開になる。

容姿：G O D E A T E Rの雨宮楓とほぼ同じ。女装をすると髪がストレートになりゴスロリがよく似合う。ちなみにレイリルとユニゾンすると長い前髪が短くなり、長い銀髪で伝勇伝のシオンアスタールのようになる。バリアジャケットはF a t eのアーチャーと同じ赤い外套。

デバイス：アクイラ

魔力：S -

魔力光：オレンジ

魔力変換資質：凍結・電気・光・炎熱

レアスキル：『死の脅威』自分の周りの命の危険を見ることができ

る。

神より与えられし力

1：『クリエイト創造』楓が知っているアニメ・漫画・ゲーム・特撮に出てくる武器なら宝具でも作れるがレベルが高い武器ほど肉体に負担をかける。

2：『アビユリチ能力』楓が知っているアニメ・漫画・ゲーム・特撮に出てくる能力を殆ど再現出来るが強い能力ほど肉体に負担をかける。（ただし、神の力により蘇生は出来ない）

3：『肉体限界』自分の肉体を常に最強の状態にする。（この能力に魔力も含まれる）

4：『答えを出す者』あらゆる答えを導き出す。精神的にダメージを受けるため多用はできない。

5：?????

6：?????

7：?????

必殺技：『スターダストブレイカー』周りの魔力を集め相手の周りを凍らせて打ち出す。

名前：レイリル

好きなもの：団子、楓をいじること

嫌いなもの：女の敵

概要：神に作られたユニゾンデバイスで、楓との適合率は95%を誇る。かなりDSで気まぐれで傲慢。ちなみに楓より強いとのうわさも……

容姿：伝勇伝のフェリスを銀髪にした感じ。バリアジャケットは大伝勇伝時のフェリスと同じ。

デバイス：剣

魔力：S

魔力光：オレンジ

名前：不道飛鳥

好きなもの：寝ること、面白いもの、チンク

嫌いなもの：リア充

概要：聖祥で楓と出会う。フランス人と日本人のハーフだが日本育

ちなためフランス語はしゃべれない。チンクを溺愛している。楓の右腕とも称されている。デバイスはミッド式だが戦闘では肉弾戦を行う。

容姿：サングラスを無くした禁書目録の土御門元春。

デバイス：グローブタイプ

魔力：A

魔力光：黄緑

レアスキル：超魔力運用（詳細不明）

29話 楓VSクロノ そして楓の成長(前書き)

感想お願いします。

今回の楓の拷問室はお休みです。

あと意外と楓の戦闘が少ないです・・・



## 29話 楓VSクロノ そして楓の成長

あれは3年前のことだった。

買い物に行つてると財布を忘れてしまった。

手持ちが不安だったがまあギリギリかなと思ったがひとまずレジに向かった。

「5025円です」

足りない！？25円足りない！！

「すみません。返してきます……」

その時の店員の憐れむ顔が今でも忘れられない。

ちなみにこの話は本編とは一切関係ありません。

『無いんですか！？』 久々の登場アキラ

N O s i d e

話は戻り現在。

「シグナム相手を頼む」

「お前はどつするんだ」

「シャマルを守る」

「心得た」

「待って！！楓！！」

フェイトが楓のところに飛ばうとした時だった。

「お前の相手は私だ」

シグナムが愛機レヴァンティンを空に掲げるとカートリッジが射出され、その刀身を炎が蛇のように纏う。

「紫電一閃！！」

シグナムがレヴァンティンをフェイトに切りつける。

フェイトはそれをバルデッシュで防御するが耐えきれずに真っ二つになる。

「ウアア!！」

シグナムはさらにもう一撃叩き込む。

とっさにバルデッシュが防ぐがフェイトはビルの上に落下した。

攻撃を終えたシグナムに楓が近づく。

「手加減しとけよ。一様俺の友達だからな」

「お前の友達はこの程度で心が折れるのか？」

「ハハあり得ないね。全力でいいぜ烈火の将」

「承った」

楓が指を鳴らすと楓の姿は消えていた。

「フェイト!？」

少し離れたところで戦っていたアルフは落とされたフェイトの所に行こうとする。

しかし、その前にザフィーラ立ちはだかる。

「」の・・・」

アルフは怒りを募らせる。それを挑発するようにザフィーラは手を握り締める。

「フェイトちゃん。アルフさん」

戦線を離脱しているなのは二人を不安そうに見つめる。

「まずい。助けなきゃ・・・」

ユーノはなのはの周りに結界を張る。

「回復と防御の結界魔法。なのはは絶対ここから出ないでね」

そして、ユーノは戦いに向かった。

「どうしたヴィータ。油断でもしたか？」

「うっせえよ。ここから逆転する所だったんだ」

「そうか。それは邪魔したな。すまなかった」

シグナムがそう言いながら手をヴィータにかざすと、ヴィータを拘束していたバインドが碎け散った。



「闇の書がない!?!」

ユーノはフェイト元へ向かっていた。

「大丈夫!?!」

「うん・・・ありがとうユーノ」

「バルディッシュも」

ユーノは真つ二つになりボロボロのバルディッシュを見つめる。

「大丈夫。本体は無事」

バルディッシュはリカバリーを開始する。

「楓も何で」

「分からない。でも楓は本気で当てるつもりはなかった」

「えっ!?!」

「あのコースであの標準はおかしい」

「楓は何を考えてるんだろっ・・・」

「ともかくユーノ。この結界内から全員同時に外に転送できる?」

「うん。アルフと協力出来れば」

「私が前にでるからその間にやってみてくれる？」

「分かった。(アルフできる?)」

フェイトはアルフに念話を送る。

「(ちょっときついけど何とかするよ)」

「それじゃあ頑張ろう」

「うん」

楓は空を移動していた。

「(シャマル今から今からそっちに!!!)」

その時水色の魔力弾が楓の頬をかすり楓の周りを氷が砕け散る。

「お前は来ないと踏んでいたんだがな・・・クロノ」

「フェイトたちが向かう時リニス君の力をわずかに感じると言うてね」

クロノは楓を殴り胸倉をつかみかかる。

「何で君があんな奴らといるんだ」

楓はそれを振り切り少し距離を開ける。

「答えないって言ったら？」

「体に聞くまでだ!!」

クロノがSUI2で殴りかかってくるが楓はアクイラで受け止める。

「そもそも本当に楓なのか？力も魔力も跳ねあがってる」

「それでもまだお前の方が上だろ」

今度は楓が斬りかかりそれをプロテクションで防ぐ。

「何でお前はあんな奴らの仲間に!!」

「まだお前には関係ない。俺みたいな野良猫の世話してんなら、てめえの猫の世話でもしとけ」

アクイラの刀身を青い光を纏う。

「なっ!?!」

「氷災一閃!!」

楓がアクイラで斬りつけると、切り口からクロノが氷った。

「頭冷やせ馬鹿」



そうやって楓は移動を再開した。

少し離れたビルに楓はたどり着いた。

「シャマルはやてには電話したか？」

「はい。ええ、今さっき」

「とりあえずみんなが足止めしてくれてる。早めに済ませろ」

「分かってるわ。クラールヴィント導いて」

シャマルは募集の準備を開始した。

フェイトVSシグナムの戦いはいまだに続いていた。

フェイトは魔力弾を4か所。正方形に配置しフォトンランサーを構成する。

「レヴァンティン私の甲冑を」

シグナムも迎え撃とうとする。

「撃ちぬけ雷神」

フェイトはフォトンランサーを打ち出す。

しかし、シグナムはそれを目をつぶりながら纏ってる魔力が受け流した。

さすがにフェイトも驚き呆然とする。

「魔導師にしては悪くない。あいつよりは強いな。だがベルカの騎士に1対1を挑むにはまだ足りん。

シグナムが突然消える。否、早くて見えないのだ。

そして、シグナムが頭上から斬りかかった。

「レヴァンティン！！叩き斬れ」

レヴァンティンが炎を纏い、シグナムは叩き斬る。

そして、フェイトはビルに落とされた。

別の場所ではユーノとヴィータ、アルフとザフィーラが戦っていた。

ユーノとアルフは転送の用意をしていたが結界の強度が固く、それがかねわなない状態だった。

シグナムがカートリッジをロードする。

「終わりか？楓もうまく言いすぎだな。抵抗しなければ命は取らん」

「誰が。楓がなんであなたたちといるか聞かせてもらおう！！」

「いい気迫だ」

シグナムは嬉しそうに笑う。

「私はベルカの騎士ヴォルケンリッターの将シグナム。そして、我が剣レヴァンティン。お前の名は？」

「ミッドチルダの魔導師。時空管理局囑託フェイト・テストロッサ。この子はバルディッシュ」

「テストロッサ、それにバルディッシュか」

二人は構え合い……

激突した。

現在3か所で戦闘が行われていた。

戦っていないのは

楓（休憩中）

シヤマル（募集準備）

なのは（治療中）

クロノ（凍結中）

であった。

なのはは何もできない自分をもどかしく思っていた。

「助けなきゃ……」

なのははふらふらになりながら歩く。

「私がみんなを助けなきゃ……」

その時レイジングハートからピンクの翼が現れる。

『撃ってください。スターライトブレイカーを』

「そんな、無理だよ！そんな状態じゃ」

なのはの言う通りレイジングハートはすでにぼろぼろだった。

『撃てます』

「あんな負担のかかる魔法、レイジングハートが壊れちゃうよ」

『私はあなたを信じてます。だから私を信じてください』

なのはは無言でうなずく。

「レイジングハートが私を信じてくれるなら、私も信じる」

なのはがスターライトブレイカーを撃つ体制に入る。

「レイジングハートカウントを」

ピンクの魔法陣が魔力を集める。

そして、なのはは

誰かの手に貫かれた……

「しまった。外しちゃった」

「しまった。外しちゃった。じゃねーだろ。R15になるぞ!!」

全てはシャマルがリンカーコアを抽出しようとして間違えたのが原因である。

「リンカーコア捕獲。収集開始」

シャマルが闇の書をかざすと空白のページに文字が書かれてゆく。

それと同時になのはの魔力の塊リンカーコアがしばみ小さくなってゆく。

なのははそれでもスターライトを撃とうする。

「スターライト……ブレイカー!!!!!!!!!!!!!!」

放たれたスターライトは結界を貫いた。

そして、なのはは倒れこんだ。

「(結界が抜かれた。離れるぞ)」

「(心得た)」

「(シャマルごめん助かった)」

「(いったん散ってまた集合)」

「(後でな)」

楓と守護騎士は光になり空に散りじりなり消えた。

「ふあゝ温かいなザッフィー」

「・・・・・・・・・・」

公園では楓がザフィーラ（オオカミモード）に抱きつき温まっていた。

「何をしてるんだ？」

「温かそうね」

「ずりー楓あたしにもザフィーラ貸せ」

「誰がこんな温かい毛皮貸すか!」

「我は毛皮ではない・・・・・・・・」

やってきたシグナムたちとこんな話をしながら、俺たちははやての待つ家に帰った。

29話 楓VSクロノ そして楓の成長（後書き）

次回予告

「未定!!」

すみません!!



30話 怪我には注意しよう(前書き)

テストのやり直しが辛いです。

### 30話 怪我には注意しよう

〔時空管理局本局〕

Sideフェイト

「君の怪我也軽くてよかった」

「クロノごめんね心配かけて。クロノも酷い状態だったのに」

「僕はあいつに一枚噛まされただけだからね。君となのはとあいつでもうなれた」

「何で楓はあの人たちと一緒にいたんだろう……」

「たぶん、何か考えがあることは確かなんだ……」

「考え？」

「知ってるだろ。楓はいつも1つ2つ先のことを考えて行動してる」

「うん」

「そうだ。私の時もいつも先を見ていた。」

「きつと大丈夫だ」

「うん」

私たちはなのはの病室に入る。

部屋に入るとなのはと先生がいた。

「ハラオウン執務官。ちょっとよろしいでしょうか？」

「はい。なんでしょう？」

「こちらへ」

クロノは先生に連れられて部屋を出て行き、扉が閉まった。

なのはにいつもの元気さがなくて、何て言えばいいか分からない。

「フェイトちゃん」

「なのは……」

なのはが笑う。私も少し心が軽くなった。

「あのごめんね。せつかくの再開がこんなで」

「怪我大丈夫？」

「うんんん……こんな全然。それよりなのはは？」

「私も平気。フェイトちゃんたちのおかげだよ。元気！元気！」

やっぱりなのはは無理に明るくしようとしてる。

「フェイトちゃん？」

なのはが私の所に歩こうとし、倒れそうになる。

「なのは！？」

「ごめんねフェイトちゃん。まだフラフラ」

私はうまくなのはを受け止めた。

「助けてくれてありがとう。フェイトちゃん。それからまた会えて嬉しいよ」

「私もなのはにあえて嬉しい」

私たちは体を寄せ合った。

私たちはクロノと合流してバルディッシュとレイジングハートの様  
子を見に行くことにした。

「ユーノくん！！アルフさん！！リニスさん！！」

「なのは久しぶり！！」

「なのは」

「お久しぶりですなのはさん」

3人はなのはが動けると分かり安心したように笑うが私はバルディッシュが心配で

「バルディッシュ。ごめんね私の力不足で」

「破損状況は？」

クロノがユーノに聞く。

「正直あまり良くない。今は自動修復をかけてるけど基礎構造の修復が済んだら一度再起動して部品交換しないと」

「そうか」

「ねえ、そう言えばさあの連中と楓が使ってた魔法ってなんだか変じゃなかった？」

「あれはたぶんベルカ式だ」

「私が説明しよう。ベルカ式はその昔ミッド式と魔法勢力を2分した魔法体系です。遠距離や広範囲への攻撃をある程度捨てて、対人戦闘に特化した魔法で優れた使い手は騎士と呼ばれています」

そう言えば……

「確かにあの人ベルカの騎士って言った」

「最大の特徴はカートリッジシステムと呼ばれる武装です。儀式で圧縮した魔力をつぎ込んだ弾丸をデバイスに組み込んで瞬間的に爆発的な破壊力を得る。バルディッシュの製作するときにある程度調

べましたがかなり危険なしのもです」

「なるほどね」

「いっぱい頑張ってくれてありがとうね。レイジングハート。今はゆつくり休んでね」

「フエイトそろそろ面接の時間だ」

「うん」

「なのは君もちよっといいか？」

「失礼します」

「おお！！久しぶりだな」

「ご無沙汰しています」

彼はギル・グレアムさん。クロノの指導教官だった人らしい。

「まあ、保護観察官と言っても名前だけだよ。リンディ提督から先の事件のことや君の人柄についても聞かされたしね。とても優しい子だよ」

なんか恥ずかしいな……

「ありがとうございます」

「なのはくんは日本人なんだな。懐かしいな」

「ふえ？」

「私も君と同じ世界の出身だ。イギリス人だよ」

「ふえ！？そうなんですか!？」

「あの世界の人のほとんどは魔力を持たないがまれにいるんだよ。私や君のように高い魔力資質をもつものが」

そう言えば楓も魔力資質は高かったな・・・

「はは、魔法との出会い方まで私とそっくりだ。私の場合は助けたのは管理局の局員だったんだがね、もう50年以上も前の話だ」

「ふえ」

「フェイトくん。君はなのはの友達なのかね」

「はい」

私の最初の友達の一人なんだ。

「君に約束して欲しいことは一つだけだ友達や自分を信頼してくれる人のことはけっして裏切ってはならない。それができるなら私は君の行動について何も制限しないことを約束する。できるかね？」

「はい。必ず」

「いい返事だ」

私たちはお辞儀をしてドアの外に立つ。

「提督。すでにお聞きおよびかも知れませんが、先ほど自分たちがロストログア閤の書の捜査・搜索担当になりました」

「そうか。君がか。言えた義理ではないが無理はするなよ」

「大丈夫です。急時にこそ冷静さが最大の友提督の教え通りです」

「うむそうだったな」

私たちはその場を後にした。

Side 楓

「はやくちゃんお風呂の支度できましたよ」

「うん、ありがとう」

「ヴィータちゃんも一緒に入っちゃいなさいね」

「はい」

「明日は朝から病院です。あまり夜更かししません様に」



「はい」

「ではよいしょっと」

座っていたはやてをシャルマルが俗にゆうお姫様だっここで運ぶ。本来なら俺がやるうと思っのだが女の子がお風呂に入るとゆう時にはさすがに行けない。

「シグナムと楓くんはお風呂どうします？」

「楓くん一緒に入るか？」

「バカ！？俺は今日は止めて朝シャワー浴びるよ」

「私も明日の朝にするよ」

「そう」

「お風呂好きがめずらしいじゃん」

「たまにはそうゆう日もあるぞ」

「ほんなら、お先に」

「はい」

「シグナム大丈夫か」

「ああ」

シグナムが俺とザフィーラの前で少しだけ服をめくる。すると一筋の傷が付いていた。

「酷くやられたもんだな」

「お前の装甲を打ちぬいたか」

「澄んだ太刀筋だった。よい師に学んだのだろうな」

よい師とは思うがリニスは結構口うるさいぞ？

「武器の差がなければ少々苦戦したかもしれん」

「でもそれでもお前は負けないだろ」

「そうだな。正直俺でも本気だしても勝てないんだからフェイトに勝てるわけねえよ」

「そうだな」

「それより楓、お前は何で入らないんだ」

「朝のシャワーってのも気持ちいもんだぜ」

「嘘だな。お前の動きをみたらよく分かる」

「あはっ、ばれた？」

「手首をやってるんだろ」



30話 怪我には注意しよう(後書き)

「楓の拷問室」

楓「ひさしぶりの拷問室だな」

作者「他の小説でも忙しいからな」

楓「つてか書けよ!!」

作者「そんなに進めるわけにはいかないんだよ」

楓「何で？」

作者「今度PSPで新作が出るじゃん？」

楓「ああ、あの変な2人の姉妹」

作者「この先の話はマテリアル編とかのシリーズが3つは入るんだがそれにうまく入れないといけないんだよ」

楓「確かにな」

作者「だからゆっくりやって行こうや」

・次回予告

八神家での日常。

朝の風景だったり、病院に行ったり。

大して聖祥にフェイトが転向してきた。

「次回『二つの日常』」

現在オリキャラ募集やっています。

31話 二つの日常(前書き)

更新遅れてすみません!!

### 31話 二つの日常

N o s i d e

「うわぁーい!!すごい近所だ!!」

「ほんと」

「ほら、あそこが私ん家」

部屋の中ではエイミイがモニターを開いていた

なのはとフェイトがいるのは闇の書の搜索拠点兼フェイト自宅になるマンションのバルコニーである。

「ユーノくとアルフはこっちではその格好か」

エイミイの目線には淫獣モードユーノといつもの狼の姿ではなく、かわいい子犬の姿のアルフがいた。

「新形態子犬フォーム!!」

「なのはやフェイトの友達の前じゃこの姿じゃないと。」

「君らもいろいろ大変だね」

すると部屋になのはとフェイトが入ってくる。

「アルフちっちゃいどうしたの？」

「ユーノくんもフェレットモード久しぶり」

フェイトはアルフを抱え、なのははユーノに頬ずりをする。

ここでユーノにムカついた方は大きく息を吸って深呼吸しましょう。

するとクロノが部屋に入ってくる。

「なのは、フェイト友達だよ」

「はい!!」

「こんにちは!!」

「来たよ!!」



やってきたのはもちろんすずか&アリサであった。

「アリサちゃん。すずかちゃん」

「初めましてっていうのもなんか変かな？」

「ビデオメールでは何度もあってるもんね」

「うん。でも会えて嬉しいよアリサ、すずか」

「うん」

「私も」

「フエイトさんお友達」

現れたのは最近の出演がシャマルと同格のリンディさんである。

「「こんにちは」

「こんにちは。すずかさんにアリサさんよね？」

「はい」

「私たちのこと？」

「ビデオメール見せてもらったの」

「そうですか！ー！」

「良かったら皆でお茶でもしてらっしゃい」

「それじゃあ家のお店で」

「じゃあせつかくだから私もなのはさんのご両親にご挨拶をちょっと待っててね」

リンディさんは家の中に戻る。

「きれいな人だね」

すずかのいうことは確かだ。そもそもなのはにミゼットさん以外のお年寄り（女性が見当たらない）のが不思議だ。

「フエイトのお母さん？」

「えっとその今はまだ違う」

2人は少し疑問に思ったが気にしなかった。

「うるさい……」

ちなみに隣の部屋に住んでいたレイリルがつるさくて眠れなかった。

（翠屋）

「ユーノくん久しぶりだね」

「なんかあんたのこと何処かで見たことがあるような気がするんだけど」

「さすがユーノ、アリサがアルフを抱いているがアリサは少し微妙な気持ちだ。」

「気の所為かな？」

「アルフばれないでよかったね。」

すると彼女たちの所にスーツを着たご存じアースラのクルー、アレックスが箱を持って歩いてきた。

場所は変わり、八神家。

「はあ」

リビングで溜息をつくボロボロの楓がいた。

「しかし、ボロボロにやられてもうたな楓くん」

「はやてがお盆にお茶とアイスを乗せて持ってくる。」

「さすがにシグナムは強いな……」

「闇の書の将やからな」

楓はこの日の午前中にシグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラと試合を他の世界でしていた。

この試合はシグナムたちにレイリルを紹介することを目的とした試合だった。

楓はかなり健闘した。

シャマルを開始50秒で仕留めて。ヴィータを手玉に取るほどだ。

しかし、三試合目。ザフィーラとの試合で勝てないことを悟ると、レイリルとユニゾンし引き分けで終わった。

そして、四試合目でシグナムに完敗したのだった。

「はやて」

「なに？」

「俺強くなる。シグナムを倒せるくらいに」

「うん」

「そして、シグナムをぶっ倒す！！」

「倒したらあかん！！」

といつも通りの2人だった。

「リンディ提と……リンディさん」

「はい、なぐに？」

「あのこれって？」

フェイトの手にあったのは聖祥大の制服だった。

「転校手続き取っておいたから、週明けからなのはさんのクラスメイトね」

「あら素敵」

「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ。な、なのは」

「うん」

高町一家も絶賛である。

「良かったわねフェイトちゃん」

「あの、えっと、はい、ありがとうございます」

「ロストロギア。闇の書の最大の特徴はそのエネルギー源にある。闇の書は魔導師の魔法資質を奪う、リンカーコアを喰うんだ」

「なのはちゃんのリンカーコアもその被害に・・・」

「ああ、間違いない。闇の書はリンカーコアを喰うと収集した魔力や資質に応じてページが増えていく。そして最終ページまで全て埋めることで闇の書は完成する」

「完成するとどうなるの？」

「少なくともろくなことにはならない」

クロノは苦い顔をして答えた。

夜、ビルの屋上に楓・シグナム・シャマル・ザフィーラがいた。

すると、屋上のドアが開きヴィータが入ってきた。

「来たか」

「うん」

「管理局の動きも本格化してくるから」

「これまでの様に地味に静かにはできねえ」

「少し、遠出をすることになるな。なるべく離れた世界での収集を」

「何ページまで来てるって」

シヤマルが闇の書をめくる。

「340ページ。この間の白い服の子でかなり稼いだわ」

「下手な小説並みだなあ」

「半分は越えたんだな。ズバツと集めて早く完成させよう」

「はやてを救う。絶対に!!」

ザフィーラが耳を動かす。

「行くか。あまり時間もない・・・」

「ああ。行くぞレヴァンティン!!」

「導いて。クラールヴィント!!」

「やるよ! グラーファイゼン!!」

「輝け!! アクイラ!!」

俺たちはデバイスをセットアップし、騎士甲冑を纏う。

「それじゃあ夜明けどき前までに!!」

「ヴィータあまり熱くなるなよ」

「わあってるよ」

「じゃあ皆それほどの戦果、期待してるから宜しく!!」

俺たちはまた募集に向かうのだった。



### 31話 二つの日常(後書き)

〔楓の拷問室〕

なのは「作者さんおはなししようか？」

土屋「ごめんなさい!!」

楓「取りあえずなのは。レイジングハート仕舞え」

なのは「(チツ・・)うん」

楓「で、なんで更新が遅れたんだ」

土屋「新しい小説の構成と高校の課題が忙しかったんだ」

なのは「ダメ人間なの」

土屋「グハア!!」

楓「予告も結構違ってたしな」

土屋「ブハア!!」

なのは「次回までに頭を冷やすの!!」

次回予告

あの子がまたもや登場!!

ドラマCDシリーズに介入。

彼（彼女）が大暴れ！！

次回『風子ちゃん再び！！海鳴スパラクーアで大暴走』

お楽しみに。

32話 特別編 風子ちゃん再び!!海鳴スパラクーアで大暴走(前書き)

長い.....

(楓の拷問室お休みです)

32話 特別編 風子ちゃん再び！！海鳴スパラクーアで大暴走

S i d e ????

みんなお待ちせ

えっ？待ってない？

そんな照れない照れない

私が誰かって？もう知ってるくせに

何を隠そう私は海鳴のアイドル風子ちゃんです

今回の話は楓が多少暴走しておりますのでご了承ください。

過去に戻る。

〜八神家〜

「シャマル〜はやてたち、まだ帰ってこないの〜」

「心配ならついていけばよかったのに」

「だってさちゃんとヴィータがアイス買ってくるか心配で」

「そっちの心配なんですか」

「当たり前だろ。鉄槌の騎士ヴィータが付いてるんだ。かなりの使い手じゃなきゃ負けねえだろ」

「それもそうですね」

俺はソファから起き上がる。

すると、はやくてたちが帰ってきた。

「お帰りなさいはやくてちゃん」

「ただいまシャマル」

「買い物、ハイよ」

ヴィータがビニール袋をシャマルに渡す。

「ありがとうヴィータちゃん」

「ヴィータ、アイスは買ってきただろうな」

「もちろん」

「さすがはヴィータ」

「楓ほごじゃ」

「フフフフフ」

「主はやくて目に毒です。行きましょ」

シグナムが車いすに乗っていたはやてを抱き抱えてお姫様抱っこをする。

「やっぱりシグナムの抱っこはええ感じやな」

「そうですね」

「はやてちゃん。私の抱っこはダメなんですか？」

「甘いでシヤマル。シヤマルの抱っこはすてきな感じや」

「わぁ〜い」

「何が違うんだ……」

「どっちが上なの？」

ヴィータがはやてに聞く。

「さて？どっちや」

「もやもやするな」

「行き先はリビングでよろしいですか？」

「よろしいよ」

俺たちはリビングに向かった。

「いちこのアイスはあたしだから、手出すなよ」

「私はいちごよりバニラが好きだわ」

「チョコは俺がいただく。もしくはミントでも可」

「名前でも書いておけ。そしたら間違わん」

「シグナムさん甘いでっせ。すでに俺は実行済みでいー!!」

「ザフィーラただいま」

ザフィーラは顔を動かしてまた丸くなった。

「ヴィータちゃん車いすのタイヤ拭いてきてくれる？」

「あいよ」

「ついでに俺のバイクのタイヤも拭いてきてくれるか？」

「それは自分でやれ。ってか楓のバイクの場所知らないし、楓未成年じゃん」

「冗談だ」

半分は……

「ヴィータおおきにな」

「すぐ拭いてくるからね」

「竹輪に大根、昆布にさつま揚げ、今夜はおでんですか？」

「あたり」

「いいですね」

シグナムっておでん食べたことあるんだ。

「じっくり煮込んで美味しく作るから楽しみにな」

「はい」

「お手伝いします」

「俺も手伝うぜ」

「楓はおでんも作れるのか？」

「愚問だな烈火の将。東京タワーの近くの公園の屋台で鍛えたこの腕を振ってやるさ」

「うん、仕込みはOK」

「うん。いい匂い、はやてお腹すいた」

「までヴィータ料理っていうのは最高の食べ物ってのがあったんだ」



「我慢する……」

「ヴィータちゃんとシグナムはこれでも食べてつないでね」

シヤマルが2人の前に器を置く。

「これは？」

「私が作った和え物よ。わかめとタコのごまぜあえ」

「大丈夫？」

ヴィータお前の気持ちは良く分かる。

「大丈夫って!!」

「お前の料理はたまに暴発というか、深刻な失敗の危険が」

「見た目に騙されんだよな」

「ああ〜酷い〜」

「シヤマルの料理も上達してるしさつき私も味見したし」

済まないはやて。俺が作った和え物とすり替えておいた。

「なら安心です」

「いただきます〜」

そして、2人は目を開けたまま意識を手放した。

「ザフィーラ、うちのリーダーとアタッカーは酷いと思わない？」

「（聞かれても困る）」

「ザフィーラも酷い」

「（自業自得だ・・・）」

「楓くんまで」

「シヤマル、ザフィーラ困ってるやん。そんな細かいことで悩んだらあかんよ」

「ん？はやて今の思念通話受けてねえよな？」

「思念通話してたん？」

超能力者ですかあんたは！？

「失礼しました。お耳に入れるようなことでは無いと思いましたがええ」

「ええよ別に。ザフィーラ滅多にしゃべらへんから、たまに声が聞けて嬉しいんよ」

「ここではやてにクエッション。ザフィーラが今どんなことを考えてるか。正解者にはこのクリスタルウンジャラゲゴライアス人形をプレゼント」

「それはどうでもええけど・・・そやな、お言葉はありがたいですが、むやみに言葉を発しないのは我が主義ですよ」とか？」

「どお」

シャマルがザフィーラに聞く。

「寸分たがわず」

「ハハハすげえな」

読心術でザフィーラの心呼んだけどマジであたってやがる。

はやて恐ろしい子！！

「さて、お風呂の準備そろそろいいかしら」

シャマルが風呂場に向かう。

俺はポケットから試験管を取り出し、中に入っている紫の液体を気絶したままのシグナムとヴィータの口に含ませる。

「ここは私は生きてるのか!？」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ハッ!？」

どんな臨死体験したんだお前ら。

「キヤアアアアアアア」

「「「「シヤマル!?」「「「「

俺たちは風呂場に走った。

そこで俺たちが目にしたのは血で真っ赤に染まった浴槽と、そこに浮いて死んでいたシヤマルだった。

次回『八神家連続殺人事件（後編）』 真実はいつも一つ!!

「あかんよ楓くん。私らも死んでまっやない。それにそこはじっちゃんの名にかけてやる?」

「主はやて、ツッコミどころが間違ってます」

「それにシヤマル生きてるよ」

「で、シャマル何があつたん？」

「ごめんなさい！お風呂の温度設定間違えてて冷たいお湯が湯船いっぱい」

転生する前はあいつがよくやってたな。

「ええ」

「沸かし直しか・・・」

「けどこのお風呂のお湯だき時間がかかるからな」

「シャマルしっかりしてくれ・・・」

「ごめんなさい」

「シグナムさレヴァンティン燃やして水に突っ込めばすぐ沸くんじゃね？」

「断る」

「楓の武器にはなんかないの」

「よし俺に任せろ！風呂場が木端微塵になるかもしれないが風呂のためだ」

「楓やめて〜！〜！」

「うん。闇の書のマスターらしく私が魔法でどうにかできたらええねんだけど」

「いいえ！そんな！？やっぱりここは私が」

「炎熱系なら私だが微妙な調整は難しいな」

「俺も同じだな」

「楓に任せたら家も壊れかねないからな」

「どうかええって。こんなしょうもないことで魔力消費したらあかんやん」

俺たちは考え込む。

「そうやシャマル。ポストに入ってたチラシの束とって置いてあるか？」

「今週の方だけですけど」

「ちよう取ってきて」

「はい」

はやてはシャマルが持ってきたチラシ見始める。

「じれや」

はやてが一枚のチラシを見せてくる。

「海鳴スパラクーア新装オープン？」

「記念大サービス」

「何これ」

チラシに書いてあることをシャマルとシグナムが復唱し、ヴィータが聞いてきた。

「みんなで入るおっきなお風呂屋さんやね」

「みんなですか？」

「もちろん男女は別やで」

「ちなみに男女と一緒に入る風呂を混浴という」

「滝の打たせ湯、泡の出るお風呂にバイブレイションボディマツサ  
ージバスに紅茶風呂、いろんなお風呂が12種類あるんやて」

「それはまた素晴らしいですが」

「なんか楽しそう」

「新装サービスで安い、しかも3名様以上だとさらにやり引きやて」

「大盤振る舞いだな」

「ここはもう行っとけってことちゃうか？行ってみたい人！」

「「「はい！」「」」

俺とヴィータとシャマルは思い切り手を上げる。

「我が家で一番のお風呂好きさんが、なんや反応鈍いで」

見てみると風呂好きのシグナムが手を上げていない」

「ああ、いえ」

はやては適当に話しながらシグナムに念話をする。

まあ、シグナムもシグナムでまた固いことを考えてるんだろう。

そして、シグナムの説得にはやてが成功したみたいだ。

「ザフィーラも行こか。人間体になって普通の服きてったらええんやし」

「お誘いまことにありがたいのですが、私は留守をあずかりたく」

「そうなんか？」

「ザフィーラ風呂苦手だしな」

「そうやった。でも、そしたら楓くん男湯で一人になってまうよ？」

「いいよ。俺はたとえ一人でも12種類あれば楽しめるぞ」



「ええの？」

「ああ！」

「ほんならみんな。着替えとタオルを持ってお出かけの準備や」

「「おおー」」

「シャル私の分も頼む」

「はい」

「シャル俺の分も頼むわ。めんどくせえから」

「分かりました」

はやてとシャルとヴィータは準備に向かう。

3人が消えるとザフィーラが口を開く。

「主に窘められたか？」

「ああ。だが、なぜだろな。恥じ入る気持ちもあるのだが、不思議と心が温かい」

「それがはやてのいい所だ。人の心を見抜いて冷えた心を温める。食えない奴だが、それ以上にやさしい女の子だよ」

「そうだな」

「シグナムー楓くんー準備が出来たわよ」

「ああ今行く」

「すぐ行くわー!!」

そして俺ははやてにはめられたのであった。

「大人2人と子供3人女湯で」

今なんと？

「はやて、子供3人？あと一人は」

「楓くんに決まってるやん」

「何で俺!？」

「さつきチラシを見直したんやけど、男の子も11歳までは女湯に入ってええんやって」

「だからって俺は男だぞ!!そんなところに」

「だって楓くん一人じゃ可哀想やん!一緒入る」

「しかし、みんなも何か言えよ」

「いいんじゃない？」

「一緒に入ろうよ楓!!」

「私は構いません」

クソ!!俺に味方はすでにいない!!味方は家で留守番中だ。

「だけど!!」

「家主の命令は？」

「絶対です……」

その黒い笑顔には逆らえないよ。弱い俺……

「はやて、1つだけ条件がある」

「なに？」

「女装をさせてくれ」

「女装?ええけどバレへん?危ないで？」

「フッフ、ヴィータ!シャマル!ちょっと付いてこい」

俺は2人をはやてたちの視界の外に連れ込んだ。

〈2分後〉

「は〜い！お待たせ！！海鳴のアイドル！！風子ちゃんです」

「あのどちらさんですか」

はやてが引きつった顔で聞いてくる。

「私よ、はやてちゃん」

「ヴィータ、シャマルこれがホントに楓くん？」

「ええ」

「信じたくないけど」

何か気がついた方はいらっしやらないだろうか。

そう27話で登場した風子とは雰囲気が違うことだ。

27話で登場した風子を姉、今回の風子を妹と例えようか。

風子姉は楓が能力などで体を女に変えた姿である。精神的には比較的に落ち着いている。

風子妹は量子変換器などを使った姿。妹になっている時は精神も女の子なので、もしも楓が女の子として生まれた姿だ。正直めんどくさいやつ。

「早く行こー！！」

「家の楓くんがあんな子に・・・」

「はやて」

グイータに慰められるはやてだった。

ちなみに地の文が正常なのは風子の状態の時は俺の精神が心の奥に閉じこめられているのである。

「綺麗だねはやてちゃん」

「う、うん。そやね」

浴場に着いたがはやてはまだ慣れていない。

むしろ慣れないで欲しいが。

俺は一人さきに温泉に突入した。

「キャハハ広

い!!」

俺もとい風子は温泉を見渡す。

(しかし、何もしてかさないよな)

すると風子の目が光った。

(何ですずかがいるんだ!? まずい非常にまずい!!)

紅茶風呂にいた、すずかを見つけた風子はすずかのもとに駆け寄る。

「あ〜」

「はい？」

「すずかさんですよね？」

「はい。でもどうして」

「私、聖祥の後輩なんです。こんなところで3天使の一人に会えるなんて感動です」

「そんな3天使だなんて」

「すずかもそれなりに喜んでいる。」

「だって可愛くて優しくて男子なんか彼女にしたい男子ナンバー1ですよ」

「そ、そうなの」

「はい」

「う、嬉しいかな・・・」

「すずかが喜んでいる。」

「ここまでは良かったのだから。」

「風子のターン」

「でも、すずか先輩って性格悪そうって意見があるんですよ」

「そ、そんなこと」

「しかも、意外と黒そうだし、実は男を尻に引きそうなタイプですよ」

「そんな……」

「だから男が寄りつかないんですよ」

ガーーーーー！！

「そんな、そんな、そんな、そんな……」

すずか戦闘不能

風子は次のターゲットを探しに行く。

「ルルルル〜あれフェイトさんですか？」

「えっはい？」

フェイトは首を傾げる。

「何で私の……」

「有名ですよ。上の学年にかわいい先輩が来たって」

「先輩？つてことはあなたは後輩の人？」

「はい。古戸風子ともうします」

「よろしく風子ちゃん」

「はい先輩」

褒めターン！！

「でもフェイト先輩ってすごいですよね。成績優秀でスポーツ万能で文武両道ですもん」

「そ、そんなことないよ」

確かにフェイトは頑張ってたからな。

「今じゃ彼女にしたい女子ランキングの上位じゃないですか」

「（そ、そんなのがあるんだ……）」

風子のターン！！

「でも、かわいすぎて一皮むてないんですよね」

「えっ」

「高嶺の花ってやつですか？逆に手が出せないんですよ」

「そんなこと……」



「しかも、高町先輩と仲が良すぎてレズに見えるんですよ」

そして、最後の一言がフェイトに追い打ちを駆けた。

「同姓として見損ないます」

ガーーーーー！！

「……そうだよね……でも……」

フェイト 戦闘不能

そして、風子は温泉に入った。

「一人か？」

「あ、シグナムさ〜ん」

「その呼び方は止める。気持ち悪い」

「シグナムさんのいけず〜」

シグナムが隣に入る。

「しかし、お前も大変だな」

「私は別にいいんですよ。ただ本来の人格の彼のツッコミがつるぎくて……」

「お前は何をしてたんだ？」

「気にしないでください」

風子はタオルをまいて露天風呂に向かった。

「ねえ、アリサちゃん。すずかちゃんは？」

「それがさつきから『そんな、そんな、そんな』しか言わないのよ」

「どうしたんだろう、すずかちゃん」

「それよりフェイトはどうしたのよ」

「フェイトちゃん暗い顔してサウナ室に入ったまま出てこないの」

「なんで!？」

露天風呂ではなのはとすずかの二人が楽しく?会話をしていた。

「もしかして高町先輩とバーニング先輩ですか？」

「あ、はい」

「バーニングって誰よ!!!バ・ニ・ン・グ・ス!!!」

「冗談ですよ」

「それより、あんた誰？」

「失礼しました。私、古戸風子と申します。聖祥小の3年生です。以後お見知り置きを」

「3年生ってことは後輩さんなの」

「だから私たちのことを知ってたのね」

「はい」

褒めターン!!

「でも二人がそろってると格別ですね」

「そう?」

「高町先輩もバニングス先輩もかわいいですよん」

「そうかしら」

「そう言ってもらえると嬉しいの」

風子ターン!!

「でも高町先輩ってそのキャラ作ってるんじゃないですか」

「ふえ!?そんなこと・・・」

「だから物好きな男しか集まらないんですよ」





「どつしたん急」

楓戦闘不能

勝者風子

32話 特別編 風子ちゃん再び！！海鳴スパラクーアで大暴走（後書き）

キャラ募集やってます。 冷やし中華風

次回予告

はやてのために募集を続ける俺たち。

そして新たな力を携えたなのはとフェイトが現れる。

次回「なのはたちの……新たな力起動」

33話 新たなる力起動（なのはたちの……）（前書き）

更新遅れました、いいわけは拷問室で。



33話 新たなる力起動（なのはたちの……）

「楓……朝だよ……」

「んあ？もう朝？」

ヴィータが眠い目をこすりながら俺を起こす。

俺達はリビングに向かう。

「おはよう」

「おは……zzzz!!よう……」

「2人とも眠そうやな。ってか楓くん今寝てへんかった？」

「……zzzzzz寝てない」

「説得力あらへんよ!？」

リビングには他のみんなが全員そろっていた。

「顔洗ってらっしゃい」

「ミルク飲んでから」

「はい」

そう言ってヴィータがミルクをシャマルから受け取る。

「シヤマル俺にもミルクあるか？」

「はい。ちゃんとありますよ」

俺はミルクを受け取る。

はぁ、おいしいな

朝のミルク

「うん、やっぱりまだ成果はでてないかな」

俺とはやてとシグナムは現在病院に來ています。

「この俺が直せない病気ですよ。そう簡単にはいきませんよ」

「そうね、って、医者として納得していいのかしら」

「まあ気にしたら負けっすよ」

「そうよね……でも副作用も出てないし、もう少しこの治療続けましようか？」

「はい……えっと……お任せします」

「居酒屋か!!」

「お任せって・・・自分のことなんだからもう少しまじめに取り組もうよ」

「うっ・・・あの・・・その私先生を信じてますから」

はやて・・・

そして、はやてを退出させて保護者同士の話になった。

俺、保護者だからな！！

「はやてちゃん日常生活はどうですか」

「足の麻痺以外は健康そのものです」

「そうですね。お辛いと思いますが私たちも全力を尽くしています」

見てりや分かる。けどこの世界の医学じゃ治らない・・・

「今はなるべく麻痺の進行を緩和させる方向で進めています。これから入院も含めて大変な治療になります」

「はい、本人と相談します」

俺とシグナムはイスから腰を上げて部屋から出ようとする。

「楓くんちよつといい？」

「ええ。シグナム先に帰つとけ」

「分かった」

俺はシグナムが部屋から出る壁にもたれ掛かった。

「で、お話はなんですか？」

「楓くんも分からないのよね。はやてちゃんの病気……」

「先生たちが直せない病気を僕が知るわけないっしょ。僕が得意なのは見抜くことです」

「そうよね。変なこと言っでごめんなさい」

「謝ることはないですよ。石田先生の気持ちも分かりますから」

「どうにかできないのかしらね……」

「無理でしょうね……」

それも現実の理論にすぎないが……

そして数日

俺達は募集活動に専念してたのですが……

「補足されちゃったね〜ヴィータ、ザッフィー」

「ああ、管理局か……」

「でもこいつらチャライよ、返り討ちだ」

その時、俺達を囲んでいた局員が離れていった。

「上だ」

ザッフィーの声に反応して頭上を見るとクロノがすでに攻撃体勢に入っていた。

「ステインガールブレイド・エクスキューションシフト!!」

俺達に無数の魔法の刃が降り注ぐ。

あゝこの技なら滅却師の銀嶺弧雀で全部うち消したいな。使えません（笑）

とか言ってる間にザッフィーが魔力を広げてシールドを作り守ってくれた。

「少しは通ったか？」

クロノは魔力を使い息切れを起こす。

霧が晴れるとザッフィーの左腕に魔力の刃が数本刺さっていた。

「ザッフィーラ!!」

「気にするな。この程度でどうにかなるほどやわじゃない」

ザッフィーが魔力の刃を気合いで折る。

「心配なんかしてねえよ」

「上等!!」

クロノが何かを見てる？

俺がそれを見るとそこにいたのはなのはとフェイトだった。

Side なのは

エイミーさんとの通信を受けて私たち急いで現場に急行しました。するとそこではすでにクロノ君と紅い服の子と犬耳の使い魔さん。そして楓が戦闘を行っていました。

「あいつら」

紅い服の子が声を上げます。

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

「「Set up!!」」

するといつもと違って私たちを紐のような魔法陣が囲みます。

「えっ？これって」

「今までと違う？」

するとエイミーさんから通信が来ます。

「2人とも落ち着いて聞いてね。レイジングハートとバルディッシュは新しいシステムを積んでるの」

「新しいシステム？」

「その子たちが望んだの。自分たちの意志で、自分たちの思いで」

「そうなのレイジングハート？」

「両手を上げてその子たちの新しい名前を」

「分かってるの。レイジングハートの新しい名前は……」

「レイジングハート・エクセリオン!!」

「バルディッシュ・アサルト!!」

「す私たちはバリアジャケットを装着しました。」

私のレイジングハートとフェイトちゃんのバルディッシュの細部が少々変化していました。

「あいつらのデバイスまさか・・・!？」

「カートリッジシステムか・・・面白そうだ」

Side

私がヴィータたちの元に向かうと結界が張り巡らされていた。

「強層型の捕縛結界。ヴィータたちは閉じこめられたか」

『行動の選択を』

「レヴァンティン。お前の主はここで引くような騎士だったか？」

『否』

「そつだレヴァンティン。今まではずっとそつしてきた!!」

Side 楓

「私たちはあなたたちと戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて。そして楓がどうしてそつちにいるのかも」

「闇の書の完成を目指してる理由を」

2人が俺たちに問いかけるとヴィータが腕を偉そつにかまえた。



「あのさ。ベルカの諺にこうゆうのがあるんだよ。【和平の使者なら槍を持たない】話し合いをしようってゆうのに武器を持ってくるるかバカって意味だよバカ！」

「いきなり有無を聞かずに襲ってきた子がそれを言う!?!」

もつともです、なのはさん。

「それにそれは諺ではなく、小話のオチだ」

「うっせえ!!!いいんだよ細かいことは」

「細かくもねえけどな」

その時ピンクの閃光が結界を貫きビルに落下した。

「シグナム」

そう言ってフェイトとシグナムは見つめあった。

「過激ですねシグナムさんは」

「ホント味方でよかったよ」

「ユーノくん、クロノくん手出さないでね。私あの子と一対一だから!!!」

出た!!!なのはのOHANASSI(魔王)モード!!!怖W!!!

そして戦闘が開始された。

「レイジングハートカートリッジロード」

「バルディッシュカートリッジロード」

「デバイスを強化してきたか」

「きいつけるよヴィータ!!」

「言われなくても!!」

そして俺たちは別の方向に散らばる。

No side

くヴィータVSなのは

2人は飛びながら移動をしている。

「結局やんじゃねえかよ」

「私が勝つたら話を聞かせてもらおうよ。いいね!」

突然ヴィータが立ち止まり懐から4つの鉄球を取り出す。

「やれるもんならやってみるよ」

そしてそれを使いシュバルトフリーゲンを打ち出した。

なのははそれを避けるがヴィータがさらに追撃を続ける

なのはもそれを防ぐとなのはプロテクションは以前のものより堅くなっていた。

「堅え……」

「ホントだ」

そして爆発が起きてヴィータはとばされる。

「アクセルシューター!!」

なのはの打ったアクセルシューターは以前の物より魔力弾が多く、強くなっていた。

「ああ!?!」

ヴィータもこれには驚きを隠せない。

「こんな大量の弾操れる訳がない」

アクセルシューターの檻に捕らえられたヴィータは放っていた鉄球4つを十時方向から同時に攻撃を仕掛ける。

『できません。マスターなら』

そしてなのはに近づいた鉄球は打ち落とされた。

「約束だよ。私たちが勝ったら事情聞かせて貰うって」

なのは手を挙げる。

「アクセセル」

それに反応してグラーフアイゼンは結晶型のシールドを張る。

「シユート」

無数の魔力弾はそのシールドを壊しかけていた……

（シグナムVSフェイト）

「はああああ！！！」

「ああああああ！！！」

2人の撃ち合いが続いていた。

「プラズマランサー！！！」

8つのフォトンランサーがシグナムを襲う。

「はああああ！！！」

シグナムもそれをうち落とすがフェイトの合図によりシグナムにまた向かう。

そしてシグナムの避けるときままで立っていた場所に8つのフォ

トンランサーが激突する。

「レヴァンティン！！」

追跡してきたフェトランサーを炎熱を使い消したが、その隙をフエイトは逃さなかった。

フエイトはバルディツシュをサイスフォームにして斬りかかる。

それに反応したシグナムはシュラーケンフォームにして防ぎ、爆発が起こった。

2人は制止しお互いを見る。

フエイトは腕に、シグナムは胸に傷を負った。

「強いな、テストロッサ。それにバルディツシュ」

「あなたとレヴァンティンも。シグナム」

「この身になさなければならぬことがなければ心良い戦いだっただけだが、仲間たちと我が主のため今はそうも言ってもらえん。殺さずに済ます自信はない」

シグナムが構え直す。

「この身の未熟を許してくれるか」

「構いません。勝つのは私ですから」

「楓とユーノ」

楓は結界の維持をしているユーノの元に降り立った。

「よう！ユーノ」

「楓！？何しにきたの」

「怖い顔すんなって。俺はただこの結界を解いて欲しいだけなんだよ」

「何で楓があの人たちと組んでるんだよ。あの人たちのやってることとは……」

「犯罪か……？」

「楓は正義の味方じゃなかったの？」

楓はアクイラを仕舞い、近くの家の壁に寄りかかる。

「ユーノ。これは一人ごとだ」

ユーノは楓を見つめる。

「俺は昔この世界にある国を旅していた。その国は少しばかり治安が悪かったんだ。俺はそこでウクラスって名前の奴と友達になった。

ウクラスは2年目の警察官でな、その国でもかなりの正義感を持った警官だった。

俺たちはそこに惹かれて3ヶ月もそこに居座つちまった。  
だが事件が起きた。

ウクラスは麻薬の摘発にある倉庫に向かったんだ。

そこでウクラスは死んだ。組織の男に撃たれたそうだ。

だけど俺が思ったのはそこじゃない。その後の警察の対応だ・・・

警察はその事件を揉み消した・・・

ウクラスを殺した組織にはその国の政治家の息子がいた。そいつは自分の経歴に傷が付くことを恐れ事件を全て消し去つたんだ。

俺は許せなかった。友達の葬儀すらできないんだから。

だから俺は正義を敵にしても正義を貫きたい。そう思ったんだ」

俺が話し終わるとユーノは俺の顔を暗い目で見つめていた。

「それで何かできたの」

「力がなかったんだ。俺には何もできなかった」

そして、楓はその1年後に死ぬことになった。

「今すぐに壊さねえから心配すんな」

「どっしり」

「なのはが手出すなって言ってるだから手は出さねえよ」

そして楓は本気顔になる。

「だが飼い猫が入ってきたら問答無用でブツ壊すぞ……」

「ザフィーラVSアルフ」

こっちはこっちでザフィーラとアルフが格闘を行っていた。

アルフが拳をザフィーラにぶつけ問いかける。

「でかぶつ。あんたも誰かの使い魔か!」

ザフィーラも腕で防ぎながら答える。

「ベルカでは使えるものを使い魔とは呼ばぬ。主の牙、そして主の盾。守護獣だああっああ!」

「同じようなもんじゃんかよおお!」

爆発が起き、後ろに引いたザフィーラは遠くのビルで待機していた  
シャマルに念話を繋ぐ。

「(あまり状況は良くないな。シグナムやヴィータが負けるとは思  
わぬが、ここは一度引くべきだ。シャマル何とかできるか)」

「(大丈夫。そっちは楓くんが向かってる)」



「（それなら大丈夫だな）」

「（うん。だか・・・）」

カシャ！

突然シャマルの声がなくなる。

「（シャマル。どうしたシャマル？）」

シャマルの後ろにはSU2を構えてるクロノがいた。

「第一級搜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いであなたを逮捕します。抵抗しなければ弁護の機会がある。同意するならば武装の解除を」

その時クロノが蹴られ、隣のビルの屋上のフェンスに激突した。

蹴った主は仮面をしている男だった。

「・・・仲間？」

「あなた・・・」

「使え。闇の書を使って結界を破壊しろ」

「でも、あれは・・・」

「使用して減ったページはまた増やせばいい。仲間をやられてからでは遅かるう」

シヤマルは覚悟を決める。

「みんな今から結界破壊の砲撃を撃つわ。上手く避けて撤退を……」

「撃つな!!!」

その瞬間突然結界がガラスの様に砕けた。

ユーノが結界維持のために使っていた魔法陣が消えた。

楓の右手によつて。

「幻想殺し……」

「覚えてたか。ご名答。でもお客さんがきたんでな。俺は失礼する」

楓は瞬間移動で消えた。

「すまんテストタロツサ。この勝負預ける」

「シグナム!!!」

「ヴォルゲンリッター鉄槌の騎士ヴィータ。あんたの名は？」

「なのは。高町なのは」

「高町ぬ・・・なぬ・・・ええい呼びにくい!!」

「逆切れ!？」

「ともあれ勝負は預けた。次は殺すかな。絶てえだ!!」

「えつとヴィータちゃん!？」

「ここで失礼する」

「ちょっと待ちなさいよ!!逃げの!!」

そして守護騎士たちは離脱した。

クロノと仮面の男は向き合っていた。

「何者だ!!連中の仲間か」

「失礼なこと言うなクロノ」

楓がクロノの隣に現れた。

「うちの飼い猫はもつとかわいい連中だからな」

楓は構えるリスクは問わない。

楓の手に球体の雷が現れる。

「解放・固定！！！！『千の雷』！！！！掌握！1！！」

楓は術を体に取り込む。

「術式併走『雷天大壮』！！！！ブフツ・・・」

体が雷のようになるやいなや楓が口からかなりの量の血を吐き出した。

「楓大丈夫か！？それに・・・」

「心配するな。コントロールラブが酷いんだよ。まだこの技は」

楓は再び構える。

「一時休戦だ」

「ああ分かった」

クロノが先に先行して飛び込む。

しかし、仮面の男は蹴り一発でクロノを地上に叩き付ける。

「今は手を出すな。時期に正しいことだと分かる」

「何だと・・・」

「ふざけるな!!」

楓が殴りかかるが間一髪避ける。

「何!?!」

「おそらくその技は雷を取り込んで速度を上げる技だろう。恐れ入る。そんな技見たことない。だが体がそれに着いていってない」

楓の足の血管が無数に切れ血が吹き出している。

「君はやつかいだ。イレギュラー。ここは引かせて貰う。だが深く関わるな」

仮面の男はそう言い残して転移した。

「クソ」

楓は術式を解いて下にいるクロノの所に降りる。

「無事かクロノ」

「君こそ。僕よりボロボロじゃないか」

「鍛え方が違うからな」

「楓。あいつは誰だ」

「言っただろ。てめえのねこの世話しとけてな」

「どうゆう意味だ……」

「聞くな。自分で考え、理解し、決断しろ。お前にならできるから」

楓は大通りを歩き始める。

「まで!」

クロノはそう言ったが、楓の暗い顔を見ると動くことができなかつた。

33話 新たなる力起動（なのはたちの……）（後書き）

（楓の拷問室）

土屋「テスト終わりましたー！ー！ー」

楓「赤点は無かっただろうな」

土屋「……………」

楓「分かった。忘れる」

土屋「皆さんにオリキャラ募集の変更点があります」

オリキャラの登場は12歳の後に登場するので友達だったとゆう設定は変更する可能性があります。

楓「今更かよ」

土屋「すまん。でも紅 幽鹿様の卯月乃愛と冴島風牙、フロントム様のエル、セキシンの嵐倭はかなり登場する可能性が高いです」

楓「しかも、卯月乃愛は番外編のキーキャラクターの一人になるかもしれないんだろ？」

土屋「その通り！！だからそのキャラがキーキャラクター。もしくは好敵手になるかも」

楓「君も感想コーナーに急げ!!」

楓「これ怪しい通販だろ」

土屋「そつだな・・・・・・・・自主しよ」

次回予告

負けた楓

しかし、時は進む

フェイトを守るために戦う楓

そして・・・・・・・・

次回「敗北の果てに」



### 34話 敗北の果てに

目覚めると知らない天井・・・知ってる天井だった。

「大丈夫かい」

目覚めるとジェルがいた。

「オエツ!!」

「なぜいきなり嗚咽をもようすんだい」

「チンクヤトーレヤウーノならまだしもお前とクアット口なら吐く  
かもしれないだろ」

「私を呼んだかしら楓・・・」

「おええええええええええええええええつ!!」

「吐いたあああああああ」

頭の中で綺麗な草原を思い浮かべてお待ちください。

もう少しお待ちください。

お茶でも飲んでお待ちください。

退屈しのぎに「」で落語を・・・・・・・・・・・・・・・・

あっ！本編ですか・・・・・・・・

「で、どうして俺がここにいるんだ？」

「アキラが連絡をくれて、不動くんが裏路地で倒れてる君を見つけたのさ」

「なるほど」

俺はあの後どうやら気絶したらしい。

「また無理をしたんだね」

「無理じゃねえよ。ちょっとヤンチャしただけさ」

「ヤンチャで右足を骨折するかい。あばら骨も4本ほど逝ってるよ」  
「マジで?」

確かに右足にギブスが装着されている。

「とりあえず処置はしたから三日で治ると思うが」

「科学カスゴっ!!」

「科学はそんなに進歩してないさ普通は一週間かかる。君の回復力のたまものだよ」

「俺スゴっ!!」

まさかここまで人間離れするとは……

「で、君はこれからどうするんだ」

「ひとまず帰るわ。はやても心配してるだろうし。それにこれじゃまともに戦えないだろうし」

「そうかい。ならトールに送らせるよ」

「そうしてくれると助かるわ」

そんなこんなで帰ってきました。

しかし、ここまで歩いてくるのは大変だな。さすがにトーレと歩いてるのを誰かに見られると大変なことになるから途中で別れたけど、疲労で左足も骨折するかも。

しかし、杖って不便だな・・・一方通行乙。

「楓くん!!どうしたんその怪我!!」

「ハハハ、階段降りてら倒れてるオッサンに足をとられてそのまま落ちてたら折っちゃった」

「落ちちゃったて・・・」

シヤマルが心配そうに見てくる。

「心配するな。三日で治るから」

「「「す」!!」「」」

とりあえず慌ててた三人を落ち着かせシグナムが座っているソファの隣に腰を卸した。

「（雨宮、大丈夫か？昨日の戦闘だろ）」

「まあな、シャルルから聞いてるだろ」

「仮面の男か。雨宮、あいつらは一体何者なんだ」

「俺には言えねえよ。ただあいつらは俺たちの未来を引き裂く。どうせこっちからは会いにいけないんだ」

「そうか、すまない。怪我をしているのにこのようなことを聞いて」

「いや、烈火の将がそんなに気安く謝るなよ。威厳が保たれないぜ」

「そうだな。しかし、仲間にもそのようなことは必要ないだろう」

「そうだな」

「それから私たちは午後から募集にいくからお前は休んでろ」

「ああ、そうさせてもら……」

もしかして……不味い。フェイト追撃イベントだ。

フェイトに苦痛を与える訳にはいかないかな。

「俺も行く」

「しかし、その怪我では……」

「頼む」

シグナムは少し考え込む。は

「(分かった。だが無理だけはするなよ)」

「(ああ、後、やることから俺は少し遅れる)」

「(ああ)」

今の俺の力ではギル・グレアムの使い魔の仮面の男。いや、使い魔の双子リーゼアリアとリーゼロッテには勝てない。

場所も補足できない以上現地で決めるしかない。

「アクイラ」

『マスター……!!』

「いきなりどうした!?!」

『だって最近、私登場はしてるはずなのにセリフが無かったんですよ!?!何でザフィーラさんとあの地味なシャマルさんにセリフがあつて私に無いんですか!?!』

(地味じゃありません!?!)

「なんか今声が聞こえた気がするんだが……」

『気のせいですよマスター』

「そ、そうか？それならいいや」

『それでマスター用件はなんですか？』

忘れるとこだった。

「アクイラ、レイリルと飛鳥にメールを頼む」

「それでは」

「勝てるか分からないからな保険だよ」

「雷速瞬動が破られましたからね」

「あれは俺の今使える高速移動の一つだ。だがあれをかわされたとなると正直打つ手がない」

この戦い俺にもどうなるか分からない……

俺がシグナムのいる砂漠に瞬間移動をするとシグナムとフェイトが向き合っていた。



「楓!？」

「遅いぞ雨宮」

「すまないシグナム。状況は読めた。一騎打ちお続けください」  
俺は巻き込まれない様に少し離れる。

S i d e 楓

シグナムはいきなりシュラーケンフォームで先制攻撃を仕掛ける。

フェイトはすぐさま避けハーケンセイバーを放つ。

シグナムは避けるがフェイトが斬りかかる。

「鞘!？」

シグナムは攻撃を鞘で防いでいた。

「はっ!！」

鞘でフェイトを打ち落とすが魔力弾を使い体勢を取り直し地上に降り立つ。

シグナムも地上に降り立つ。

そして2人は必殺技の体勢に入った。

「プラズマ……」

「火龍……」

「スマツシャー……!!」

「一閃!!!!」

お互いから放たれた攻撃は竜巻を起こし爆発する。

「はああああ!!!!」

お互いの斬りかかりはまだ続く。

戦いのせいですでに2人は血を流していた。

シグナムとフェイトは次の一撃で決めようとする。

しかし、フェイトの体は飛ばされた。

「楓……」

「雨宮……」

そこにいたのは仮面の男に真っ正面から胸を貫かれ、おびただしい量の血を流していた楓だった。

### 34話 敗北の果てに（後書き）

（レイリルの拷問室）

楓「ちよつと待った！……！！……タイトルが変わってるぞ！！」

レイリル「当たり前であろう。胸を貫かれて無事であるわけ無かる  
う」

楓「連動！？まさかの連動！？あれ！！体が透け初めて、ちよつと待ってああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

楓消滅

土屋「しかし、いきなりシリアスだね」

レイリル「あの程度でマスターが死ぬ分けないでしょ。私の特訓を受けたんだからね」

楓の特訓ファイル1

1：

2：

3：

4：

レイリル「こんな所ね」

土屋「何で全部モザイクかかってるんだよ!!」

レイリル「見せられるわけないでしょ。グロすぎて18禁にでもしたいのあんた？」

土屋「いいえ」

レイリル「現在オリキャラ募集してるわ。採用率が今一番高いのはガンナーよ」

土屋「銃使いは少ないからな」

レイリル「じゃあ宣伝も終えたし次回予告よ」

次回予告

見えない……

聞こえない……

何も感じない……

そして命の灯火は儚く消える……

次回『黒き絶望』



### 35話 黒き絶望

No side

そこにいたのは仮面の男に胸を貫かれて大量の血を流していた楓だった。

「不味い。判断ミスだ……」

楓はこうなることを予期し、幻想殺しでリーゼロッテの手に触れ魔法を解除しその拳を受け止めるとゆう考えだった。楓の考えなら上手く行くはずだった。しかし、魔法を消してとたん反射で本気の拳が楓を貫いた。しかも魔法の発動途中で解除したため少し体内に腕が入っていたためこの状況になった。

「貴様!!!!!!」

シグナムがレヴァンティンを振りかざして襲いかかるが仮面の男は避ける。

「クッどうなっている」

仮面の男は惑リーゼロッテっていた。自分はリンカーコアを奪おうとしただけだったのだから。

「楓!!!私を庇って……」

「ハアハアハア……」

(目が霞んできた)

「雨宮しつかりしろ!!雨宮!!」

(シグナム……目が見えない)

シグナムは仮面の男に攻撃をしながら楓に叫ぶ。

(声が消えた?いや、聞こえないんだ……)

「楓!!楓!!……!?シグナム!!」

(……何も……感じない……)

「テストロッサ!!雨宮は!?!」

次の瞬間フェイトの言葉はシグナム、連絡を受けてる管理局メンバーに大きなショックを与えた。

「心臓が……止まった……」

「うそ……楓くんが死んだ?」

モニターを見ていたエイミィはすぐになのはに通信をした。

「楓くんが……」

なのははエイミィが何を言ってるか理解出来ず目の色が消えた。

（ここは何処だ）

……

（死んだのか？ハハハあの時は即死だったから覚えてないけど死つてこんな辛いんだな）

……

（フェイトを泣かせちゃったな）

……

（俺が死んだらはやて泣くかな……）

……



(ア) アリサとすずかに怒られちまうな

.....

(イ) なのはに悪いことしたかな

.....

(ロ) みんなごめん

「ヴアアア

ギ

ガ

ゲイ

ヴア

グナ

ブオ

「！！」

突然心臓が止まったはずの楓が咆吼を上げた。

「………楓？」

フェイトがそののも無理は無かった。貫かれた傷口は黒く淀み、髪はボサボサ、目は紅くただ仮面の男とシグナムを見ていた。

「ヴアア      ウア

グア

「！！！！」

楓が吼えたと思うと仮面の男はすでに殴られ体は宙を舞い20mほど先に落下した。

「カハツ!!」

「雨宮!!」

シグナムは止めるが仮面の男リーゼロッテの前にたち拳を振り下ろした。

「ガアアアアアアアアアア!!」

楓の拳はドス黒い魔力を纏い仮面の男リーゼロッテの腹部に当たった。

(不味い……あばらが折れた。早くしないと殺され……)

「ブアアアアアアア!!」

楓は考える暇も与えなかった。楓の拳によりもはや仮面の男リーゼロッテは戦闘意欲を失った。

勝てる相手じゃない……

人間じゃない……

化け物だ……

「ジャ　　ヴ

ギヤ

「!!!!」

「やめて楓!!」

「止める雨宮!!」

制止するフエイトとシグナムの声も届かず拳は振り降ろされた。

### 35話 黒き絶望（後書き）

「ジェイル・スカリエッティの拷問室」

ジェイル・スカリエッティ「今回は僕かい？」

土屋「適任だろ？」

ジェイル（略）「しかし今回は黒いな」

土屋「今回の話は結構めんどくさかった」

ジェイル「まあこれからの楓が気になるね」

土屋「お前も人を敬う心を……」

ジェイル「科学者として今回の楓の現象に好奇心が」

土屋「そう思った」

次回予告

危険な状態

そこに現れた2人組

彼は一人楓に立ち向かう

次回『超魔力運用』



### 36話 超魔力運用

振り落とされた拳は仮面の男の顔を捕らえていた。  
リーゼロッテ

(生きてる？これは剣？)

2人の間を剣が遮っていた。

「悪い冗談だな。私がマスターの相手をするなんて冗談でもたちが悪いわ」

「そつだにやゝしかし、どうにかしないとこれは不味いぜよ」

そこに立っていたのは。

剣を片手に騎士甲冑を装備し何時もと違いまじめ顔なレイリル。

しっかりサングラスでラフなアロハシャツを着、グローブ型のデバイスを装備した不動飛鳥だった。

「『雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ』縛道の六十一  
“六杖光牢”『鉄砂の壁 僧形の塔 灼鉄？？ 湛然として終に音  
無し』縛道の七十五“五柱鉄貫”」

レイリルが詠唱を終えると六つの帯状の光が胴を囲うように突き刺さり、五つの五角柱が体にのしかかり、楓の動きを封じた。

「これで一分ちよつとは稼げるかしら。アクイラ何とか出来る？」

『マスターの意識が無ければ不可能です！！マスターの魔力がいきなり上がって』

「なら記録をしながらスリープモードに入りなさい！壊れるわよ！」

『わ、分かりました』

アクイラはスリープモードに入った。

「レイリル……」

「レイリルさん……？」

「あらシグナムちゃんにフェイトちゃん」

引きつった顔で2人に空いている左手を振る。

「レイリル。雨宮どうなっているのだ」



「分からないわ」

「分からない!?!」

シグナムはレイリルがこの現象を知っているものと思い多少安心を覚えた。楓の師でありSランクの騎士である。このこともきつと知っている。何とかしてくれると思っていた。

「正直やばいわね。マスターの底力は私以上よ」

シグナムはレイリルの緊張がよく分かっていた。

シグナムとレイリルは一度だけ手合わせした。その時の結果はシグナムの大敗だった。その勝負はバトルマニアのシグナムに面白いと思わせなかった。まるでゲームと言ったところだろうか？シグナムはもて遊ばれた。シグナムとレイリルの戦闘力の差はそこまで無かった。しかし、レイリルはリズムを呼んで戦ったのだ。

「勝てないのよね。まるで兵器よ」

兵器には鼓動が無い。ただ人を殺す。

「それじゃあ楓を元に戻す方法はないんですか」

「誰も無いとは言って無いじゃない」

「プラン1：マスターの魔力が枯渇するまで戦い続ける。リスクは戦死者が出るでしょうね。プラン2：マスターを殺す。リスクはこれもかなり死者が出るでしょうね。」

「どうにも出来ないのか!！」

「落ち着くにゃ〜シグナムちゃん」

「こんなと何を言っているんだ。レイリル何でこんなのを連れてきた!！足手まといだ」

「こいつの言う通りよ。落ち着きなさい私が何の策もなしにこんな男連れてくと思う?」

「こんな男って酷いにゃ〜」

「策ですか?」

「プラン3：こいつが一人で戦う」

「一人で!?!危ないですよ。私たちも・・・」

「いいえ、フェイトちゃん。むしろ今回は私たちよりこいつの力の方が強いわ」

飛鳥は腕を鳴らす。

「!?!?!」

「始めるぞ楓!！」

楓を拘束していた縛道が壊れた瞬間、飛鳥が殴りかかった。

「!?!?!」

「オラー!!」

2発ジョブをかまして、右ストレートを顔に打ち込む。

「私が戦わない理由は今の彼にあるの」

飛鳥は反撃される前にジョブを、ストレートを、アッパーを決める。

「彼ドンドンと早くなってませんか？」

「さすがねフェイトちゃん」

「確かに早くなってる・・・」

シグナムが目を細める。

「あなたたちさっきまでここで戦っていたでしょう」

「はい」

「彼の能力は超魔力運用。なのはちゃんの集束を体に宿した感じよ」

「それってどうゆうことですか」

「近くの魔力を収集して体に集めて、さらに手で触れた魔力を奪うことができる。欠点は収集の限度があること。触れてる魔力しか収集できないこと」

「そうゆうことか!!」



「楓は」

飛鳥の腕にいる楓は眠っていた。

「楓は!?!」

「この程度の傷なら日常茶飯事よ」

「そ、そうなんですか……」

フェイトはそれ以上聞かないことにした。

「じゃあ、私たちはここで」

「おいとまさせていただきます」

飛鳥が楓を背中に抱え、2人のしたに魔法陣が現れる。

「待ってください」

「ごめんねフェイトちゃん」

そしてレイリルはシグナムに念話をする。

「(後で落ち合いしましょう。はやてちゃんのお家に行くわ。はやてちゃんとも面識はあるから)」

「(雨宮を頼む)」

「（了解）」

そして2人は消えた。

「テストロツサすまない」

シグナムは守護騎士たちに撤退を命令して消えた。

「楓……………」

フェイトはアルフたちが来るまでただそこに立ちつくしていた。

### 36話 超魔力運用（後書き）

「飛鳥の拷問室」

飛鳥「さ〜てみんなのアイドル、チンクの旦那の飛鳥だにや〜」

チンク「嘘を付くな！」

作者「それは置いていて」

チンク「お前は作者であろう。収集を付ける」

作者「だって別に俺は関係ないし」

飛鳥「酷い作者だにや〜」

作者「しかし、お前も親友の胸を抉るなんて酷いと思っぜ」

飛鳥「それしか方法がなかったんだし仕方なかったぜよ」

チンク「しかし、お前の力なら闇の書を吸収できるのではないか？」

飛鳥「そうもいかないのにや〜」

作者「メリットとしてはこうだな」

メリット

1：相手の集束砲などを吸収もしくは奪いとることが出来る。

2：相手の魔力障壁を破壊することが出来る。

3：かなりの細かなコントロールが可能。

デメリット

1：相手を傷つける魔力は吸収出来ず、傷を負うことがある。

2：右手で触れないと奪い取ることが出来ない。

3：相手の表面にある魔力しか奪えない。

チンク「つまり、飛鳥が胸を貫いたのはリンカーコアから確実に魔力を奪い取るためだったのだな」

飛鳥「惚れた？」

チンク「・・・いや・・・」

作者「地味に落ち込むな」

次回予告

楓を思う心。

楓に対する気持ち。

ありがとう楓。



次回「ありがとう楓」

楓「嘘付くな！！次回『会議』」

37話 会議（前書き）

最近タイトルが暗いか普通過ぎる・・・

### 37話 会議

No side

〈管理局会議室〉

会議室でアースラの主要メンバーが会議をおこなっていた。

「2人が出撃してしばらくして、駐屯所の官制システムがクラッキングであらかたダウンして誰かが一度回復させてくれたんだけど楓くんが倒れた後また全部ダウンして、指揮や連絡が取れなくてごめんね。あたしの責任だ」

「そんなことないよ。エイミィがシステムを復旧させたからアースラに連絡が取れたんだし」

ロツテがエイミィそう言う。

「仮面の男の映像もちゃんと残せた」

「でもおかしいわね。向こうの機材は管理局で使っている物と同じシステムなのに。それを部からクラッキングできる人間なんているものなのかしら」

「そうなんですよ。防壁も警報も全部素通りでいきなりシステムをダウンさせるなんて」

「楓ならできそうだけど、いや楓なら可能だろうな」

「もつと強力なブロックを考えなくちゃ」

ちなみにそのブロックすら楓には効かないと考えていたクロノだった。

「でもそれだけ凄い技術者がいるってことですか？」

「もしかして組織だっやってるのかもね」

「だとしても奴らは闇の書の守護騎士たちとは関係無い組織だ」

「僕もそう思うよ」

「どうして？」

エイミーがクロノとユーノの言葉に疑問を覚える。

「仮面の男との接触の時に楓が使っていた技は僕が見た中で1番強い技だ。しかも、その時点であいつは倒す気だった」

フェイトもクロノに続く。

「私もそう思う。楓がやられた後のシグナムは私と戦ってる時に上に本気をだしてたから」

「これは楓なのか？」

クロノが見たのは暴走状態の楓だった。

「魔力値はおよそSSS+。凄い魔力だよ」

「でもこんな姿になるなんてまるで化け」楓くんは化け物なんかじやありません!!」・・・」

リーゼロッテの言葉を遮りなのはが怒る。

「確かに楓くんはがさつで骨を折っても1週間で直したり、車を蹴り飛ばしたり、バスに乗り遅れても走ってきたりするけど」

「なのはそれは否定できてないぞ」

「そうですね。何時もふざけたり、考えなく動いたり、トイレ行くのに迷ったりするけど」

「フェイト。それはもう悪口だ・・・」

「でも、楓は私を守ってくれた・・・」

フェイトは微笑む。

「私を守るために、母さんと話し合ってくれた。それにきくと楓がいなかったらなのはとも友達になれなかったと思う」

「そうなの。楓くんは何時も一人で頑張って、怪我して、だから目を離せないの」

「そうだな」

2人の言葉にクロノも頷く。

「あんたたちはこれを見てもそう思えるの？」

今度はアリアが聞く。

「そうだね。確かに普通ならそう思うかもしれない」

「でも、楓を知ってる奴ならそうは思わない」

「そうゆうでたらめな奴なんだ楓は」

ユーノ、アルフ、クロノが答えた。

「でも楓くんは大丈夫なのかしら」

「大丈夫ですよリンディさん」

なのはは笑顔で答える。

「楓くんは絶対に死にませんから」

レイリル side

私は八神家に来ていた。

はやてちゃんはまだ寝ているみたいでリビングには私と守護騎士といた。

「レイリル！！楓は？楓は大丈夫なのかよ！！」

「問題ない・・・とは言えないわ。今症状を隠蔽して緊急入院してるわ。さすがにすぐに処置しないといけない状態だったから」

さすがに危ない状況だった。マスターの怪我は昔の修行で受けた怪我と同じくらい飲むのだと思っていた。しかし、マスターの意識は戻らなかった。いつもなら2時間くらいで戻るのに。

「シャマルでどうにか出来ないのできないのか？」

「無理よ。たぶん・・・」

「・・・・・・脳か？」

ザフィーラが正解を言ったから私は頷いた。

「さすがに脳のダメージは魔法でも治せないわ。それに私はマスターの使える能力しか使えない・・・」

「楓くんって回復魔法を使えなかったんですか？」

「使えるわよ。簡単な怪我を治すくらいならね。でも楓の力は破壊の力。治すと自分の体を滅ぼす。だから回復魔法は覚えなかったの」

「……………楓自信に任せるしかないとゆうことか」

ザフィーラの言葉に私は頷いた。

「でもあの仮面の男は誰なんでしょうか？」

「少なくとも奴らが闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

「……………完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれないな」

「ありえねえ！だって完成した闇の書を奪ったってマスター以外には使えないじゃん！！」

「完成した時点で主は絶対的な力を得る。脅迫や洗脳に効果があるはずないしな」

「まあ家の周りには嚴重なセキュリティを張ってるし、万が一にもはやてちゃんに危害を及ぶことはないと思うけど」

「マスターも家にいくつものトラップを張ったけどマスターが気を失った時点で全て解除されちゃったしね」

「……………念のためだ。シャマルはなるべく主のそばを離れぬほうがいいな。」

ザフィーラの言葉に頷くシャマル。



「ねえ？闇の書を完成させてはやてにバグを切り離して貰ったらはやては幸せになれるんだよね？」

「そうね。マスターはそう考えてるわ。マスターはある力を持っている。その力で見たんだから間違いはないわ」

「力？」

シグナムが首を傾げる。

「答えを見る力。楓はあらゆる状況におけるいくつもの答えを見ることが出来る」

「なら何で楓は怪我したんだよ。答え見たなら怪我するわけないじゃん」

「この能力の代償が脳へのダメージなのよ。脳へのダメージは目立たないけど多様すれば使用者が壊れる。だから楓も3ヶ月に1回、いや5ヶ月に1回しか使えないの……」

「楓くんは最後にいつ使ったんですか？」

「13ヶ月前にね。はやてちゃんの呪いを消す方法を見たわ」

「……雨宮は私たちよりも前に一人で何とかしようとしていたんだな」

ガタン！！

と車椅子が倒れる音がした。

私たちが駆けつけるとそこには倒れているはやてちゃんがいた。

### 37話 会議（後書き）

（アキラの拷問室）

アキラ「……………クスン……………クスン」

作者「大丈夫ですか？アキラさん？」

アキラ「大丈夫？じゃありませんよ！最近私の扱い酷くありませんか？私実は話敵にはほとんどでてるのに、セリフも描写もないですよ」

作者「そうだね。じゃあ、アキラのいるシーンを過去に振り返って見てみよう」

37話 出番なし

36話 レイリルとの会話で出番あり

35話 楓の腕に付いている（描写なし）

34話 アキラが愚痴る

33話 アキラをしまう描写あり（セリフなし）

32話 楓の腕に付いていた（描写なし）

31話 楓の腕に付いていた（描写なし）



作者「そのうちお前にも結構な出番あるから」

アクイラ「ホントですか!？」

作者「まあ楓が復活して闇の書の闇と対決してる間だからまだ結構後だけどな」

アクイラ「まさかそれまでセリフなしだとも」

作者「まあ楓が起きたらセリフあると思うから」

アクイラ「信用してますよ」

作者「だから安心しろ地味デバイス」

アクイラ「地味じゃない!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

次回予告

レイリルです。

はやてちゃんが入院しちゃったり、

楓を見に行ったりします

次回「ナース服は男の魂!!!（全く内容には関係ありません）」の  
一本です。

それでは皆さん

じゃん

けん

ぽん

うぶぶぶぶ。

パイ

38話 ナース服は男の魂！！（全く内容には関係ありません）

Side レイリル

私たちははやてちゃんを病院に連れていった。

今病室に移って石田先生と話している。

「うん。大丈夫みたいね。良かったわ」

「はい。ありがとうございます」

「はあ。ほっとしました」

確かに慌て方が凄かったからねシヤマルちゃん。

「せやから、ちょ目眩がして胸と手が攣っただけやってゆったやん。もう、みんなして大事にするんやから」

「でも頭打ってましたし」

「何かあつては大変ですから」

「はやて良かった」

はやてがヴィータの頭を撫でる。

「まあ、きてもらったついでにちょっと検査とかしたいから、もう

少しゆっくりしていったね」

「はい・・・」

わー、はやてちゃん嫌そうな顔。

「さて、シグナムさんとシャマルさん。ちょっと。後レイリルさんも来ますか？」

「行かせてもらおうわ」

私たち大人メンバー「（私も大人だ）」何か聞こえた気がするけど私たちは病室の外の廊下にでた。

「今回の検査では何の反応も出てませんが、攣っただけとは無いと思います」

「はい。かなりの痛みがりようでしたから」

「麻痺が広がり始めてるのかもしれない。今までこうゆう兆候はなかったんですね？」

「と思うんですが、はやてちゃん痛いとか苦しいのとか隠しちゃいますから」

はやてちゃんって本当にマスターに似てるのよね。

「発作がまた起きないとも限りません。用心のためにも少し入院してもらったほうがいいですね。大丈夫でしょうか」



戸惑いながらシャマルちゃんが私をシグナムちゃんの顔を見るけど  
そうゆうの決めていいのシグナムちゃんだから。

「はい」

シグナムちゃんも少し考えて首を縦に振った。

「入院？」

「はい。そうなんです」

少し時間がたち、シャマルがはやてに告げると、はやても面もちが  
暗くなり、ヴィータも不安そうにはやての顔を見つめる。

「でも、検査とか念のためとかですから。心配ないですから。ね？」

シャマルちゃんがシグナムちゃんに振る。

「はい」

「それはええねんけど、私が入院しとつたら、みんなのご飯誰が作  
るんや？」

「ウツ」

はやてちゃんのご飯が大好きなヴィータに1000のダメージ。

「そ、それは何とかしますから」

シグナムちゃんもぎこちない。

「大丈夫です・・・たぶん・・・」

「シャマルちゃんに作らせなきゃ大丈夫よ」

「レイリルさん酷い!!」

「レイリルさん。シャマルも気にしてるのでお手柔らかに・・・」

「はやく毎日会いにくるよ。だから大丈夫」

「ヴィータはええ子やな。せやけど毎日やなくてもええよ。やる」とないし、ヴィータ退屈やん」

「う、うん」

「ほんなら私は3食昼寝付きの休暇を楽しむわ」

その時はやての顔がハツとなる。

「あかん、すずかちゃんと楓くんからメールが来たらどうしよう」

「私が連絡しておきますよ」

「お願い」

今はやてちゃんにはマスターは家庭の事情で県外に出ていると説明

してある。これ以上はやてちゃんに負担はかけられないから」

「では、戻って着替えと本を持って来ます。ご希望がありましたら」

「何にしようかな?」

そう言っつて私たちは部屋を出た。

N O S i d e

部屋から守護騎士（ザファイラ除く）&レイリルが部屋から出ていくとはやては胸を掴み痛みを堪えた。

S i d e シグナム

「私これからマスターを見に行くけど帰る?」

「いや私は行こう。シャマルとヴィータはどうする?」

「私も行きます」

「行く」

私たちはエレベーターに乗り一階に降りる。

「楓くん。一階には病室には無いんじゃないの?」

「誰が一階に病室があるって行ったかしら？」

レイリルは薄嫌い物置の様な部屋に入る。

「レイリルここは一体？」

「物置よ？」

「いや・・・そうではなく」

すると部屋の中にある少し大きめのロッカーを開けた。

「何が入っているんですか？」

するとウィータがロッカーのぞき込んだ。

「凄いよ。階段がある」

「そんな馬鹿な・・・」

階段があつた・・・

狭い階段を下りると光が射し込んだ。

「着いたわ」

そこは楽園だった。

花が咲き、川が流れ、光が暖かい部屋だった。

その中心のベッドに雨宮は寝て、隣に白衣の男が立っていた。

「お客さまも一緒かい？」

「Dr・マルコ」

マルコと呼ばれた男は医者には見えそうで見えない格好をしていた。石田先生と同じ白衣を羽織ってはいるが、紅いYシャツを下に着て、白衣はかなりくたびれている。履いているのもビーチサンダルで、黄色い半ズボンを履いているから足の剛毛が目立つ。髪の毛はかなりボサボサで、寝ていないのか？目の隈が酷かった。

「初めましてかな？私はマルコ。マルコ・ベルフェット。一応この鳴海大学病院の医師だ」

「一応って……」

シヤマルが戸惑ってるが私もどんな反応をすればいいか分からん。

「変なやつだな」

「ヴィ、ヴィータ!？」

「ヴィータちゃん!？」

「ああ。気にしなくていい。よく言われる」

そうゆう問題なのか？

「Dr・マルコ、マスターの状態はどうですか？」

「だからそのDrってゆうの止める。そうゆうキャラじゃねえんだよ」

「でもDrはDrですから」

めんどくさそうな顔をしてDr・マルコは髪をかきながらカルテを見る。

「肉体のほうはかなり安定してきた。傷が治るのは1月の終わりとも言っておこうか。まあ、意識が戻って肉体を活性化出来れば1週間そこらで治るかな」

「1週間!？」

シヤマルが驚きで声を上げる。

「驚くことじゃない。元々このガキAは肉体系の術が得意なんだ」

「ねえガキAって楓？」

「そつだガキC」

「ガキじゃねえ!!」

楓とは違って適当な人だな。

「俺は大人の女性にしか基本興味ない」

「Dr・マルコ。話を戻してください」

「おっとすまない」

Dr・マルコはカルテを構え直してしゃべり始めた。

「問題は意識だ。脳の波長に全く変化が見られない。はっきり言わせてもらおう。植物状態だ」

「そんな!?!」

「楓は治るの!?!」

「落ち着け。このガキがその程度で死ぬ訳ないだろ」

「マスターはすでに5回植物状態に陥っているわ」

「それはもう奇跡を通りこして異常だな……………」

「だが起きることは保証できない」

部屋に沈黙が流れる。

「医者風に言えば本人の気力次第ですってことだ」

「そうですね……………」

レイリルのその顔は、少なくとも私の見た顔の中で一番暗かった。

38話 ナース服は男の魂!! (全く内容には関係ありません) (後書き)

↓Dr・マルコの診断室↓

マルコ「タイトルの通り俺が登場人物を診断するらしい」

コンコン!!

マルコ「入れ」

なのは「お邪魔します」

マルコ「邪魔するなら帰れ」

なのは「お邪魔しました!!」

マルコ「次の方」

ヴィータ「オッスマルコ!!」

マルコ「よう嬢ちゃん。お悩みわ?」

ヴィータ「実は……その……」

マルコ「言にくいことなら小言でいいんだぜ」

ヴィータ「いや、大丈夫……実は……」

マルコ「実は?」



ヴィータ「身長を伸ばしたいんだ」

マルコ「・・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿か？」

ヴィータ「馬鹿ってなんだよ!!」

マルコ「お前は守護騎士プログラムと体がリンクしてるんだ。いや、リンクしてなくてもはやてが死ぬまで不老ロリだぞ」

ヴィータ「だからどうにかならないか聞いてるんだよ」

マルコ「でもな・・・・・・・・」

ヴィータ「何か他の方法はないのかよ!」

マルコ「あるちゃあるが・・・」

ヴィータ「あるのか!」

マルコ「これだ」

ヴィータ「なんだよこの瓶の中の液体」

マルコ「俺の知り合いのマッドサイエンティストが作った肉体成長薬『背がノビール4』だ」

ヴィータ「それで背が伸びるのか?」

マルコ「ああ」

ヴィータ「なら……」

マルコ「ただ副作用で身長が伸び続けて止まらない」

ヴィータ「危ないだろ！！危なく飲むとこだったぞ」

マルコ「まあ努力なくして成果なしだ。まあ、俺が買った身長を伸ばすってロゴのある機会を出すから」

ヴィータ「うん」

マルコ「デハ、オカラダヲオダイジニ」

ヴィータ「うん（面倒くさそうだな……）」

「そのころのなのは」

なのは「にゃ！？口車にのって帰っちゃったのー!!」

なのはは診察を受けれるのか

続く。

次回予告

マルコだ。

次の話は俺の素性をレイリル嬢が話すらしい。

次回「Dr・マルコの素性」

39話 Dr・マルコの素性

私たちは病院を出て家に戻っていた。

主のいない帰り道寂しいもんだ。

「あのレイリル？Dr・マルコってどうゆう人なんですか」

シャルマルがレイリルに聞く。

「藪医者」

「藪医者！？」

「レイリルそれは大丈夫なのか？」

「藪医者だけど、腕は確かよ。それは楓が認めてるんだから」

「彼って魔法知ってますよね？」

「そもそも管理局の人間だし」

「「「管理局！？」」」

「大丈夫なのかよレイリル！！」

管理局・・・信用していいのか？

「シグナムちゃん心配しなくていいわ」

やっぱり気持ちを見透かされてるのか。

「Dr. は元々は本局医療部の人間だったのよ。でもね……」

「何かあったのか？」

「ミッドチルダで女の子をナンパしてて、ついで言ったら、その女の子が反管理局の人間でね、他の世界に拉致されて、まあその組織はDr. が潰したんだけど」

「ってことはあいつそんなに強いのか？」

「うん。微妙なのよね。Dr. って飛鳥よりも力を出さないし、私も楓も知らないのよ」

「で、その後はどうなったんだ？」

「まあ組織を潰したら、帰り道が分からなくなって、世界を遭難して、この世界に流れ着いたの。そして今の病院に雇ってもらって、確か今は内科の副主任をしてるらしいわ」

「まあ、よく分からない人ってことは分かった」

「シグナム……それって結局分かっているのか分かってないか分からないぞそれ」

ヴィータのセリフもよく分からなくなってきた。

考えるのは止めて、帰って早く主の着替えと本を持っていこう。

39話 Dr・マルコの素性(後書き)

↓Dr・マルコの診断室↓

マルコ「あゝ暇だ」

なのは「マルコ先s・・・」

落とし穴起動

なのは「にゃあああああああ!!!!!!!!」

マルコ「次の人どうぞ」

クロノ「こんにちは」

マルコ「はい、執務官殿。今日はどうした?」

クロノ「実は身長が・・・」

マルコ「そのネタもうやった」

落とし穴起動

クロノ「あああああつあああああ!!!!」

マルコ「次のかた」

シャマル「こんにちは」

マルコ「シャマル嬢かい。どうしたんだい？」

シャマル「実は……地味なんです」

マルコ「次のかた」

シャマル「ちゃんと聞いてください」

マルコ「ってもよう地味じゃ無くなる薬なんて……」

シャマル「やっぱり無いですよね……」

マルコ「あるけど」

シャマル「あるんですか」

マルコ「使えたもんじゃないんだよ」

シャマル「そうですか……」

マルコ「でも地味ってゆうのも悪いことじゃないんだぜ」

シャマル「そうですか」

マルコ「使い方によってはミスディレクションや消えるドライブ）  
バニシングドライブ）」

シャマル「あ、あの……」



マルコ「知られざる英雄ミスターアンノサレマングや光化静翔ミスターアンノサレマングを使えるかも・・・」

シャマル「最後のはほとんど別の能力です」

マルコ「とりあえずバスケットボールを出しておくからミスディレクションを磨いておけ」

シャマル「分かりました」

ちなみに数日後シャマル嬢がバスケに目覚めたのは別の話だ。

次回

シャマルの戦いが今始まる。

ミッションはただ一つ。

なのはたちにはれずにはやてとすずかを会わせる。

次回「シャマルの奮闘」

## 40話 シャマルの奮闘

Side クロノ

僕とエイミィは無限書庫で闇の書について調べているユーノに連絡を取っていた。

「ここまでで分かっていることを言っておく」

無重力の様な部屋で浮いているユーノが語り始める。

「まず闇の書ってゆうのは本当の名前じゃない。古い資料によれば正式名称は『夜天の魔道書』。本来の目的は各地の偉大な魔導師の技術を収集して、研究するために作られた。主とともに旅する魔道書。破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思う」

「ロストロギアを使って無闇やかに莫大な力を得ようとする輩は今も昔もいるってことね」

ユーノと一緒にいたアリアも呆れるように言った。

「その改変のせいで、旅をする機能と破損したデータを自動修復する機能が暴走してるんだ」

「転生と無限再生はそれが原因か？」

「古代魔法なら、それくらいありかもね」

僕のとりにいたロツテが仮説を唱えた

「一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化。一定期間の収集がないと持ち主自身の魔力や資質を浸食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる。無差別破壊のために。だから、これまでの主はみんな完成してすぐに……」

その点はすでに個人で調べていて知ってる。

「ああ。停止や封印方法についての資料は？」

「それは今調べてる。だけど、完成前の停止はたぶん難しい」

「何故？」

「闇の書が真の主として認めてないとシステムへの管理者権限が使用できない。つまり、プログラムの停止や改変が出来ないんだ。無理に外部から操作をしようとすれば、主を吸収して転生するシステムも入ってる」

「そうなんだよね」

アリアが同感する。

「だから闇の書の永久封印は不可能って言われてる」

「元は健全な資料本がなんとゆうかさ」

「闇の書……夜天の魔道書もかわいそうにね」

エイミーが哀れみながらそう言った。

「報告は以上か？」

「現時点では。でも、いろいろ調べてる。でも、さすが無限書庫。探せばちゃんと出てくるのが凄いよ」

「とゆうか、私的にはあなたのほうが凄い。すごい搜索能力」

確かに僕も執務官の仕事でもあまり無限書庫には行きたくない。

「すまないがもう少し頼む」

「うん」

「アリアも頼む」

「はいよ。ロッテ後で交代ね」

「はーい。OKアリア。頑張ってね」

僕たちは通信を切った。

「ユーノくん凄いね」

「ああ。私も正直驚いた」

「エイミー仮面の男の映像を」

「はいな」

「何か考え事？」

まあね。

エイミィに仮面の男の映像を出してもらおう。

「この人の能力も凄いとゆうか、結構あり得ないきがするんだよね。この二つの世界、最速で転移しても10分はかかりそうな距離なのに。しかも、なのはちゃんの新型バスターを防御、長距離バインドをあっさり決めて、それから僅かに9分後にはあの楓くんを落とすた」

「かなりの使い手ってことになるね」

そう、あの楓が僕が知ってるだけでも2度こいつに敗北している。

「僕でも無理だな。ロツテはどうだ？」

「あゝ無理無理。あたし長距離魔法とか苦手だし」

「アリアは魔法担当。ロツテはフィジカル担当。きっちり役割分担してるもんね」

「そう！そう！」

「昔はそれで酷い目に遭わされたもんだ」

あの頃は大変だった。

「その分強くなつたら！感謝しろって」

「Side なのは」

私とフェイトちゃんはバス停に向かっています。

「（私となのは呼び出しがあるまでは、こっちで静かに暮らして  
てだって）」

「（出勤待ちみたいな感じかな？）」

「（うん。武装局員を増員して追跡調査をメインにするみたい）」

「（そっか）」

「入院？はやてちゃんか？」

学校に着くとすすかちゃんの友達のはやてちゃんが入院した話を聞きました。

「昨日の夕方に連絡があつたの。具合は悪くないそうなんだけど、  
検査とか色々あってしばらくかかるって」

「そっか。じゃあ放課後にお見舞いにも行ってみる?」

「いいの?」

「さすがの友達なんでしょ? 紹介してくれるって話だったしさ。お見舞いもみんなで行った方がいいんじゃない?」

でも、アリサちゃん。ちょっと急すぎるかも。

「それはちょっとどうかと思うかも」

「でも、いいと思うよ。ね」

「うん。ありがとう」

みんながいいならいいのかな?

Side シャマル

「よいしょっど」

今、私はお弁当を作っています。

それにしても、冷凍食品やボイルすればいいものだとみんな食べてくれるんですね。

全く失礼な話ですね。

はやてちゃんの携帯の着信が鳴る。

「すずかちゃん」

メールは、はやてちゃんの友達の月村すずかちゃんからだった。

『こんにちは。』

月村すずかです。

今日の放課後、友達と一緒に  
はやてちゃんの、お見舞い  
に行きたいのですが、  
行っても大丈夫でしょうか？  
お返事いただけるとうれしいです。

もし

ご都合が悪いようでしたら  
この写真をはやてちゃんに見せて  
ください』

「すずかちゃん、いい子ね」

私は添付してある画像を開いた。

「・・・はっ!?!?」

そこに写っていたのはすずかちゃんとその友達と管理局魔導師の2人でした。



「何？テストロッサたちがどうしたって？」

私は募集に向かっているシグナムに通信をした。

「だからなのはちゃんとテストロッサちゃん。管理局魔導師の2人がはやてちゃんに会いに来ちゃうの！！すずかちゃんのお友達だから。どうしよう！！どうしよう！！」

「落ち着けシヤマル。大丈夫だ。幸い主はやての魔力資質は殆ど闇の書の中だ。詳しく検査されないかぎりバレはしない」

「それはそうかもしれないけど」

「つまり私たちと鉢合わせなきゃいいだけだ」

「うーん。顔を見られちゃったのは失敗だったわ。出撃した時、変身魔法でも使っていればよかった」

「今から悔いてもしかたない。ご友人のお見舞いの時は私たちは外そう。後は主はやて、石田先生に我らの名を出さぬようお願いを」

「はやてちゃん変に思わないかしら」

「しかたあるまい」

「うん」

何とかしないと。

でも具体的にはどうしよう……

石田先生に変に思われないかしら？

何とか穏便かつスマートに解決できる方法……

そうだ！！

「で、俺に相談してきたと」

「はい。一応この先生ですし」

Dr.マルコはコーヒーをテーブルに置いて頭を掻いた。

「まあ、なんかなるだろう。あいつは意外と扱いやすいからな」

「ありがとうございます！」

「礼なんかいらん。レディの願いは極力何でも受ける。それが俺のポリシーだ」

「・・・あはは」

やっぱり、この人はこうゆう人なんですね・・・

「びびぞ」

「」「」「」「」「」

今、はやてちゃんとすずかちゃんとお友達が会っています。

「こんにちは。いらっしやい」

「はやてちゃん大丈夫？」

「うん。平気や。みんな座って座って」

「ありがとうございます」

「コートかけそこにあるから」

なのはちゃんとテストロッサちゃんは気づいてないみたいね・・・

「シヤマルさん何やってるんですか？」

「あの、そのちょっと気になりました!?!」

「中に入ればいいじゃないですか。とゆうのは禁句なんですかね」

「あ〜え〜っと」

答えられませんでした。

「変な言い方もしれないですが、はやてちゃんの治療医としてシヤマルさんたちには感謝してるんです。みなさんと暮らすようになって、はやてちゃん本当に嬉しそうですから。はやてちゃんの病気は正直難しい病気ですが、私たちも全力で戦ってます」

「はい」

「一番辛いのははやてちゃんです。でも、みなさんとお友達が支えて上げることで勇気や元気が湧いてくると思うんです。だから支えて上げてください。はやてちゃんが病気と闘えるように。」

はやてちゃんのことをここまではやてちゃんのことを……

「はい」

嬉しくて涙が出ました。

「お友達のお見舞いどうでした」

「うん。みんなええ子だったよ。楽しかった。また時々来てくれる  
って」

「それは良かったですね」

「そやけどもうすぐクリスマスやな。みんなとのクリスマスは初めてやから、それまでに退院してペアっと楽しく覚えてたらええねん  
けど」

「そうですね。できたらいいですね」

12月13日。

クリスマスまではあと

闇の書がはやてちゃんの浸食する段々上がってきてるみたいなの。

このままじゃもって一月。

もしかして、もっと短いかも……

・ 楓くんが帰ってこないと言の書が暴走しても止めれる人がいない・

どうしよう……

No side

ギル・グレアムは闇の書のデータを見つけていた。

「父様」

アリアの言葉に張りつめていた糸が緩んだ。

「あんまり根を詰めると体に毒ですよ」

「そうだよ」

「リーゼか。どうだい様子は」

「まあ、ボチボチですね」

「クロノたちも頑張ってますけど、闇の書が相手ですから一筋縄では」

「そうか。すまん。お前たちまでつき合わせてしまった」

「なぐに言ってるんのお様」

「あたしたちは父様の使い魔。父様の願いは私たちの願い」

「大丈夫だよ、父様。デュランダルももう完成してるんだし」

「闇の書の封印。今度こそ大丈夫ですよ」

2人はグレアムに笑いかける。

「ああ」





マルコ「どうした？お前が診断なんて」

ザフィーラ「……このことは他言無用で頼む」

マルコ「問題ない」

ザフィーラ「……実は犬と言われることに抵抗が無くなってきた」

マルコ「それは重傷だな」

ザフィーラ「……何故誰も我を狼と呼んでくれない」

マルコ「そりゃあ日本に狼なんていないからな。子供たちなんかは知ってても三匹の子豚の2足歩行狼しか知らんだろ」

ザフィーラ「……このままでは犬に成り下がってしまうのではないのだろうか？」

マルコ「しかし、これは薬でどうにかなる話じゃないしな。記憶の宝石とかゆうロストロギアがあれば別だがあれはSSSランクのロストロギアだからな」

ザフィーラ「……どうしようもないな」

マルコ「ひとまずこれを渡す」

ザフィーラ「……これは一体何だ？」

マルコ「私は狼です、ステッカーだ」

ザフィーラ「……これを付けると?」

マルコ「これを付けねば分かってもらえるはずだ」

ザフィーラ「……諫仕方ない」

マルコ「では健闘を祈る」

子供「ねえお母さん。あの犬おおかみさんって書いてあるよ」

お母さん「そうね。かわいいわね」

ザフィーラ「……………」

その頃のなのは

なのは「海が綺麗なの」

ビーチでまどろぬのは。

なのは「空が青いし……………」

なのは「ここは何処なの」

なのはは無人島にいた。

次回予告

クリスマス・イブの前日。

管理局メンバーや楓の仲間は一切なにをしてるのか。

幸せな時間をお楽しみに。

次回「イブ前夜」

## 41話 イブ前夜

No side 12月22日

「ええ。ここまででは上手く言ってるわ」

「ああ。そっちに戻らなくなった分、管理局もこちらを追い切れないようだ。主はやては寂しがつてはいないか？」

「私には一言も。でもお友達はよく来てくれてるみたいなの。すずかちゃんたち」

「だが心配させてもいけない。数日中に一度戻る」

「うん。気をつけて」

「ああ」

「大変よねホント」

シグナムが通信を切ると隣で飛んでいたレイリルが口を開いた。

「すまないな」

「気にしないで。こっちこそ手伝えるのが私だけでごめんね」

「雨宮よりは要領がいい」

「ありがとう」

2人は崖の上に立つ。

「後何ページ？」

「60ページ」

12月23日

久々の高町家の食卓風景。

しかし、数えると一人多かった……

フェイトだ。

「はい、どうぞ」

「おお、美味そうだな」

「……いただきます」

「フェイトちゃんも沢山食べてね」

「はい。ありがとうございます」

高町家のほのほのとした食卓。

美由紀がテーブルの下を除くとアルフ（子犬・Ver）もいる。

「フェイトちゃんも今年のクリスマスはご家族とご一緒なのかい？」

「はい。えっと一応は」

「そう」

「家は今年もイブは地獄の忙しさだな」

「私今夜のうちに値札とポップ作っておくから」

「お願いね。私たちは今夜しっかり寝とかなきゃ」

フェイトは土郎、なのは、美由希の言葉の意味がよく分からなかった。

「翠屋のクリスマスケーキ。人気商品だからイブもお客さんいっぱいなの」

「それにねイブに過ごす恋人同士や友達同士のために深夜まで営業してるんだよ」

「そうなんですか」

高町姉妹の言葉で納得するフェイト。

「恭ちゃんはいいいね。店の中で忍さんとずっと二人きりだから」

「それは別に関係ないだろ！」

「アリサちゃんとすずかちゃんの予約分はちゃんとキープしとくからね」

「うん」

桃子の言葉に頷くなのは。

「リンディさんからも予約いただいでるからなあ〜お楽しみに」

「はい。ありがとうございます」

士郎の言葉に頬を赤く染めた。

マルコの自室のソファでマルコと飛鳥がテーブル向き合いながら座り、飛鳥の隣にレイリルが座っている。

「マルコ。楓はいつ目覚めるんだ」

いつもよりまじめな飛鳥がマルコに問う。

「こればかりにはどうにもならん」

「どっゆっつことよ」

「今こいつの体は100%回復してると言っても過言ではない。しかし……」

「しかし何だよ」

「ああ。試しにレイリルユニゾンしてみる」

「分かったわ。ユニゾンインー!!」

光になったレイリルが入った。

「キャー!!!」

レイリルが飛び出してきた、地面に倒れる。

「拒絶された?」

「どっゆっつことだマル」



マルコはモニターを展開して指揮棒でモニターを挿す。

「ユニゾンの時マスターとユニゾンデバイスの波長がほぼ同じになる」

「でもこれは……………」

「融合事故か？」

「そうだ。波長はほぼ合っているんだが、波長が小刻みに揺れて安定同調しない」

「原因はなんだ？」

「こいつの心が拒絶している……………ってゆうのが俺とジエイルの見解だ」

「拒絶ね……………レイリル。俺はジェイルの所に戻って考えをまとめる」

「分かったわ……………」

「無理はするな……………」

「ええ」

飛鳥はそれだけを言って、部屋の一角にある転送ポートに消えた。

「『明日の終業式の帰りの件みんな大丈夫ですか？』」

ベツトの上ですずかは明日はやてにプレゼントを渡す計画をメールで話しあっていた。

「『じゃやてにプレゼントを私に行くんだよね』」

フエイトは帰りながらメールをする。

「『でも、内緒で行って大丈夫かな』」

なのはは勉強しながら返信する。

「『もし都合が悪かったら石田先生に渡してもらえばいいし』」

アリスはソファアに座りながら返信する。

「『じゃあそつゆつことでもた明日ねお休み』返信つと」

アースラ館内。クロノがモニターに向かって調べごとをしていると部屋にエイミイが入ってくる。

「あれ？どうしたのクロノくん」

クロノはモニターの画面を切って立つ。

「う、うん。ちょっと調べ物」

「何だ。言ってくれたらやるのに」

「いや、いいんだ。個人的なことだから」

クロノは立ち去ろうとしたが後ろを振り向いた。

「ああ、闇の書についてのユーノのレポート、なのはたちにも送ってくれたか」

「なのはちゃんたちも闇の書の過去については複雑な気持ちみたい」

「そうか」

クロノは部屋を出て自室に戻り端末を操作する。

「クソ！まだでないのか。楓……………」

クロノはベッドに飛び込んだ。

「あいつの言っていたことが事実なら……………てめえの猫の世話で  
もしとけか……………」



## 41話 イブ前夜（後書き）

「D「マルコの診察室」

マルコ「はあ」

フェイト「はあ」

マルコ「何時からいた？テストロッサ嬢」

フェイト「えつと最初から？」

マルコ「追求はしないで置こう。で、相談は？」

フェイト「なのはが1話前からなのはがないんです……」

マルコ「無人島じゃない？」

次回予告

遂に訪れる

なのはたちと守護騎士が出会う

遂にA・S編クライマックス開始

次回『出会っちゃったんです』

42話 出会っちゃったんです(前書き)

最初からクライマックスだぜ!!

ごめんなさい言って見たかったです……

## 42話 出会っちゃったんです

No side

海鳴大学病院のはやての病室には八神家のメンバーが集結していた。

「はやて、ごめんね。あんまり会いにこれなくて」

「うん、うん。元気やっか？」

はやてはヴィータの頭を撫でる。

「めっちゃめっちゃ元気」

するとコンコンとドアがノックされる。

「こんにちは」

声は月村すすかの物だった。

「あ、すすかちゃんやどござ」

「「「「こんにちは」」」」

そして、ドアが開いた瞬間、守護騎士たちの表情が変化した。

「こんにちは、今日は皆さんお揃いですか？」



「こんにちは初めまして」

入ってきたすずかと守護騎士たちに初めて会うアリサは挨拶した。

そしてなのはとフェイトは声を出すことができなかった。

「あつ、すみません。お邪魔でした？」

緊迫した状況を碎いたのはアリサだった。

「あ、いえ」

「いらっしゃい皆さん」

シグナムが否定し、シャマルが迎え入れるが言葉にきこちない。

「何だ良かった」

「それより、今日はみんななどないしたん？」

すずかが安堵すると、はやてが聞いた。

「「セーの、サプライズプレゼント!!!」」

アリサとすずかが声を合わせて箱を差し出す。

「わあ!」

はやての顔が明るくなる。

「今日はイブだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「ほんまか?ありがとうな」

「みんなで選んで来たんだよ」

「後で、開けてみてね」

3人が会話をしている時、ヴィータはただ、なのはとフェイトを睨んでいた。

「なのはちゃん、フェイトちゃんどうした?」

言葉を発さない2人に気になって、はやてが2人に聞く。

「う、うん」

「ちょっとご挨拶を、ですよね」

「じゃはは・・・」

「はい」

「みんなコートを預かるわ」

「「はい」」

シグナムが短く返事をし、コートを預かるためシャマルがロッカーに移動した。

「念話が使えない。通信妨害を」

「シャマルはバックアップのエキスパートだ。この程度造作もない」

他に聞こえないようにフェイトとシグナムは小声で話す。

「えっと・・・あの・・・そんなに睨まないで」

ヴィータはまだなのはを睨んでいた。

「睨んでねえです。こうゆう目つきなんです」

「ヴィータ嘘はあかん！悪い子はこうや」

はやてがヴィータの鼻を摘む。

「お見舞いしてもいいですか？」

「ああ、そうしてくれ」

シグナムはフェイトの言葉に静かに答えた……………

その後なのはとフェイト、シグナムとシャマルはとあるビルの屋上にいた。

「はやてちゃんが闇の書の主……………」

「悲願は後わずかで叶う」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも」

「ちょっと、ちょっと待って！！駄目なんです！闇の書が完成したらはやてちゃんが！！」

その時、上空からヴィータが襲いかかった。

なのははバリアで守るがフェンスまで飛ばされてしまう。

「なのは……！」

それと同時にシグナムがフェイトに斬りかかるが、フェイトは凄まじいスピードでバックステップを踏み、バルディッシュをかまえる。

「管理局に我らの主のことをまだ伝えられては困るのだ」

「私の通信防御範囲から出すわけにはいかない」

「・・・ヴィータちゃん」

ヴィータは無言で騎士甲冑姿になる。

「・・・邪魔すんなよ・・・もう後ちよつとで助けられるんだ・・・はやてが元気になって私たちの元に帰ってくるんだ。必死に頑張ってきたんだ。もう後ちよつとなんだから」

ヴィータの瞳から涙が零れる。

「邪魔すんなあああ！！！！」

怒りをあらわにし、ヴィータは思い切り攻撃した。

なのは居た場所が炎に包まれている。

「ハアハアハア・・・」

炎の中からゆっくりとバリアジャケットを着たなのはが現れた。

「・・・邪魔め」

「悪魔でいいよ・・・」

なのはもレイジングハートを起動させ、カートリッジをロードする。

「悪魔らしいやり方で話を聞いてもらっから」

なのははそう言い放った。

「シヤマル。お前は離れて通信妨害に専念しろ」

シヤマルは後ろに下がり騎士甲冑を纏った。

「闇の書は悪意ある改変を受けて壊れてしまっている。今の状態で完成させたら、はやては……」

シグナムはレヴァンティンを構える。

「我々はある意味で闇の書の一部だ」

ヴィータがなのはにグラーファイゼンを振り下ろす。

「だからこそ闇の書を完成させないといけないんだ」

「じゃあどっして……」

『アクセルシューター』

なのはのアクセルシューターを撃つ体勢に入る前にヴィータは距離を取った。

「じゃあなんで闇の書なんて呼ぶの!？」

「えっ?」

「何でホントの名前で呼ばないの?」

「ホントの名前……」

『ソニックフォーム』

フェイトがバリアジャケットを纏っていたがいつもとまるで違っていた。

まるでレオタードのようだ。

「薄い装甲をさらに薄くしたか」

「その分早く動けます」

「温い攻撃でも当たれば死ぬぞ? 正気かテストロッサ」

「あなたに勝つためです。強いあなたに立ち向かうには、これしか無いと思ったから」

シグナムは歯を食いしばりながら騎士甲冑を纏う。

「もう少し早く兩宮が帰ってくればどれほどの友になっただろうか」

「楓は帰って来ます。間に合います」

「止まれん」

涙を流しながらレヴァンティンを握る。

「我ら守護騎士。主の笑顔のためなら、騎士の誇りも捨てると誓ったのだ。だからもう止まれんのだ!」

「止めます。私とバルディッシュが」

「ホントの名前があったでしょ」

「闇の書の本当の名前・・・」

「うん」

ヴィータが何かを感じ始めた時・・・

なのはの体が強固なバインドにより拘束された。



「バインド。また」

「なのは!？」

シグナムと膠着状態にあったフェイトは後ろに引きフォトンランサーを準備する。

そして、あたりを見回す。

「そこだ!！」

放たれたフォトンランサーが空に当たるとその空間が歪む。

「はあああああ!！」

フェイトが2度斬りつけると仮面の男が現れた。

「この間みたいには行かない!！」

フェイトが攻撃使用とした瞬間、死角から横腹に蹴りが入る。

そして、フェイトがバインドにより拘束される。

「2人!？」

なのはは仮面の男が2人いることに驚く。

そして、仮面の男がカードを大量にとりだすと、シャマル、シグナム、ヴィータも拘束された。

「この人数だとバインドも通信防御もあまり保たん。早く頼む」

バインドを担当してる仮面の男が催促する。

「ああ」

仮面の男の手に闇の書が現れる。

「いつのまに!?!」

自分が持っていた闇の書が無いことに驚くシャマル。

「ウアアウウウア」

「ウツウウア」

「ウツウアツア」

仮面の男が闇の書を開いた瞬間ヴィータ、シグナム、シャマルが苦しみ出す。

「最後のページは不要となった守護騎士自らが差し出す。これまでも幾たびかそうだったはずだ」

『募集』

「アツアツアア!!--」

シヤマルが消えた……

「壊れてしまったロストロギア」

「クツグアツアア!!」

シグナムが消えた。

「シヤマル!!シグナム!!何なんだ!?何なんだよ!てめえら!!」

「ウアアアアア!!」

「ブアアアアアア!!」

ヴィータの下半身が消えたその時。

突如現れたザフィーラの拳と仮面の男の障壁がぶつかった。

「グアア」

ザフィーラの拳は届かず障壁に防がれた。

「もう一人居たな」

「ググウウウウ!!」

「奪え」

『募集』

「ヴアアアアアアアアアア!!」

苦しみに耐えながらザフィーラの放った拳は

障壁に防がれた……

## 42話 出会っちゃったんです(後書き)

「マルコの診察室」

マルコ「今日も診察」

なのは「マルコ先生!!」

こんがり日焼けしたなのはが入ってくる。

マルコ「落とし穴・・・」

なのは「その手には乗らないの」

なのはが落とし穴を飛び越える。

マルコ「の上から金ダライ」

【ゴーーーーーン!】

なのは「にゃああああ」

落とし穴に落ちるのは。

マルコ「さてと片づいた。今日の仕事終わり」

・次回予告

完成する闇の書

到着するレイリル

次回「闇の書起動」

・次章予告

闇の書事件から数日の話

新たな敵は

自分自身

マテリアル編もうじき公開

### 43話 闇の書起動

No side

「ハッ！」

八神はやてはふと目を覚ました。

はやて自信もよく分からずにふと窓の外を見ようとした。

その時

「ウウ!!！」

黒い何かを感じた。

訳の分からない何かを……

「あの2人は。なのはとフェイトの2人は大丈夫か？」

「4重のバインドとクリスタルゲージだ抜け出すまで数分かかる」  
言葉通り、なのはとフェイトはバインドを去れゲージに捕らえられていた。

「十分だ。闇の書の主の目覚めの時だな」

仮面の男の姿がなのはと瓜二つになる。

「因縁の終演の時だ」

もう一人もフェイトの姿となる。

偽なのは（以降Sなのは）と偽フェイト（以降Sフェイト）の下に魔法陣が現れると、その中心にはやてが現れる。

「なのはちゃん・・・フェイトちゃん・・・」

まずはやての視界に入ったのはSなのはとSフェイトだった。

「何何？何何これ？」

はやては自分の身に何が起きているのか分からなかった。

「君は病気なんだよ。闇の書の呪いって病気」

「もう治らないんだ」

「闇の書が完成しても助からない」

「君が救われることは・・・無いんだ」

「そんなええねん。ヴィータを離して。ザフィーラになにしたん？」



「この子たちね、もう壊れてるの。私たちがこつする前から」

「とつくの昔に壊された闇の書の機能をまだ使えろと思ひこんで。無駄な努力を続けてた」

「無駄つてなんや!? シグナムは? シャマルは?」

Sフェイトの首を動かす方向を見るとそこにはシグナムとシャマルのコートだけがあった。

「ハア・・・ハア!!!??」

「壊れた機械は役に立たないよね」

「だから壊しちゃお」

「駄目!! 止めて!!!!!!!!!」

はやては力一杯に叫ぶ。

「止めて欲しかったら」

「力づくでどうぞ」

「何で! 何でやねん!! なんてこんな!!」

泣き叫ぶはやてにSなのはとSフェイトは追い打ちの様な言葉をかける。

「ねえ、はやてちゃん」



「どろしたのー!!」

「数分前にそっちで仮面の奴らの魔力が検知された!!」

「場所は!?!」

モニターに地図が表示され、赤くマークがつく。

「飛ばして3分ね……」

「マルコあなたはマスターを見てて」

「俺は行かなくていいのかい?」

「あなたの攻撃がプログラムに通じると思っ?」

「微妙だな。俺の技は物理攻撃が主体だからな……」

「だからあなたはマスターを早く起こす努力をしなさい」

モニターから飛鳥がしゃべる。

「レイリル!! 時間的にこっちからは増援がおそらくだせない」

「分かってる。せめて璃玖リクは出れないの」

「無理そうだ。時間的に足りないし、あいつは今回の件には全く興味を持ってない」

「どこが英雄なのよ」

「とりあえずこっちは情報を整理しておく」

「私もすぐに出るわ」

レイリルはバリアジャケットを纏、階段を駆け上がっていった。

「ガキ。後はおまえが起きるだけだ。雨宮楓……」

シヨックの性ではやては声を出せずにいた。

はやての下に魔法陣と前に闇の書が現れた。

バリーーン！！

クリスタルゲージとバインドが剣によって切り刻まれた。

「レイリルさん」

「ごめん。なのはちゃん、フェイトちゃん遅れた」

「そんなことよりはやてが」



「我は闇の書。我が力の全ては……」

官制人格の手から紫と黒の入り混じった球体が現れ、その大きさを増幅させていく。

「主の願いをそのままに」

球体はすでに官制人格の大きさの数倍以上になっていた。

アースラは警報がなり続けている。

「対象区域の通信妨害」

「映像来ます」

「クロノは？」

「すでに現地に飛んでいます」

リンディはそれを見て呆然としていた。

「よし結界は張れた。デュランダルの準備は？」

仮面の男がもう一人の男に問いかける。

「できている」

もう一人の仮面の男は手に中央部分に宝石が施されたカードを出した。

「デアボリック・エミッション」

官制人格の手の上にあった闇の球体が突如収縮してゆく。

「ちょっと冗談!!」

「空間攻撃!？」

「闇に染まれ」

闇が雷を放ちながら、ドンドンと巨大化してゆく。

なのはがとっさに障壁を張る。

闇はドンドンと広がりあたりを包み込んだ。

「あれであの2人は持つのか？」

「暴走が始まる瞬間まで持つて欲しいな」

その時仮面の男たちの周りに光の粒子が散らばる。

2人が辺りを見ると、バインドで拘束された。

「ウツ!!」

「アウ!!」

「ストラグルバインド相手を拘束しつつ、強化魔法も無効かする。あまり使いどころのない魔法だけど、こつゆつ時には役に立つ」

クロノが杖を杖を回す。

「変身魔法も強制的に解除するからね」

「ウアアアア!!」

2人の周りの光が消えて見覚えのある2人の姿が現れる。

そして、2人の仮面が剥がれ落ちた。



「クロノこの……」

ロツテがクロノを睨みつける。

「こんな魔法……」

「教えて無かったか？」

アリアの言葉を遮る。

「一人でも精進しろと言ったのは君たちだろう。アリア、ロツテ」

官制人格は空を見る。

「逃げたか……」

なのはたちは周りのビルの合間に逃げていた。

「なのはごめん」

「なのはちゃん大丈夫」

レイリルが手から光りを放つと手の傷が多少良くなる。

「大丈夫です。ありがとうございます」

「あの子広域攻撃型だね。避けるのは難しいかな」

フェイトはそう判断し、ソニック・フォームから通常状態に戻る。

「私も広域攻撃型は苦手なのよね・・・あつ、なのはちゃん」

レイリルはなのはにレイジングハートを手渡す。

「ありがとうございます」

なのはは官制人格のいるビルを眺めた。

「はやてちゃん・・・」

### 43話 闇の書起動（後書き）

あとがきコーナはお休みです。

#### ・次回予告

ユーノ、アルフと合流するのはたち。

クロノはグレアムと対談する。

しかし、一般人を守るために

次回「終わった計画」

#### ・次章予告

「お話しようか・・・」

「遠慮させていただく・・・」

マテリアル編もうじき開始。

## 44話 終わった計画

No side

「なのは！」

「フェイト！」

ユーノとアルフが救援に訪れる。

「ユーノくん、アルフさん」

「主よあなたの願いを叶えます。愛しき守護者たちを傷つけた物たちを今破壊します。」

官制人格が暗い空間を発生させ、それは風船、いや爆発の様に広がってゆく。

衝撃がなのはたちを襲った。

「結界ね」

レイリルが冷静にそうゆうとフェイトが頷く。

「私たちが狙ってるんだ」

「クロノが今解決方法を探している。援護も向かってるんだけど時間……そうだレイリル楓は？」

ユーノが思い出したかのように聞く。

「マスターはまだ意識が戻ってないの……」

「そんな……」

なのはの顔が暗くなる。

「私たちが何とかしないと」

フェイトの声に皆が頷いた。

「スレイプニール羽ばたいて」

官制人格は黒い羽スレイプニールを使い空へ羽ばたいた。

クロノは蹴りをつけるために時空管理局本局の一室に来ていた。

「リーゼたちの行動はあなたの指示ですね。グラム提督」

「違うクロノ」

「私たちの独断だ。父様には関係ない」

「ロツテ、アリアいいんだ」

ロツテとアリアの否定をグラムが止めた。

「クロノはあらかたのことを掴んでいる。違うかい？」

クロノは少し躊躇ったが話始める。

「11年前の闇の書事件以降、提督は独自に闇の書の転生場所を探していましたね。そして発見した」

クロノはモニターを出す。

「闇の書の在処と現在の主、八神はやてを」

そしてグラムに視線を戻す。

「しかし、完成前の闇の書と主を抑えてもあまり意味がない。主を捕らえようと闇の書を破壊しようとするすぐに転生してしまうから。」

だから監視をしながら闇の書の完成を待った。

見つけたんですね闇の書の永久封印方法を」

グレアムが頷く。

「両親に死なれ、体を悪くしていたあの子を見て心は痛んだが運命だと思つた。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる」

「あの子の父の友人を騙つて生活の援助をしていたのも提督ですね」

「永遠の眠りにつく前くらい、せめて幸せにさせてやりたかった・・・偽善だな」

「封印の方法は闇の書を主ごと凍結させて、次元の狭間が氷結世界に閉じこめる。そんなところですね」

「そう。それならば闇の書の転生機能は働かない」

「これまでの闇の書の主だつてアルカンシエルで蒸発させたりしてんだ。それと何にもかわらない」

「クロノ今からでも遅くない。あたしたちを解放して。凍結をかけられるのは暴走が始める数分だけなんだ」

ロツテとアリアの言葉にクロノは反論する。

「その時点ではまだ、闇の書の主は永久凍結されるような犯罪者じゃない・・・違法だ」

「そのせいで！！そんな決まりのせいで悲劇が繰り返えされてるん

だ！！クライドくんだったって……あんたの父さんだったってそれで！！」

「ロツテ」

グレアムがロツテを落ち着かせる。

「法意外にも提督のプランには問題があります。まず、凍結の解除はそう難しくは無いはずです。どこへ隠そうと、どんなに守ろうと、いつかは誰かが手にして使おうとする。怒りや悲しみ、欲望や切望、そんな願いが導いてしまう。封じられた力へと……」

クロノは一度言葉を切った。

「それにPT事件で僕の友達がこう言いました。『全てを守れるなんて思っていない。俺には一人を見捨てることはできない。だからどんな暗闇だろうと手を伸ばし続ける』ってね。僕はその言葉を今実行したいと思います。今度は彼らだけでなく僕も一緒に手を伸ばします」

そしてクロノが部屋を出ようとする。

「クロノ」

「はい」

「アリア、デュランダルを彼に」

「父様……」

「そんな……」



「私たちにもうチャンスはないよ。持っていたって役に立たん」

アリアがカード型のデバイスを出す。

「どう使つかは君に任せる」

クロノはデュランダルを見つめる。

「氷結の杖デュランダルだ」

鳴海での戦いはさらに勢いを増していた。

フェイトとレイリルが攻撃をして注意を逸らし、ユーノとアルフがバインドで腕と足を封じた。

「碎け」

しかし、その一言でバインドは碎け散る。

フェイトはプラズマランサーを、なのははディバインバスターを対角線場から撃つ。

「盾」

官制人格の両サイドに障壁が現れ攻撃を防ぐ。

「知ってる？人間の手ってね二つしか無いのよ？」

後ろからレイリルが斬りかかる。

「そうだな」

レイリルの剣も障壁に防がれる。

「刃もて、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー」

2人のいた場所が爆発する。

「なのはちゃん！！フェイトちゃん！！」

煙の中から2人が出てくる。

「咎人たちよ。滅びの光よ」

官制人格が右手を前に出すと魔法陣が現れ、魔力が集まってゆく。

「まさか」

「あれは」

アルフとユーノが気づく。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「スターライトブレイカー」

官制人格が自分の技を出そうとすることになのはは呆然とする。

「アルフ、ユーノを」

フェイトがアルフに合図を出すと2人は離れた。

「貫け、閃光」

アルフがユーノを抱えて飛びながら、その横をレイリルが飛ぶ。

「なのはの魔法を使うなんて」

「なのはは一度収集されている、その時にコピーされたんだ」

「やっかいな話ね」

別の場所ではフェイトがなのはを抱えながら早く飛ぶ。

「フェイトちゃん！こんなに離れなくても！」

「至近で喰らったら、防御の上からでも落とされる。回避距離を取らなきゃ」

経験者は騙る。

その時バルディッシュが告げた。

『左方向300ヤード、一般市民がいます』

一般市民がいると……

町ですずかはただ呆然としているとアリサが走ってきた。

「やっぱり誰もいないよ。急に人がいなくなっちゃった。辺りは暗くなるし、何か光ってるし、一体なにが起きてるの!？」

「う、うん」

アリサがすずかの手を握る。

「とりあえず逃げよう。なるべく遠くへ」

「うん」

2人は走り出す。

「なのはこの辺で」

フェイトがなのはを降ろす。

なのはは靴で地面を滑り、停止する。

『20メートル』

バルデツシユの言葉を聞きなのはは道路で、フェイトはその上の信号から民間人を捜す。

そして、なのははビルの路地から出てくる2人組を見つけた。

「すみません。危ないですから、そこでじっとしてください」

「えっ？」

「今の声って？」

煙が晴れて双方の姿がよく見えようになる。

「なのは？」

「フェイトちゃん？」

「あっ!？」

なのはは声を出せなかった。

そして、官制人格は鉄槌を下した。

「スターライトブレイカー」

放たれたスターライトブレイカーは地面に当たり魔力の衝撃が周りにドンドンと広がってゆく。

「フェイトちゃん。アリサちゃんたちを」

「うん。2人ともそこでじっとして」

フェイト2人にはバリアを張り、障壁を張る。

「レイジングハート!!」

なのはも障壁を張る。

「（なのは、なのは大丈夫!?!）」

「（フェイト!フェイト!）」

攻撃範囲から離れていたなのはとフェイトが2人の安否を確かめる。

「（ぎりぎりなんだけど）」

「（結界内にアリサとすすかが取り残されてるんだ）」

「（なんだって!?!）」

ユーノがアースラに連絡を取る。

「エイミーさん」

「余波の収まり次第、すぐ回収する。なんとか堪えて」

だが余波は消えず……………

「なのは!!」

なのはの障壁は……………

「ごめん……………」

砕け散った。

#### 44話 終わった計画（後書き）

「マルコの診察室」

ジェイル「いつも思うが君のコーヒーは絶品だね」

マルコ「ここはスバじゃねえんだけどな」

チンク「失礼する」

ジェイル「チンクじゃないか。どうしたんだ」

チンク「げっドクター」

ジェイル「その明らかに嫌そうな顔はなんだい？」

マルコ「止めとけジェイル本気で嫌なんだ」

ジェイル「君も失礼だな」

マルコ「で、相談は？身長のことなら聞くなよ」

チンク「違う！最近誰かの視線を感じるのだ」

マルコ「そりゃあストーカーだろ」

チンク「どうにかしてくれないか？」

マルコ「ならこれを使って人のいないとこにいけ」



マルコは紐で括られた20本ほどのナイフを渡す。

マルコ「紐は後で取れよ」

チンク「分かった」

チンク「これを外すのだな」

チンクが紐を外した瞬間ナイフが飛んでゆく。

「ぎゃあああああああああ」

「にゃあああああああああ」

チンク「何なのだ！？いつたい！？」

マルコ「だからストーカーは止めるって言ったんだ飛鳥……」

マルコは陰から見ていた。

マルコ（しかし、もう一人の声は誰だったんだ？）

なのは「……ナイフが……飛んできたの……」

・次回予告

楓と彼女は向き合う

本来ならもう出来ない

2人は死んだのだから

次回「蘇りし心」

・次章予告

楓「俺ってこんなにめんどくさい奴だったんだな」

マテリアル編もうすぐだよ

45話 蘇りし心(前書き)

ついに主人公復帰です。

## 45話 蘇りし心

No side

「ここは・・・どこだ・・・」

雨宮楓は海の中に浮かんでいた。

いや、海なのだろうか？

光を放つ星のかけらが広がり深い深海を照らしてる。

「・・・海？違う。息が出来てる」

その時、楓の頭に映像が流れ込む。

「そつだ俺はロツテに貫かれて・・・死んだのか？」

「死んでない」

楓は声のするほうを見るが誰もいずただただ同じ景色が続いている。

「君は死んでなんかいないよ」

確かに声はするが何もいない。

「誰だあんた・・・？」

「私はあなたの中の住人」

「言ってることが分からない」

「そのままの意味よ」

楓はアンサー・トーカーを使ってみるが答えがでない。

「ここは君の精神世界だよ。精神にリンク出来るわけじゃないじゃないか」

「ここが精神世界？」

「そう。そこから中に散らばってるが君の記憶や感情」

「これが」

楓がそれを触った瞬間記憶が頭の中を痛みとともに駆けめぐる。

「ハッ・・・」

「無闇に触らないほうがいいとは思っけどな」

「先に言え・・・」

「勝手に触ったんじゃないか。僕は悪くないよ」

「そんな過負荷みたいなこと言いやがって」

「まあ、そうだね」

「否定しねえの」

「フフハハハハハ！」

女の声が笑いだす。

「何だよ急に……」

「ごめん、ごめん。君は変わらないね」

楓の顔つきが少し変わる。

「お前、俺の知り合いか……」

「そうだね……」

(こいつは俺を知っている。だけどこの声が思い出せない。関係ある可能性の2つとも全く違う)

「君の考えてること言おうか？僕が幼なじみ4人が、もしくは生き残りの7人だと思ってるんでしょ」

(こいつ……)

「残念ながら外れよ。確かに僕は君を知ってるし覚えてる。でも、君は覚えてない」

「覚えてない？」

「そう。でも、その話は今は必要無い」

「必要無いってなんだよ！！」

「言葉の通りよ。本来君が来るのは早すぎる。君は後2年の予定だったの」

「お前が何を言ってるか分からねえよ！！」

「分かる必要はない。順応しなさい」

「ったく。分かったよ」

楓はあぐらをかき無理矢理納得する。

「あら、意外。もつと渋ると思ったのに」

「お前の言葉から、お前は俺がおよそ2年先にここにくると考えていた。つまりお前は俺が来ることを知っていた。しかし、今は話す気がない。なら次来た時に聞いた方がいいだろう」

「楓君って意外と頭が切れるんだ・・・」

「・・・」

楓は座り込み8の字を書く始める。

「冗談よ!?!」

「で、俺はどうすれば戻れるんだ」

「今のままだと帰れないわ」

「何だつて?ならどうするんだよ!?!」

「言ったでしょ。今のままならつて」

「どつゆつことだ?」

「あなたは死んだの」

「はっ?」

楓はきよとんとする。

「あなたは死んだ」

「そんな訳無い。それなら何で俺はバカ神の所にいないんだ?」

「死んだの意味が違つわ」



「意味？」

「あなたの心が死んだの」

「心？」

「人には肉体の死と心の死がある。あなたの心は死んだの」

「心の死・・・」

「安心して。肉体の死じゃ神に蘇生させてもらうか、能力を使うし  
かないけど、心の死は生きる希望を強く思えば生き返ることができ  
る」

「なら」

楓の体がオレンジに光る。

「あれ？何も変化ないんだけど」

「あなたなんて考えた？」

「『仲間を守る』って」

「駄目ね」

「何で？」

「あんたの心は死んだの。その『仲間を守る』ってこころはね」

「ならどうすれば」

「新しい思いよ。強い思いは奇跡を起こす」

「奇跡……」

「奇跡を起こしなさい」

楓の体を再びオレンジの光が包み、金色に変わる。

「これは……」

「まあできたら当然ね。あなたたち、楓と一葉さんは生まれたことが奇跡だからね」

「俺と姉ちゃん」

「話はこちらまでよ。行きなさい。あなたの言葉を貫きなさい」

「結局なにも分からなかったな。だけど」

「……？」

「ありがとな」

楓の体を包む黄金の光が強烈な閃光を放ち楓の姿が消えた。

「さてと。僕も私から戻りますか。あなたとまた会うまでは……」

声の少女は意識の海に消えていった。

S i d e   なのは

私は無事だった。

分からない、私の障壁は砕け去った。

なのになんでなの？

フェイトちゃんとアリサちゃん、すずかちゃんが私の上を口を開いて見つめている。

「大丈夫か？」

この感じ。

「何ポカンとしてるんだよ。ってか、なのはは見てすらないじゃねえか」

この声は。

「何で？」

「何でって？お約束だろ」

この優しい顔は。

「正義の味方は遅れてやってくるってな」

「楓くん！！」

## 45話 蘇りし心（後書き）

（楓の拷問室）

楓「帰ってきた！！！！！」

土屋「よかったな」

楓「ここに立ててるのが幸せなんだな」

土屋「だけとお前の新しい希望ってなんなんだ？」

楓「秘密だ」

土屋「ならいいけど」

土屋「実は43話で気づいたことはありませんか？」

楓「オリキャラだろ」

土屋「その通り、名前だけです。紅 幽鹿様の璃玖くんが登場しております」

楓「これからドンドン絡んで行くからな」

土屋「今章と次章のマテリアル編での出番はありませんが、その次の章に触りで登場します」

土屋・楓「皆さん募集お願いします」

・次回予告

遂に楓参戦

楓VSリインフォースとの戦いが幕を開ける

はずなのだが……

次回「楓復活!!なのに退場ですか!?!」

・次章予告

楓「ハハハハ消えろ!!消えろ!!ハハハ!!」

なのは「楓くんどうしたの?」

楓「

」

次章マテリアル編そろそろ開始

46話 楓復活!!なのに退場ですか!?(前書き)

戦闘描写は苦手です。

4 6 話 楓復活!!なのに退場ですか!?

ギリギリで俺はみんなを守れた。

「楓くん!?!」

「うるさい悪魔頭に響く」

「悪魔じゃないの!?!」

「だってお前ヴィータに悪魔でいって言ったろ?」

「そうだけど……って聞いてたの!?!」

なのはの乗りツッコミ久しぶりだわ。

「さすが、アリサじつとしてる。助けがくるからさ」

「なのはちゃん、フェイトちゃんに……楓くん?」

「ちよつと……」

アリサが何か言いかけた時2人の足下が光り、2人は転移した。

「ばれたな……」

「うん」



「そっだね・・・」

秘密は暴かれるもの、ばれるものだ。隠しきれものなんて滅多にない。

「なのは大丈夫だ。あいつらは俺たちの親友なんだぜ」

「うん。大丈夫」

真っ直ぐな目をしたなのはが答える。

「（ユーノくんごめん2人を守ってあげてくれるかな）」

「（アルフもお願い）」

2人は念話で頼む。

「（でも、フエイト）」

「行こうアルフ」

「でもさ」

「気がかりあると3人が安心して戦えないから」

「・・・うん」

「行くわよ」

「（お前は戻ってこい）」

レイリルは渋々飛んだ。

するとエイミイから連絡がくる。

「なのはちゃんとフェイトちゃんにクロノくんから連絡。闇の書の主に、はやてに投降と停止を呼びかけてって」

「はい」

なのはが答え投降を呼びかけ始める。

「はやてちゃん、闇の書さん聞いてください。ヴィータちゃんたちを傷付けたのは私たちじゃないんです」

「シグナムたちは・・・」

「我が主はこの世界が・・・自分の愛するものたちを奪ったこの世界が悪い夢であればいいと願った。我はただそれを叶える者。主には穏やかな夢の内でも永久の眠りを。そして愛する騎士を奪ったものには永久の闇を」

「ふざけるな！！」

俺は叫んだ。

「悪い夢？そんな言葉で逃げてるんじゃないやねえよ！！主が望む？はやてはそんなことでッ対に望まない。お前の中で眠ってる眠り姫に言え。お前ホントにそう思ってるのならお前をぶん殴ってやる。だからミルクでも飲んで待ってけ。絶対に助けてやる」

大地から太い触手のような者が現れる。

「アウアア」

「なのは！？フェイト」

触手は俺の体をも縛る。

「我は主の願いを叶えるだけだ」

「ふざけるなっつてんだろ。お前の意志はどうなんだよ」

「我の意志は主の意志」

「そんなこと聞いてねえ！！お前が心でどう感じてるかって聞いてるんだよ！！」

「我は魔道書ただの道具だ」

「道具なんかじゃねえ。なら何で泣いてるんだ」

官制人格は涙を流していた。

「心があるから涙は出るんだ。悲しみがあるから涙が出るんだ」

その時俺の触手をレイリルが切り裂いた。

「私たちは確かに道具だったかもしれない」

「だけど！！私たちは生きてる。それは心があるってことよ」

「心があるから一緒に戦えるんだ」

「ユニゾン・イン」

レイリルが光の球体になり俺と同化する。

「・・・楓くんが」

「・・・銀髪」

レイリルとユニゾンしイメチェンを果たした俺はアクイラを一振りし触手を切り裂いた。

フェイトは美味く着地し、なのはは危なげに着地した。

「にゃ！？」

突然魔力の柱がいくつも立ち上がり、なのはが尻餅をついた。

「早いな。もう崩壊が始まったか。私ももうじき意識を失う。そう  
なればすぐに暴走が始まる。そうなれば主の望みを叶えられない」

リインフォースが右手を前に出すと俺たちの周りに血の色の短剣が  
複数現れる。

「沈め」

俺は向かってきた短剣を切りながら凍らせ、フェイトはソニックフ

オームに戻りなのはを抱え空へ飛んだ」

「このだっ子。ゆうことを聞け」

「お前も我が内に眠るといい」

「させねえ!!」

俺はフェイトより先に飛び斬撃を撃つ。

「邪魔をするな・・・」

俺はブラッディダガーを肩に喰らう。

「楓!!」

フェイトが攻撃態勢を解き俺を受け止める。

「フェイト。感情だけで突っ込むな」

「う、うん」

俺は肩の埃を払う。

「フェイト俺の後ろを頼む。なのは・・・そうだな適当に撃つと  
け」

「うん。私が楓を守る」

「楓くん。遠回しに私のこといらないうって行ってない?」

「……そんなことないに決まってるじゃないか」

「今の間はなに」

「なのは今は集中しよ」

フェイトの言葉でしようがなく諦めるなのは。

「レイリル、アイスバトン」

「（了解マスター）」

リインフォースの周りに4つの氷のクリスタルが四方に配置される。

そして俺の姿が消える。

「どこに行った」

リインフォースが周りの氷を気にせず俺の姿を探す。

「後ろだ」

「何？ウツ・・・」

「さすがに通らないか」

俺が後ろから斬りかかったがプロテクションで防ぐ。

「どつして後ろから・・・」

「横からも出来るぜ」

「何!？」

リインフォースは右手の方向に構える。

「高速移動じゃないな」

「ご名答。この技はアイスバトン。氷のクリスタルを展開し、その氷と同化し、氷のネットワークを張り巡らせる。限界個数は40。半径は30メートル」

「だが欠点があるな」

リインフォースがブラッディダガーでクリスタルを全部砕く。

「砕ければ終わりだ」

「そうだな。だが……」

俺は指で上を指す。

「あれは魔法陣」

空には何層にも張り巡らされた魔法陣がありその一番上の魔法陣の上にフェイトがいる。

「フェイトは近距離攻撃って思いこみがあるだろ？あの魔法陣は魔力を反発させる。リニアモーターカーと同じ原理だ」

フェイトが打ち込む体勢に入る。

「フォトンランサーでも鋭く強い一撃になる」

「フォトンランサー!!」

「この程度」

リインフォースは頭上に障壁を張る。

ビシッ!!

フェイトのフォトンランサーは障壁にひびが入って消えた。

「チャンス!!」

俺はカートリッジを2個ロードした。

「爆炎一閃!!」

ひびの入った障壁を目がけ刀を振り下ろした。

「まさか・・・」

「フェイトのフォトンランサーで障壁にダメージを与え、俺の一撃でブツ壊す!!」



「そうか・・・」

リインフォースは目を閉じる。

「だが障壁がもう一枚あるとは思わなかったか？」

「な!？」

現れたもう一枚の障壁が俺の攻撃を防いだ。

「愚か者に永久の眠りを・・・」

「えっ？」

俺の体が急に透け始める。

「お前は普通の人間じゃないのだな」

「まさか」

俺は転生者。こっちで生まれた人間じゃないから体の構成が違う!？

「レイリル」

「マスター!!!？」

俺はレイリルを体から出した。

「レイリル。また留守にする」

「マスター」

「楓!!」

「楓くん!!」

俺の姿は消失した。

46話 楓復活!!なのに退場ですか!?(後書き)

〔楓の拷問室〕

楓「戦闘描写だめだめだな」

土屋「気にしてるから心にグサリとくる」

・次回予告

見慣れた町

俺が育った町

そこに俺はいた

それは俺の求めていた幸せ

次回「俺の町」

## 47話 俺の町

Side すずか

「あれ？学校」

光が消えて、周りを見るとアリサちゃんのいう通り学校の校門にいました。

「ほんとだ」

でも、なのはちゃんとフェイトちゃん、それに楓くんのあの姿は・・・

Side なのは

楓くんが消えちゃったの・・・

「楓をどこにやった!!」

フェイトちゃんが闇の書さんに叫びました。

「エイミーさん!!」

「闇の書の内部空間に楓くんの熱・魔力反応健在。闇の書の内部空間に閉じこめられてり。現在救出方法健闘中」

「我が主もあの子も、目覚めることのない眠りの内に終わり無き夢

を見る。生と死の狭間の夢。それは永遠だ」

「永遠なんてないよ……みんな変わってく、変わっていかなきやいけないんだ。私もあなたも」

「そうだ。私もなのはや楓に変えてもらった。だから変わるんだ  
!!!」

「いくよ、フエイトちゃん!!」

「うん。なのは!!!」

私たちは闇の書さんに向かっていった。

S i d e  
楓

ここは……どこだ……

あれ?これこの前もやってなかったっけ……

「朝だよ?朝だよ?朝だよ?」

「ん?朝……?」

俺は頭上にある目覚ましに手を置く。

「あれ……ここは俺の家」

そこは俺の部屋だった？

いや、俺の実家の部屋だ。

「俺なにして……あれ？マジで何してたんだっけ」

俺は階段を降りて1階に降りて、リビングのドアを開けた。

「楓おはよう」

「おはよう楓。朝ご飯できてるわよ」

「父さん、母さん」

そこにはテーブルで新聞の4コマ漫画を読んでいる父さんとキッチンで弁当を作っている母さんがいた。

「どうしたの楓？そんなケサランパサランが大発生しているような顔して」

「母さん、分かりにくいぞ」

父さんがツッコミながらコーヒーを飲む。

ちなみにコーヒーの大部分が砂糖6割・ミルク2割・コーヒー2割になっているのは血なのだろう。

「父さん本物？」

「本物？楓お前、頭でも打ったか？」

「夢だったのか……」

「お母さんもそんな夢見ますよ。お父さんや楓がゾンビになって……」

「バイオハザード!?!」

でた親子ツツコミ。

その時ピンポン!!とチャイムが鳴る。

「すみません楓くんいる？」

と我が家に無断侵入してきたのは俺の親友その3、わたりすぐる渡英だった。

「お前は何で無断侵入してんだ」

「チャイムは鳴らしたろ？許可取るのめんどくさいしな」

さすが俺以上のめんどくさがり屋で昼寝の師匠だ。

「おばさん俺ライスで」

「なんで家で飯食おうとしてるんだ!!」

「いいのよ楓」

母さんが茶碗を2つ持ってきてご飯をよそった。

食事が終わり俺たちは家を出る。

「しかし、めんどくさいな学校……」

英がスケボーに乗りながら眠そうにいう。

「学園1の天才だらいえるんだろ」

いつも寝てるのにテストがオール100点なんてありえないよ。

「すぐるって夢見る？」

「夢？ああ……」

俺は気になって英に聞いてみた。

「お前や天馬がゾンビになって……」

「バイオハザード!？」

2人も同じ夢を見てるなんて……

「お前はどんな夢見たんだよ」

「俺がなのはの世界に行く夢」



「お前なのは好きだからな」

「笑っちゃうよな」

「ホント笑えるな・・・お前の顔」

「そつち!?!」

「髪切れ髪」

俺の長い左の髪を挿す。

「俺のポリシーだ」

あれ?どうして伸ばしたんだっけ?

「オツスお2人さんん1はj h k j h d き d . / あ」

「黙れ・・・」

「変態が移る・・・」

「酷くない!?!」

俺は後ろから肩に手をかけてきたこいつを俺が腹を殴り、英がサマ  
ーソルトキックを極めた。

でも、さすが英。人間離れしてる。

「誰が人間離れしてるだ」

こいつ読心術使えるんだけ……

「ねえ僕を無視してない」

ちなみにこいつは幼なじみその5あきあめそとこ秋雨雪。女みtainな名前だがキモイくらいの男だ。

「楓、天馬からメールきたから急ぐぞ」

「うん」

俺たちは学校へ走った。

「僕を置いていかないで！！後、なんで僕にメールこないの！？」

無視だ。

「来たな。楓、英」

「おはよう天馬」

「何始めたんだ？」

「ねえ？なんでみんな俺を無視するの？」

「キモイから」

「グサ！！グサってきたよ！！」

雪に止めを挿したのは天地あまちまなみ愛深である。

そして、教壇で立っているのが俺たちのリーダーでクラス委員長で愛深の兄の天地あまち天馬てんまだ。

「天馬、何するの？」

「よく聞いてくれた楓」

俺たちは全員席につく。

「みんな聞いてくれ俺たちは今からBクラスに対して戦争をおこなう！！」

「「待て！！」」

俺と英が同時に突っ込む。

「試召戦争だよな？それ試召戦争だよな？」

僕は確かめる。

「なあ愛深？なんでこうなった？」

英が愛深に聞く。

「喧嘩売られたのよ。B組のクラス委員長に」

「仲悪いねホント」

俺は苦笑いをする。

「武器を取れ!!」

「男ども行くぞ!!」

女子が失笑してるぞ天馬・雪。

side はやて

「(眠い)」

私がぼんやり目を開けると銀髪の女の人がいる。

「そのままお眠りを、我が主。あなたの望みは全て私が叶えます。  
目を閉じて心静かに夢を見てください」

結局戦争は雪が単身Bクラスに単身で乗り込み、一方的に敗北した。  
せめて英を連れていけば良かったのに。

次の授業は・・・数学。

唐義<sup>かぎ</sup>先生か。

「愛深。次の授業唐義先生だよな？」

「違う」

「違ってます？」

「唐義先生休み」

「休み？まああの人、体弱いからな」

「代理で砂糖先生がくる」

「げっ。あの堅物メガネかよ」

あの先生うるさいんだよな・・・

ヤバイ・・・教科書忘れた。

「どうしたの？」

「教科書忘れた」

「貸さないよ？」

「いや、分かってるから」

俺の幼なじみはみんな同じクラスだから教科書が借りれない。

「真島まじまか板東ばんとうに借りにいくか・・・」

他のクラスの友達その2人しかいないし。

「Eクラスに行ってくるわ」

「うん」

俺はEクラスに走った。

「すみません真島か板東いますか？」

「休みですよ」

「ハッ？2人とも？」

真島も板東も休むような奴じゃないんだけどな・・・

諦めるか・・・

Side なのは

闇の書さんのパンチを障壁で防ぐけど、壊されてしまう。

すると右手が闇でばやけてその一撃で私は海に落ちる。

「なのは!？」

すぐに体勢を直して海から上がった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「大丈夫なのは」

「うん。なんとか・・・」

海から脱出して息を整える。

「（リンディさん。エイミーさん戦闘位置を海の上に移しました。市街地の火災をよろしくお願いします）」

「大丈夫よ。今、災害担当の局員が向かっているわ」

「（それから闇の書さんはだっこのですが、何とか話は通じそうです。もう少しやらせてください）」

「行くよ。レイジングハート」

「私たちも行くよバルディッシュ」

私はカートリッジを詰める。

「マガジンが後3本。カートリッジ後18発。フェイトちゃんは？」

「私も同じくらいしか残ってない。15発・・・」

「スターライトブレイカー撃てるかな・・・」

『手段はあります。エクセリオンです』

「駄目だよ！あれは本体の補強をするまで使っちゃ駄目だって。私  
がコントロールしたらレイジングハート壊れちゃうんだよ！？」

『問題ありません。私はマスターを信じてますから』

駄目だよ・・・

Side 楓

「楓帰るぞ」

天馬が俺を呼び、その後ろには愛深がいる。

「う、うん」

俺たちは3人で歩く。



英は午後から消えて、雪はさっき女の子についていった。

「天馬のテンション低くない？」

さっきから天馬のテンションがかなり低い。

「面白く無かったからだと思っ」

「面白さ絶対主義者だからな」

「うん」

俺は途中で2人で別れた。

そして、走った。

No side

「（私は何を望んでたんやっけ？）」

「夢を見ること。悲しい現実は全て夢になる。安らかな眠りを」

「（そうなんか？）」

リインフォースは涙を流しながらなのはとフェイトを見る。

「私のホントの望みは……」

「お前たちも、もう眠れ」

「いつかは眠るよ」

「だけど、それは今じゃない」

「今ははやてちゃんと楓くんを助ける。それからあなたも」

なのはとフェイトがカートリッジをロードする。

「レイジングハート エクセリオンモード ドライブ!!」

「バルディッシュ ザンバー ドライブ」

レイジングハートは鋭くなり、バルディッシュが巨大な魔力刀になる。

「繰り返される悲しみも、悪い夢も、きつと終わらせられる」

リインフォースが構えて、なのはとフェイトも構える。

「私が欲しかった幸せ・・・」

「健康な体、愛する者たちとのずっと続いていく暮らし。眠ってください。そうすれば夢の中ではきつと、そんな世界にいられます」

はやてが首を振る。

「せやけど、それはただの夢や」

なのはがリインフォースに弾かれる。

「なのは!!ザンバー」

フェイトがリインフォースに向かうが弾かれた。

「一つ覚えの攻撃通ると思ったか」

「倒す。レイジングハートが力をくれる。命と心をかけて答えてくれる。泣いてる子を救ってあげてって」

「だから私たちは答えるんだ!!」

なのはが砲撃状態に入り、フェイトもバルディッシュを振りかざす。

「アクセルチャージャー起動 ストラクフレーム エクセリオンバスター A・C・S ドライブ」

「ジェットザンバー!!」

2人の攻撃はリインフォースの障壁とぶつかる。

「届いて!!」

「届け!!」

「ブレイク」

フェイト2人の攻撃で障壁を貫く。

「なのは!?!」

「まさか!?!」

「シュート!?!」

巨大な爆発が起きた。

レイジングハートがカートリッジを射出した。

「(ほぼ0距離。バリアを抜いてのエクセリオンバスター直撃。これだめなら……)」

「なのは上」

フェイトの声で上を見る。

そこにはピンピンとしたリインフォースが立っていた。

「もう少し頑張らないとだね」

「後少しだよ」

「あたし、こんな望んでない。あなたも同じはずや違うか？」

「私の心は騎士たちの感情と深くリンクしています。だから騎士たちと同じように私もあなたを愛おしく思います。だからこそあなたを殺してしまう自分自身が許せない。自分ではどうにもならない力の暴走。あなたを浸食することも、暴走してあなたをくらいつくしてしまうことも止められない」

「覚醒の時に今までのこと少しは分かったんよ。望むように生きられない悲しさ、私にも少しは分かる！シグナムたちと同じやずっと悲しい思い、寂しい思いしてきた。せやけど、忘れたらあかん」

はやてがリインフォースの頬を手で触れる。

「あなたのマスターは今は私や。マスターの言うことはちゃんと聞かなあかん」

2人の下に白いベルカ式の魔法陣が現れた。

Side 楓

「楓は俺たちを集めて何をするきなんだ」

天馬が愚痴る。

俺は家のリビングに両親と幼なじみを集めた。

「やあ！みなさん、お集まりいただきありがとうございます」

「何？その格好」

「楓に似合ってるわよ」

愛深はきょとん？としているが母さんはお世辞を言ってくれる。

「探偵か？」

英がズバリと当てた。

今の俺は着物で羽織に縞の袴を穿いて、形の崩れた帽子を被っており、足袋に下駄履きとゆう格好だ。

「じゃあ、始めましょうか」

「謎は全て解けた」

## 47話 俺の町（後書き）

（楓の拷問室）

土屋「はい！！始まりました楓の拷問室！！」

楓「テンション無駄に高いな」

土屋「なのはForceとVividの限定版買ったらテンション上がっちゃって」

楓「抑えろ」

土屋「まあ、話作りの参考だしな」

楓「ちゃんと作ってくれよな」

・次回予告

この世界の歪みを教えよう。

そして、駒は全員そろろう。

次回「俺のいるべき世界」

・次章予告

「……………逃げるか」

マテリアル編マジもつすぐスタート。



## 48話 俺のいるべき世界

Side  
楓

「どつゆつことだ」

天馬が真剣な顔して聞いてくる。

「この世界が闇の書の内部世界ってことだ」

「そんな分けない。今日の楓おかしい」

愛深が俺の顔をおかしいと思ってる。

「まず、おかしいと思ったものが2つある」

俺は指を1本立てる。

「一つ目はみんなの不在。唐義先生や真島、板東の不在だ」

「そこのなにおかしい？」

「確かにそうだな英。だが国枝、本条、佐伯、江藤も休みだった。おかしいだろ。俺とあの事件を生き残った人間がみんな休みなんてな」

「そんなの偶然だろ」

空気ぶち壊すな雪。

「二つ目だ。さっき隣町まで行って来た。そしたらなんだ？隣町が無かった」

「それは……」

母さんの顔が暗くなる。

「いつから気づいたんだ？」

父さんが真剣な眼差しで俺に問う。

でも、緊張感が無くなるのでいちご牛乳を飲みながらは止めてください。

「実は朝からだよ」

「朝から!？」

父さんが握っていたいちご牛乳を握り潰してしまい、いちご牛乳を零してしまっ。

「あらあら真一郎さんったら」

母さんがタオルで父さん服を拭く。

「すまん取り乱した」

父さんがタオルをもらって拭き直す。

「おかしいと思ったのはこの部屋のイスの数だ」

「イスの数？」

母さんがきょとんとする。

「3つだよ」

「それがどうしたんだ？」

英が勝手にイスに座ってる。

「もしここが事故が無い世界なら、イスの数は5つ。少なくとも4つはあるはずなんだ」

父さんと母さんが複雑な顔する。

「ここにはいるべき人が足りない」

部屋に沈黙が流れる。

「妹と一葉姉さんがいないんだ」

「それは!?!」

母さんが珍しく声を上げたが父さんが母さんの肩を持ち抑える。

「楓……ここに残るきは無いのか？」

「ごめん」

「何でだよ!?!」

雪がテーブルを叩く。

「ここには悲しみも無い!?!絶望も無い!?!あるのは平和な日常と笑顔だけじゃないか!?!」

「だけど、ここに留まっていられないんだよ。俺の帰りを待ってる奴らがいるからな」

「楓らしい」

「俺いくよ」

すると英が立ち上がり父さんに何か入った風呂敷を渡す。

そして、父さんが開けると中にはアクイラが入っていた。

「アクイラ」

「いや、これは新しいお前のデバイスだ」

英が父さんの横に立つ。

「俺が魔改造したデバイスだ」

「まて！！今おそろしい単語が聞こえたぞ！？」

「冗談だ。こいつは俺の知識と闇の書のデータをハッキングしたデータから、俺が午後の授業をサボって改造した新作だ」

「闇の書をハッキングするなんて規格外だろ」

「俺は天才らしいからな。使い方は使えば分かる」

「助かる」

俺はアクイラを右腕に装着する。

『マスター！！怖かったです！殺されるかと思いました！』

「アクイラ落ち着け！！英何した！？」

「・・・何も・・・してない・・・」

「聞かないでおくよ・・・」

俺はみんなを見渡す。

「みんな久々に会えて嬉しかった」

「楓、私たちも嬉しかった」

「お母さんも楓のこんなに大きい姿を見れたから良かったわ」

「父さん、母さん」

「やりたいようにやれ」

「楓がんばって」

「天馬、愛深」

「しっかりな」

「英」

「ハーレムを築け」

「みんなありがとう」

「やっぱり無視!？」

「行くぞアキラ」

『はい、マスター』

No s i d e

はやてがリインフォースの頬に両手で触れる。

「名前をあげる。もう闇の書とか呪いの魔道書なんて、私が呼ばせへん。私は管理者や私にはそれができる」

「無理です・・・自動防御プログラムが止まりません・・・管理局の魔導師が戦っていますが・・・それも・・・」

泣きながらリインフォースが泣きながら答える。

「止まって」

なのはとフェイトが戦ってるリインフォースの動きが止まり、なのはとフェイトが動揺する。

「外の方！えっと、管理局の方！そこにいるこの子の保護者、八神はやてです」

「はやてちゃん!？」

「はやて!？」

「その声はなのはちゃんとフェイトちゃん!？ホンマに!？」

「なのはだよ。色々あって闇の書さんと戦ってるの」

「はやて無事?」

「うん。ごめん。なのはちゃん、フェイトちゃん。何とかその子止めてあげてくれる？魔道書本体からはコントロールを切り離したいんやけど、その子が走ってる与管理者権限が使える。今そっちに出てるのは自動行動の防御プログラムだけやから」

「えっ？」

「（闇の書暴走後に主が目覚めてる）なのは！フェイト！分かりやすく伝えるよ。今からいうことをなのはとフェイトがすればはやめちゃんも楓も外に出られる。どんな方法でもいい。目の前の子を魔力ダメージでブツ飛ばして。全力全開！手加減なしで」

「さっすがユーノくん！分かりやすい」

「ホントに！！」

フェイトがザンバーで防御しようとしているリインフォースのアームを切り裂く。

「なのは今だ！！」

「エクセリオンバスター バレル展開 中距離砲撃モード」

レイジングハートからピンクの翼は先に魔力が溜まり、射出されてリインフォースが張りつけられる。

「夜天の主の名において、汝の新たな名を贈る。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール『リインフォース』」



「みんな俺が死んだらよろしく」

俺は近所の公園の中心に立つ。

「アクイラ、ソードフォーム行くぞ」

『もちろん』

バリアジャケットを纏い、アクイラがソードフォームになる。

「天地貫く光となれ」

「エクセリオンバスター フォースバースト」

「打ち抜け轟雷」

「ストライククラッシュ」

俺の周りの空間が碎ける。

「ブレイクシュート!!」

「サンダースマッシュャー!!」

なのはとフェイトの攻撃が混じり合いピンクと黄色の爆発が包み、敵の姿がなかった。

「リインフォース認識。管理者権限の使用が可能となりました。

フェイトが空の上にいる人影に気づく。

「楓!!」

「楓くん!!」

「ただいま」

「ですが防御プログラムの暴走が止まりません。管理から切り離された膨大な力は時期、暴れ出します」

「まあ、なんとかしよう」

はやての前に魔道書が現れる。

「行こか。リインフォース」

「はい。我が主」

楓たちのいる場所が揺れる。

「みんな気をつけて。闇の書の反応まだ消えてないよ」

「さて、ここからが本番よ、クロノ準備はいい」

「はい。もう現場に着きます」

「アルカンシエル。使わなければいいけど」

海の上に巨大な闇の半球が現れた。

「ヒュー、実物はでかいね。でもクールに対処しないとな」

『マスターの心拍数乱れすぎですよ』

「うるさい」

「マスター」

レイリルがどこからともなく飛んでくる。

「お前いままで何処にいたんだ」

レイリルが折れた刀を見せる。

「町で戦った時に折れた」

「やっぱり試作機じゃ折れて当たり前か」

「試作機だったのか」

「機械で超魔力運用を再現するのは難しいんだぞ」

エイミーが通信をする。

「みんな下の黒い淀みが暴走の始まる場所になる。クロノくんが着くまで無闇に近付いちゃ駄目だよ」

「管理者権限発動」

「防衛プログラムの進行に割り込みをかけました。数分程度ですが暴走開始の遅延ができます」

「うん」

はやての周りに紅、白、紫、明るい緑のリンカーコアが一列で現れる。

「それだけあったら十分や。リンカーコア送還、守護騎士システム破損修復」

守護騎士たちが負けたビルの上に紅、白、紫、明るい緑のベルカ式の魔法陣が4つが出てき、4人の守護騎士が現れる。

「おいで私の騎士たち」

楓たちの前に白い魔力の柱が立ち、そこに白いベルカ式の魔法陣と守護騎士が中心の何かを守るように立つ。

「ヴィータちゃん!!」

「シグナム!!」

「シャマル、ザッファイ!!」

「我らや天の主の元に集いし騎士」

烈火の将シグナム。

「主あるかぎり、我らの魂尽きることなし」

湖の騎士シヤマル。

「この身に命ある限り、我らは御身の元であり」

盾の守護獣ザフィーラ。

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

鉄槌の騎士ヴィータ。

「リインフォース。私の杖と甲冑を」

「はい」

そして、魔法陣の中心に夜天の王、八神はやてが現れた。

「はやてちゃん」

「夜天の光よ我が手に集え。祝福の風リインフォースSet up  
!!!」

はやてが騎士甲冑を纏う。

「はやて」

ヴィータが物恋しそうに言う。

「すみません」

シグナムがこのようになったことを謝罪する。

「あの、はやてちゃん私たち」

「ええよ、みんな分かつとる。リインフォースが教えてくれた。そやけど細かいことは後や。今はお帰りみんな」

「ウエエエエェン!! はやて!! はやて!! はやて!! はやて!!」

ヴィータがはやてに泣きつく。

楓・なのは・フェイトがはやての所に行く。

「楓くんもお帰り」

「やっぱり馬鹿だるお前・・・」

「馬鹿でなんや!」

「俺のセリフだ。お帰りはやて」

「うん。ただいま。なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんな。うちの子たちが迷惑かけてもつて。」

「う、うん」

「平気」

なのはとフェイトが答えた。

「すまないな。水を刺してしまうのだが時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ」

「ホントにK（空気が）Y（読めない奴）だな」

「だれがKY（よくできてる奴）だ！！」

2人の解釈が違うこと気にしないでおう。

「時間が無いので、簡潔に説明しておく。あそこ黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが数分で暴走を開始する。僕らはそれをなんらかの方法で止めないといけない。停止のプランは2つある。一つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。2つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔道砲アルカンシエルで蒸発させる。これ以外にいい方法は無いか？闇の書の主とその主、そして楓に聞きたい」

「私たちは全て雨宮に任せていたので」

「楓なにか策があるのか？」

「ああ、とびつきりの方法がな。考えればよく分かるさ。アルカンシエルでぶっ飛ばす」

「でも、そんなことしたらはやての家のぶっ飛ばじやんか！！」

「そんなにすごいのか？」

ヴィータの言葉になのは疑問を思う。



「発動地点を中心に100数十?の範囲を歪曲させてから、反応消滅を起こさせる魔道砲っていうとだいたい分かる?」

「私もそれ反対!」

「同じく反対!」

なのはとフェイトが反対する。

「だから馬鹿だろ。あるんだよ。アルカンシエルを地球以外で撃てる方法」

「「地球以外・・・あつ」「」」

なのは・フェイト・はやてが気づく。

「答えは防衛プログラムを強制的に軌道上に転移させぶっ飛ばす」

「相変わらず凄いというか?」

リンデイが苦笑いを浮かべる。

「計算上では実現可能というのがまた怖いですね。クロノくん、こちのスタンバイはOK。暴走臨界点まで後、10分」

「じつに個人の能力だよりでギャンブル性の高いプランだが。まあ、やってみる価値はある」

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合四層式。まずはそれを破る。バリアを抜いたら、本体に俺たちの一斉砲撃でぶっ飛ばしてコアを露出させ、ユーノたちの強制転移魔法でアースラの前に転送して、アルカンシエルで蒸発させる」

「グラム提督見えますか」

クロノがグラムに通信する。

「ああ、よくみえるよ」

「闇の書は呪われた魔道書でした。その呪いはいくつもの人の人生を喰らい、それにかかわってきた多くの人の人生を狂わせてきました。あれのお陰で僕の母さんも他の多くの被害者遺族もこんなはずじゃない人生を進まなくななきゃいけなくなりました。それはきつとあなたもリーゼたちも無くしてしまった過去も変えることができない」

クロノがデュランダルを起動せさ、楓がくる。

「だから未来を変えるだからみてろよグラムのオッサン。それがあんたのすべきことだ」

「楓」

「変えよつぜ執務官殿」

「ああ」

「アルカンシエルチャージ開始」

リンディがそう宣言した。

「暴走開始まで後2分」

「なのはちゃん、フェイトちゃん、楓くん、シャマル」

「3人の治療ですね。クラールヴィント本領発揮よ」

クラールヴィントにそっと口づけをする。

「静かなる風よ。癒しの恵みを運んで」

楓たちの体を優しい光が包む。

「湖の騎士シャマルと風のリング、クラールヴィント。癒しと補助が本領です」

「すごいです」

フェイトの本音が零れる。

「ありがとうございます。シャマルさん」

「胸の傷が楽になった。サンキュー」

「私たちはサポート班だ。あのうざいバリケードを止めるよ」

「うん」

「ああ」

アルフの言葉にユーノとザフィーラが応えた。

暴走が始まり淀みの周りに黒い柱がいくつも立つ。

「夜天の魔道書を呪われた魔道書と呼ばせたプログラム。闇の書の闇」

淀みの中からメデューサと甲冑を着た6足動物を融合させたような物が現れた。

「みんな行くぞ!!!!!!」

楓の声により最終決戦が始まった。

## 48話 俺のいるべき世界（後書き）

（楓の拷問室）

アキラ「私の出番少ないんですけどおおおおおー!!」

楓「うるさい。所詮デバイス。セリフがあるだけいいだろ」

アキラ「でも……でも……」

楓「大丈夫だ」

アキラ「ホントですか？」

楓「これからお前のセリフ予定にないらしいから」

アキラ「理不尽だあああああああ!!」

・次回予告

最後の戦い

それぞれの必殺技が炸裂する

そして

次回「闇の終わり」

・次章予告

アキラ「私の出番あるのでしょうか？」

楓「……………」

アキラ「もう、いいです……！」

## 49話 闇の終わり

Side  
楓

「チェーンバインド!!!」

「ストラグルバインド!!!」

アルフとユーノがバインドで縛り、切り落とす。

「縛れ!!! 鋼の軛」

ザフィーラから放たれた白い閃光が切られた触手を一掃する。

「ちゃんと合わせるよ、高町なのは」

「ヴィータちゃんもね」

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン!!!」

グラーファイゼンが巨大なハンマーを形取った、ギガントフォームに姿を変える。

「轟天爆砕!!! ギガントシュラーク!!!」

グラーファイゼンが防衛プログラムのバリアを粉碎する。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン行きます」

カートリッジを射出しピンクの羽が生える。

「エクセリオンバスター」

放たれた魔力で防衛プログラムの動きが止まる。

「ブレイクシュート!!」

なのはの砲撃が赤い2層目のバリアを破る。

「次!シグナムとテストロッサちゃん」

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン。刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

シグナムがレヴァンティンの鞘を柄と合わせると弓の姿のボーゲンフォームになる。

「翔けよ、隼!!」

放たれた矢がバリアを貫き、砕け散る。

「フェイト・テストロッサ。バルディッシュザンバー行きます」

ザンバーフォームでフェイトが円を描き回る。

「打ち抜け雷神!!」



フェイトのジェットザンバーが最後の層ごと防衛プログラムの左半身を切り落とす。

自分の危機を察したのか巨大な魔力を溜める。

「盾の守護獣ザフィーラ砲撃など撃たせん」

白い魔力の柱が全ての触手を貫く。

「はやてちゃん!!!」

「彼方より来たれ、ヤドリギの枝臨月の槍となりて撃ち貫け」

闇の書の目線上の空間が歪み白い魔力が6つ現れる。

「石化の槍ミストルティン!!!」

防衛プログラムが石化するが再生がそれを上回り、恐竜の首のような姿に変わる。

「やるぞクロノ」

「ああ楓。行くぞデュランダル」

クロノが詠唱を始める。

「悠久なる凍土 凍てつく棺のうちにて 永遠の眠りを与えよ」

海が凍り、防衛プログラムが凍り付く。

「凍てつけ！」

完全に凍るがまだ動く。

「我が新たな剣トワイライト・アクイラ」

アクイラを正面に構える。

「天地・天空ターンスラッシュ」

俺は真つ直ぐ垂直上に貫き、下から空に向けて貫きながら空に飛ぶ。

「行くぞ！！なのは、フェイト、はやて」

3人が頷く。

『スターライトブレイカー』

「全力全開！！スターライト！！」

「雷光一閃プラズマザンバー！！」

「ごめんな。おやすみな。響け終焉の笛ラグナロク」

アクイラを剣形態から銃形態に変える。

「飛翔せよシューティングブラスター」

「…………ブレイカー………」

四方向から放たれた集束砲が激しく爆発を起こす。

「本体コア露出。捕まえた」

シャマルが旅の鏡で本体コアを捕縛する。

「長距離転送」

「目標起動上」

「「「転送」」」

サポート班のコンビネーションで空に上げる。

「アルカンシエルバレル展開！！」

「アイアリングブロックシステムオープン」

リンディさんの前にアルカンシエルの起動スイッチが現れる。

「命中確認後、反応前に安全距離まで待避します。準備を」

軌道上に防衛プログラムが転送された。

「アルカンシエル発射」

放たれた砲撃は巨大な爆発を引き起こした。

「提督！！反応現存！！・・・失敗です」

「そんな！？」

エイミイの言葉で現実に戻される。

「クロノくん失敗！！」

「そんな」

なのはやその場のメンバーが落胆する。

「アキラ補食形態」

「はい。マスター」

「行くの？」

レイリルが俺に聞く。

「たぶん俺のリンカーコア取り込んでるから丈夫になったんだろう」

「準備は出来てるそうです」

「ああ。行って来る。シン・ライフオジオ」

優しい光が俺を包み。

「何をするきなんだ……楓」

クロノがしかめっ面で俺の前に立つ。

「楓くん。行くだよね」

「ああ」

「楓、私は止めない。信じてるから」

「楓くん。お願い」

「なのは、フェイト、はやて行って来る」

俺は額に指をあて、瞬間移動で宇宙へ飛んだ。

「提督。楓くんです」

「楓くん!?!」

防衛プログラムはダメージを受けてコアとに化け物が覆い被さるようになってる。

「喰らえアキラ!!」

剣が化け物の口となり、闇の書のコアを喰った。

「グアアアアアアア!!」

俺の体を黒い何かが駆けめぐる。

「ギャアアアオ!!」

コアを失った欠片が俺に迫ってくる。

「準備OKだ」

5メートル。

「動けないからさ頼んだぜ」

3メートル。

「撃てえええええええ!! 璃玖!!」

白い光が闇の欠片を消し去った。

「軌道上の的を撃ち抜くなんて規格外だろ」

俺は重力に逆らわずに地球に降りていった。

No side

白い髪青年、柊璃玖が持っていたモバイルスーツの銃のような銃が  
砕け散る。

「脆いな……」

「脆いってどつちがにゃ」

近くのテントの中から飛鳥が出てくる。

「何時からいた？」

「楓が復活した時かにゃ。しかし、お前がここに来てるとは思わなかったぜ」

「嘘付け」

「何で助けたんだ？興味が無いとか何とか言ってたが」

「興味なんて無い」

木の切り株の上に置いてあるトランクを持って歩き出す。

「ただ僕はあいつが正義の味方になるのを見届けないといけない。僕と違い人を助けることで英雄になろうとするあいつを」

そう言い放ち柊璃玖は森に消えて行った。

Side なのは

「闇の書の反応ロストしたよ」

エイミーさんから通信がくる。

「あのエイミーさん。楓くんは？」

「心配しないでなのはちゃん後10秒くらいで着くから」

「10秒？」

どづゆづことだるづづ？

「みんなー！！！」

楓くんの声はするのに右を見ても、左を見ても、見あたらないの。

「上やなのはちゃんー！！！」

上？はやてちゃんの声聞き上を見るとそこには。

「ただいまー！！！」

パラシュートで降りてくる楓くんの姿が見える。

「楓くんー！！！」

「楓ー！！！」

はやてちゃんとフェイトちゃんが手を振る。

楓くんも手を振る。



「楓くんお帰りなさい」

「ただいま!!」

楓くんの手と私の手が繋がる。

と思った瞬間強風が吹く。

「楓くん!？」

「楓!？」

「やばい!!!」

楓くんが風に風に飛ばされて行く。

「あばよとっつあん!!!」

「とっつあんって誰なの」

「まゝてルパン」

「はやてちゃんも乗らないの!!!」

こうして闇の書事件は終わりました。

その後、楓くんは墜落して海に浮いている所をアースラの人に回収されたそうです。

## 49話 闇の終わり（後書き）

（楓の拷問室）

楓「終わった終わった」

土屋「終わってねえよ。まだ1話残ってるんだよ」

楓「そうなの？」

土屋「A・S編のエピローグってことだな」

楓「でも璃玖が出てくるとは思わなかった」

土屋「書いてる俺も予想外だった」

楓「ともかく次回A・S編最終回！！」

・次回予告

戦いが終わってそれから

俺たちは平穏な日々に戻っていく

次回「今の幸せ」

・次章予告

「僕をバカにするな!!」

「バカになんかしてねえよ。バカにバカって言っても分からないだろっし」

「ムキイイイイイイ!!」





「そつだー!!」

俺は閃いた。

「ユーノ。君に問いたい」

「えっ、どうしたのクロノ？」

「そこの黄色い熊はなんだ？」

「僕の友達のプさんだよ」

「プさん……」

「はちみつ食べたいな」

「……バインド」

「止めてよ、僕の友達だよ!!」

「どうせ中に楓が入ってるんだろ？」

クロノが頭を取った。

そこに入っていたのは……

「ユ、ユーノ!？」

中に入ったのはユーノだった。

「じゃあ、さっきのユーノは!？」

「残念でした」

俺が変身魔法でユーノになって、ユーノを着ぐるみに入れてクロノが着ぐるみに注目している間に俺が転送ポートから逃げる作戦成功  
!!

「さようなら」

俺は地上に逃げることに成功した。

俺が我が家に戻るとそこでは。

「楓お帰りにゃ」

「マスターお帰り」

「邪魔してるぞガキ」



「人の家で何してる？」

「『『パーティー』』」

パーティーつうより宴会だ。

「まあ、お前も飲め」

「未成年に飲ませるな」

「堅いことはいいつこなしだにゃ」

飛鳥に強引に飲まされる。

「ぶふつばふつ！..」

「おいしかったかにゃ？」

「これポン酢じゃねえか！..」

死ぬかと思っただぞ。

「レイリル水」

「はい。マスター」

レイリルからコップを受け取り飲む。

「ブウウウウウウ！..」

『どうしたんですかマスター！？』

「これポン酢じゃねえーか」

「ふふふふ」

このユニゾンデバイス！！

「はあ、口が酸っぱい。コーヒー飲むか」

俺はコーヒーを砂糖6割、ミルク2割、コーヒー2割で作る。

「うらそこー！！あの親ありて、この子ありとかいつなー！！

バカどもが酔いつぶれて俺は暇になったからアースラに戻った。

「楓くん……何してたの……？」

「楓……怪我してるんだよ……分かってる？」



最近、俺は昼寝してねえのにチクシヨウ!!

「雨宮楓。お前に聞きたいことがある」

リンフォースが俺に問いかけてくる。

「本来なら。私は消えなければいけない存在だ。消えたと言っても防衛プログラムはすぐに復活するのだから。しかし、今防衛プログラムの反応がするのに全く私と繋がっている気がしないのだ」

「どういうことだよ?」

ヴィータはバカだから分からない。

「誰がバカだ」

地の文にすらツツコミが出来る電波ちゃんなのだ。

「誰が電波だ!!」

「……落ち着け」

「そつよヴィータちゃん」

「で、どうなのだ?」

俺は自分を指でさす。

「今、闇の書のコアが俺のリンカーコアと融合している」

「えっ?」

「はっ!?!」

シヤマルとヴィータが口に出して驚くがザフィーラ意外は口を開けている。

「でも、それって楓くんが闇の書の闇になったってことですか?」

「だいたいそんな感じだな」

「でもそんなことできんのかよ」

「そこで登場するのがアクイラの能力補食だ」

「アクイラ・・・ああお前のデバイスか」

『酷いですよシグナムさん今私のこと忘れてましたよね?』

「・・・すまない」

『謝られた!?!』

「アクイラ。コントしてないで説明しろ」

『はい。私の能力【補食】は相手を喰らいその魔力や魔力特性、レアスキルをコピーする技です』

「俺はその特性を使ってコアを丸ごと喰らった」

「じゃあ防衛プログラムはお前の一部になったということだな」

シグナムが納得したように言う。

「あの〜」

「どうしたシヤマル？」

「防衛プログラムが楓くんの中で暴走するってことはないんですか？」

「あるよ」

「「えっツッ!!!」」

シヤマルとヴィータが声を上げて驚く。

「でも、アクイラが稼働してる間は起きないから心配するな。それにこいつの呪いで死ぬのは俺だ問題ない」

部屋に沈黙が流れる。

「すまない」

「謝るな。お前になんの責任もない。最初からこうする予定もあつたんだ」

「しかし、私が消えていれば……」

俺は背伸びをしリインフォースの頭に手を置いて体重をかける。

「消えるなんていうな……」

「雨宮……」

「いいな」

「んっん……んにゃ？楓くん」

はやてが目を覚ました。

「お、とっつぁん。目さましたかい？」

「楓くん。まだそのネタ続いとるん？」

「冗談だよ。気分はどうだ？」

「うん。大丈夫問題あらへんよ」

「よかった。なら俺は行くから」

「もっといええの……」

「今の内にゆっくり休んどけ」

はやては知らなかった翌日あんなに石田先生に怒られるなんて。

翌日俺はなのはとフェイトとはやてと共にさすが主催アリサ企画のクリスマスパーティーに向かった。

そこで俺たちは全てを話した。

「でも楓くんが帰ってきてくれてよかったかな？ね、アリサちゃん」

「そうね。無事に帰って来たならよしとしましょう」

俺は箱を出す。

「プレゼントタイム!!」

「……プレゼントタイム?」「」「」

4人が驚く。

「まさか去年みたいに全部爆弾とかじゃないわよね」

「単純ですねアリサさん。僕が同じ手を使うわけないじゃないですか」

「信用できないわ……」

俺はまずずずかに箱と以前なのはとフェイトに渡したペンダントを渡した。



「楓これって」

「私たちが前、貰った奴だよね？」

「こいつらも全部知ったんだ。渡さないと駄目だろ」

「ねえ、楓くん開けていい？」

「いいぜ」

「さすが箱を開ける。」

「入っていたのは白いハンカチだった。」

「かわいい」

「次に俺はフェイトに箱を渡した。」

「ねえ楓……これ何……？」

「知り合いに作ってもらった日本語の参考書だ」

「……ありがとう」

「なんか納得のいかなそうな顔をしているフェイト。」

「次ははやて」

「じ、これは……」

「ハリセンだ！！防水機能、ワンセグ、GPS搭載、さらに新規加入だと他社のハリセンとの通話しほうだい」

「すごい！！」

「楓くんとはやてちゃんの会話にはついていけないの……」

そんな会話をしながら俺はアリサに箱とペンダントを渡す。

「これウンジャラゲゴライアス人形じゃない！！」

「お前の目は節穴か？はやて教えてやれ」

「アリサちゃん。これはウンジャラゲゴライアス人形Rや。新機能で等身大に名って戦うことも可能となるんや」

「なんではやてが知ってるの……」

「最後はなのはだ」

「うん」

「お前にはこれだ」

俺は箱からレイジングハートの形の丸いぬいぐるみを渡した。

「ありがとう」

なのはが俺に微笑む。

「なあ。みんなペンダントを合わせてくれないか？」

「何よ？」

みんなでペンダントを合わせるとある形になる。

「これって……」

「ヘキサゴンだよね？」

フェイトが答える。

「俺たちがみんなそろわないとこの形は完成しない」

「そうね」

「みんなが居ないとそろわないと……ロマンチックだねなのはちやん」

「みんな聞いてくれ」

顔がペンダントから俺に目線が変わる。

「俺は弱い。みんなを守れるとは思わない。だからって俺は全部を諦めない。守れるものを守る。正義の味方になるために」

「応援してるよ」

「頑張りなさい」



A  
S  
編  
f  
i  
n  
.

50話 今の平和（後書き）

（楓の拷問室）

土屋「完結しました！！」

楓「長かったな……」

土屋「では、次回はお約束の総集編です」

楓「詳しい話はそこでだな」

では次回「番外編 まとめてみよう2」

番外編 まとめてみよう2

楓以外「ベキバキ楓の拷問室」

楓（ツッコムべきなのか・・・？）

はやて「A's編は私がヒロインの話や」

なのは「この話のヒロインはなのはだよ」

楓・フェイト「でも、お前出番なのは少なかったよな（ね）」

なのは「ふえええええん！！」

なのは以外「では総集編どうぞ」

24話

はやて「楓くんこの時からかつこええな」

フェイト「リインフォースを守る気満々だもんね」

楓「無印編が辛かったからな」

25話

フェイト「この世界のスカリエッティは気さくなんだね」

はやて「ただの変な人やもんな」

楓「俺の遊び相手だからな」

はやて「遊び相手って怖いな……」

## 26話

なのは「これは楓くんがはやてちゃんの家に住座った話なの」 復活

楓「失礼な。転がり込んだと言え」

フェイト「それ変わってないよ……」

## 27話

フェイト「楓ってケーキ作れたよね？何で翠屋に女装して買いにい  
つたの？」

楓「確かに作れるんだが、翠屋の方が美味いからな」

はやて「こんど一緒に作るか」

楓「そうだな」

## 28話

楓「この話は個人的に思い出したくないな……」

なのは「こんなにグロッキーな楓くん見たこと無いの」



29話

フェイト「クロノこの時のこと気にして修行してるんだよ」

楓「あのまま氷付けにしとけばよかったかな」

なのは「にやはは・・・」

30話

楓「この話の伝えたいことは保険には入っとけてことだな」

なのは「フェイト・はやて」「」「どうしてそうなるの（ん！？）」「」

31話

フェイト「楓の部屋って私部屋の隣なんだよね？」

なのは「そうだけど、どうかしたか？」

フェイト「実は隣の部屋から変な音がして眠れないの」

楓「変な音・・・」

ある意味思い当たることが多すぎて悩む楓であった。

32話

はやて「この話は楓くんがぶぐ!?!」

楓「止める!?!俺にお話させるきかよ!?!」

なのは「楓くんがどうかしたの?」

楓「何でもない」

フェイト「でも楓・・・」

楓「うるさい。次行くぞ、次」

33話

フェイト「これはバトル色の強い話だね」

楓「すぐに新しい力を使いこなすなんて本当にチートだよな」

なのは・フェイト「楓<sup>くん</sup>には言われたくないの!?!」

34話

フェイト「楓が負けちゃった話だよね」

楓「俺も完全な状態だったら勝てたんだぞ」

はやて「無理せんでええよ」

フェイト「そうだよ」

なのは「いいことないよ」

楓「泣いてもええですか!？」

### 35話

なのは「この回はシリアスだよ」

フェイト「本当に心配したんだよ」

楓「ごめんな」

### 36話

フェイト「このサングラスで金髪の男の子強かったんだよ」

なのは「誰なんだろう？」

楓（隣のクラスなんだけどな……）

### 37話

楓「俺って愛されてるんだな……」

なのは「クロノくんは？」

フェイト「クロノに？」

はやて「クロノくんは？」

楓「止める!!」

38 & amp ; 39 & amp ; 40 話

なのは「マルコ先生は酷い人なの」

楓「マルコは16歳以上の女性にしか興味ないからな」

はやて「楓くんより駄目人間やな」

マルコ「強さと腕は確かなのにな」

41 & amp ; 42 & amp ; 43 & amp ; 44 話

フェイト「闇の書の起動の辺りだよね」

はやて「このときはごめんな」

なのは「はやてちゃんのせいじゃないよ」

楓「結局誰も死ななかつたんだから気にするな」

45 話

フェイト「楓。あの声ってなんなの?」

楓「俺も答えを出す者まで使ったのに分からなかつたんだ」

なのは「ふん。楓くん怪我がまだ完治してないのにそんな負担の

かかることしたんだ」

楓「いや！？その！？」

フェイト「いや？いいんだよ……」

楓「あ、そう怒られると思った」

はやて「怒ったりせえへんよ」

楓「良かった……」

なのは・フェイト・はやて「お話するだけだから」

楓「ギヤアアアアアアアア！！」

#### 46話

フェイト「楓って強くなつた？」

楓「そうでもないぜ。実はスターライトを能力で防いだからあの後不調だったんだ」

なのは「能力？」

楓「爆流波」

なのは・フェイト「だから木が倒れてたんだ・・・」

47話& a m p ; 48話

楓「俺はこの世界のみんなの心を守る。みんなの前で誓ったんだ」

49話& a m p ; 50話

楓「闇の書の終わりだな」

フェイト「本当に楓大丈夫なんだよね」

楓「俺になんかあったら話が続かないからな」

なのは「リアルなの」

はやて「でも、この話でうちの子たちも救われた。ありがとな楓くん」

楓「まだ終わってないぜ」

なのは「どうゆうこと?」

楓「詳しくは次回予告で」

・次回予告

もうじき正月

暇を持って余っていた楓はクロノと夜の町を徘徊していた

しかし、そこにあいつの襲撃が

次回「襲撃者はフェイト？」

51話 襲撃者はフェイト？（前書き）

マテリアル編スタートです。



## 51話 襲撃者はフェイト？

S i d e  
楓

「クロノ。何で俺たちが買い出しに行かないといけないんだ」

「しょうがないだろ。この荷物を母さんやエイミィに持たせるのは酷だからな」

俺とクロノは正月の食料を買いだめるためにスーパーに向って、今は帰るだ。

はあ、地球じゃなかったらバイクに乗っていけるのに。

「楓。あれから1週間たつが変わりはないか？」

あれから1週間たった今も俺の体に変化はない。それは一重に転生時に神からアクイラに付けて貰っていたシステムのお陰であろう。

「ああ。傷も治ったし、前より動きやすいぜ」

「それは良かった」

俺はポケットから板チョコを出して、割って半分をクロノに渡す。

「ありがとう」

俺はクロノに目をくれずチヨコを囓る。

「楓、君はこれからどうするんだ？」

「執務官を目指してみようと思う」

「執務官か。君にはお似合いの職業だな」

「だから試験問題頼む」

俺は泣きながらすがり寄った。

「泣かなくても教えるからはなれる」

「よし。なら離れる」

「嘘泣きか!？」

俺たちは町を出ていつもサッカーをしていた河原に座り込んだ。

「本当に行かないのか？」

「ああ。カルナージの自然でも見て心身を鍛え直してくるわ」

実は正月休みに高町家、ハラオウン家、月村家+アリサの旅行がある。

参加しないのは、雨宮チームと八神家だ。

俺が参加しないのは上記の通りで、レイリルはユニゾン時の違和感

を調べにジェイルの研究所へ。飛鳥はチンクを拉致して温泉旅行へ。璃玖は……知らない。

八神家ははやてがまだ石田先生からの許可が取れていないこと。リインフォースがまだ万全な状態ため今回は欠席だ。

「まあ、春休みにでも、みんな行こうや」

「そうだな」

結界が発動した。

「結界!?!」

「エイミィ!!!こちらクロノ。状況の説明を頼む」

クロノがエイミィさんに連絡を取る。

「現在調査中……まって!!!アンノウンが接近中」

「アンノウン?」

「クロノ避ける!!!」

俺はバリアジャケットを着てクロノを蹴り飛ばした。

「ぶあぼぶるどっはすっあ h g k d っっ h ー!!」

あっ、川に落ちた………

「よくもクロノを!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「君がやったと思ったんだけど」

「しかし、誰だお前？偽物か？」

上空にいたのはフェイトと瓜二つの少女だった。

「あなたこそ誰、ここは何処？私は母さんのためにやらなくちゃいけない。邪魔するなら手加減はしない」

フェイトがサイスフォームで俺に襲いかかってくる。

「アクイラカートリッジモード」

俺は手でサイスを握る。

「受け止めた!?!」

『グローブフォーム』

「フェイトにしては弱いし、アリシアの魔力光とは色が違う。ホント誰だよ」

「私はフェイト・テストロッサ。それ以外に答えようがない」

「そうかならお話ししようぜ」

魔力刃を握り潰すとフェイト(?)が後ろに体を引く。

「ハア!!」

「フツ!!」

サイスフォームの攻撃を全て握りつぶす。

「今のお前じゃ勝てねえよ」

「何で・・・」

「グローブフォームは魔力構築を壊すことができる。だから魔力で出来た武器と障壁系の防御魔法は砕け散る」

「なら・・・」

フェイトが俺と距離を取りフォトンランサーを打ち出す。

『ウィップフォーム』

アクイラの姿が鞭に変化しフォトンランサーの軌道がが変化し地面に落ちた。

「アクイラ勝手に変えるなよ」

『ソードが良かったですか？それともロッドでしたか？』

「戻せ」

『はいはい。全く』

アクイラがグローブモードに戻った。

「今度は何？」

「答える義理は」

俺は拳を構え

「ねえ！！」

俺はネギまで使われている術、瞬動術でフェイト(?)の目の前に移動し腹に拳をたたき込んだ。

「爆連！！」

楓の放った拳は衝撃を放ちフェイト(?)は吹き飛んだ。

フェイト(?)は口から血を吹き出し、体は地面にたたき付けられた。



51話 襲撃者はフェイト？（後書き）

（楓の拷問室）

土屋「マテリアル編始まりました」

アクイラ「マスター！！マスター！！セリフ！！セリフ！！セリフがあります」

楓「ドンだけセリフが欲しいんだよ！！芸人かお前！！」

アクイラ「チート物のインテリジェント・デバイスにとって、セリフは死活問題なんですよ」

楓「そんな大げさな……」

アクイラ「チートに隠れたデバイス協会の調査では、いつの間にか出番が無くなって他の武器で戦っていたり、デバイス？何それ？ってことになるんですよ」

楓「何？その協会？」

アクイラ「私が作った会です」

楓「……」（こいつ友達居ないからきつと一人なんだろうな）

・次回予告

フェイト？を撃破した楓



そしてエイミィとリインフォースからの通信で全てが解明される

そして新たな敵が現れる？

次回「闇の欠片」

## 52話 闇の欠片

Side 楓

煙の中からフェイト(?)がゆらっと立ち上がった。

「……クツ!」

「無理しない方がいいぞ」

俺はバインドでフェイト(?)を縛った。

「さっきの技は相手に爆発の衝撃を与える技だ。だから、お前の腹はグツチャグチャだ」

考えるだけで気持ち悪くなってきた……

「私は、私は」

そう言うと、フェイト(?)の体が消え始める。

「なっ!?!」

先に驚いたのはフェイト(?)じゃなく俺の方だった。

「体が!どうなってるんだよ!?!」

「分からない!?!ああ……母さん!?!母さん!?!」

そう叫んでフェイト(?)は光となって消えた。

「どうなってるんだ？」

「楓くん応答お願い」

「こちら楓状況説明を頼む。何がなんだかわからねえ」

「それは私が説明しよう」

別のモニターに現れたのはリインフォースだった。

「どうしてお前が？」

「雨宮楓。体に変化はないか？」

「……変化ってほどじゃないが気持ちが高ぶってる気がする」

「あれは闇の書の防衛プログラムの残骸だ」

「残骸？でも、防衛プログラムのコアは俺が喰らったはずだけど」

「確かにコア本体はお前が喰らい取り込んだ。しかし、アルカンシエルで散った欠片が本体のコア。つまりお前を捜しているんだ」

「分かりやすくいうと彼氏に逃げられた彼女が、逃げた男を追い立てるみたいなことか？」

「分かりにくい例えだが、そうゆうことだ」

「今、なのはちゃんやフェイトちゃんにも対策を急いでもらってるの」

「なら俺も行く。一番近い敵の場所を教えてくれ」

「北西に600メートルの地点に一体補足してる。お願い楓くん」

「分かった」

「それより楓くん」

「何ですか？」

「クロノくん知らない？さっきまで一緒だったよね？反応がないんだけど」

「……知らない」

俺が現場に着くとザフィーラの姿の闇の書の残滓がいた。

「楓か……」

「お前は俺のことを知ってるんだな」

「何を言っている。主とみなは」

「いや。なんでもない」

どうやって切り出そう……

「なあ、ザフィーラ。俺と試合しないか？」

「試合？体は大丈夫なのか？」

「ああ、元気100倍だぜ」

「それなら構わないが……」

ザフィーラが構える。

「お前はそのグローブでやるのか」

「まさか。こいつじゃお前とはやり合えねえからな」

俺は手に穴が空いた箱と太陽の描かれた指輪を出して、指輪をはめる。

「少し痛むが初期シリーズなら使えるな」

俺は指輪と反対側の手に箱を持ち穴と指輪が向き合うように構える。

「開口」

中から光りが現れる。

「……カンガルー？」

俺の横に現れたのは2つの砲台を積んだカンガルーだ。

「こいつは漢我流だ」  
カンガリュウ

「なんなのだ……？」

「カンピオ・フォルマ  
形態変化」

「なっ!？」

漢我流の背中の砲台から黄色い光が俺に放たれる。

「ウオオオオオオオオ!!」

俺の姿がボクサーのような姿になり体が大人に成長する。

「なっ!？」

「ナツクルの極限ブレイク!!」

ボンゴレファミリーの晴れの守護者、笹川了平のボンゴレ筐。

「さあ、2開戦の始まりだ」

## 52話 闇の欠片（後書き）

（楓の拷問室）

楓「なんでギアじゃなくて筐の方なんだよ!!」

土屋「お前がギアなんて使える訳ないじゃないか」

楓「それ言われたら言い返せない……」

土屋「それよりあと次の戦闘を含め4戦になっております」

楓「少なっ!?!」

土屋「こんなお話みても面白くないっしょ」

楓「それを言われたら泣くよ」

・次回予告

ザフィーラとの戦いが

今始まる

次回「2開戦開幕」



53話 2 開戦開幕

Side 楓

俺とザッフィーが殴り合ったのは、ほぼ同時だった。

「あっ!!」

「ぐっ!!」

俺とザッフィーの拳が互いの顔に入る。

「フッ!!」

「ハア!!」

俺が右足を蹴り上げると、ザッフィーが左腕でそれを防ぐ。

「……やるな」

「どうも」

俺は地面に降りて、ザッフィーに笑いながら言う。

「ハアアアアア!!」

ザッフィーが上空からの跳び蹴りを繰り返す。

「ハッ！！極限太陽！！」

俺の拳とザフィーラの蹴りが激突して光を発する。

「楽しいなザフィーラ！！」

「シグナムたちの気持ちがあつた気がする。闇の書の制約がない勝負は心が踊る。」

ザフィーラが俺の目の前の道路を殴り、砂煙が立ちこめる。

「フッ！！」

ザフィーラが煙から出てきて、連続パンチが俺をかすめようとする。

「あつ、ぶつ、ねえ！！」

俺はギリギリのところで避ける。

「次は俺から行くぜ！！極限コンビネーション（マキシмумコンビネーション）！！」

ザフィーラの懐に潜り込んで連続攻撃を放つが、ザフィーラも紙一重で避ける。

「ハッ！！」

ザフィーラが拳を放ち俺とザフィーラがお互いに空に引く。

「やばいな……」

この技。ナツクルの極限ブレイクには弱点がある。それは3分間しか使えないとゆうことだ。たぶん、もう2分立っている。

「ザフィーラ。次の一撃で終わりだ」

「時間がたつのは早いな」

ザフィーラが構える。

「行くぞ」

「ああ」

俺とザフィーラが一齐に空を翔る。

「ハッ!!!!!!!!!!!!!!」

「ウオオオオオオオオ!!!」

「マキシмумキャノン  
極限太陽!!!」

「守護の拳!!!」

夜の町に大きな光が光った。

「……………我的負けだな」

「ギリギリだけどな」

俺はいつものバリアジャケットに姿を戻して、地面に座り込む。

「だけど楽しかったよ」

「……………ああ」

その時、ザフィーラの姿が消え始めた。

「……………これは!?!」

「罰ゲームだ」

「……………罰ゲーム?」

「負けたら別室送りなんだ。きつとみんないるから」

「なら休もうとする。また手合わせ頼む」

「ああ」

そして、ザフィーラの姿が消えた。

「ふう」

「楓くん!!!」

はやてが飛んできた。

「楓くん大丈夫？」

「俺に何かあったと思うか？」

「いや、絶対にあらへん」

「そこまで否定しなくても。今ザフィーラを狩ったところだ」

「楓くん。その発言生々しいからやめよな」

エイミーから通信がくる。

「楓くん、はやてちゃん。近くにまた反応あるの」

「わかりました。行ってきます」

「了解」

「楓くん。いこか？」

「ああ」

俺とはやては次の現場に向かった。



53話 2 開戦開幕（後書き）

・次回予告

次回「狩りしよつぜー!」

54話 狩りしよっせー！！

Side なのは

川の下流で私たちはクロノくんの形取った闇の欠片と戦っています。

「グアアアアアアアアア！！」

「フェイトちゃん。やったのー！！」

「そ、そうだね。殺ったね……」

なにかフェイトちゃんと解釈が違ってる気がするけど気にしないの。

「それより楓くん大丈夫かな？」

「そうだね。はやてと一緒にいるみたいだから連絡してみようか」

フェイトちゃんがはやてちゃんとの回線を繋ぐ。

「はやて。こちらフェイト今大丈夫？」

「h s t h d h t d j t t d j d t j f j h d h d」

音声にノイズが入ってるの。

「フェイトちゃん。これって？」



「他の回線も電波が乱れてる」

「電波？」

「うん。回線も乱れてるし、さっきから微弱な電流が流れるのを感じる」

「はやてちゃん。はやてちゃん。応答してなの」

「がh j d t h . . . なのはt j k j d j h s」

「どうしよう。フェイトちゃん。うん」

「ここは僕に任せてくれ」

「クロノくん!?!」

「クロノ!?!どうしたの?そんなにずぶ濡れになって」

現れたのはずぶ濡れのクロノくんだった。

「僕のことはどうでもいい。それより貸してくれ」

クロノくんがモニターを弄りだします。

「これをこうして・・・できた。これで少しノイズは入るかもしれないが連絡が取れるはずだ」

「分かった」

「はやてちゃん聞こえる？」

「……なのはちゃん……こちらはやて……大丈夫です」

「はやて。楓は無事？」

「……楓くんは「ブオオオ。神速！！連撃！！」」

「なにはやてちゃん今の声」

「今のは「ハハハ！！狩り祭りじゃあああ！！」」

その時モニターが綺麗に映りました。

「はやて今何が起きているの！？」

「見せた方が早いわ……」

そこには手から雷を放ち、空で笑ってる楓くんがいました。

「えっと、楓くんは何してるの」

「楽しそうに見えるけど」

「……今戦ってたのはなのはちゃんとフェイトちゃんとヴィー  
ータや」

クロノくんが回線を切りました。

「関わらない方がいい」

「そうだね」

「じゃはは………」

今の楓くんには関わらないほうがいいと思いました。

Side 楓

「紫電一閃!!」

俺はなのはの闇の書の欠片を狩り終えた。

「以外とできるもんだな」

俺は高ぶっていた心を落ち着けた。

「はやて行くぞ」

「う、うん」

はやての顔が引きつってる。俺なにかしたか？

「楓くん。近くに大きな反応があるの」

「おそらく闇の欠片の中枢。マテリアルだと思われる。どんな姿かは分からないが気をつけてくれ」

「マテリアルだからス・テルマ・スキルマギステルだが知らねえが」

「楓くん。それまったく違う」

「仲間を傷つけるやつはブッ倒す」

54話 狩りしよつぜー!! (後書き)

・次回予告

次回「王」

## 55話 王

Side 楓

今、俺とはやては周りの景色が紫で歪んでいる変な空間にいた。

そこ！！急展開ワロタとかいうな。

俺が笑いたいくらいだ。

「ハハハ・・・」

「楓くんとうとう頭可笑しくなってもうたん？」

はやての言葉で現実に引き戻される。

「ごめん。ちょっと疲れてたわ」

「それならええけど」

そう言った時、はやてを砲撃魔法が狙った。

「はやて!!」

俺ははやてを抱きかかえ回避する。

「キヤ！」

「はやてしっかり捕まってる」

俺を拡散弾や放射弾や砲撃魔法が俺を捕らえてゆく。

「楓くんが私を抱きしめて……」

「はやて!!こんな時にトリップするな!!」

クソ!!それ一発のスピードや攻撃力はそれほどでもないが量が多すぎる。

「楓くん。どうする?」

「避けるだけで手一杯だ。フェイトがいるならなんとかかな」

量なら量だ。

「はやて。攻撃を一度だけ盾防ぐ。お前と俺の攻撃で攻撃の来てる方へ撃ちまくるぞ。一斉砲撃だ」

「分かった!!」

「風陣結界!!」

俺が魔法陣を展開し、風の障壁を張る。

「合わせるよはやて」

「OKや」

「月牙天衝！！」

「クラウ・ソラス」

俺の斬撃とはやての砲撃が爆発を起こし、そこにはやてのそっくりさんがいた。

「反撃をするとは塵芥にしてはやるようだな」

「あんたがマテリアルって奴なのか？」

「いかにも。我は『王』を司るマテリアル。闇を統べる王だ」

ロード・ディアーテエ

「「王！？」」

俺とはやては闇を統べる王に聞こえないように話す。

「楓くん。あの子倒したら終わるんとちゃう？」

「さすがにそんなあっさりいかないと思うけどな」

「何をしている塵芥ども」

痺れを切らして闇を統べる王が言う。



「話合わないか？」

「話し合うことなどない。私の目的は闇の書の復活それだけだ」

話を通じそうにない。

「はやて。OHANASIIするぞ。策はあるか？」

「動きを止められたらいいんやけど、バインドを使う隙もあらへん」

「俺が行く。後方支援を頼む」

俺が闇を統べる王に突っ込み、はやてが後ろからバルムンクを打ち出す。

アクイラと彼女のデバイス『エルシニアクロイツ』が衝突する。

「この程度か？塵芥」

「クッ」

思ったより押しが強い。

闇を統べる王が離れてエルシニアクロイツを構える。

「アロンドایت」

「ガッ！！」

砲撃が俺に命中する。

「楓くん!!」

はやてが叫ぶ。

「強い……」

冗談抜きで強い。

今の体力じゃ本気は出せない。

「2人でこの程度か」

「そんなことあらへん!!」

はやてがクラウ・ソラスを撃つが防がれる。

「まだまだ楓くんは本気をだしてへん」

オイ!!そんなこと言うなよ!?

「誠か?」

そっちもそっちで目の色が変わったし!?

「もう自棄だ。水牙一閃」

アクイラが水を纏い俺は振りかざす。

「やれば出来るではないか」

「どうも」

「だがお前の剣はでかすぎる。そのために次の攻撃へのモーシヨンが遅すぎる」

「なっ」

しまった！？砲撃魔法！？防御間に合わない！？

「エクスカリバー！！」

「ガアアアアア！！」

「やったか」

煙が晴れた。

「凄いな。あの一瞬で防御するとはな」

「火事場の馬鹿力ってやつだ」

『何言ってるんですか。私が防御モードになって防いだんでしょ  
うが』

「はい。ありがとうございます」

「ただ次はどうですか。無闇に突っ込んだらさっきと同じことにな  
る。」

「何か手はないか……」

55話 王（後書き）

・次回予告

強大な力を持つ闇を統べる王

俺たちは策を巡らせる

次回「友情の運命の剣」

## 56話 友情の運命の剣

Side 楓

俺と闇を統べる王が向き合う。

「かかってこないのか塵芥」

「慎重な性格なんでね」

均衡状態が続く。

「クラウド・ソラス」

「なっ!?!」

均衡を破ったのは俺たちの会話の外にいたはやてだった。

「アアアアアア!!この塵芥が!!!!!!」

「避ける!!はやて!!!!」

「絶望にあがけ塵芥!!」

ベルカ式の魔法陣が現れはやての動きを止める。

「エクスカリバー!!!」

「キヤアアアア!!!」

はやてに攻撃が命中し、落ちてゆく。

「はやて!!!」

俺は怒りにまかせて突っ込んでいく。

「怒りにまかせて攻撃とは」

俺の攻撃はあっさりと流される。

「闇になれ。闇のように暗く静かに冷静に」

「クツ!!!」

確かにあいつの言う通りだ。今の俺は感情に任せてただ武器を振るってただけだ。

「闇には・・・負けない」

「闇に勝てるわけなからう。闇こそ絶対最強の力だ」

「違う。この世界で一番強い力は絆だ」

「つまらないな」

「俺は闇から仲間に使われた」

だから信じる。

「ハッ！！」

俺はもう一度突っ込む。

「馬鹿の一つ覚えだな」

「そうだな」

だけどこれは攻撃じゃない。

俺は後ろに飛ぶ。

「チェーンバインド！？」

俺はオレンジのチェーンで闇を統べる王を捕らえる。

「これではお前は攻撃出来ないぞ」

「確かにそうだな」

両手が塞がっている状態では戦えない。

「だけどな」



「もう一人いたら戦える!!」

「何!？」

突然の声に闇を統べる王が驚く。

「はっ!!」

はやてに放たれたバインドが闇を統べる王を捕らえる。

「楓くんと話してる間ずっと術式を練っていたんや。30秒は動けん」

「30秒程度で」

「違うな」

「違う」

「30あれば決められる!!」

はやてがラグナロクを撃つ体勢に入り、俺はその前にアクイラを上  
に構えながら立つ。

「撃つで、楓くん」

「ああ。やってくれ」

はやてから放たれたラグナロフがアクイラに吸い込まれていき、巨大な白い光の剣の横に後2つの巨大な刃が現れる。例えると繋がってない三叉槍だ。

「これが俺たちの」

「これが私たちの」

「友情の力!!!」

アクイラを闇を統べる王に向ける。

「運命の剣!!!」  
ラグナロク・ブレード

光の刃が闇を統べる王を喰らった。

そして、勝敗は決した。

「これが友情の力か」

「そうだ」

闇の統べる王が消え始める

「終わりだな……」

「なあ。今は闇と友情どっちが強いと思う？」

「マテリアルにそれを聞くのか？」

「聞かせてくれ」

「今は強いと思う」

もう体の半分が消え始める。

「我を倒したんだ。絶対に負けるな。負けたら殴りにいくぞ」

「ああ。出来れば殴られたくないな」

「ふっ。なら頑張れ」

素直な言葉を放ち闇を統べる王は消えた。

「楓くん」

はやてが俺に抱きついてきた。

「はやてよくやった」

はやての頭を撫でる。

「ほんとによくやったよ」

「楓くん」

突然エイミーから通信がきた。

「はい」

俺ははやてをひとまず蹴り飛ばした。

「ふにゃ!?!」

「変な声が聞こえたけどどうかしたの?」

「なんでもないっすよ」

「楓くんマテリアルの撃破ご苦労様」

「はい。他の状況は」

「みんな頑張ってるよ。それと次お願いできるかな?」

「はい。マテリアルですか」

「うん。フェイトちゃんが向かってるんだけど、相手がマテリアルだから」

「保険ですか。分かりました。後、さっきの戦いではやてが気絶してるんで回収お願いします」

「まっかせなさい!!」

俺はひとまず次の現場に向かった。

56話 友情の運命の剣（後書き）

・次回予告

次の相手は

アホな子

色々やってみる

次回「物で釣れるあいだは子供」

57話 物で釣れるあいだは子供

Side 楓

「チョコレートを付ける!」

「まだ僕は負けない」

「アメちゃんも付ける」

「その程度じゃ僕は落とせないぞ」

「なら翠屋と俺のコラボレーションケーキだ」

「うっ!」

「ほらほら手が出てるぞ」

「まだだ」

「バケツプリン」

「クッ」

「楓……」

フェイトが俺とフェイトと似ているマテリアルのやり取りをただ呆然と見ていた。

「何でこんなことになったかは」

「回想を」

「」「どっぞー!」「」

「敵同士だよな?」

~~~~~

俺はすぐさまフェイトの戦っている公園に着いた。

すると、フェイトがマテリアルと思われる少女を見ながら、ポカんと口を開けていた。

「フェイト何して……………」

「新手か?いいだろう。僕が相手だ。ハハハ!!  
2人まとめてかかってこい」

たぶんこの子アホだ……………」

「フェイト。楓どうしよう……………」

「かわいそうで攻撃出来ないのか?」

「うん」



「はあ、俺に秘策がある」

「秘策？」

「ああ。アホな子供に有効な戦い方だ。ヴィータと戦った時に使った技だ」

「ヴィータに怒られるよ」

俺は外套の裏からドーナツを出す。

「俺の手作りドーナツだ。戦いを止めるならこれをやる」

「ウツ!? な、何を言ってるんだ! この『力』のマテリアル。雷刃レウイ・ザ・スラッシュヤーの襲撃者がそんな物で釣られるわけ無いじゃないか!」

「釣られたな」

「釣られたね」

それから俺はスイート・タクティクス（お菓子を使った交渉術）を使って戦った。

「これがあの東 バナナだ」

「降参だ!!」

まさか東 バナナで落ちた!?

交渉に使った代金16435円。痛い出費だ。

「僕は……もぐもぐ……君に従うよ」

「計画通り」

「楓顔が怖い」

「おっと」

俺は顔を手を叩く。

「フェイト。これが本当のお話だ」

「なのはに見せて上げたいね」

あの暴力女に学ばせてあげたい。

まあ、無理だけど……

「レヴィって呼んでいいかい？」

「うん。君には許すよ」

アホな子俺好きだ(^.^)

「君の仲間。マテリアルは何人いるんだい？」



レヴィが頭を抑えてもがく。

俺はレヴィの頭に手を触れる。

「体のプログラムが急速に書き換えられて、違う。裏切りを考えて爆弾を仕掛けられていたんだ」

「楓どうにかできないの!？」

「うるさい!!今やってる」

俺は俺の使える手をフルに使う。

「感情が消えてなくなってる……………」

「感情が……………」

「ギャhjjggjjdhdhdhj」

「ガッ!！」

「楓」

俺は噴水に飛ばされて、噴水が粉々になる。

「痛つて〜。最近こんなばっかりだ」

俺は最近のことに愚痴をこぼす。

「だけど」

感情は消えただけで、抹消された訳じゃない。

少しでも感情の鱗片を揺さぶることができれば、勝機はある。

「フェイト」

「うん。分かってる」

「「お話だ!」」

結局こうなるのです。

57話 物で釣れるあいだは子供（後書き）

（楓の拷問室）

楓「久しぶりだなコーナー」

土屋「最近投降が多くてネタがないからな」

楓「そうだよな。他の作者さんはスゲエな」

土屋「だな」

・次回予告

暴走するレヴィと対話するために戦う楓とフェイト

2人はレヴィを救えるのか

次回「対話の為に 電心剣」

58話 対話の為に 電心剣

Side 楓

レヴィが凄き出す。

俺はアクイラのシールドで何とか防いだが動きが早すぎて攻撃が通らない。

「早すぎる。フェイト!!!交代だ!!!」

「分かった」

フェイトがソニックフォームになり俺とチェンジする。

「だけど、どうする？」

俺の身体強化は今の体じゃ、殆ど使えない。

「フェイトチェンジ」

「でも」

「いいからお前は攻撃の準備でもしておけ」

「はあ、まさか俺がこの技を使うとわ。」

「う、うん」

「アアアアア!!」

アクイラと彼女のデバイス『バルニフィカス』がぶつかると。

「楓の動きが速く!?!」

「オラ!!」

「がgt「つがg!?!」

「早く起きやがれ!!」

早くしないとこいつは完全に殺戮人形になっちまう。

「レヴィ!!!!レヴィ!!!!」

「ぐっgyじゅyjjつyyjjつyyjjgg」

「さっきまであんなに笑ってたじゃねえかよ」

「ぐggkkffjjyyjjつhll!!!!」

「菓子ならまだある。早く帰って!!」

「あぶああああhfhfつffdfhfhfgg」

「帰って!!レヴィ!!!!!!!!」



「……………うるさいなあ。もう」

「戻った!」

「レヴィー!」

「えへへ。ただいま」

「おかえり」

「遅せえよ」

「ごめん」

レヴィは笑う。

「でも、さよなら」

「どつゆつことっ」

フェイトがレヴィに聞くと楓が答える。

「感情が蘇ったところで浸食は止まらない。感情が蘇っただけで奇跡だ。たぶんそのままにしても、消える」

「消えるって……だったらリニスと同じのを」

「無理だ・・・創る力も足りないし、使っても暴走の根本的な解決にはならない」

「そんな」

「だから、君たちに僕を止めて欲しい。僕は他のマテリアルとは違うからね」

「ああ」

「うん」

「俺（私）が止める」

「お願い」

レヴィの様子が急変する。

「グギユウウウ・・・早く!!」

「フェイト!!」

「うん」

俺は被害を防ぐ為、瞬間移動でレヴィを上空に移動させた。

「フェイト行けるか？」

「うん。いつでも」

「行くぞ」

俺とフェイトが隣り合い、アクイラとバルディッシュ・ザンバーが重なり巨大な雷の剣となる。

「お前のことは絶対に忘れない」

「私たちは」

「「友達だ!!」」

「うん」

ブラスマ・セイバー  
「電心剣!!」

巨大な剣は夜の空を切り裂いた。

「レヴィー!!レヴィー!!しっかりしろ」

「レヴィー!!起きて!!」

レヴィーが薄く目を開けた。

「ありがとう。止めてくれて」

「喋るな」

カイナを使ってもこれじゃあ……

「楓!!」

「クソ。俺は!!俺は!!」

「いいよ」

レヴィが俺の涙を拭う。

「いままで僕は闇こそが幸せな暖かな居場所だと思ってた。だけど君たちは僕を友達だちと呼んでくれた。今思うと何かくすぐったいや」

レヴィが恥ずかしそうに笑う。

「でも、僕はその言葉で救われた。それだけで十分さ」

「レヴィ……」

「レヴィ……」

レヴィの姿が消え始める。

「ねえ。もしもまた、こんな奇跡が起きて、僕たちがまた会えたら」

君たちを友達と呼んでもいいかな？」

「もちろん!!！」

「私たちは友達だ!!！」

「ありがとう」

今までで一番の笑顔を見せて、レヴィは消えていった。

「フェイト……行くぞ」

「楓……」

「早くこんな戦い終わらせるんだ」

「そうだね」

「レヴィ。見ててくれ」

「楓どこに行く」

「なのはだ」

「えっ？」

「俺の感が正しければマテリアルの一人はそこにいる」

「なのはに連絡が取れない!？」

「当たり前か。な。行くぞ。終わらせる為に」

「な」

58話 対話の為に 電心剣（後書き）

・次回予告

相手は理の MATERIAL

終わらせる為に戦う

次回「終わらせよう 星剣」

59話 終わらせよう 星剣

Side 楓

海の沖合でピンクと紫の花火が上がった。

「いたな……」

「なのは!!!!」

「楓くん!? フェイト」

なのはは多少バリアジャケットが破れてはいるが無事だった。

対する敵。なのはのバリアジャケットを赤と紫に変えた少女。おそろく感じからすると『理』のマテリアルだ。

「『理』のマテリアルで間違えないか」

「はい。『理』のマテリアル。星光の殲滅者です」  
シユテル・ザ・デストラクター

「マテリアルなのにアホじゃない!？」

「どうしたのフェイトちゃん？」

フェイト。とりあえず落ち着け。

「『理』のマテリアル。降参してはくれないかい。君の仲間ももう



『破壊』のマテリアルとやらしかのこっちゃいない。今残った反応は2つ。『破壊』のほうにはクロノ・シグナム・ザフィーラが向かってる。

このまま戦ってもお互いの利益は生まれない。ここで素直に投降して欲しい」

「確かにそれはそうですね」

「だろ……」

「ですがそれは不可能です」

「どうして!!」

なのはが星光の殲滅者に聞く。

「私は闇を復活させる為に生まれた。その私たちが目的を失うとどうなると思いますか?」

「どうなるって……」

「暴走だよね」

「暴走!?!」

なのはは目的から外れ暴走したレヴィがどうなったかを知らない。

「知ったたのですね」

「俺たちは雷神の襲撃者の暴走に立ち会った」

「あの子ですか」

「驚かないのか？」

「どうせお菓子に釣られたりしたのでしょっ」

「こいつアホじゃない……」

「で、3人でかかってくるのですか？」

「答えを聞かせてくれ」

「今更答えですか？決まっていますでしょっ」

「そっかい」

「私はあなたたちの強さの理由が知りたい。

この気持ちの高ぶる理由を知りたい

始めましょっ」

「ああ

俺が先制攻撃を放った。

Side はやて

クー！！楓くん！！加減しないで蹴って！！

今度は私が殴つたる！！

ギン！！

「キャ！！なんや？今の風？」

風の先にはマテリアルだと思つた女子と楓くんが戦つてた。

「はやて〜」

「フェイトちゃん」

少し離れた場所にフェイトちゃんとなのはちゃんがいた。

「フェイトちゃん。あれって」

「うん。楓とマテリアルが戦つてるんだ」

楓くんが攻撃をしようとするとうとマテリアルが砲撃を放ち、マテリアルが砲撃を放つと楓くんが避ける。そんな攻防がずっと続く。

「楓くん大丈夫なん。休まずにずっと戦つてるんやろ？」

「たぶんかなりボロボロだと思つ」

「なのはちゃんはどつ思つ？」

なのはちゃんはただ呆然と見つめてる。

「なのは?」

「なのはちゃん?」

「いっ、いめん」

「どうしたのなのは?」

「ちょっとね……」

「なのはちゃん……」

Side なのは

あの日……

昔の私やフェイトちゃんと同じ目。

どうにかしたいけど何もできない目……

「楓くん……」

私の体は考えるよりも前に動いていた。

Side 楓

どうにもできない。

話をして改心しても暴走する。

倒しても消える。

「どうしたのですか？それが闇を喰らった男ですか」

「その闇喰って腹下してるんだよ。早く済ませてトイレに行かせてくれ……」

「そうですか。それは失礼しました」

俺は剣を横に振ると紐のようにするりと避けられた。

「クソ！！何で当たらない！！」

俺は氷の短剣を三本投げるが当たらない。

「何で！！何で当たんねんだよ」

なのはが俺の隣に飛んできた。

「なのは手貸せ。とにかくあいつの周りにアクセルシューターを撃ちまくれ。多く撃てば一発は当たる」

なのはがアクセルシューターを撃たない。

「何やってるんだ！！早く……」

パンツ！！

ビンタされた・・・

「楓くん。楓くんらしくないよ。いつもの楓くんなら、目的の為にどんな手でも使うし、どんなことだってする」

「俺らしくない・・・」

「うん。楓くんは考えすぎるんだよ」

俺は・・・

「俺は何をしてたんだ・・・」

「楓くん。一緒にやろ」

「一緒に・・・」

「うん・・・」

「なのは。力を貸してくれ」

「もちろん」

「行くぞなのは！..」

俺は星光の殲滅者に斬撃を放つが障壁に防がれた。

「目の色が変わりましたか。お腹の調子はよろしいのですか？」

「俺の腹は気まぐれなんだよ」

「楓くんの性格と同じでね」

「なのはお前後でお仕置きだからな」

「うっ」

もちろんちゃんとお話するぞ。

その時、星光の殲滅者の体が薄くなった。

「お前」

「おそらく中枢が倒されたのでしょっ」

「中枢？」

「楓くん。今リインフォースさんから連絡があった」

「あの馬鹿病み上がりの癖に無理しやがって」

「楓くんも言えないかも」

すると星光の殲滅者がこんな提案をしてきた。

「お願いがあります。私の一撃とあなたたちの一撃どちらが強いかな勝負してください」

「勝負」

「どうせ消えるのならあなたたちの強さを確かめたい」

「どうするなの？」

「もう決めてるんでしょ」

俺たちと星光の殲滅者が距離を取る。

「これが私の力です。ルシフェリオンブレイカー！」

赤い光が俺たちを包み込んだ。

「少し効くな」

「うん」

「私の全力をも受け止めました」

「俺たちは丈夫なのが取り柄なんだよ」

「楓くんいくよ」



「ああ」

「これがわたしたちの」

「全力全開!!」

「スターライト・セイバー  
星剣」

アクイラにスターライトが直撃する。

そして、アクイラが折れた……

……何ですと!?

59話 終わらせよう 星剣（後書き）

（アクイラの作戦本部）

ここは楓の家の一室。そこではアクイラの会議がおこなわれていた。

アクイラ「って私だけなんですわね」

しょうがないだろ。

アクイラ「でも、折れるって私可哀想じゃありませんか!？」

しょうがないだろ。

アクイラ「しかも、セリフもないし……」

しょうがないだろ。

アクイラ「いつか本編を乗っ取ってやる!！」

デバイスアクイラの世界征服計画は続く。

アクイラの作戦本部……続く？

・次回予告

何やかんやで終わった戦い

次回「終わった戦い　そして別の意味で終わった……」

60話 終わった戦い そして別の意味で終わった……

アクイラの簡単に分かるあらすじ

マスター対『理』のマテリアル、星光の殲滅者との戦い。

マスターはロード・レヴィとの戦いで精神が弱くなっていました。

そして、本来の自分を見失ってました。

しかし、なのはさんの激励で復活し、必殺技の撃ち合いになってしまいました。

そして、星光の殲滅者の必殺技を耐え、2人の必殺技、星剣を使おうとしたその時、

私の耐久力が0になり、刀身が折れてしまいました。

いったい私はどうなるのか。

「どつでもいいから本編どつぞ」

アクイラが……折れた……

「私はてっきりその剣に力を溜めて、私に使うのだと思いましたが、普通の集束砲だとは思いませんでした。私の完敗です」

「さ、さすがだろ」

「そ、そうなの。これがコンビネーションなの」

ちなみにその時フェイトとはやては

(嘘ついたーーーーー!!)

と想ってたらしい。

星光の殲滅者の体が消え始める。

「あなたたちの強さは尊敬に当たります。こんな指名が無ければ良かったのですが。私は消えそうで、あなたたちは疲労していましたから。対等な条件であなたちと戦いたかった」

「チェスでさえ先攻と後攻があるんだ。対等な条件なんてないさ」

「そうですね。あなたと話していると自分の考えが馬鹿らしく思います」

星光の殲滅者の体が半分消えた。

「もし次の見えた時は」

「一対一で全力でやろうな」

「はい」

「終わったな」

「ねえ、楓くん。アクイラ大丈夫？」

「アクイラどうだ？」

『破損率60%です。現状では銃形態、鞭モードの使用しか出来ません』

「かなり破損したな」

『そもそもちゃんと整備しないから』

「だってお前整備、断るじゃん」

『当たり前じゃないですか。あんなマッドサイエンティストに私を任せようとするからです』

「はあ、久々に整備するか……」

『お願いします』

「なのは、フェイト、はやて行くぞ」

「キヤア!?!」

「アツアアア!?!」

突然はやてとフェイトが水しぶきをたて海に落ちた!?!?

「なのは防御!?!」

「キヤアアア!?!」

なのはが海に落下する。

「クソ!!」

俺は防御態勢に入ると俺の前に陰が現れた。

「なっ!?!」

飛ばされて海面ギリギリの所で踏みとどまる。

「今のは……拳撃……」

「よく耐えたな。さっすが俺のベース」

「『破壊』のマテリアル。予想はして多けど……」

まさか……俺のコピーだなんて

『破壊』のマテリアルのは外套が青で、中の鎧が白い俺だった。

「探したんだぜ」

「ちょっとまで。お前の所にはクロノとシグナムとザフィーラが……」

「そいつらなら倒したぜ」

「なっ!?!」

「まあ、逃げられたけどな」

ザフィーラなら勝てないと分かったら体勢を立て直すか、クロノとシグナムの堅物コンビが逃げる状況が考えられない。

「デバイスも凍らされて、粉々にされたしな……」

デバイスがないなら、互角。いや応援がくるまで引き延ばせば。

「とにかく中枢が破壊された以上、俺がお前を破壊して、全てを破壊させてもらうわ」

「そんなことさせない」

「そんなボロボロで言っても仕方ないぜ」

俺は海に外套を投げ捨て、それに反応して『破壊』のマテリアルも



外套を投げ捨てた。

「決闘!!!」

ノリは一緒なんだな。

60話 終わった戦い そして別の意味で終わった……（後書き）

（楓の拷問室）

楓「なあ、もうすぐ四月だな……」

土屋「どうしたんだテンション低いな」

楓「だって進級の季節だぜ……」

土屋「ドンだけ学校が嫌いなんだよ」

楓「高町（兄）と同じくらい」

土屋「分かった。その言葉だけで十分だ」

楓「で、次回でマテリアル編終わりだろ」

土屋「多分な」

楓「でもさ、GODがまだ発売してないから大丈夫なのか？」

土屋「その辺はまだ内緒だ」

楓「じれったいな」

・次回予告

始まった戦い

楓は勝利をつかみとれるのか？

次回「拳の戦い」



「なら俺も」

「させるか!!」

「ブツファ!？」

楓が『破壊』の腹を蹴って腕を振りほどく。

「クツ!？」

「どうした？俺のコピーにしては弱いじゃねえか」

「クソつたれ!!」

「ブツ」

殴られ俺の口から血が零れる。

「ハア、ハア、グフツ!!」

さらに楓の腹を何撃も拳を入れられる。

「ブフツ……」

楓の口が真っ赤に染まる。

楓の動きが鈍くなり2人の周りの竜巻が消える。

「落ちろオリジナル!!」

「バア！！！！」

俺の体が海に落ちる。

「終わったか・・・」

「まだだ」

楓が海から飛び出て、『破壊』に周り蹴りを入れる。

「ゴフア！！！！」

楓の蹴りがもろに入り、『破壊』が腹を手で押さえた。

「てめえ、不死身化よ」

「俺、転生者つすから」

楓と『破壊』の拳と拳が激突する。

「何でお前は戦う。お前の目的はもう終わったんじゃないのか？」

「さあな。でもきつとまだ終わってないんだよ。俺の戦いは」

「終わってないねえ」

「だから俺はまだ死ねないんだ」

「さすがオリジナルと言いたいが、まだ俺も負けられないんでねえ」

「じゃあ。決着つけようぜ」

2人の殴り合いがいつそう激しくなる。

2人の戦いはすでに肉眼では捕らえられない（比喻です）ほどになっ  
っている。

「グッ!!」

「グア!!」

そして

「ブア!!」

「ハア!!」

決めたのは

「ハアツ!!!!!!!!!!」

楓のカウンターだった。

「勝った!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

『破壊』の体から力が抜けて落ち始め、勝利の手応えを感じた途端、  
楓は意識を失った。

海に落ちそうになる楓を体勢を立て直した『破壊』が抱き留めた。

「勝利の手応えを感じた途端気を失うか。そうとう気を張ってたんだな。まったく、敵の生死くらい確認しろよ」

『破壊』が楓を抱えながら、砂浜に降りて、楓を降ろした。

「やっぱり俺も正義の味方ってのもコピーしたのかな」

『破壊』の体が消え始める。

「全く、お前の勝ちだ」



S i d e  
楓

楓は目覚めると包帯をグルグルに巻かれ、ベッドに固定されていた。

「なんだ、この状況は。って何だこれ!？」

「俺がやった」

「マルコ……」

俺の右側にいたのは、よれよれの白衣を着て今にも海に遊びに行きそうな男、マルコだ。

「お前はこれくらいしないと、すぐに動き出すだろ」

「今は動きたくないさ。疲れた」

「だろうな。疲労が100%を超えているからな」

「でも、無事でなによりよ」

「あの、何でリンディさんがいるんですか？」

俺の左側。ベッドを挟み込んでマルコと向き合っていたのは我らがアースラ艦長リンディ提督だ。

「私がいたら可笑しい？」

「いいえ」

アースラにリンディさんがいても可笑しくはないけど・・・

「でも、マルコ2等空尉と知り合いだなんて」

2等空尉？マルコって医局の人間じゃなかったっけ？

「止めてください。昔の話です」

マルコが照れくさそうに髪を掻きむしる。

「楓。どうだい？体は」

クロノが部屋に入ってきた。

「体が悲鳴上げてるよ」

「そうか」

「なあクロノ。事件はどうなった？」

「無事解決さ。現場を元通りにし終えたら今回の仕事は終わりだ」

「そうか。みんな無事か？」

「多少傷は負ってるがみんな無事だ。みんな家で休んでるよ」

「よかった」

「君は人の心配より自分の心配をしたほうがいいと思うが」

「そうだな」

俺とクロノは笑い会う。

「クロノ。俺、やっぱり執務官試験受けてみる」

「そうか」

「不幸になったり、なるうとしてる人を救える仕事だからさ」

「で、僕に何をしてもらいたいんだ？」

「勉強を教えてください」

「分かったよ」

これからの俺の道は分からない。とりあえず、あの脳味噌をブチ殺す以外の進路も必要だ。

「さあ。新しいスタートだ！……！！」

『私を直してからにしてくださいね』

「はい……」

修理には3日掛かりました。

## 61話 拳の戦い（後書き）

（楓の拷問室）

土屋「マテリアル編終了です」

楓「ホントに短かったな」

土屋「次回からは少し日常編に入ります」

楓「悪い予感しかしないんだけど」

土屋「とにかく次回から日常編をお楽しみに」

・次回予告

次回「楓VS男子VS女子」

62話 楓VS男子VS女子(前書き)

明日仮面ライダー公開ですね。

ただそれだけです。

## 62話 楓VS男子VS女子

Side  
楓

「雨宮楓です。帰ってきました。これからまた、よろしくお願いします」

2月に入って、俺は学校に復学することになった。

復学して俺にかけられた声は。

《キヤアアアア楓くん！！》

女子からの甘美な声と

《何でてめえ帰って来やがった！！！！！！》

男子からの罵声だ。

激しい声の戦争の境界線を歩きながら自分の席に座る。

「まったくうるさいわね」

アリサが呆れ顔でため息を吐く。

「じゃあ何とかしてくれよ」

「嫌よ。自分で何とかしなさい」

「はあ。隣にいたのがアリサじゃなくすずかかフェイトだったら良かった」

ゴン！！

「殴るわよー！！」

「もう殴ってる……」

俺たちはクラス全員で雪の積もった校庭に出た。

「じゃあ楓が帰って来たのを祝って雪合戦やるわよー！！」

両手に腰を当てて、アリサが高らかに宣言した。

《イエエー————！！》

何だろっこのクラスのノリの良さ。

「ねえ楓。雪合戦って何？」

フェイトが楓に聞いてきた。

「フェイト雪合戦知らないのか」

「うん」



「雪合戦っていうのは、雪を固めて丸い玉にするんだ。そして、相手に当てるんだ」

「当てるだけ？」

「まあ、主なことは、2チームにわかれて戦い、敵陣に配置されたフラッグを奪取、もしくは敵チームのプレイヤー全てを雪玉で撃退すれば勝利となる。制限時間内に勝利条件が満たされなかった場合、その時点で残っていたプレイヤーが多いほうのチームが勝者。残人数でも決着しない場合は引き分けとなる。

以上を1セットとし、2セット先取すれば勝利。

フラッグの奪取で10ポイント、残人数での決着の場合は人数に応じたポイントを獲得し、そのポイントを競うルール、残人数でも決着しなかった場合はビクトリー・スローにより決着させるルールなども存在する。(Wikipediaより) ってことだな」

「凄いなだね」

「後、雪玉に石を入れたり、雪玉と見せかけて白くコーティングした鉄球を投げつけたりするとおよし」

「そうなんだ」

「楓くん。それルール違反なの」

「「あつ、なのはいたの？」

「フェイトちゃんまで！？私の扱い最近雑じゃない？」

なのはの突っ込みの切れが良くなったな。

「ルールは簡単に2つのチームのリーダーの頭に乗せたフラッグを奪った方が勝ちよ。すずか」

「うん。チームは男の子と女の子に別れてプレイします。男の子は赤のハチマキ、女の子は青のハチマキを巻いてください」

よかった。今まで模擬戦とかではみんな対俺っていう、勢力図が描かれたから。

「みんな力を合わせて《雨宮を消す。雨宮を消す》すずかさん!! 敵なんですけど!! 周り敵だらけなんですけど!!」

「どうするアリスちゃん」

すずかがアリスに相談する。

「しょうがないわね。じゃあチームを変更するわ」

アリスが手に持つてるフリップに書き込む。

「楓VS男子VS女子に対戦カードを変更します」

「なに一つ解決してないよ!? 寧ろ悪化してるよ」

「ちなみに男子の優勝チームは一日王様の権利。女子には一日楓を好きにしている権利。楓には……50円」

「少な!! 安!?!」

「それじゃあスタート」

アリサの声と共に戦が幕を開けた。

俺はとりあえず隠れ場のある体育館に隠れた。

「さて、男子なら全力で殺れば勝てるけど・・・」

女子には『統率』のアリサ、『速さ』のフェイト、『万能』のすずか、『運動音痴』のなのはがいる。

「やつかいだな・・・（なのは以外は）」

その時俺の足下に雪玉が投げられた。

《いたぞー！！》

《殺れ！！》

いたのはバットや日本刀を持った8人程度の男子の部隊。

「雪合戦じゃない！？合戦じゃないか！？」

《殺れ！！》

「ちよつと、危ない！？」

俺は全力で雪玉を投げた。

《グギヤアアアア！！》

全弾が股間に命中。わざとじゃないよ？

「……ごめんやりすぎた」

俺はとりあえず両手を合わせ散っていった戦士たちに黙とうを捧げた。

《いたわよ》

「今度は女子かよ！！」

俺は体育館の上にあらかじめ置いてたトラップを震脚で作動させる。

「よし！！これで！！」

女子が高スピードで雪玉を避けた。

「あれ？あれれれれ？」

フェイトじゃないよね？あの子たち。

《今よ！！捕らえて》

「まず!?!」

俺は創造で手からカードを出す。

「来れ(アデアット)」

俺はアーティファクト『テングノカクレミノ天狗之隠蓑』を出して、被って体を消す。

《消えた!?!》

女子たちは俺を血眼になって捜すが見つけれなかった。

俺は屋上に上がり天狗之隠蓑を取って、口から流れる血をふき取る。

「さすがに屋上にいるとは思わないだろ」

だけど、雪合戦で創造を使うとは思わなかった。

「楓!!見つけたわよ」

「ゲツ!?!アリサ!?!」

アリサとすずかや女子数人が屋上のドアを突き破った。

「何でここが!？」

「ごめんね楓くん。教えて貰っちゃった」

「教えて貰ったって誰に」

「さすがが指で空を指すとそこにはへりが飛んでいる。」

「楓くんヤッホー!!」

へりから手を振っていたのはさすがの専属メイドのファリンで。

「ってことは……………」

へりを運転していたのはサングラスをかけたメイド、ノエルだ。

「雪合戦にへり使うのかよ……………」

「そんなのどうでもいいでしょ」

「どうする楓くん。もう逃げ場ないよ」

確かに屋上の出入口は一つ。一応、梯子も備えられているがアリスのことだ。そこも女子に封じさせてるだろう。

「万事休すか……………」

雪が積もってるからって、ここから飛び降りたら、骨折はするな。落ちて無事な場所なんて一つもないし諦めて投降するか。女子に負

けるなら男子よりは増しかもしれない。

いや、何諦めてるんだ？

こんな所で諦めるのが雨宮楓か？

違う。俺なら最後まで足掻いて足掻いて足掻いて足掻き尽くす。

そうだ。K O O Lになれ雨宮楓。

頭を使え。今、考えなくてどうする？

「もう逃げ場ないわよ楓」

「フフフ…ハハハハそれはどうかな」

俺は屋上から飛び降りた。

「飛び降りた!?!」

俺は衝撃を少なくする為に

校庭にいるなのはをクッションにして雪の積もる校庭に飛び降りた。

「にゃ!?!」

「よし!!着地成功!!」

俺は倒れているなのはを校舎に立て掛ける。

「なのは〜!お〜い!生きてる〜か」

「ふゃ〜楓くんが〜そらから〜落ちて〜来たの〜」

なのはの頭の上で回っている をポケットに詰め込む。

「大丈夫だな」

そして、ポケットに入れてない をへりに向けて投擲!!



「きゃー!!」

「へりのコントロールが!!」

へりがどこかに落ちていった。

「ナイスシュート!!」

「ナイスシュート……. . . . . じゃないわよ!!へり落ちたわよ!!?  
怪我したらどうするの!?!」

「やっぱり分かってないな。アリサ」

「何よ?」

「ギャグパートでは人は死なねえんだよ!!」

.....

「そんな全員して可哀想な奴みたいに見るな!!」

俺は泣きながら走っていった。

Side フェイト

私は楓を探しに学校にある小さな林にいた。

楓がいたらトラップを大量に仕掛けていると思ったが、そのような物はないし、見当外れみたいだ。

「動くな」

木の後ろから出た手に口を塞がれた。

「ふんふんふんふん」

私は大声を出そうとしたけどどうまく声が出せない。

そして、その人物は

「ヒヤン!!」

私の背中に雪玉を入れてきました。

「フェイト。俺だ」

「冷たいよ楓……」

それは楓でした。



## 62話 楓VS男子VS女子（後書き）

（楓の拷問室）

楓「これ雪合戦違う」

土屋「雪合戦が出来るならええやん。俺の町全然雪ふらへんから、長野行ったときの雪が、ホンマ感動だったやで」

楓「何か今日のこいつのテンションが可笑しいな……」

楓「壊れたか……」

・次回予告

楓はこの状況を打開し、アリサを仕留めることが出来るのか？

次回「毒を盛って、毒を制す」

63話 毒を盛って、毒を制す（前書き）

4月ですね。

毎年来るこの季節は嬉しくもあり、寂しくもあります。

とりあえず頑張ります。

ちなみに毒はフェイトです。

63話 毒を盛って、毒を制す

Side 楓

俺はあの後、林に逃げ込んだ。

しかし、どうするかな。

と考えてる時にフェイトを見つけた。

「……そうだ」

俺はフェイトの口を手で抑えた。

「動くな」

「ふんふんふんふん」

ここで正体を明かすのは俺らしくないのでひとまず雪玉を入れてみた。

「ヒヤン!!--」

「フェイト。俺だ」

フェイトが体を硬直させたところで正体を明かす。

「冷たいよ。楓」

「ごめん。つい、やってみたくて」

「もう」

俺はしゃがみ込んだフェイトを立たせた。

「それでさ、フェイトに頼みがあるんだけど」

「頼み？」

「俺の仲間になってくれ」

「仲間！？でも、そんなことしたらみんなに悪いし」

「頼む。このままだと間違いなく俺の命と貞操は奪われてしまう」

「でも……」

「頼む。仲間になってくれたら、今度2人でどこかに遊びに行こうぜ」

「えっ！？2人！？」

フェイトが驚く。

「2人じゃ、いやか？」

「うん。いや、2人がいい」

「それなら仲間に」

「なる！！なる！！なる！！」

予想外にやる気だが、まあいいや。

「で、どうするの」

敵の残り戦力は男子数人。女子ほぼ全員（なのはout）だ。

「まず男子のリーダーを潰す。その間にフェイトが女子を一人ずつバレない様に仕留める。」

「男子のリーダーってどれくらい強いのか？」

「この初等部に俺より強い男子がいると思うか？」

「……絶対いない」

「自分で言ったのも何だが辛いな……」

「男子のリーダーを倒したらどうするの？」

「2人でバレないようにアリサを狩ればいいんだが………とにかく2人なら何とかできる」

「うん。2人なら」



「行くぞフェイト。俺たちは雪合戦で勝つ」

作戦開始。

俺はベンチに座って、周りを囲まれている男子のキャプテンを見つけた。

《いたぞー！雨宮だ》

男子がバットを取り出す。

「バットって野球でもするのか？」

《うるさい。お前みたいなイケメンに何が分かる》

「分からないな。俺とお前らは腐ってるものが違うからな」

《腐ってるものだどー！》

「ああ。お前らは顔が腐ってる」

《なんだとー！ふざけるなー！なら、お前は何が腐っているんだ》

俺は……

「心が腐ってるんだよ」

俺は隠し持っていた雪玉を投げた。

「こっちは野球経験者がいるんだぜ。サッカーをやってるやつのは  
ールなんか打つてしまえ」

男子がバッドを構える。

「確かに俺サッカーの方が好きだ」

でも………

「フォークも投げられるんだよ!!」

《ウオオオオオオオオオオ!!》

フォークが囲んでいた、男子の命を刈り取った。

「そんなバカな……」

「ちなみにカーブとチェンジアップもいけるぜ。ナックルは無理だ  
けどな」

じりじりとリーダーに近づくと、リーダーはベンチから後ろに転倒  
して、立てずに後ろに下がって行く。

「待ってくれ。そうだ、俺に出来ることならなんでもしよう」

「興味無し」

旗を抜き取って、持つてる雪玉を全部当てて、雪で生き埋めにした。

「じゃあな、山田」

俺はフェイトと合流するために後ろを向いて、歩いた。

「俺は・・・斉藤だ・・・」

少しして、さっきの林に戻ると、フェイトの足下に無数の屍がいた。

「さすがフェイトだな（悪い意味で）」

「大変だったんだよ」

これで残りは6人つてところか・・・

「フェイト。クロノに連絡して欲しいことがあるんだけど」

「クロノ？大丈夫だけど」

フェイトが通信を繋ぐと書類に埋もれたクロノが現れた。

「クロノ生きてるか？」

「楓・・・か。どうかしたのか？」

闇の書事件と闇の書の欠片事件の後かたづけで、クロノの目には綺麗な隈が出来ていた。

「ちょっと頼みがあってな。少し外に出れ」「すぐに行こう!!」「...  
ああ。そうしてもらえると助かる」

「で、頼みつてなんだ」

俺はクロノに頼み事を告げた。

俺は校庭のど真ん中にフェイトと共に立つ。

「フェイト。あんたが裏切るとわね」

「ごめん。アリサ」

アリサがすずかと女子4人を連れて、近づいてくる。

「楓。もう逃げられないわよ」

「ああ。逃げも隠れもしない。雪だけでお前らを倒してやるつもりじゃないか」

「へへ。そんなこと言っているのかしら」

「フェイト行くぞ」

俺とフェイトは構えた。

その時、俺たちに暖かい雨が降り注ぎ、俺たちの持っていた雪玉と作っていた雪玉が溶けた。

「雨？いや、今日は一日中曇りだったはず・・・まさか」

俺が空を見ると、戦闘機がタンクから水を大量に流していた。

「これは・・・」

「鮫島とファリンさんとノエルさんに頼んだのよ」

忘れてた・・・

「あんだ、言ったわよね。雪でお前らに勝つって。でも雪がないんじゃないでしょうもないわね」

こいつが俺と同格の才能の持ち主だっことを・・・

「さあ、かかって来なさいよ。それとももう手も出ない？出ない？」

アリサが空に向かって高笑いをした。

「なあ、アリサ」

「何よ？降参？」

「雪がなければさ……」

俺は指を空に指す。

「作ればいいんだよ」

俺の指に雪が舞い落ちる。

「雪？だからどうしたの？雪玉を作る時間なんて「あるんだよ」！  
？」

アリサが空を再び見ると空に巨大な雪玉が現れる。

その大きさプール一個分。

「嘘？なんでよ」

「クロノに魔力を込めた雪を作ってもらったんだよ。それを雲より  
上で集束させてよつくりと大きくしていく。そして、お前が手を出  
しきったところでお披露目したんだ」

「楓くん。魔法なんて卑怯だよ」

すずかが文句を言うが俺は俺の考えを言った。

「だって俺は雪で勝つっていったら？」

俺は雪玉の標準をアリサたちに向けた。

「行くぜ。必殺！！名前はまだ未定！！」

巨大な雪玉はアリサたちを包み込んだ。

「いただきます」

フェイトがアリサのフラッグを抜き取ったことにより、俺たちの勝利が確定した。

「優勝者は楓くんです」

すずかが疲れ切った顔で言う。

「なあ、アリサ。優勝したんだから俺のお願い聞いてくれよ」

「もう、どうでもいいわ。私たちのできることにしなさいよ」

「ああ、お前らにして欲しいんだ」

「何が御望み？」

俺の望みは……

「クラスみんなとのOHANASI」

クラスが全員凍り付いた。

「こうなることが分かって、戦闘機や日本刀を使ったんだよね？」

「そ、それは・・・」

「ハハハ!!」

《ギヤアアアアアアアアアアアア!!》

その後3時間、断末魔が続いたそうだ。

(なのはは、6時間後に目を覚まして雪合戦の記憶を失ってました)





**63話 毒を盛って、毒を制す（後書き）**

・次回予告

フェイトと楓は遊園地に行く

2人のデート？はどうなるのか？

そして、それをつける3+1人組とは

次回「フェイトと遊園地でデートなの？」

64話 フォイトと遊園地でデートなの？（前書き）

最初に言っておきます。

フォイトがヒロインとご一緒わけではありませぬ。

64話 フェイトと遊園地でデートなの？

Side  
楓

俺、雨宮楓は女の子と二人きりで待ち合わせということをしたことがない。

はやてと図書館で待ち合わせをしたことはあるが、それもデートとは言えなかった。

そもそも俺みたいな男がデートなど出来るはずもなく、前の世界では19まで貞操を守り抜いたのだ。

AM・7:50

俺は待ち合わせ場所の駅に着いた。

ちなみに待ち合わせ時間は9:00だ。

いや！？別に楽しみなわけでも、緊張してるわけでもないぞ！！

でも、フェイトが先に来たらと考えると、男として情けないわけでありまして。

AM・9:00

「おはよう。楓」

ちょうどに来ました……

「俺も今来たところだよ」

嘘です。

「フェイト似合ってるな」

「ありがとう」

フェイトはいつもとは対象的に白いジャケットを来ていた。

ちなみに俺の服装は青いジャケットを羽織って、下は白いTシャツだ。

「リニスを選んでくれたんだ」

「リニス。最近あってないけど元気か？」

「うん。今はリンディ母さんの手伝いしてるんだ」

そついやリンディさんとも最近あってないな。この前会ったのもマテリアル事件だからな。あのときは。体が包帯でグルグル巻きにされて動けなかったし。

「そつだ。リニスとアキラから伝言があるんだ」

「伝言？」

「出番を増やしてくださいって」

スマン、リニス。お前の出番はまだ先だ。後、アクイラ。お前は俺の腕に着いてるんだから自分で言え。

「リニスについては考えとくから行くこつぜ」

「うん」

するとフェイトがモチモチとし始めた。

「どうしたフェイト。トイレか？」

「違うよ！ー！楓じゃないんだから」(14話を参照)

「言って見るよ」

「あ……」

「あ……？」

「手……繋いでもいいかな？……駄目」

俺は左手でフェイトの右手を繋いだ。

「はう！？」

「駄目な訳ないだろ」

「う、うん」

「切符は買っているから乗るぞ」

俺はフェイトの手を引きながら改札に向かった。

No Side

AM・6:00

楓が駅にやってくる1時間50分前にやって来ていた3人の女たちがいた。

「ねえ、アリサちゃんホントに楓くん来るのかな？」

「間違いないわ。昨日の雪合戦の約束らしいから」

アリサがなのはに自慢顔で言う。

「でも、楓くんって早起き苦手だからこんなに早く来る意味があるのかな？」

「そうだよな。私たちが誘ったときも5時間、遅れてきたもんね」

すずかの言葉でなのはは苦い経験を思い出す。

「でも、楓はかなり計画的に計画してたぜい」

3人は右を見た。

「「「誰!?!」」」

「通りすがりの傍観者だにや〜」

「あんた誰よ!!!」

「しがない探偵だにや〜」

「探偵さんなの?」

「探偵さんですか?」

「なのは!!!すずか!!!なに納得してるのよ!?!」

「カリカリすると良くないぞ。」

「誰のせいよ!!!」

「楓?」

「あながち間違っていないから否定出来ないわ……」

「それで、探偵さんがなんの用なんですか?」

なのはが探偵もとい飛鳥に聞く。

「銀髪で剣持って乱暴で高飛車なレディからの依頼でな」

（レイリルさんだ……）

「あいつのデート風景を撮してこいって言われてるんだよ」



飛鳥がすずかに紙を渡す。

「これは?」

「あいつの今日のデートの計画書だ」

なのはたちが唾を飲んで計画書を読む。

A M ・ 9 : 0 0 ・ 待ち合わせ

A M ・ 9 : 1 0 ・ 電車に乗る

A M ・ 9 : 4 5 ・ 駅に到着

A M ・ 1 0 : 0 0 ・ 遊園地に到着

く遊園地で遊ぶく

P M ・ 0 : 0 0 ・ レストランで食事

く遊園地で遊ぶく

P M ・ 7 : 0 0 ・ 遊園地を出る

P M ・ 7 : 1 5 ・ 電車に乗る

P M ・ 8 : 0 0 ・ 解散

「何か本格的なの」

「そつだね」

「うづやまs…じゃない私たちに黙ってこんな面白そうなことを」

「とりあえず手をだしたら殺されるから傍観して置くのがいいと思うがどうする？」

「そつね。分かったわ」

ここに同盟が結成された。

そんなことが起こっていることを知らない楓は電車に乗っていた。

「人多いね」

「休日だからな。遊園地に行く人もいるし、その先の駅にはシヨッピングモールがあったはずだからな」

楓たちの目的地のある駅は今一つ駅をすぎたから後3つ目の駅だ。

「フェイトって遊園地に行ったことあるのか？」

「うづん。初めて」

「そつか。なら楽しいこと全力で教えてやる」

「おねがい」

2人が微笑ましい会話をしていると、杖を着いたおばあさんが辺りを見回しながら歩いてくる。

「フェイト。ちょっとすまん」

「楓？」

楓が立ち上がって、おばあさんに話かける。

「おばあさん。この席に座ってください」

「ええ。でもご迷惑じゃ」

「迷惑なんかじゃありませんよ。僕がそうしたいんです」

「でも・・・」

「そんなに遠慮される方が気分が良くないですよ」

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきます」

楓は自分の座っていた席におばあさんを座らせて、フェイトの前に立って吊革を持って立った。

「楓」

「ん？どうした？」

「うっん、何でもない」

「着いたぜ。遊園地!！」

「すごい!!!大きいね」

「なあ。フェイトなんか行きたいところあるか?」

「うっん」

フェイトは考えてパンフレットに写真を指さした。

「ジェットコースターか。いいな。行くぞ」

「か、楓!？」

楓はフェイトの手を握りながら走り出した。

「フェイトちゃん。お話しないとね」

「なのはちゃん落ち着いて」

「それにしてもこんなところに遊園地があったなんてね」

「3年前に作られた遊園地だからな。しかもCMもされないB級遊園地だからな」

「そうなんだ」

「でも、このマスコットキャラクターがウンジャラゲゴライアスだったのね」

「この遊園地の名はウンジャラゲゴライアスランド。3年前に経営者である少年が作った遊園地だ。」

「「わあああああああああ!!!」」 楓・フェイト

「ちょっと待つて。タイムタイム待つて待つてああああああああああああああああああああ」 アリサ

「待つて。お願いだからにやああああああああああああああああああああああああああああ」 なのは

「2人とも落ち着いて。大丈夫だからああああああああああああああああ

あああああああああああああ　　「　　すずか

「まったく。この程度で怖がるなんて子供だにゃあ。それじゃあこ  
の先の人生やってな・・・（気絶）」　飛鳥

「楽しかったね楓」

「ああ。楽しかったな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「大丈夫なのはちゃん。アリサちゃん」

「大丈夫じゃ・・・」

「ないの・・・・・・・・」

ジェットコースターで酔った2人をベンチに座らせる。







「どつした？」

「お母さんがいない・・・」

男の子は今にも泣きそうな顔をしている。

「君名前は？」

「かざぎり しゅうや」

「しゅうやか。いい名前だ」

楓が腹に空気を込める。

「かざぎり しゅうやくんのお母さん！ー！いらっしやいませんか！  
」！

それから3回ほど叫んだが返事はなかった。

「近くにいないのかもね」

「迷子センターに行くぞ。もし、しゅうやのお母さんが探してたら、そこにたどり着くし、放送もできる」

「そつだね」

楓はしゅうやをおぶって迷子センターに向かった。

「ありがとうございます」

「いいえ。僕らはしゅつやを連れてきただけですから」

案の定母親は迷子センターでバツタリ出会った。

「実はこの子と今度遠くへ引越すことになって、最後にこの町で思い出を作りたかったんです」

「そうですか」

「迷子になったとき連れてこなければ良かったんじゃないかって思いました」

「見つかって良かったですね」

「はい。お名前をお聞きしても」

「雨宮楓です。一応このオーナー代理をやっています」

「えっ、でも小学生じゃ」

「ちょっとわけありで。なっ、みんな」

《はい。雨宮さん》

迷子センターの従業員が答える。



を近付けるな」

《イエス・ユア・マジエスティ》

「アクイラ 双剣モード!!!」

楓がアクイラを2つの青い双剣にして化け物の攻撃を受け止める。

「大丈夫かしゅうや」

「う、うん」

「泣かずによく母さんを守った。後は俺に任せて逃げる」

「うん」

母親を立たせてしゅうやが母親を連れていった。

楓がベルトを巻きパスケースを巻く。

「今回は記念だ。変身!!!」

機械音がなり赤いボタンを押して、ベルトにパスをかざした。

『Sword Form』

楓は仮面ライダー電王に変身した。

「俺、参上!!!」

楓はデンガツシャーをデンガツシャー ソードモードに組み立てる。

「楓私も」

楓が手の平をフェイトに向けて止める。

「時間ないから、最初からクライマックスだぜ」

「グギヤア!!」

化け物を斬りつける。

「てめえらは何もんだ？」

「グギイ」

「話せないか。なら倒させていただく」

化け物の攻撃を避けながら斬りつける。

「グギヤ!!ググツ!!」

その時、化け物が両手から赤いレーザーを出す。

「うあっ!?!」

レーザーが楓の胸に直撃して火花が飛ぶ。

「グググググ」

「レーザーって反則だろ」

「魔法じゃない・・・」

フェイトの使い魔。もしくは次元を漂流してきた原生物という考えが外れる。

「楓!!大丈夫?」

「ああ。大丈夫だ。次で決める」

楓はパステスをベルトにかざす。

「俺の必殺技!!」

デンガツシャーが光り、化け物のレーザーを避けながら横から斬る。

「ゲアアアアアアアアア!!」

化け物は木っ端みじんに爆発した。

楓は変身を解いた。

「楓。大丈夫?」

「今回は誰にも怪我がなくて良かったよ」

「そっだね」



「アリスちゃん。なのはちゃん。探偵さん。あれ見て」

2人がツツコムとすずかが何かを見つけた。

「楓さんとフェイトちゃん!!」

「やっと見つけたわ」

「行くぞ」

彼らの追跡はまだ続いている。

Side 楓

俺たちは走って観覧車に乗り込んだ。

「楓これは？」

「観覧車って言うんだ」

フェイトは俺の前の席に座った。

「心が和らぐね」

「そうだな」

観覧車から見える海には、もう夕日が半分沈みかけていた。



「楓にずっと言いたかったことがあるんだ」

「なんだよ。かしこまって」

「楓。いつもありがとう」

「どうして」

「私のことを救ってくれたこと。母さんのこと。リニスのこと。砂漠で助けてくれたこと。全部ありがとう」

俺は照れくさくて髪を掻いた。

「俺は手を貸したただだよ。お前を救ったのは俺となのはだし。プレシアさんを説得したのは俺とクロノ。リニスはプレシアさんの魔力が残ってなかったら、アウトだった」

「それだとしても、みんなをそうさせたのは、楓だよ」

「そうかな？」

「楓は優しいから。だから……」

そして、俺に唇に柔らかいものが触れた。

「これは今日のお礼」

「えっ！？あ、うん」

俺は何が分からずに観覧車が降りるまで頭が働かなかった。

No Side

遊園地から出て、楓はフェイトと別れて人目のない公園に来た。

「ねえ、アリサちゃん。フェイトちゃんと別れたんだから帰ってもいいんじゃないのかな」

「なのは。このままでいいの？あいつにお仕置きしなくていいの？」

「そうだな。お仕置きしなきゃいけないな……」

「『えっ！？』」

アリサたちが後ろを向くとそこには楓の姿があった。

「えっ！？だつて楓くん！？」

すずかが指を指した方向には楓がいた。

「あれは……」

ボン！！

「分身だ」

煙を立てながら式紙が元の紙に戻った。

「い、いつから知ってたの!？」

なのはの問いに楓は笑顔で答えた。

「最初から」

「ねえ、アリサちゃん」

「どうしたのすずか!?!」

「探偵さんが……」

アリサは周りを見回すがさっきまでいた飛鳥がいなかった。

「違うのよ楓!! 私たちは協力してただけで……」

「何言ってるんだよ……主犯がいても……共犯だろ……」

「……あの……その……」

「OHANASHIしよつげ」

「……イヤー……!?!」



## 64話 フェイトと遊園地でデートなの？（後書き）

（楓の拷問室）

アクイラ「私アクイラが紅幽鹿様の魔法少女リリカルなのは〜紅〜にゲスト出演しました」

楓「どうぞ。そちらもよろしくお願いします」

・次回予告

あれからの八神家はどうなっているのか？

ちよつと行ってみるか

みたいなノリで行ってみました

次回「幸せな家族」

## 65話 幸せな家族

Side 楓

「シャマル。コーラ持ってきて」

「ごめんなさい。今、切らしてるんです」

「じゃあ抹茶をミルクと砂糖持ってきて」

「はい」

「雨宮。何故お前は当たり前のようにここにいるんだ？」

リビングに入ってきたシグナムが俺に向けて言う。

「お帰り、シグナム姉さん。今日は何処に行ってたんだい？」

「ああ、クロノ執務官に呼ばれてな。アースラまで行って来たんだ」

「はやくてたちも一緒に行ったのか？」

「いや、主は来てないはずだが。シャマル主はやくは何処にいらっしやる？」

「みんなでザフィーラの散歩に行ってるわ」

俺はシャマルから緑茶を受け取り、ミルクと砂糖を入れてかき混ぜる。

「ふうん。みんな今日はこれから仕事は入ってないんだな」

「えっと、今日はみんな午後からは仕事は」

「入っていないかったはずだ」

ここで2つの事件の後の八神家について語るから、説明文がめんどくさい人は飛ばしてもOKだよ。

八神家は管理局への従事をする事になった。(まあ俺もだが)

まず、シグナムとヴィータは武装隊に入隊した。

シャマルは医局に入局した。

ザッフィーは局には入局せず、はやてのボディガードをしている。

はやては管理局の保護観察を受けて、今は囑託魔導師を目指して勉強してる。

そして、リインフォースだが、バグが俺と融合し、切り離されたことにより能力がかなり制限されている。ユニゾンは5分保てず、魔力も安定していない。まあ、俺が生きている限り消えることはないし、俺に何かがあった時の為に零時迷子を設定している。

さあ、説明はここで終わりだ。

「晩飯つて考えてるか？」

「はやてちゃんが帰ってきたら、私とはやてちゃんて買い物に行きますけど」

「なら行かなくていいぜ。ほれ」

俺はビニール袋をシャマルに渡す。

「これお肉ですか」

「さっき買ってきたんだ。俺のおごりだ」

「ありがとうございます。冷蔵庫に入れてきますね」

シャマルが冷蔵庫に向かった。

「ただいま」

ヴィータがリビングに飛び込んできた。

「お帰りヴィータ」

「あ、楓じゃん！どうしたの？」

「楓くん。今日はどうしたん？」

はやてと車椅子を押すリインフォースとザフィーラが続いて入ってきた。



「焼き肉しにきた」

「焼き肉!!!!!!!!!!!!!!」

「ええな。焼き肉」

ヴィータの目が輝いている。

「落ち着けヴィータ」

俺たちは2カ所に別れて肉を焼くことにした。

右のプレートでは俺、シグナム、ヴィータが、左のプレートではやて、シャマル、リインフォースが肉を焼く。

ちなみにザフィーラはやてが別に焼いた肉をテーブルの下で食べている。

「あつ!!!楓!!!あたしの肉取ったな!!!」

「へへん。肉は取ったもん勝ちだろ？」

「なら、この肉は私がいただく」

「俺の育てた肉!!!」

「取ったもん勝ちなんだろ？」

「クソ!!」

「あれは何なのでしょう。か我が主」

「リインフォース。あれは見たらあかん。不毛な戦いや」

「はやてちゃん。私たちは平等に分け合って食べましょ」

「雨宮!! 私肉を!!」

「ヴィータ!! てめえ!!」

「シグナム・・・殺す!!」

「ククブア!!」

「この戦いは不毛だった」

俺はお気に入りの八神家の屋根で横になって星を見ていた。

「雨宮楓、起きているか」

「リインフォース。どうした？」

リインフォースが俺の隣に座る。

「体に不具合はないか？」

「問題ねえさ。マテリアルの一見の後から肉体も精神も好調だ」

「それは良かった」

「リインフォース。今の生活はどうだ？」

「幸せだ。味わったことのないくらいに……」

「そうだな」

「この家にいればどんな状況でも幸せだ」

「雨宮楓。私はお前に迷惑をかけている……」

「そんなことないさ。お陰で俺はみんなを守れた」

そう。失わずにすんだ。

「だからそんな辛気くさい顔するなって」

俺はリインフォースの頭を撫でた。

「もしも、まだお前が罪の意識やこれからの不安を抱えてるなら、  
幸せに生きてみる」

「幸せに……」

「お前は誰よりも責任を負いすぎてるんだよ。だからこれから幸せに生きるんだ」

「でも私はお前や多くの人を傷つけた」

「だからだ。お前には責任がある。幸せになれ。じゃないと俺たちも報われないだろ」

「雨宮楓……」

「あと、その呼び方やめろ。楓でいいって」

「……楓」

「ああ。リインフォース」

俺はリインフォースとリビングに降りた。

「リインフォース、楓くんと一緒にいたん？」

リビングに降りるとはやてとシャマルが食器を洗っている。

「はい、主」

俺はさっきの戦いの後、ソファアの上でヴィータに枕にされているザフィーラの隣に座る。

「……話をしていたのか」

「俺たちがあつた時と似たような話だ」

「……そうか」

「お前は詮索しないでくれるからやりやすいよ」

「……ふっ」

ザフィーラは珍しく笑つた。

「……しかし、楓。我を枕にしないでくれるか？」

「だってふかふかしてるんだもん」

「だな」

俺とヴィータは枕を<sup>ザフィーラ</sup>有意義に使つた。

## 65話 幸せな家族（後書き）

・次回予告

2月14日

その日

惨劇がおこる

なぜこんなことになったのか

誰か

教えてください

どうしてこうなったのか

次回「アクイラのなく頃に」 ほとんどネタです

・次章予告

雨宮楓。

小学5年生。

執務官になりました。

インターミドル編始まります。

66話 アクイラのなく頃に(前書き)

ネタです。

## 66話 アクイラのなく頃に

どうしてこうなったんだろう・・・

あの輝いていた聖祥に帰りたい。

N O s i d e

A M ・ 1 0 : 3 0 ・

職員室でなのはの担任の目の前の電話がなる。

「はい。こちら私立聖祥大附属小学校です」

「雨宮です・・・」

「雨宮君？サボリと思ったわ。どうしたの？」

「人をサボりの常習犯みたいに言わないでくれませんか？」

「みたいじゃなくて、そうなんですよ」

「まあ、そうですが。ちょっと体がだるくて」

「だるい？風邪？珍しいわね。入院することならよくあるけど」



「はい」

「病院には行ったの？」

「病名なら分かりますから」

「分かるの？（確かに雨宮くんはお医者様のお手伝いをしてるって聞いてるけど）」

「実は……」

「実は……？」

「早めの五月病です」

「早くいい……」

「はい……」

S i d e  
楓

ダルー〜 ダルー〜 d a r u i

俺はしょうがなく学校に行くことにした。

だけど、今日は町がそこらかしこ浮き足だってるな。

今日って何かあったっけ？

そう考えて30分、学校に着きました。

えっ、30分も考えてたかって？

そんなわけありませんよ。

色々なことを考えてましたよ。

ゲフン！！ゲフン！！

今度はそう考えている内に靴箱へ……………

「何だこれ……………」

俺が見たのは靴箱から流れ出ている箱、箱、箱、箱の山。

「何でこんなことに…………イジメ？いや……………」

俺は携帯を開く。

「2月・・・14日・・・」

そうかバレンタインか。だけど、この量って。少なくとも見積もっても100はあるぞ!?

少しは人気があるのはさすがの俺でも自覚はしていたが・・・

俺はバレンタインはあまり好きとは言えない。

返すのがめんどくさいからだ。

俺は箱の山から自分の靴を取り出す。

「さてと、教室は・・・戦場だな」

男子が狂ってるだろうな・・・

「・・・何これ？笑うところ？」

教室に行くと男子が文字どおり死んでいた。

しかも、女子がない。



「死んでないからな……」

「やりたくなるだろ？」

俺は女子を捜すために走り始めた。

3分ほどして6年生の教室の前で女子生徒を見つけた。

「すみません先輩！！他の女子見てませんか？」

「あ……ま……み……や……く……ん  
？」

「えっ！？」

それはまるで気を失った目をしていて。

「あぶあみやくん！！」

「ギター！！！！」

俺は来た方向にターン！！

階段まで走ったが。

《雨宮くん!!!!!!!!!!!!!!!!!!》

大量の女子発見って行ってる場合じゃない!!

「怖wwwwww!!」

俺は女子のいた方向に走ってUターン!!

そして、フェイントを使って女子をかわして、もう一カ所の階段から1階に降りた。

「は……は……は……」

最近雪合戦いらい体を動かしてなかったからな……

俺はとりあえず学校から脱出すべく1階に駆け下りた。

「早くジェイルのところにも身を隠さないと……」

「見つけたわ。楓!!」

「見つけたよ。楓くん!!」

そこには女子の軍勢のバリケードで入り口を塞いでいる女子の前に立っていたのはアリサとすずかがいた。

「アリサ、すずか……お前ら正気か？」

「何……言ってる……のよ……」

「そう……だよ?」

不味い。明らかに正気じゃない……

「アリサ!―すずか!―そこを通してくれ」

「いいわよ」

「へっ!?!」

予想外のセリフだった。俺を捕らえようとしている奴らが俺の退路を開くなんて。

「みんなお願い」

すずかの言葉でバリケードが開いた。

「……なんで……これは……」

そして、俺は見た。

校門からぞろぞろ入ってくる、女子、女子、女子の大群。

「ファンクラブはこの町に及んでるってことよ」

「ちなみに会長はアリサちゃん」

再びバリケードが閉まった。

「じゃあ楓」

「捕まってる」

「全力で拒否させていただく!!」

俺は校舎の中を再び逃げ始めた。

「くそ……行き止まりか……」

俺は曲がり角を曲がることを繰り返して奴らを撒いたけど……

「屋上まで逃げ切れれば手だてはあるんだけどな」

《いたわ!!捕まえて!!》

「最近こんなことばっかだ……」

俺は壁にもたれかかって座り込む。

《捕縛!!》

トラップも無い、傷が開くから力も使えない、退路もない。



「ホント嫌になるよな……」

ドン!!

音を立てて女子が全員倒れた。

「君はいつも厄介ごとに巻き込まれるんだな」

「それも楓のいいところだよ、クロノ」

「クロノ、フェイト!!」

俺を助けてくれたのはクロノとフェイトだった。

「助かったよ。でもどうしてお前らが？」

「実は……」「フェイトここは危険だ……そうだね。どこが見つからないところに行かないと」

「なら保健室に行こう。あそこなら大丈夫だ」

「楓……僕を連れ込んでどうする気だ？」

「クロノ。お前もボケを覚えたな」

俺はクロノとフェイトを連れて保健室に入った。

「楓。きたはいいが、これで大丈夫なのか？」

「みんながきたら突破されちゃうよ？」

俺は保健室に並んでいる3つのロッカーの真ん中を開けた途端、ロツカーが動き、ロツカーの裏に畳6畳分の部屋が現れる。

「ここが俺の部屋だ」

「なんでこんな秘密基地が保健室にあるの？」

「君は何を作ってるんだ？」

「秘密基地だからな黙秘させていただく。だけど、秘密基地だからバレナイと思いたいね」

「たぶん無理だな」

「楓のフェロモンをかいでその内来ると思うよ？」

「俺は昆虫か・・・」

俺たちはちゃぶ台をかこんで座った。

「で、何が起きてるんだよ。さすがにギャグパートだからって俺は酷いと思うぜ」

「これはロストロギアの仕業なんだ」

「ロストロギア!？」

「うん。『聖女の祈り』っていう。宝石型のロストロギアだよ」

「なんでそんなもんが」

「この学校に埋まっていたものがこの前の雪合戦の時の魔力が原因らしいんだ」

魔力っていうとクロノに集めて貰った雪か・

「クロノ。俺に謝れ。まず謝れ」

「僕のせいにするな」

「しょうがない。クロノ、このロストロギアの効果を教えてくださいな  
いか?」

「このロストロギアは……」

めんどくさいのでここで説明するがロストロギア。『聖女の祈り』の力はこうらしい。

このロストロギアは、発動地点から半径50？圏内の女性の欲求を増幅させるらしい。本来は、この学校の地下に埋まっていたため魔力で目覚めたとしても発動することはなかった。

だが、バレンタインの女の子たちの俺とつき合いたいと言う欲望が彼女らを変貌させてしまったらしい。

「でも、そんなことがあるならどうしてなのはやフェイトは無事だったんだ」

「私さっきまではやてのところにいたの」

「はやて・・・そうか結界か！！」

「そうだ。あの家はシャマルが念のために魔力結界を張っている。その影響でロストロギアの発動の波動を受けなかったんだろう。そこから考えるになのははまた魔力トレーニングで体に魔力を纏っていたから無事だったんだろう」

「なのは・・・また無茶して」

フェイトが苦い顔になる。

「なあ、クロノ。このロストロギアには期限とかあるのか？」

「今日1日。そしたら、新しい魔力を求めに転生するはずだ」

「ってことは、はやての家に逃げ込めばいいってわけか」

ってことは屋上から飛んで逃げるのが一番だな。

「クロノ、フェイト。俺は屋上に逃げようと思う」

「そうだな。僕もそれがいいと思う。フェイト、君はどうだい」

「いいけど、どうやって屋上に行くの？校舎には人が一杯だよ？」

「俺に任せろ」

俺が入り口と反対側の壁を叩くとエレベーターが現れた。

「屋上直通のエレベーターだ」

「もう僕（私）には君（楓）が分からない」

屋上に入った俺たちを出迎えてくれたのは空を覆うほどのヘリコプターだった。

「フェイト。これってなんの冗談だと思う？」

「このネタこの前もやったわ！！しかも、明らかに悪化してるだろ！！」

一台のヘリからアリサが顔を出した。

「あなたたちはすでに包囲されてるわ。大人しくお縄につきなさい  
!!!」

「楓どうする？ロストログシアの力で操られてるとしても、一般人の前では魔法は使えないぞ」

「アクイラ。俺の体はどれくらい回復してる？」

『60%です。創造なら簡単なものは使えますが、能力はまだ危険です。後、もしかして私の出番ってこれだけですか!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!』

アクイラがないた。

「クロノ、フェイト。俺に近寄れ。瞬間移動で八神家まで跳ぶ」

「駄目だよ楓!!!」

フェイトが俺を制止させる。

「だけど……」

俺が悩んだその瞬間フェイトとクロノが倒れた。

「楓くん。また無理しようとしたよね……」

そこには鬼神？悪鬼？暴君？いや違う。そこには管理局の白い悪魔がたたずんでいた。

「OHANASIIよ」

フェイトとクロノは気を完全に失ってる。

「守らないとこの2人を・・アキラグロブモード」

俺はアキラをグロブモードに換える。

「そうだな・・お前らちよとやりすぎだな」

「何がやりすぎなのかな?かな?」

俺となのはお互いに構える。

「かかってこい悪魔!!」

「ははははは!!楓くん!!」

原作：都築真紀

制作：土屋 ハヤト

設定：土屋 ハヤト

脚本：土屋 ハヤト

主題歌：オカルティクスの魔女

？ 作詞：志倉千代丸、作曲：志倉千代丸

？ 歌：Ayumu (Zwei)

監督：土屋 ハヤト

アキラのなく頃に

数日後

海鳴市連続失踪事件

2月14日聖祥大付属小学校の女子生徒と雨宮楓。執務官クロノ・ハラウンと囑託魔導師フェイト・テストロツサ（現在養子の申請中のため前名字で記載する）も行方不明である。

調査したところ雨宮楓の秘密基地と思われる場所から直筆のメモが発見された。

メモはA4の大学ノートを半分で構成され、

以下がそのメモの内容である。

「私、雨宮楓は命を狙われています。

誰に命を狙われているのかは分かりません。



ただ一つ分かるのはその人数が多すぎるといことです。

なのはとアリサとすずかは犯人の共犯。

相手はへりを所有。

どうしてこうなったのか私には分かりません。

これをあなたが呼んだとき私は死んでいるでしょう。

これのを呼んだあなた。

どうか真相を暴いてください。

それだけが私の望みです。

雨宮楓

「

今日も出番が欲しいとアクイラはなっている。

## 66話 アクイラのなく頃に（後書き）

・次回予告

次回「花見って楽しいと準備と片づけがめんどくさいと思っつのは俺だけ？」

・次章予告

「エイミィさん僕がその程度でつられると」

「  
」

「全力でやらせていただきます」

次章インターミドル編もうすぐ始まるよ

67話 花見って楽しいと準備と片づけがめんどくさいと思っるのは俺だけ？(前)

今回は花見の振りだけです。

67話 花見って楽しいと準備と片づけがめんどくさいと思っるのは俺だけ？

Side 楓

春の日差しがカーテンの隙間から差し込んでくる。暖かな陽気はまるで俺を包み込んでくれるようだ。

『マスター起きてください！！』

「後、6時間35分47秒・・・」

『細かいですね』

「ちょっとまってアキラ」

レイリルが巨大なハンマーを持って・・・

「マスター起きろ！！」

振りかざした！？

「ちよっ！？危！？」

俺は右側に転がってなんとか避けたが、俺の寝ていたところにあつたウンジャラゲゴライアス抱き枕がまるで鯀の開きのように薄く凹んでいた。

「おはようございますマスター」

「お前は俺に恨みでもあるの!?!?こんなにくらったら死んじゃうよ!?!?」

「マスターに恨みの無い人間なんていませんよ?」

言い返せない俺って何なんだろう?

「まあいいや」

俺は時計を見て朝食を取ろうと席に着いた。

時計を見て朝食を取ろうと席に着いた。

時間を見て.....

「遅刻だ!?!?!」

Side なのは

いろんな出合いがあった闇の書事件が終わって、年が明けて、冬が

終わって、そして張るが来ました。

「フェイトちゃん!」

「なのは!」

「おはようフェイトちゃん」

「うん。おはようなのは」

「私たちも、もう4年生だね。去年のクリスマスからあつという間だったな」

「そうだね。小学校と局のお仕事、技能研修と資格試験忙しいしね」

「うん。でもなんだか楽しいけど」

「そうだね」

「あつちでもこっちでもフェイトちゃんと楓くんと一緒なのは嬉しいな」

「私もなのはと楓と一緒にだと心強くて嬉しい」

「えへ」

ちょっと嬉しいです。

「そついえばはやてちゃん」

「あつ！うん。メールきてた？」

「うん、うん。今日の始業式は間に合わないけど明日からだって」

「6人とも一緒クラスになれるみたいだし。楽しみだな」

「うん！ー！」

Side はやて

「はやてさん。八神はやてさん」

「はい」

私は今病院に來ています。

「凄いわよはやてちゃん。ホントにドンドン良くなってる」

「ホンマですか！」

「足の感覚も大分戻ってきてるんじゃない？」

「戻ってきてますね」

「うん。」の調子で行けばすぐ全快しちゃうわね」

「石田先生のおかげです」

「うん、うん。はやてちゃん頑張ったからよ。発作もないから、明日からは復学も出来るし、制服とか用意は済んでるの?」

「もつぱっちり」と

準備品は全部グラムおじさんが用意してくれた。

「しばらくは車椅子通学になるけど・・・」

石田先生は階段のことを心配してくれてる。

「教室は1階にしてもらえらしいので大丈夫です」

「さすが私立。融通がきくんだ」

「そうみたいですな」

「立って歩けるようになるには、まだしばらく時間がかかるしリハビリはきつと大変だと思うけど一緒に頑張ろうね」

「はい」

「そう言えば、シグナムさんやシャマルさんは元気?」

「はい。メチャ、メチャ元気です」

Side out

「ではレティ提督。私たちはこれで失礼します」



「ごめんね。結局夜通し勤務になっちゃったけど、色々助かったわ。ありがとう」

リンディ提督の友人で本局管理局の提督レティ・ロウランがシグナムたちに謝る。

「いいえ。ありがとうございました」

シヤマルがレティに返した。

「シグナムは明日ヴィータと武装隊への出向があるから時間と場所は大丈夫？」

「本日中に追って連絡があるそうです」

「シヤマルは明後日、ザフィーラとリインフォースを連れて来てね支局の方に行ってもらおうから」

「はい」

「それじゃあ、今日はゆっくり休んで、はやてちゃんによろしくね」

「「お疲れさまでした」」

シグナムとシヤマルはエレベータに乗った。

「本局のお仕事って色々、肩が凝ることが多いわね」

「お前は内勤や医療班への出向が多いからな。気苦労が多いだろう。まあ重宝されていると聞いたが？」

「そうなのかな？お仕事はちゃんとできてると思うけど。シグナムは最近なのはちゃんと一緒のことが多いんでしょ？」

「ああ。あの子は武装隊の士官研修生だからな」

「こないだゆっくり話をした」

「どんな話」

シヤマルが目を光らせながら聞く。

「取り立て深い話でもなかったが多少なりとも理解はできた」

「ヴィータちゃんは相変わらずライバル心むき出しだけどね。なのはちゃんに」

「競いたい相手がいるのはいいことだ。色々な意味でな」

「シグナムにとってのテストアロッサちゃんみたいに？」

「わ、私は別にあれと競いあってはいいないぞ。自力はまだ私の方が大分上だ」

「はい、はい。そうでした」

エレベーターが開き2人はでる。

「そう言えば、ヴィータとザフィーラとリンフォースは主はやてと一緒だったか？」

「一緒に病院に行ってるはずよ」

「キヤ、もうかわいい！！かわいい！！」

「ホントふかふか！！」

「これくらいの犬ってちっちゃくてかわいい！！」

「いいな！！」

病院では2人の看護師たちにザフィーラ（子犬モード）はもみくちやにされていた。

「ねえ、この子何って種類の犬」

「ん〜。リンフォース。ザフィーラって何って種類だっけ？」

「ふむ。なかなかの難題だな。盾の守護獣、分かるか？」

「（生まれのことなど覚えてる訳なからう）」

「まあ、雑種だな」

「雑種だね」

「なに〜」

「でも、雑種は丈夫でいいのよ」

「ザツフィーラくんって名前なんだ!!! かつこいい!!!」

「えへへ、愛想の無い犬で」

「（ヴィータ、リインフォース。何とかこの場を離れることはできないか?）」

「（そう言うな。いいもんだぞ。近所の人と仲良くするのは）」

「（そ、そうかもしれんが）」

「（せつかく覚えた子犬フォームだ。今の内なれておけつて。テスタロッサのこのワンコロを見習えよ。子犬っぷりをな）」

ヴィータは楽しそうに笑う。

「しかし、いい陽気だな」

「まったくだな」

場所は変わって学校。

「ホントにいい陽気」

「さすがが気持ち良さそうにいう。」

「うん。それはいいけど眠くなって困る」

「ファイトだよ、アリサ。クラスメイトのはやてに居眠りキャラだと思われちゃうから」

「寝てるのが一人いるけどね」

アリサが首を回して見ると楓がぐっすりと寝ている。

「ははは」

「さすがが困ったように笑う。」

「ねえ、そういえば今年はみんなでお花見ってしてないよね？」

「タイミングのいい日に雨が降っちゃったとかで流れちゃってたね」

「お花見ってあれだよな？桜を食べながらみんなでお弁当を食べる会」

「まあ、概要は（桜の木は日本全国に広く見られその花は春の一時期にある地域で一斉に咲き、わずか2週間足らずという短い期間で散るため毎年人々に強い印象を残し、日本人の春に対する季節感を形成する重要な風物となっている。その開花期間の短さ、そしてその花の美しさはしばしば人の命の儚さになぞらえられる。そのため

か古来、桜は人を狂わせるといわれ、実際花見の席ではしばしば乱痴気騒ぎが繰り広げられる。一方で花を見ながら飲む酒は花見酒と呼ばれ、風流だともされている。陰陽道では、桜の陰と宴会の陽が対になっていると解釈する。Wikipediaより) ってもんだ」

「あんた何時から起きてたの？」

「雨が降って流れたってところからかな？」

アリスがもういいやという感じで手で頭を抑える。

「フェイトのは簡略しすぎで、楓は詳しすぎだけど大体そうね」

「お花を見て、のんびり楽しく過ごしたりとか」

「過ぎゆく季節とか咲いて散っていく桜に風流を感じたりとかするのがメインの目的かな」

フェイトにすずかとなのはが説明する。

「大人の人たちはお酒飲んでしゃぐのがメインなきもするけどね」

「じゃあ今週末はどう？いつものところなら私が抑えられるけど」

「まじで！？花見の場所取りってめんどくさいから助かるわ。俺は24時間365日ぜ」

「土曜日なら1日OK」

「同じく」

フェイトがなのはに続いた。

「私は土日OK」

「じゃあ5人は決定ね。場所は余裕あるから友達とか家族とかを御誘いの上でってことで」

「」「」「おー」「」「」

「さっそく。心当たりにお電話を」

「私も」

「クロノ電話繋がるかな？」

「パパにメールしとこ」

「俺は」

楓は鉄球を机で熟睡している男に投げつけた。

「ふぶっ！？楓。その起こしかたはないにゃ〜」

「今のわびに花見に連れて行ってやるっ」

「高町たちか。行くにゃ〜こんな面白そうなことを見逃す訳にはいかないからにゃ〜」

「なら後で詳しく連絡するわ」

「璃玖はさそわないのか？」

「あいつは自分の興味の無いことには興味ないから」

「そっだにゃ〜」

俺はまた仲間の輪に戻るとアリサとすずかを呼び出した。



67話 花見って楽しいと準備と片づけがめんどうかいと思っるのは俺だけ？(後

楓の拷問室)

楓「久しぶりだな。どうかしたのか？」

土屋「実は昨日から新学期で、今学期から特進クラスに入ることになったんだよ」

楓「で、時間がないと」

土屋「うん」

楓「で、どうするんだ？」

土屋「ひとまずゆっくりでいいから、インターミドル編を書いていくよ。その次の章は次のゲームが発売しないとかけないから」

楓「ならかけるときはしっかり更新してくれよな」

・次回

すずかとアリサの力が明らかに

うるさい！うるさい！うるさい！

分かったかな？

次回「2人の力」

・次章予告

遂に新たなオリキャラが現れる

「よう！！楓！！元気してるか！！ハハハ！！」

「お兄タマ。こいつ倒してもいいですか」

「お兄タマって呼ぶな！俺のことをお兄タマと呼んでいいのは美由希となのはだけだ！！」

「呼ばれたいんですね」

「俺を無視するなよ」

次章インターミドル編

## 68話 2人の力

Side 楓

「楓くん。ご用事ってなにかな？」

「そうよ。早く話さない」

俺は屋上のベンチにすずかとアリサを呼び出した。

「お前らを呼び出したのは他でもない。去年のこと、お前らはどう思った？」

「それってなのはちゃんとフェイトちゃん、はやてちゃんのことだよね？」

「それは凄いと思ったけど・・・」

「ね、アリサちゃん」

「うん。他の世界のことにはか思えないのよね」

「他の世界か・・・」

確かに俺も逆の立場なら同じことを思うだろう。

「でも、なのはたちがあんな大変な目に会ってると思うと気が気じゃないわね」

「少しでも助けられるなら助けたいかな・・・」

「ならお前らの力について話しておく」

「「力!?!」」

「そう。お前らには力がある」

「力・・・」

アリサが自分の両手を見る。

「ホントはお前らにこれを言う気はなかったんだがな。そうも言っ  
てられない」

「でも、なんであたしたちに力が」

「俺のせいだな。俺の周りにいることで本来目覚めることがなかつ  
た力が活性化したんだ」

「結局あんたのせいってことね」

「アリサちゃん!?!」

「分かってるわよ。今回は見逃しておくわ  
できるなら何時も見逃してください。」

「お前らの力の説明に入っていないか」

「でも、楓くん。今、こんなところで話してもいいの?」

「俺がそんなへマをするわけ無いだろ」

「しそつだから怖いだよ」

「ちゃんと対策はしてる。人払いのルーンを張ってある。この世界に魔術師はほとんどいないだろうからなのはたちもこれないさ」

「よくわからないけど、大丈夫ってことだよな?」

俺はひとまず頷く。

「じゃあまずはずずかの能力だ」

「私の能力?」

「はずずか。お前の能力はなのと同じ魔法だ。おそらくミッド式が適合率が高い」

「ミッド式?」

「なのはやフェイトが主に使うのがミッド式。シグナムやシャマルが使うのがベルカ式だ。ミッド式は凡庸性のある魔法と考えてくれ」

「はやてちゃんと楓くんは?」

「俺もはやても魔導騎士。ミッドとベルカの両方を使える」

「お前の魔力はかなり低いが訓練の仕方ではなのはたちに追いつけるかもしれない」

「ホント」

「ああ」

「さすがの魔力は多いとは言えない。フェイトやクロノの半分にもみたないだろう。」

「そう、魔力だけなら。」

「俺の仮説が正しければさすがはもっと別の戦い方ができる。」

「楓、私はミッド式？ベルカ式？」

「アリサは……」

「うん、うん」

「分からない」

「へっ!？」

「分からない」

「分からないってどついついとよ」

「実はアリサの魔力値はランクでいうとC - くらいなんだ」

「それって低いの？」

「さすが聞く。」

「なのはやフェイトはAAAランク。俺はS。はやてはSSなのか？ちなみにさすがはたぶんBだ」

「じゃあ私に力なんてないじゃない」

アリサがふてくする。

「誰が魔法が使えるっていった。お前には魔法の才能なんてないんだよ」

「楓くん!？」

「あんた、私をけなしにきたわけ!？もう、いい帰る」

「まてよ」

俺はアリサの肩を掴んだ。

「離して!!!」

「なら先に話を聞け!!!」

俺の大声にアリサの体がピクンと震える。

「お前は確かに魔法の腕は最悪だ。だがな、お前には他の人間には使えない力がある」

「他の人間には使えない力？」

「そうだ。俺も今はまだほとんど使えない。だがお前はそれを引き出すパートナーを探せば使いこなせる」

「それってどんな？」

「今は言わない。いや、まだ確証がないんだ。もし、お前の力の存在とそのパートナーを見つけたら、この世界から多くの人間の存在が消えてるかもしれない」

アリサはただ呆然としているけ。

「あくまで仮定だ。今の俺には確かめられない。それよりも俺はお前らを自分の身を守るくらいまでには育てあげる」

俺はトレーニングメニューを渡す。

「とりあえず、すずかの修行は早めに始める」

すずかのメニューはなのはがやっている物と同じで魔力負荷を体にかけるトレーニングだ。これで自然に魔力を上げる。

「私の修行は？」

「お前の修行はまだできない。さっきも言ったがお前の力を生かせるパートナーがない。それに俺の体じゃお前にはその技術が教えられない」



「楓くんの体ってそんなに大変なの？」

「心配するほどじゃないさ。傷も塞がったし、肉体状態も70%まで戻った」

俺はアリサに別の紙を渡す。

「お前の修行は今年の8月に始める予定だ」

俺はひとまず話を区切った。

「さてと、そろそろなのはたちが感づくかもしれないし、花見の招待もしないといけねえから帰るぞ」

「そうね」

「はやてちゃんに連絡しないと」

俺たちは教室に戻った。



花見を告げる電話がいろんな世界を駆けめぐる。

次回「集えお花見戦士たち」

・次章予告

「で、参加することになったと……」

「なんだよその目は」

「いいえ。やっぱりあなたは面白いですよ。雨宮先輩」

次章インターミドル編頑張ります。

## 69話 集えお花見戦士たち

お花見のお誘いコールが鳴り響いた。

・八神はやて

「もしもし、はやてです。あつ、すずかちゃん。どないしたん？お花見？それはええね、すばらしいな」

・クロノ・ハラオウン

「ああ、フェイトかクロノだ。土曜日・・・その日はデスクワークだからちよつとした外出ならつき合えるが。艦長もエイミイもそんなに忙しくないな」

・高町美由希

「なのは。お姉ちゃんですけど、どうしたの？お花見？行く、行く、すつごく行く。エイミイも来るかな？うん。そっか」

・エイミイ・リレッタ

「お花見か、いいですね。エイミイさんはお花見初体験ですよ。うんうん。というか子供たちメインなんだ。じゃあ大人として幹事とかやって上げたほうがいいかな？うん。いいよ。任せて。経理と通信は専門家に任せておきなさいって!!」

・リンディ・ハラオウン

「あゝフェイトさんたちの企画なのね。いいわよ。その日ならお休みにできるし。あら、アリサさんたちのお父さんもいらっしやるの？じゃあ大人が何人か居てもいいのかしら？レティもオフを消化仕切れないって言ってたから誘ってみようかしら？」

・レティ・ロウラン

「あなたたちの世界での日常に興味もあるし、私は構わないけど。それってどういうお祭りなの？お花を見て食事。ピクニックみたいなもの？じゃあ特別な準備とかはいらないわね。そう言えば私の預かってる子たち。シグナムたちは」

シグナム・シャルム・ヴェイター  
・守護騎士

「ええ、はい、元は主はやてのご友人たちからの提案で、テスト口ツサを経由して、巡り巡って提督のところまでお話がいったようですよ」

「ちょうど予定も入っていないですし、はやてちゃんのお供ですから、私たちも言っちゃったりしていいでしょうか？」

「ほんとですか？ありがとうございます」

「人数多くても構わないってお話でしたから、私たちもちょっと日頃お世話になってる方々をお誘いしようかと」

・石田幸恵

「はい。海鳴大学病院の石田・・・ああ！シャルムさん。土曜日？え

え、金曜は当直なんで土曜の昼間は。お花見ですか？桜綺麗ですもんね。嬉しいですけどいいんですか？ご家族での会じゃ・・はい。その時間だと途中参加になってしまふと思いますが、参加させていただきますね。はあ、えっ、そんなに大勢でなんですか？全部で何人くらい？」

・マルコ・ベルフェット

「よう石田。どうした？・・花見？お前に回ってきたってことは発案者はあのガキ共もか。俺は大丈夫だ。最近全く休んで無かったからな。気晴らしにはなるだろ。酒も飲めるからな」

・ランディ& amp・アレックス

アースラでエイミーが大体の人数を確認する。

「合計20人以上。両親がたを入れると下手すると30に届いちゃうかも」

「また大所帯な宴会ですね」

「いや、アレックス。宴会じゃなくて風流の会だろ？」

ランディがアレックスの言葉を訂正をする。

「まあ、大体似たようなもんだよね。とにかく私と美由希ちゃんが幹事を引き受けたんで、2人には管理局の人方面の手配を色々手伝って欲しいなって」

「構いませんよ」

アレックスは素直に了承する。

「当日の食事と飲み物を保証していただけるなら」

「おっ、まかせとけ」

・フエイト&amp;アルフ

「なんか大変なことになってるね」

「みんな集合だから、きつと楽しいよ」

「お弁当に肉は出るかな？骨付きで、でっかい固まりのやつがいいな。前に2人の記念日に食べたやつ。あれ美味しかったから」

「エイミィに頼んでみようか？きつと用意してくれるよ」

「うん」

・なのは&amp;ユーノ

「ユーノさんと昼間のお花見は始めてだね。去年はもう散りかけだったしね」

「でも綺麗だったよ」

「2人で見るのもいいけど、みんなもきつと楽しいよ。楽しみだな」

「そうでだね。楽しみだ」

・楓&amp;レイリル

「これを芋蔓式って言うんだろっな」

「でも、楽しみなんでしょ？」

「分かるか？」

「分かるわよ。マスターですから」

『バカ丸出しの顔ですから』

「お前は今からスクラップ！イエイ！！」

『ちょ、待って！？冗談です！！』

「と、言う訳で美由希ちゃん。管理局関連と食事の手配はこっちで」

「OK。こっちは地元住民と飲み物系の手配をして置くから」

エイミィと美由希が電話で楽しそうに話す。

「こづいつのは得意なんだよね。なんか楽しくって」

「分かる。分かる」



「じゃあ後でそっちに打ち合わせにいくな」

「うん。待ってる」

シヤマルが八神家に帰宅する。

「ただいま」

「シヤマル。おかえり」

「おかえり」

「おかえり」

はやてに続いてヴィータとリインフォースも言う。

「ただいまみんな。駅前のパン屋さんが焼きたてタイムだったからちよつと買ってちゃったってあら！？どうしたの！？制服なんて拡げて！？もしかしてはやてちゃんの着せ替え！？」

「試着と言え。失礼な」

「まあ、まあ」

「もう！私のいない間にこんな楽しそうなことを」

「シャマルはサイズ会わせたときに制服着てたの見たろ」

「だって家で見るのはなんか違うんだもん」

「そついうものなのか？」

リインフォースがシャマルに聞く。

「そつよ。新鮮み、というか鮮度よ」

「まあ、ちよつと着替えるところから」

疾風が着替え始める。

「しかし、少々心配ですね。学校に行かれています間はお手伝いが何も出来ませんから」

「うん。何も心配いらへんよ。元々大抵のことは一人で出来るんやし」

「うん。そうかもしれないけど」

「なのはちゃんやフェイトちゃん、楓くん、すずかちゃん、アリサちゃんも一緒やし義務教育は受けとかなあかんってレティ提督のお言葉やから頑張って小学生やってみるよ」

「えへっ頑張つて」

「うんこれで完成かな？」

「はっやっぱりかわいい」

「ああ、よくお似合いです」

「はい、鏡」

「主。ご感想は？」

「うん。ホンマにすずかちゃんたちとお揃いや」

「ザフィーラ！ほら、はやての制服姿だよ」

「ザフィーラ。どないや？」

「ご立派です。我が主」

「おおきにな」

八神家全員で笑い合う。

「そやけど、私がこうして平凡に暮らしていけるのもみんなのおかげやなありがとうなみんな」

「何言ってるんです」

「主を守り助けるのは騎士の勤め。主従を超えていとおしい主であるならなおさらです」

「そつだよ」

「私たちの幸せでもあるのですから」

「それにあなたをお救いするに当たって最善の手段をとるとしては言い難いですから」

「私たちの収集のせいではやてちゃんも管理局の従事」

「そんなはええよ。私の管理責任の方が問題や。みんなが気に病むことちやう。それに私はみんなから永遠を奪ってもうたから」

はやての顔が暗くなる。

「転生機能の停止ことですか？」

「うん。闇の書とリインフォースの完全な分離で今の守護騎士システムは私の命に依存してる。私が死んでもうたら、みんなは再生できなくなってしまうから」

「なんだそのことが」

「それって普通なことじゃありませんか？」

「・・・私たちは流浪を続ける無限の旅を終えたのです。使えるべき主の元で生き、時を過ごし、主を報い、そして消える。それは人の命とよく似ています」

「永遠に生き続ける牢獄から解放してくれたんですよ。はやてちゃんとリインフォースと楓くんが」

「はやてと生きて、はやてを見送ったら、後は好きなときに眠って、

空の上でみんなに会えるんだ」

「それは感謝こそすれ、不満に思うことなどありません」理解いただけですでしょうか？」

「そうか」

「はやて」

「そやな。ほんならみんなで生きようか？ずっと、ずっとみんなで」

「はい」

「もちろんです」

「この身に命がある限り」

「私と騎士たちはあなたのそばに」

「私たちははやての騎士だから」

## 69話 集えお花見戦士たち（後書き）

（楓の拷問室）

土屋「はぁ……」

楓「どうした？柄にもなくテンション低いぞ？」

土屋「いつなのはゲームの続編は発売されるんだろう？」

楓「冬じゃね？」

土屋「だぎゃああ待ちきれない！！」

・次回予告

花見楽しむ俺たちは新たな未来へ向かって進んでいく。

次回「桜舞う舞う僕らの世界」

・次章予告

アクイラ「私の出番はあるのでしょうか？」

次章インターミドル編

## 70話 桜舞う舞う僕らの世界

Side 楓

そして、土曜日。

俺の鼻に桜の花びらが舞い落ちる。

みんなの祈りが届いたのか？はたまた、俺が作った気象制御装置才  
テンキさんZが正常に作動したのか？とにかく空は綺麗に晴れまし  
た。

風は多少肌寒いが、天気はぽかぽかと快晴。絶好の花見日和だ。

「あっ、あ」

「大丈夫そうだね」

スピーカーからエイミーさんと美由希さんのマイクテストの音が響  
く。

「それではお集まりの皆さん。おまたせしました」

参加者は手を叩く。

「本日の幹事を務めさせていただきます、時空管理局執務官補佐工  
イミィ・リレッタと」

「高町なのはの姉で、エイミイの友人の一般人、高町美由希です」  
2人の幹事が自己紹介を済ませる。

高町姉の話はまだ続く。

「それから、今回の運営の責任者をお呼びさせていただきました」

「管理局メンバーにはお馴染みリンディ・ハラオウン提督にご挨拶と乾杯の音頭をお願いしたいと思います」

「はい皆さんこんにちは。今日は綺麗に晴れましたね」

そうですね。

「はい。こちらの世界のみなさん。特に関係者のご両親、ご兄弟の皆さん方には私たち管理局や次元世界の存在や実状。説明を受けても、未だになじみの薄いという方もいらっしゃるかもしれません。こういった集まりを通して双方の親交を深めるというのも貴重な機会かと思えます」

ここまでリンディさんが話すと急に顔がまさに桜の様にパツと明るくなる。

「と、まあ、堅い話はお題目として置いて、今日は花を見て、食事を楽しんで、仲良くお話をして過ごしましょう。それでは今日の良き日に乾杯」

《乾杯》



「はあ、なんだか大人数になっちゃったね」

「うん。アースラクルも結構来てるから50近いのかな？」

「家の大人たちが、家のお父さん、アリサちゃんのお父さん、後はすずかちゃんのお母さんと」

「家のパパ。乾杯前からもう士郎さんと飲み始めてたわよ」

「あはは。あの2人仲よしだから」

「デビッドさんと話してこようかな。今日は仕事抜きで」

アリサの父。デビッド・バニングスさんは仕事仲間、雨宮グループとバニングスグループは協力体制をとっている。

「あんた人の父親と何？してるのよ？」

「娘さんをくださいって言って来るんだよ」

「ちよつと！？待って！？そんな！まだ心の準備が！？」

アリサの顔が真っ赤に染まる。

「スマン冗談だ部ぎゃ j h s h さうが h」

アリサの右ストレートが俺の顔面に hit!!

「すびばしえん」

俺は凹んだ顔を引つ張りだした。

「そついえば石田先生もいらっしやるって」

すずかの言葉に俺たちは驚いた。

「でも、石田先生って管理局のこととか魔法のことかって・・・」

「知らないわよね？」

「そついえば」

なのはとアリサの言葉を聞いてすずかも気がついた。

「一応ないしょにせなあかんけど、まあ平気やろ。リンディ提督やレティ提督にお願い死といたし」

「なら俺たちも秘密にしないとな」

「楓くんが一番心配なんやけど・・・」

「なにを言う。狼少年の異名を持つこの俺が・・・」

「それ全く信用できないんやけど・・・」

「冗談だ。この世界のトップシークレットの情報を持ち、俺がその情報を漏らしただけで国が一つや二つ消えると言われている、この俺に付け入る隙なし」

「あゝ楓くん。安心はしたんだけど、さら〜っと恐ろしい単語が

聞こえたかも何だけど・・・」

「気にするな。それよりさっさと挨拶回りして、軽く食って、特等席行くぞ」

「特等席？」

「って何？」

花見新人のはやてとフェイトが首を傾げる。

「内緒の場所があるの」

「すごく綺麗な場所」

「じゃ、行く。挨拶回り」

「じゃあな」

俺たちはそれぞれ挨拶回りに向かった。

俺はフェイトとアルフたちのところに向かった。

「きゃっははは。肉！！肉！！」

「いけませんアルフ。ここにある料理はみんなの物です！！」

肉を取り続けるアルフの手をリニスがはたく。

「分かったよ」

「アルフはリニスには勝てないんだな」

「うん」

「楓、フエイト!」

アルフが俺たちに気づき手を振る。

俺はアルフと同じシートに居るアレックス、ランディほか管理局員に軽く礼をして座る。

「アルフ。俺は肉食だから肉食べてもいいよな」

俺は肉を右手でとり食べる。

「あはは、楓からは肉は取れないよ」

「アルフがいつもそれくらい遠慮を持っていたらいいのですが」

リニスが頭を抱える。

「全く遠慮を持たないよりはましだと思っせ?」

「あなたはいつも適当ですね」

「それが俺だろ?」

「そうですね」

俺はリニスから飲み物を貰い飲み干す。

「ねえ、あれ何だろう?」

フェイトが指を指す方を見ると一角で盛り上がりを見せている。

「何やってるんだ?」

「カラオケやってるみたいだね」

「フェイトちゃん。歌ってくれば?」

アレックスがフェイトに提案する。

「えっ!?!」

「いいじゃんかフェイト」

「そうですね。行ってくればどうですか?」

「恥ずかしいよ」

「フェイトちゃん。うまいって聞いてるけどな」

「そうそう」

そりゃあ中の人の中の人ですから。

「何が恥ずかしいの？」

「子供を虐めてるのか？アレックス。ランディ」

俺たちのシートにシャマルとシグナムがやって来た。

「シグナム！シャマルさん！」

「嫌だな、シグナムさん！？滅相もない！？」

「ちょっと歌を進めただけですよ」

2人の顔が赤からドンドンと青に変わった。

「そつだぞ〜」

「私たちも進めてるんですけどね」

アルフとリニスが助け船を出した。

「歌？」

「あの音楽端末と拡声器が一体化したデバイスか」

シグナムさん。僕らに分かる様に説明してください。あれをみてカラオケと言えないのはあなたを除けばいませんよ？

「いい加減こつちの用語を覚えて。あれカ・ラ・オ・ケって言うのよ」

「それです」

フェイトがシャマルの言葉に頷く。だてに現代っ子やってないぜシヤマル。

「歌か・・・」

「あつ・・・シグナム・・・何で私をじつと見るの？」

「いいじゃないか。聞かせてくれテストロッサ」

「ええっ!？」

「俺も聞きたいな」

フェイトが戸惑っているとシャマルが気づく。

「なのはちゃんとユーノくんがいた!なのはちゃん。ユーノくん。フェイトちゃんの歌聞きたい?」

なのはとユーノはお互い顔を見て笑う。

「聞きたいです」

「僕も」

「だそつだ」

「逃げ場は無くなったな」

「お〜い。次はフェイトが歌うって」

アルフの声にエイミィが返事をした。

「みんな下手でも笑わないでね」

大丈夫だ。お前の歌が下手だったら、アニソンの大部分が崩壊して  
るからな。

俺はフェイトの歌を聞くと別の場所に向かった。

「それじゃあ改めて乾杯〜!!」

《乾杯》

リンディさんがしきり直して飲んでいた。

「これはこっちのお酒？」

レティ提督がアリサとすすかに聞く。

「うちの父が持ち込んだワインだそうです」

「ブドウって果物から作った果実酒だそうですよ」



「そう。いい香りですてき」

「そうですね提督味も深いですし」

「駄目！？楓くん。お酒は二十歳すぎてから！！」

「さすが俺の酒を持っていく。」

「ったく堅てえな」

「でもアリサさんもすずかさんもあんまり驚かなかったわね。魔法のこととか次元世界のことを知っても」

「まあ、ビックリはしましたけど」

「なのはちゃんとフェイトちゃんだからすぐに納得がいったっていうか」

「それにバグキャラがそこにいますから」

「それもそうね」

アリサ。俺はラカンさんじゃないぞ。普通の一般男児だ！！後、リンディさんも納得しないでくれません！？

「私はなのはちゃんと楓くんとはあまり交友がないんだけど2人って普段からそんなに凄いの？」

「いいえ。楓は凄いいけどなのはそこまでは」

「でも、強い子だと思います。いろんな意味で」

「フェイトもですね」

「そう」

リンディは優しい顔になる。

「ホント美味しいわ、これ」

「話振ったのあなたですよ？それに何、自分一人で飲んでるんですか？俺にも飲ませてくださいよ」

「いいわよ。アリサさんもう一本開けてもいいかしら」

「「ええっ!?!」」

アリサとすずかはレティ提督がまだ飲むことに驚く。

「大丈夫なんですか？」

「平気よ2人とも。レティは学生時代から底なしなの」

「それならまだまだありますから」

「取ってきますね」

「ありがとね」

「待っててくださいね」

アリサとすずかはワインを取りに向かった。

「明るくてはつきりしていい子たちね」

「フェイトもなのはさんも楓くんもいい友達に恵まれてるわ」

「手を出さなきゃアリサはいい奴なんですけどね」

「そうね」

レティ提督に笑いながら言う。

「私ね少し暮らしてて思ったの。この世界は幼くて未成熟だけど綺麗だわ」

「うん。お酒の美味しい世界に悪い世界はないわね」

「ちょっと！！聞いてよまじめな話」

リンディさんがレティ提督に笑いながら怒る。

「事前に聞いてるわよ。今年中に巡航艦の艦長を降りて、こっちの世界から本局に通うんでしょ」

「あら？お耳の早いこと」

「俺がツイッターで・・・」

「楓くん人の個人情報を勝手に流さないでくれないかしら？」

「フェイトちゃんの為？」

「まあね。フェイトも楓くんと一緒に執務官を目指すって言ってるけど、中学卒業まではこっちの世界で暮らすのがいいと思うし、少し遅くなっちゃったけどなるべく一緒にいて上げたいですよ」

「クロノくんの時もそう言ったもんね。まあクロノくんの時はずいぶんグレアム提督のところに行っちゃったからちよつと微妙だったけど」

「まあ、子供なんてそんなものでしょ。親の思い通りになんかならないわ」

「確かにうちの子もそうだし」

父さんと母さんも同じようなことを考えてたのかな？

『マスター・・・』

「分かってるよ。きっと2人も同じことを考えてたよ」

俺は父さん譲りの髪を弄りながら笑った。

そうしていると、ワインを取りに行っていたアリサとすずかが帰ってきた。

「お待たせしました」

「赤白ロゼ、色々持ってきました」

「う〜わ〜ありがとう。アリサちゃん。すすかちゃん」

「私もちょっといただこうかしら」

「どござ、どござ」

「俺もロゼなんて滅多に飲まないからいただくよ」

「楓くんは駄目」

「けち〜」

「それと、土郎さんとうちの父がこちらに合流したいそうなんです  
か、いいですか」

「あら？ホント？」

「あら、やだ、大丈夫かしら。私色気出過ぎてない？」

「大丈夫ですレティ提督。俺まだ我慢出来てます」

「うちの母も合流すると思います」

「うん。ありがとうすすかさん」

「お話してみたいわ。いらしてくれるなら是非」

「こちらから伺ってもいいけど」

「じゃあちよつと聞いてきます」

アリサとすずかは向かった。

「よし。はい。焼きそば5人前完成です」

「ありがとうクロノくんごめんね手伝って貰っちゃって」

酔いをさます為に出歩いていると、クロノとエイミイさんが焼きそばを焼いていた。

「いえ。エイミイがふらふら出歩くのがいけないんですから」

「でも、クロノくん何するのも手際いいね。お姉さんはビックリだよ」

「士官学校はサバイバルもやりましたから」

「ふんっん凄いな」

「クロノ俺にも焼きそば焼いてくれ」

「君は自分で焼きたまえ。僕より君が焼いたほうが上手いだろ」

「めんどくさいな」

俺はクロノの隣に立って自分で焼き始める。

すると美由希さんがクロノに質問する。

「士官学校っていうと、なのはもそういうのやるのかな？」

「なのはは武装隊の方ですから、僕とはコースが少し違いますがや  
ると思いますよ」

「そ、そうなのか。未だに想像できないんだよね。私の中ではな  
のはってまだちっちゃい子供だから」

「僕の中では初めて会ったときから腕のいい魔導師でしたから」

「あいつは子供にしては頭が良すぎますよ。最初の俺とアリサとな  
のはの喧嘩なんて凄かったですから」

「同じ人物を見ても見解は違うものですね」

「まあね」

「あれれ、楓くん、お姉ちゃん、クロノくん？何で焼きそば作って  
るの？」

「二人には」

なのはとユーノが現れた。

「見つかったか」

「えへへ。誰かがこの鉄板セットを持ち込んでさ、材料もあるし、せつかくだからってエイミイが作り始めたんだけど」

「当のエイミイが注文だけ受けてふらりと出かけてしまっただけのぎまだ」

「でも美味しそうだね」

「美味しいよ、もう少しまったら食べられるよ」

「そういえばユーノ。今日はフレットもどきの姿じゃないんだな？」

「一年たって魔力適合が大分進んだんだよ。もうこの姿でいても問題ないんだ」

「一年って遅いだろ……」

「あはは……」

「じゃあユーノもうフレットには戻らないの!？」

美由希さんは驚愕をあらわにする。

「あのえつと……」

「去年は急にいなくなって寂しかったんだよ？あの撫でこころが忘



れられなくて」

「お姉ちゃん。あんまり無茶言ったら駄目だよ。フェレットモードはあくまで仮の姿なんだから」

「はい」

納得した美由希さん。

「でもユーノ。あの姿になったら私のところにもきてね。是非、撫でさせて」

訂正。納得してない美由希さん。

「前向きに善処します」

ユーノドンマイ。

と思いながらも口にせず、俺は出来たばかりの焼きそばを食べ始めた。

「よし6人前終了」

「あっハハハハ、あ、あ、あっ、ごめん。お待たせ」

「エイミーお帰り」

「遅い！！何してたんだ！！」

「通信主任は色々挨拶も多いのだよ」

「はい。交代するよ」

「じゃあ、美由希さん。交代してください」

「いいの？ごめんね。じゃあ、みんなの様子を見たり何か摘んだりしてくるね。すぐ戻ってくるから」

「よしクロノくん。材料も持ってきたから久々にあれやりますか？」

「あれ・・・ああ、例の焼きそばか」

「例の？」

「何か秘密が」

「ばんばがるぼがぼ」

俺も言おうとしたが声が出ない・・・

「いや、士官学校の自炊の時によく作ってたメニューがあるのよ。結構人気もあったから、こっちの人にもどうかなって」

「うわー！ー！」

目を輝かせるのは。

「出来たら呼ぶから、良かったら食べてみてくれ」

「うん」

なのはとユーノはどこかに行った。

「スパイスを入れてと」

「ゴフン！ゴフン！！」

クロノがせき込む。

「あ〜ごめんクロノくん。スパイス飛んだ？」

「ああ違う。最近喉の調子が」

「そう言えばそろそろ声変わりかな？」

「ああ。そうか」

「少し背も伸びたしもう15歳だもんね」

「まあな」

「まあ早いとこ身長で私を追い抜いて頂戴な」

「そうなる予定だよ」

「でもそのころには俺がクロノを抜いてるけどな」

「いいじゃないか勝負だ」

「望むところだ」

「頑張つて。二人さん」

「クロノくん。立派にそだったら私のお嫁さん候補にしてあげるから」

「そんな重要事項を身内で済まそうとするな。足を使ってちゃんと探せ」

「クロノくんかわいくない」

「昔からだしこれからもずっとかわいくなるつもりはないわけだが」

「かわいいクロノ……気持ち悪……」

「まあそういうところがかわいくもあるんだけどね」

「不本意だ」

「さあフィニッシュ。火入れるよ」

「うわ！？待て！？まだ早くないか！？」

「料理は勢い。いくよー！！」

はやてに言ったら怒られるな。

「ファイヤーー！！」

「うわああああ」

ちなみに俺は常日頃、炎を防ぐ指輪型宝具『アズニール』を付けているので大丈夫でした。

「気づけば孤独や」

「一緒にどうですか御姫さま？」

「わあ！？楓くん！？どないしたん！？」

「何ってお前と話しに来たに決まってるだろ？」

俺ははやてに焼きそばを渡した。

「ねえ。楓くん……」

はやてはなかなか焼きそばに手をつけない。

「どうした？はやて？食べるよ？」

「うん……」

「もしかして焼きそば嫌いだったか？」

俺は心配する。

「これって楓くんが作ってくれたんよね？」

「そうだけ」

「何か変な物入ってない？」

「さっさと食べるバカ!!」

はやてはおそるおそる焼きそばを食べる。

「美味しい!!これ美味しいよ!!」

「だろ？」

「ホンマに何も入ってへん」

「まだ引きずるか!？」

はやてが焼きそばを食べ終わると石田先生が訪れた。

「はやてちゃん。ごめんなさい。遅くなっちゃった」

「あつ、石田先生。いらつしゃい」

「わあなんだか凄い人数ね。それに凄くいい場所」

「色々ご縁がありました」

はやてと石田先生が話している最中、俺は一人の男を睨みつけていた。

「何でお前がいるマルコ」

「酒と女がいる場所に俺がこないわけないだろ」

石田先生と違いマルコの服装はこの場に合わない、いつものよれよれの白衣だった。

「俺はナンパしてくるからな」

マルコは右手をポケットに突っ込みながら、左手を振って歩いていた。

「マルコ先生はマルコ先生なんやな」

「私も先輩としては認めてるんだけどね・・・」

「まあ、先生。座って、座って。ゆっくりしてってください」

「ごめんね。少し顔出して差し入れ持つてくるだけのつもりだったから」

「はあ・・・そんな水くさい。飲み食べしてってくださいよ」

「そう?」

「あつ!! 楓!! 石田先生!!」

「ヴィータ!!」

「ヴィータちゃん」

「こんにちは来てくれたの?」

「うん。シャマルさんに誘っていただいたから」

「ヴィータ。石田先生すぐ帰るって言てるけどどないや?」

「え〜ゆっくりしてごうよ〜」

「かなり懐かれましたっすね石田先生」

「う、うん。まあ大丈夫かな?」

「「ははは」

はやてとヴィータが笑い合う。

「（シグナム・シャマル・ザフィーラ・リインフォース。石田先生いらしたよ。程良いところで集合してな）」



「(はい)」

「(分かりました)」

「(了解です)」

「(すぐに向かいます)」

「うちの子たちもすぐ集まってくると思いますから」

「そう」

「ヴィータ。石田先生に何か飲み物と食べ物持ってきてあげて」

「ああ、そんなに気を使わないで」

「先生の好きそうなもの持ってくるね。待ってて」

ヴィータは走り去っていった。

「石田先生。俺が作った焼きそば食べますか？」

「・・・何も入ってないわよね？」

「そんなに信用ありませんか!？」

俺がいるとはやてと石田先生が話し難そうだったから一度その場を離れた。

「クロノ。レティ提督酔ってないか？」

俺はクロノに焼きそばを貰った。

「母さんとフエイトも大変そうだ」

「そういえば、俺たちは進路のことよく話すけど、お前はどうするんだ」

「僕は提督を志願しようと思う」

「ふうん提督か」

「驚かないんだな」

「親父さんの後を継ぎたいんだろ？」

「前前から考えてたんだ。闇の書事件が終わったら始めようって。捜査は執務官の方がやりやすかったからね」

クロノが器用にコテをクルンと回した。

「僕の船に君が乗ってくれれば僕も楽なんだがな」

「考えとくよ」

俺はボトルを出して一気に飲み干す。

「さてと、俺も残り焼くの手伝いますか」

「助かるよ」

材料も無くなり俺が何しようかなと歩いていると珍しくなのはとシグナムが二人でいたのだが。

「不意打ちをかけたのはより正確に意識と動きを奪って、リンカーコアを収集するために傷害そのものが目的ではなかったわけですね？」

「う、うん」

「私のコアを抜いた時も、その気なればすぐに復活してまた邪魔するはずの私たちにおぶん復帰できない程度のダメージを与えることができたのにしなかった」

「多少は計算もあった。それに主に心配をかけたくなかったからな。兩宮は何も言わなかったが、ことが終われば管理局に大人しく出頭し、事情を説明するきだったのだろうが。結局我らも同じことを考

えていたしな」

「不要な血を流さない選択をしたのは正しいと思います」

「ああ」

「すみません。生意気を言ってます」

「いや」

「えっと、つまり、罪は罪ですけど償う方法はもう決められてるんですし、過ぎたことを後悔したり、反省したりする分のエネルギーをもっと沢山の人を救ってくれる方に使ってくれたら嬉しいかな」と。私は襲われた人代表なので。少しは説得力あります？」

「ああ。論旨に少々無茶はあるが、やはりお前はいい子だ。テストロツサたちがお前をすいているのはよく分かる」

「楓くんを見てそう思ったんです」

「雨宮を？」

「楓くんは正義の味方を目指しても悪いことをします。でもそれが結局正しいことに繋がるのはシグナムさんもご存じですよね？」

「そうだな」

「楓くんは善人でも悪人でも助けるんです。善人でも悪人でも助けられなかったらその責任を背負い込むんです。助けられなかった人のことを思いながらその人のぶんだけ頑張るんです。だから私もそ

う思えたんです」

シグナムがなのはの頭に手を置く。

「あいつを見て、そう思えるならお前も成長したということだ」

「そうですかね？」

「そっだ」

俺は菌痒くなってその場を離れた。

「楓くんドンドン飲みなさい」

「提督酔ってますよね!？」

「酔ってないわよ」

「いや、絶対酔って」そんな聞き分けのない子にはお仕置きよ」「う  
ふあおはいははっ」

ビンごと飲まされて俺は泥酔したのだった。

「ああ。さて、宴もたけなわでございますが」

「日も落ちて来ましたし、すでに眠りの世界に旅立たれているかたも少なからずいらっしゃるようなので」

さつきまで眠りの世界にいましたから。

「ここらでお開きにしたいと思います」

「それではさつきのくじ引きで配置された通り、片づけと、ゴミ分別の担当をお願いします」

俺ははやてたちと同じ担当になった。

「はやて。ゴミを完全に殲滅していいか」

「楓くん。めんどくさいからってあかんよ。焼け野原になってまう」

「はやてちゃん!!」

俺たちが話している局員Aがやってくる。(野郎には興味ねえ)

「はい」

「さつきメンテスタッフのマリーから連絡があつてね。はやてちゃん用のデバイス、新バージョンが2つ出来てるから、使用してみたい欲しいってさ」

「はい。ありがとうございます」

「・・・では私が後ほど受け取って来ましょう」

「うん」

「よろしくね」

局長Aはそのままどこかに向かっていた。

「マリーさんとメンテナンススタッフの皆さんには、なんやお土産持っていかなあかな」

「何かとお世話になりっぱなしですしね」

「はやてちゃんに合うデバイスなかなかないですけど、今度は上手く合うといいですね」

「出力と制御性能のバランスが難しいようですね」

「俺が作ってやるのに」

「お前が作ると別の意味で心配だ」

シグナム。君も僕をそんな風に思っているのだね・・・

「合わずに、飛ばしたり、壊したりしちゃったりしたのも6台目くらい？」

ヴィータが指折り数える。

「それくらいやな。ふう。不器用であかん」

「しょうがないよ。あんなでっかい魔力でミットとベルカ両方使う魔導騎士なんて、そうそういないんだし」

「私が制御出来ればいいんだが」

リインフォースがまた暗い顔をする。

「お前のせいじゃない。元々主の魔力は特別大きいのだ」

「・・・特注になるのは必然です」

「最終的には自分で作らなあかんと思ってるやけどな。ユーノくんとかマリーさんに協力してもらって、設計から考えてるんやけど、なかなか難しいんよ」

「ユニゾンデバイスか？」

俺ははやてに問う。

「ミッドのインテリ式はちょう相性し、ストレージは本型がいいし、そうなると管制人格型がええし、ウィータも妹が欲しいやろ？」

「うん!」

「新たな同士が出来るのは嬉しいですね」

「それまでは緩急品でなんとか繋いでいかないと」



「頑張る」

夜。俺は雲がためガスを使い、レイリルと雲の上で横になっていた。

「なんか平和だな」

「そうね」

「この前までの俺、こんな余裕なかったからな」

「クリスマスに戻りたい？」

「冗談」

「ふふ、そうね」

「こんな日々がずっと続けば……って訳にはいかないんだよな」

「管理局の闇ね」

「おそらくレジアスが来年、再来年には局員を送ってくる」

「だけどそれを防ぐこともできない」

「上もバカじゃない・・・とりあえずドゥーエが奴らのメンテナン  
スに入れる様にならないとなんとも言えないな」

「そうね」

俺たちは月を見つめる。

「ならそれまで楽しくやりましょ」

「なっ!?!さっきまで大事な話してたろ!?!」

「そんなことそのうち考えればいいのよ」

「そのうちって」

『マスター。レイリルは今日はゆっくり休んで、それから頑張れっ  
てです。よね?』

「・・・ええ。そうよ」

「お前嘘だろ」

「私が言いたいのはみんなを頼りなさいってことよ。なのはちゃん

「たちを、私たちを」

「そうだな」

『私たちは3人で1なんですから』

「「えっ3人!?!」」

『やっぱり私はスルーですか!?!』

「冗談だよ」

俺は笑って見せる。

「これからもよろしくな」

「はい。マスター」

『YES・master』

「あゝ楓くん!?!」

なのはたちが俺の元に飛んできた。

「楓くんも練習しようよ」

「気持ちええで」

「楓一緒に飛ば」

「そんな急に・・・いや」

「飛ばう。みんなだ」

日常編 f i n .

## 70話 桜舞う舞う僕らの世界（後書き）

（楓の拷問室）

土屋「日常編完結です」

楓「長かったようで短かったな」

土屋「こんな日常は楽しくもありきついでしょうがね」

報告

楓「何だよ報告って？」

土屋「実はインターミドル編から更新が1週間置きほどの更新になります」

楓「理由は？」

土屋「インターミドル編の構成などは主に出来てるのですが、その次のシリーズがゲームの2作目話なので脳内ストックが0なのです」

楓「仕方ないというか、なんというか」

土屋「そこで正義の味方の番外編を同時に書きたいと思います。タイトルは」

魔法少女リリカルなのは〜黒き歴史書〜

土屋「これはS t e s では語られることのない楓の空白の数年間の話です」

楓「募集したオリキャラも多数登場なんだろう？」

土屋「そのとおり」

楓「で、次回は？」

土屋「次回はインターミドル編の予告を上げたいと思います」

楓「じゃあ今回はここでお開きにしますか」

土屋・楓「これからも感想・オリキャラ・デバイス会の募集もお願いします。では、さようなら」

## インターミドル編予告

### 【予告】

消滅を始める世界。

終わりを迎える明日。

消えていく人間たち。

楓「避けるなのは!!」

フェイト「ごめん」

シグナム「死ぬな!! テスタロッサ!!」

はやて「みんな。私に命を預けて」





本当の予告開始です。

10代最強の魔導師を決める戦いインターミドル・チャンピオンシップ。

新米執務官 雨宮楓が出場します。

倭「雨宮！……絶対に戦おうぜ！……！」

楓「いや、このままいけば俺たち当たるの2回戦だぞ……」

こんな感じで現れるライバルたち

鍼「少年。ついでに倭。君たちを鍛える」

始まった修行

楓「アキラ」

アキラ「逃走ルート検索終了しました」

逃亡を図る主人公

司「先輩も不器用ですよね」

楓「おもしろがってるだろ」

そして、物語の鍵を握る謎の人物。

謎の男「大異能者と中異能者だが、二人とも目覚めてないとはな

楓「攻撃が」

司「出来ない!?!」

始まる本戦。

楓「俺の全力を使わせていただく」

クレナ「かかってこい」

インターミドル編スタート。

71話 とりあえず今日も平和です

S i d e  
楓

新暦66年。

あれから1年の月日が経ちました。

なのはは武装隊。フェイトは本局魔導師、はやては特別捜査官、八神家のみんなもそれぞれ頑張っている。

クロノが提督になるのももうすぐだ。

すずかとアリサの修行も順調。もう第二段階に入りました。

そして俺は去年の執務官試験で一発合格して晴れて執務官になりました。

毎日頑張って仕事をしています。

事件や災害もたまに起きるけどこっちは概ね平和です。





「マスターまだ終わってないの？」

「ああ。アクイラの演算機能も使ってるんだけど」

「そのせいでアクイラが煙を吐いてるわけね」

『j g g h d h d h f n h f d h d j d j』

「もう言葉も言えないんですね」

「重労働ね」

↳ 3時間後↳

「終わった」

「お疲れさまです」

俺が司からコーヒー貰おうと手を伸ばした瞬間、レイリルに「コーヒーは奪われた。」

「おい」

「こんなのを飲んでいる暇があったら寝ろ」

実はこの2日まったく寝ていない。

「レイリルさん。心配しなくてもいいですよ。そのコーヒー睡眠薬が入ってますから」

「なんて物飲ませようとしているんだ!？」

「ふふ、そっちの方が面白いじゃないですか」

「ったくよう」

「で、早く帰りましょうよ」

「そうだな」

俺たちは家に向かった。

「楓!!レイリルさん……と誰？」

マンションに着くと入口で偶然なのはとフェイトと出会った。

「なのはに紹介してなかったっけ?フェイトは面識あったよな?」

「うん。司くんだよね」

「覚えていただいて光荣ですテストロッサ先輩」

「フェイトでいいのに……」

司は基本人を名字で呼ぶ。たとえば俺やフェイト。飛鳥は先輩。リ



ンデイさんなどは名字に階級などだ。なぜ、名前を呼べないのかは本人も分かっていない。

「はじめまして高町先輩」

「高町・・・先輩？」

「なのは。司くんは私たちの後輩なんだよ」

「そうなんだ〜宜しくね。司くん」

「はい」

なのはと司が手を握る。

「でも、兩宮先輩の話通りの人ですね」

「おい、司余計なことを」

「楓くんが私のことを話してるの？」

「ええ。かわいくて、頭もよくて、まっすぐで、優しい」

「うん、うん」

なのはが顔を明るくしながら・・・

「ってか夜なのに体が光ってるぞ!？」

「PI細胞を持つてるのかお前？」

「それでいて、暴力的で、話より先に戦って解決して、OHANA  
SIIが大好きな悪魔」

「……………楓くん。私OHANASII好きだからやってあげよう  
か？」

「いいえ……………遠慮します」

「いいんだよ。遠慮しなくても」

やばい……………フェイト助けてくれ！！

俺がフェイトを横目で見ると何かジェスチャーをしている。

何々……………

ご

め

ん

楓

私

に

は

無

理

ごめん楓。私には無理……

「OHANASIIしようか？」

「誰か助けて!!！」

「すつきりしたの」

「その笑顔が俺の肋骨を折って得たものだと思つと苦しいな」

「楓大丈夫」

「……………」

「ごめん。でもあののを止めるなんて無理だよ……」

「フハハハハ!!冗談だよ」

俺はフェイトの頭を撫でながら

握り潰した。

「痛い！痛い！楓！！顔が怖い！！」

「マスター。それくらいにしてあげなさいよ」

「そうだな」

「ふう」

フェイトが息を吐く。

「後、2時間で許してやるか」

「先輩。それ許してませんよ。いや、むしろ悪化してますよ」

「そうか。なら6時間に追加だ」

俺は眠そうに欠伸をする。

「じゃあなのは明日な」

「うん。また明日なの」

俺はフェイトをつかみながらはマンションに入って行った。

「なのは〜!! 助けて〜!!」

「にゃはは!! 取りあえず今日も平和です」

71話 とりあえず今日も平和です（後書き）

（楓の拷問室）

土屋「ダブー」

楓「ダブーって何語だよ？」

土屋「いや、インターミドルの設定が出るに出なくて」

楓「出てないのかよ」

土屋「たぶん問題ない」

・次回予告

次回「俺は絶対釣られない!!」

72話 俺は絶対釣られない!!

Side 楓

「おはよう楓くん」

「おはようございますエイミィさん」

今日俺はクロノに会いにクロノの家に来てきた。

隣だけどね。

クロノの部屋に入る。

「やあ楓」

「クロノどうしたんだ。あ、エイミィさん。いちご牛乳」

「はい〜はい〜」

エイミィはクロノの部屋から出て行く。

「さてとクロノ俺を呼んだ用はなんだ」

俺は部屋にあるベットに腰掛けながら聞く。

「ああ、実は……」

俺を呼ぶだけの仕事だ。また面倒な特殊任務かなんかだろう。

ちなみにあの花見のあとクロノに以来された任務を少し紹介しよう。

### 1：古代兵器の破壊

最初から難しすぎるだろう！！原住民に追い回されるわ、古代兵器が作動しそうになるわ、古代兵器を狙う謎の黒服の組織と戦いになるわ、大変だったわ！！

### 2：迷い猫の搜索

シヨボ！？さっきの比べたら天と地ほどの差があったぞ。

まあ、その猫がトラだとは思わなかったけど……

### 3：演劇の木の役

これって管理局の仕事なのか！？



4：妖精の搜索

見つかりませんでした！はい！

5：ジエンモーランの討伐

.....

6：黒服の組織との戦い

また戦った！！そしてなぜストーリーにできなかった！？

7：エルドラントの聖戦

これ本編だよね.....そこまでして俺の出番を減らしたいか！！

1040

などの軽いミッションから重いミッションまであったが.....て  
いうか全部難ミッション。

ともかく危険な任務だったら司しか巻き込めない。だからエイミィ  
さんを追い出したのだ。

「実はインターミドル・チャンピオンシップに選手として出場して  
ほしいんだ」

「はっ!?!」

俺は耳を疑う。

「えっと・・・インターミドルってあの10代の魔導師たちが魔法戦で覇を競うってあの?」

「そうだ」

「俺が選手として出場するのか?」

「そうだ」

納得できない。絶対に裏があるはずだ。

「主催者たちが大きな犯罪グループで、その悪行を暴くために選手として潜入するとか・・・?」

「違うが・・・?」

「指名手配犯が優勝候補でその陰謀を挫くために決勝戦で倒さないといけないから10最強と呼び声の高い天才執務官の俺が出場するとか・・・?」

「そんなわけないだろ。そんな疑いがあつたら出場させないし、君より強い人間はもつという。それに天才執務官は君より司の方だろ?」

確かに頭は俺の方が悪いけど・・・俺前世と含めたら24年は

生きてたんだよ？

「会場の地下に古代兵器があつて、今年その封印が……」

「解けない！後、そんな古代兵器はない！」

「実は会場に爆弾を仕掛けたという予告状が……」

「来てない。それにまだ時間があるんだ。どれだけ気長な犯人だ」

何を企んでるんだ……

「残念だが今回は裏は無いぞ」

「心を読まれた!？」

「君の考えてることくらい分かるさ」

クロノがそう言うと3人分のいちご牛乳をコップに入れてきたエイメイさんが入ってきた。

クロノはコップを受け取り、説明を続けた。

「実はグレアム提督の知り合いに昔の大会で選手をやっていて、今はインターミドルにでる子供の指導をしている人がいるんだ。だけど彼が今回の弟子を出場させるのに自身がなく日本人で腕の立つ10代の魔道師がないかと聞いて君を推薦したんだ」

「グレアムにははやてが世話になつてるから別に異論はないけど、その先生とやらはどんな人なんだ？」

「僕にも分からないんだ。僕も話を聞いたただけだからな」

普通の人だといいいんだが……

「でも、もう一人の弟子なら知ってるはずだぞ？」

「えっ！？でも俺にそんな知り合いは……？」

「それが意外な人だったんだよね〜」

声を挟んできたのはエイミイさんだった。

「意外な人って誰ですか？」

「高町家の居候ですよ〜」

「今回の話はなかったことで。じゃあ」

俺は窓を開けてパラシュート無しのスカイダイビングを心見る。

「待て楓！？早まるな。急にどうしたんだ」

『知らないんですかクロノさん。マスターはその人が嫌いなんです』

『お』

「私はそうでもないけどな。どれくらい嫌いななの？」

『マスターと恭也さんが結託するほどです』

「それはすごい光景だね」

美由希と仲がいいエイミーはその光景があまりにも異様だと知っていた。

「だからいやなんだ。クロノ。今回はかりはお前やグレアムの依頼でもこれだけは聞けない。俺は帰らせてもらうぞ、今夜は仕事で忙しいんでな」

「そうか……」

クロノは困ったように顔をそむけるが今回は仕方ない。

「提督がホテルを経営している知り合いにたのんでスイーツの食べ放題バイキングを設定してくれるらしいのに」

「さてと。今から高町家に行くってくるか」

「すごい心変わりだね？」

背に腹は代えられん。

「それじゃあ行ってくる」

俺は部屋を出て走り高町家に向かった。

〈数分後〉

「妹原理主義者あいつを殴ってもいいか？」

「珍しく気があつたな。小僧」

俺たちはお互いの敵に向かって戦争を始めた。

72話 俺は絶対釣られない!! (後書き)

〽DJ雨宮の今日もお疲れさん〽

DJ雨宮「はい！始まりましたDJ雨宮の今日もお疲れさん。進行は私DJ雨宮がしていきます」

DJ雨宮「今回のこの企画は作者の若いパッションでノリとテンションで始めた新コーナー!!」

DJ雨宮「今回は新コーナーの紹介」

DJ雨宮「その1〽正義のあれこれ!!これは正義の味方および黒い歴史書で疑問に思ったことや質問をドシドシ送ってください!!」

DJ雨宮「今回は試しにこれ」

楓とシグナムってどっちが強いんですか？

土屋ハヤト

P  
N  
.

DJ雨宮「シグナムです!!自分で言っただけさ!!」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

DJ雨宮「今回はこれで終わり!?!早すぎるぜ」

DJ雨宮「じゃあ今回はこれでsee you next aga  
in!!!」

・次回予告

ついに

楓と恭也が夢のタッグ

次回「楓&妹清教最大主教夢のタッグ!!!」



73話 楓&妹清教最大主教夢のタツゲ！！

楓は高町家にやってきていた。

(さうと来たはいいがどうするか・・・)

楓は門の前で入るか入らないかを迷っていた。

「楓くん！！」

「ぶほっ！？」

門を突き破り、ロケット弾頭のように飛んできた、なのはの頭が俺の腹に入った。

「・・・痛えな」

「にやはは、ごめん」

楓はなのはが命中し焼け焦げた服を探る。

「しかし、良く俺がきてた分かったな」

「うん。楓くんの匂いがしたから・・・」

「お前は犬か！？後、心配する振りして俺の服の匂いを嗅ぐな！！」

なのはは楓の服の匂いを嗅いで有頂天になっていた。

「なのは匂いフェチかも」

「気持ち悪い顔して顔近付けるな」

「何してるお前ら……」

門には鬼神の様な顔をした恭也が立っていた。

「よう、妹王ご機嫌麗しゅう」

今、楓はなのはに押し倒され馬乗りになされている形になる。

「残念だがお前の所為で俺の期限は最悪なんだが」

楓と恭也が火花散らしていると……

「楓ちゃん。なのはちゃんと逢引きかい？」

楓が会いたくない人物が現れた。

「げ、倭……」

嵐倭あらしまへ

超が付くほどの能天気で恭也の修行相手であり、美由希の同級生だ。楓もよく彼の趣味の釣りに強引に連れていかれており、そのたびに仕事が溜まっていった。

しかも、楓の嫌いな保護者タイプで、とても周りに過保護だ。

だが楓もそれだけで人を嫌いになるほど腐っていない。

「楓ちゃん〜正義の味方とか無理しないないで楽しくやろうよ」  
と楓の存在が否定される。

さらに楓が高町家に泊まりに行ったときのことであった。

S i d e 楓

あれは蒸し暑い秋のことだった。

去年の秋は涼しくなかったんだよね。てゆうか異常気象。

さて、さて、お話は戻りましてその夜〜きゃふ〜俺は土郎さんの部屋で寝ていた。

「ふあ〜」

俺はいつもなのはが寝ぼけて襲いに来る時間に起きれるようにアクイラから体に微弱な電流を流して目を覚ました。

「桃子〜むにゃ・・・」

聞こえるのは土郎さんの寝言だけ。

桃子さん。あんた愛されてるよ。

『なのはさん来ませんでしたね』

「まあ、いいじゃないか」

『本当は期待してたんじゃないやありませんか？』

「ふふふ」

俺はとびっきりの笑顔で言った

「ブツ壊すぞ？」

俺はトイレの帰りに恭也とあった。

「あれ妹狂人。どうしたんですか？こんな時間に？」

「倭を知らないか？起きたらいなかったんだ」

「知りませんが」

「そうか。ならいい。子供は早く寝ろ」

「はいはい子供は早く寝ますよ」

俺と妹王が反対を向いて歩きだそうとしたその時、なのはの部屋のドアが開いた。

「まったく。こんな男がいるのに鍵を掛けないなんて不用心だな」

「あなたにだけは言われたくありません。むしろ俺は被害者です。よく復唱して」

俺と妹大臣がなのはの部屋を見た。

机の上でスリープモードで待機しているレイジングハート

無人のユーノのベッド

窓から入り込む月の光

苦しむ声を出すのは

そのなのはに寝技送襟絞を掛けていた。

「「てめえなのはに何してこれとるんじやい!」「」

その後俺と恭也で攻撃したにも関わらず倭は朝まで起きなかった。

ちなみに今なのはの部屋には倭対策の鍵が付いているが数日に一回は破られている。

しかも倭は

「いいじゃんゝなのはちゃん。今日一緒に寝ないゝ。恭也ちゃんもいいよ」

などとムカつく、うざい、殴っても効果がないなどで俺と妹青年はこいつが嫌いだ。

Side out

「げって、なんだよ〜」

「気にしないでいいよ。それよりお前らなんで道着着てるんだ？」

「こいつに新しい技の実験台になって貰おうと思ってな」

恭也は竹刀を肩に担ぎながら言う。

「俺は恭也くんの頼みなら聞くよ〜」

「お前もどうだ小僧」

「そうだな。あんたとやるのは久しぶりだし、倭とやり合っつのは初めてだからら・・・やろうぜ」

〜道場〜

「」「」「」

俺の拳と恭也の竹刀、倭の手刀が衝突する。

「そこだ」

「甘いよ〜」

楓が拳を恭也に叩き込むが横からの倭の蹴りで邪魔され楓は横にかわす。

「助かったといいたいが、それとこれは別だ」

恭也の竹刀が倭をとらえる。

「酷いな。恩人には感謝しろって近所の牧師さんに言われなかったか？」

「な!？」

いつの間にか楓は恭也の背に立つ。

「食らえ!！」

「神速!」

「なっ!？ぼるっ・じい・じい」

「くういちhd」

神速で避けられ楓と倭は激突して壁まで転がっていく。

『この世界にはすごい人たちがいるものですね』

「じゃはは」

レイジングハートの言葉に苦笑を浮かべるのは。

「ねえ？提案なんだけど賭けでもしない？」

「賭けだと？」

しゃがんでいた恭也はキョトンとした声を上げた。

「金がかかる賭けならやらないぞ」

「金なんかいらさないさ」

倭が楽しそうに黒いほほ笑みを浮かべる。

「なのはちゃんとキスにしよう」

「にゃああああああ！？」

「はあああああああ！？」

もちろんなのはと楓、恭也は声を上げた。

「おい、ふざけるな」

恭也が顔を向けずに立ち上がる。

「別に俺らはなのはのキスには興味ねえ」

恭也の横に楓が歩みよる。

「興味ないの！？」

「俺たちはお前がなのはとキスするのが嫌なだけだ」

「いいよ〜かかっておいで？」



「妹原理主義者。あいつを殴ってもいいか？」

「珍しく気があったな。小僧」

楓たちは総攻撃を始めた。

楓がジョブとストレートを混ぜ、後ろから恭也が攻撃する。

しかし、倭は2人の攻撃をお互いに攻撃を横を向きながら右手で楓の攻撃を。左手で恭也の攻撃を防いでいた。

（本当に人間かよ。）

楓は攻撃しながら倭の強さに感服した。

（だが負けるわけにはいかん）

恭也は竹刀を横に大きく振った。

「小僧。うちがあかない。一撃で決めるぞ」

「ああ」

「御神流奥義之陸“ 薙旋！！”

恭也が神速後、四連斬撃を与えた。

さすがにこれには倭も両手で防ぐしかなかった。

だがここで一瞬でも隙を見せたのは倭の間違いだった。

「いくぜ、7連釘パンチ」

楓の拳が倭の背中に入り、どんと釘を打ちつけるように衝撃が蓄積していく。

倭は壁まで吹き飛ばされたが、ふらふらと立ちあがった。

「いったいな〜少しくらい手加減」「出来るか!!!」「」

「妹マン。神速借りるぜ」

「ああ、思う存分やれ」

楓は気を溜めて拳を構える。

「ウルトラ、スーパー、グレネード、フラッシュ、グラッシャー、ブルジョア、ケフィア、スクランブル、フレイム、アクア、ランチヤー、フォートレス、スマッシュ、ブレード、アイギス、マスター、ビースト、アトランティス、モリア、ファースト、イスカンダル、メタル、アワード、テンピス、カルピス、バイオレンス、フル、バースト、ミストルティン、マクドナルド、ケンタッキーフライドチキン、ブレイブ、アイス、コードレス、クレイモア、キラー、サーチエス、シーラカンス、ピン、マキシマム、ベータ、フォルテツシモ、はああああああああああ

あんパンチ!!」

「ああああああああ」

楓のあんパンチを食らい文字道理、倭は空を飛んでいった。

「正義は勝つ!!」

「どっちが正義かわからないの……」

なのはは呆れることしかできなかった。

73話 楓&妹清教最大主教夢のタッグ!! (後書き)

「DJ雨宮の今日もお疲れさん」

DJ雨宮「昨日のことは忘れよう。明日のことは忘れよう。DJ雨宮の今日もお疲れさん」

正義のあれこれ

DJ雨宮「今回はこちら」

楓って山派？海派？

DJ「私的にはどつてちも大好きですが海ですね。山ではうちの厳しいユニゾンに修行されていたので怖いんだよね」

~~~~~

雨宮「DJ雨宮物語はまだまだ進まない〜じゃあ次回予告にレッツ  
ゴー!!!」

・次回予告

さてさて本題。

楓が倭の師匠について聞く。

次回「あなたの師匠はどんな人？」



## インターミドル編 キャラ設定

・雨宮 楓 (KAEDE AMAMIYA)

10歳(年齢が書いてないキャラは10歳です)

概要：闇の書事件から1年とちょっと。執務官試験に無事に一発合格。体もほとんど回復していて今は執務官としての多忙な日々を送っている。

レアスキル：神の7つの贈り物<sup>セブンス・スキル</sup>

概要：楓の持つ7つの能力

1：創造(自分の知っているキャラなどの武器などを作ることができる)

2：能力(自分の知っているキャラの能力をコピーできる)

3：肉体強化(その年齢が出せる全力の力を常時使うことができる)

4：答えを出す者(答えを導くことができる能力)

5～7：不明

魔力変換資質：全部(氷、雷、炎、闇、が得意)

魔力光：オレンジ

デバイス：トワイライト・アクイラ

概要：アクイラの3世代機。基本能力は高くないが豊富なバリエーションがある。チートに隠れたデバイスの会の女帝である。

デバイス：レイリル

概要：楓のユニゾンデバイス。楓の仕事が増え始めてからは小型でいることも多いが基本大人モード。リインフォースとは結構仲良らしい。武器の剣はジェイルによりバージョンアップされて現在はVer.6.10のスペックを誇る。

・不動 飛鳥（ASUKA HUDOU）

概要：楓の親友でなのはたちのクラスメイトだが、プライベートではサングラスをしているため、魔導師であるという事は知られていない。本来お気楽なキャラだが裏では感情が冷血である。この章では戦うことは滅多にない。（たぶんない）外見はほとんど土御門元春。

レアスキル：超魔力運用

概要：自分の周りの魔力を手に集めることができ、なおかつ普通の魔力なら取り込むことも可能。

デバイス：フラベルント

概要：飛鳥のグローブ型アームデバイス。非人格型である。

魔力光：ブロンズレッド

・柊 璃玖（RIKU HIRAGI）

21歳

概要：幼少時から戦争で傭兵として働き、18の時にとある戦争で第36管理世界の小国メルフィアを救い英雄と呼ばれる。持つてる武器は全てロストログニア指定されている。外見は髪がアルビノの碇シンジ。

武器：聖銃『マリア』（敵に肉体ダメージを与えずに、ダメージを与える）

死銃『ヘル』（肉体ダメージと精神ダメージを同時に与える）

癒銃『ホリィー』（撃たれると魔力、疲労が回復する）

征銃『ギル』（弾を連続同時射撃できるようになっており、マシンガン並の速さで、一回に10000発発射できる。また、征銃のみがハンドガンタイプではなく、ライフルである）



レアスキル：鷹の眼

概要：100キロ先まで見渡せる。

レアスキル：無限貯蔵

概要：とある空間につながっており、その空間の中から璃玖は銃や弾を取り出したり、貯蔵出来たりする。

デバイス：アイリス

概要：ゴーグル型ブリストデバイス。機能は多く、銃の誤差を修正をしたり、赤外線を見抜いたり、光を遮断するなど、元の機能に加え、ジェイルの改造を受けてドンドンと増えている。

魔力光：コバルトブルー

・藤林司（TUKASA HUZIBAYASI）

8歳

概要：楓の執務官補佐の少年。楓と同等、それ以上の頭脳を持つ天才。他人を見下す様な話し方をするが、別に見下している訳ではない。戦闘能力はアリサよりも弱いと楓に言われるが、戦えばフェイトを倒せるとも言える。

レアスキル：自動防御オートガード

概要：向かってくる攻撃を全て防ぐ。よって不意打ちは全て無効かされる。

魔力光：紫

・嵐倭（ARASI YAMATO）

17歳

概要：超が付くほどの能天気。釣りが好き戦闘能力は高い、武器は何でも使える。これは釣り先で何時もトラブルを引き起こしてたからである。漂流したり、軍艦に密航した事もある。その所為か交友関係が広く、その中には外国要人がいるという、考えられない人脈を持つ、よく翠屋に釣った魚を差し入れに持って行ったりしてる。楓をよく、釣りに連れて行ったりしてた（無理やり）楓の正義の味方は正直どうでもいいと思ってる。昔、ミッドに漂流した事があり、レジアスとゼストとも知り合いになった。そのあと、グレアムに帰してもらった。ポジティブ思考で精神的に凶太い。偶に恭也の修行相手をしたりしてる。が、戦うのはあまり好きでない。余談だが、美由希とは同級生で、楓と恭也はあまり好きではない。

・クレイ・コルパス

16歳

概要：インターミドルの選手。鞭使い。

・クレナ・アイシス

14歳

概要：インターミドルの選手。本来このような場での剣術ではないが流されに流され出場してしまっただが腕は楓と互角らしい。

・クロード・フルファス

概要：インターミドルの選手。黒色のローブを深く被っており素性も不明。

・スーツの男

年齢不詳

概要：楓と司の前に現れた謎の青年。黒のスーツにメガネという服装で楓たちと対峙する。楓は攻撃しようとするが攻撃できず、2人に謎の言葉を残していく。

レアスキル：傍観者権限

概要：楓と司に攻撃させなかった謎の能力。詳しくは不明。

74話 あなたの師匠はどんな人？（前書き）

すみません更新遅れました。

言い訳させてください！！

テストや

テストや

テストがありました！！

この反省をいかして期末試験までのあいだ執筆を頑張りたいので応援をお願いします。

## 74話 あなたの師匠はどんな人？

Side 楓

今回は話の尺が短くなりだから俺の師匠の話をしようと思う。

俺の師匠は2人いる。

1人目は神埼ハヤト。

中学の時の社会の先生で特技が一言で人の心を折るといふ教師としてはとても残念な人でした。

全校集会では彼の言葉で天馬と英以外の約800人の生徒・先生の心が折れた時は大変だった。ちなみにその時、俺の心もポキーのように折れてしまった。

2人目は阿字野迅。

世界を旅して、とある国で傭兵として戦っていた時にであった師匠だ。

俺にベースとなる戦い方を教えてくれたのがこの人だった。

ある日、突然消えてしまい行方知れずになってしまった。

まあ、どっちにしても碌な人たちじゃなかったってことだ。

Side out

「で、お前の師匠のことについて聞きたい」

翠屋のテーブルに楓となのはとミイラ男が座っており楓がミイラ男に聞いただしていた。

「なんで楓ちゃんが師匠のこと聞くんだよ？」

「お前の師匠がお前じゃ役不足だからって頼んできたんだよ」

『マスターそこまでは言われてませんよ』

「そうかもね。俺戦うの好きじゃないし、気楽に杞憂に暮らせれば一番だからね」

「その強さでその言葉を聞くといくら優しくて温厚で穏やかな楓くんでも終いには殴るぞ・・・」

楓は苦笑いをする。

「はは、でも、師匠なら2週間は会えないぜ？」

「2週間？」

「師匠はある世界にいて磁場の乱れで侵入できないんだ」

「すぐには会えないってことか。ならお前の師匠の能力とやらを教えてくれないか。」

「なんで・・・」

そして楓は黒いほほ笑みで答えた。

「俺に修行なんて必要ないって思い知らせるんだよ」

「無理だと思っけどな」

「楓くんならきつと出来るの。規格外だもん」

「さすがなのは。なのはのくせによく分かってるじゃないか」

「にははは」

楓はなのはの頭を撫でた。

「で、教えてくれ」

「はあ、師匠の能力は重力操作だよ」

「重力操作ってことは周りの重力を重くして、相手の動きを制限するとかそんなもんか」

「いや、師匠の能力はもつとえげつないよ。俺がクレイジーと呼ばれるまでに強力な肉体を手にしたのはそのお蔭なんだ」



「えげつない？」

「師匠の能力は肌に触れた相手の重力を自在に変化させることができる能力だよ」

「そりゃあえげつないな」

「どつゆうことなの楓くん」

「なのは。お前に5倍の重力を掛けるとしよう。そしたらお前はどつなる？」

「？」

なのはが頭にはてなを浮かべる。

「お前の体重が k gになる」

「にゃ！？にゃあにゃ！？なんでなのはの体重知ってるの！？」

「ぐへへ・・・俺はお前の全てを知っている」

「今の発言、楓くんじゃなかったらお巡りさんにつきだしてるの！」

「冗談だよ」

「本当？」

なのはがほっと息をこぼす。

「0割方」

「それって100%本気なの」

「まあ、ともかく本気の話はここまでにして・・・」

「あくまで否定はしないの!？」

「ようは、体重が増えたら体が重くなって動けなくなるだろ? そうしたら攻撃され放題なうえに、臓器や骨が重力に耐えきれずグチャグチャになるってことさ」

なのはが冷や汗をかく。

「ちなみにお前の師匠は何倍まで重力をコントロールできるんだ」

「俺が知ってる範囲じゃ200倍だよ」

(200倍か。ジェイルに作ってもらったトレーニングルームの重力は最大30倍。ってことは俺はこの2週間で170倍の重力に適応しないといけない訳か・・・ああ、俺 ジータじゃないんだよ。さすがに俺でも・・・)

「大丈夫なの。楓くんならベジーにもきつと勝てるの」

「なに人の心勝手に・・・って勝手に心読めるもんなのか!?!あ

と伏字が意味をなしてないし、あの人サイヤ人の王子様だから!!」  
さっきと打って変わって今度は楓がなのはに突っ込んだ。

「まあ、いいや」

楓は席を立って、ケーキを桃子に頼む。

「楓ちゃん帰るの?」

「修行しないといけないからな。勝てるとは思わないけどやるだけやらないと」

「なのはが手伝おうか?」

「いや!! いいです。全力でお断りします」

~~~~~

「あらそれでDrに200倍の重力の作れる装置?」

「そんなとこだ。それとそのケーキはジェルに買ってきた奴だからな」

「いいじゃない。ケチな男は持てないわよ」

「いいよ。持てなくても。俺好きな奴とかいないから。それよりジェル。作れるのか?」

「ああ。出来ないこともない。それに私の探求心もそえられるしね」

「製作にはどれくらい？」

「私とウーノで全力で取りかかるが2日はいただくよ」

「それで十分。俺もその間にやることがある」

「やること？何をするんだい？」

「2人の師匠に教えを仰ぐ」

74話 あなたの師匠はどんな人？（後書き）

「DJ雨宮の今日もお疲れさん」

DJ雨宮「昨日のことは忘れよう。明日のことは忘れよう。DJ雨宮の今日もお疲れさん」

DJ雨宮「DJ雨宮です。みなさん雨って好きですか？」

DJ雨宮「もちろん私は嫌いです・・・」

DJ雨宮「ってこんな世間話をしてる場合じゃないゲフン！ゲフン」

DJ雨宮「なのはGODの発売日が決まりましたね。それを気にインターミドル編の次章GOD編の執筆が新年からと決まりましたパチパチパチ」

はやて「ちやうやろー!」

DJ雨宮「あれ？はやてさん何してるの？」

はやて「作者さんが楓くんだけやとまとまらへんいつて」

DJ雨宮「あの野郎!」

はやて「それより早くインターミドルが終わったらどうするんや？お客さんも首長くしはるよ」

DJ雨宮「そこは問題ないジャジャー!」

## 新作発表

魔法少女リリカルなのは正義の味方〜逃走編〜

はやて「何や？作者書けてない小説や、黒の歴史書の執筆もあるのにまだ書くんか？」

DJ雨宮「意外と厳しいことをいいますね」

はやて「現実ちゅーんは厳しいもんや」

DJ雨宮「でも大丈夫この小説は夏。インターミドル編が佳境に入りだしてかくから。そして、この小説は新作だが続編じゃないんだ」  
はやて「どういうこと？」

DJ雨宮「あくまでこの小説はGOD編までの救済措置であり、GOD編執筆後は、小説を削除して正義の味方に写そうと思います」

はやて「なんや、頭が痛くなるような説明やな」

DJ雨宮「ともかくこの話はまだ仮なので詳しいことが決まりしだいご報告させていただきます」

はやて「それじゃあさいなら〜!!」

## 次回予告

楓は倭の師匠にあ!!!と言わせるために2人に会いに行く。

楓は教えを仰ぐことができるのか？

次回「巨乳の騎士と孤独なガンナ」

## YUKOOの日記1〜4

YUKOOの日記1

世界は動く

彼の意味とは関係なく

何度も何度も繰り返す

もはやそれは一つの必然

神に引かれたレールなのか

それとも彼が決めたレールなのか

最後に彼が来た世界

それは始まりの物語

それはまるで彼の写し身

友を救うこと

それは彼の出来なかったこと

彼のされたこと



YUUKOの日記2

彼女を守るために彼は悪に戻る

義を貫くだけじゃ守れないこともある

それは光と闇はついになっっているからだ

それぞれは打ち消しあい消えてしまう

だから彼は同じ闇から救うと決めた

救われない運命にいた者を

闇にとらわれていた2人の少女とその騎士を

救われなかった自分の代わりに

彼女を救い

彼女の主とその騎士の心を守る

負の連鎖は負しか生まない

ならば正の連鎖は正を生むのか

彼は何を生むのか

YUUKOの日記3

生きているから命があるのか

命があるから生きているのか

生きていないなら命はないのか

命がないなら生きてないのか

決めるのは誰なのか

神か

それとも

それ以外の何かなのか

YUUKOの日記4

きゃはははー!!

私？無理無理！！そんな服な似合わないよ

そんな青春も送れたのだろう

だけど私は選ばなかった

彼を探すために青春を送った

彼は幸せな青春を送れたのだろうか

少なくとも

次の青春はいいものであつて欲しい

それでも無いと彼は報われないのだから

## 75話 巨乳の騎士と孤独なガンナ

次の日

翌日

After day

Tomorrow!!

ウザイ!!!自分で言うのもなんだけどウザイ!!!

つてノリで雨宮楓です。

今回私は深く茂った森の奥地にやってきております。

でも、準備も無しにアマゾンの様なジャングルに踏み入るもんじゃ  
ないですよね。

知ってますか？

ワニって噛むんですよ？

まあ、勘のいい読者の皆様はお気づきでしょうが、私の頭の上でワ  
ニが帽子のように噛みついております。

図にするとこんな感じですよ。

> i 2 5 0 6 6 | 1 1 4 6 <

見れない方はごめんなさい。

ともかく、今から行く目的地で焼いて食べようと思います。知ってますか？ワニってササミの様な味がするそうですね。

「アクイラ。ほんとにこっちであってんのかよ」

『後少しで着くはずですが』

「どれくらい？」

『2時間30分です』

「分かった。お前を分解してアップデートし直さなきゃいけない」とがよよく分かった」

これぞ the 給料の無駄使い。

見れない方はこれもごめんなさい。

ビルです。ジャングルの奥地にビルが建っています。

とりあえずチャイムを鳴らします。

ピンポーン

そして逃げ「俺が降りてくるまで逃げるなよ」る訳ないじゃないですか。バツカだなくもつ。

「雨宮どうした………ワニなんか被って………」

玄関から出てきたのは、俺の組織『白の剣』のメンバー柊璃玖だ。

「お土産です」

ワニを外すと勢いよく出血。

「救急箱かしてもらえる?」

~~~~~

~~~~~

「で俺に力を貸してもらいたいと」

「……………」

「おい、雨宮」

「……………」

「起きろ……………」

はっ!?

「ワニを膝に乗せてる光景に和むとは……………不覚!」

「俺は重いだけなのだが……………」

璃玖の膝の上にはさつきまで俺頭に噛みついてたワニがまるで屋根の上で太陽の光を全身に浴びてぐっすりとしている子猫のように丸まって寝ていた。

「で、話の続きは」

「……………あっ!忘れてた」

「お前は何をしに来たんだ?」

目的を忘れるところだったぜ。

「答えは……」

「いいだろう。お前が強くなるのは俺の見たいお前に近づくことだからな」

「ありがとう」

「だが、何で俺だったんだ？」

「200倍の重力に耐えられる狙撃手がお前以外にいるか考えたら……」

「俺くらいだな」

「でしょ」

話を済ませて俺はビルから出ることにした。

「泊まらないのか？明日から修行したいのだろう？」

「あっ！？忘れてた。修行は半日頼みたいんだ」

「半日？」

「そう。もう一人頼みに行くんだ。別のベクトルの戦い方をする師匠に」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



ピンポン

今回は逃げません。

「は〜い！あつ楓くん」

「こんにちはシャマルさん」

俺は八神家に来ていた。

「今日はシグナムに用があってきたんだけど・・・」

「シグナム今いないのよね〜。夕方には帰ってくるはずだけど」

「じゃあ待ちますよ」

リビングに入るとテレビゲームをしているヴィータがいた。

「おっ！！楓じゃん。どうしたの」

「シグナムにお話があつて来たんですって」

「ふ〜ん。ねえねえ楓。シグナムが帰ってくるまでゲームしようよ」

「いいぜ」

楓WIN

「負けた」

「ふふふ弱いぞ塵芥」

「昨日借りて8時間はやってるのに」

「おいゲームは1時間OK？」

でも、8時間もやって勝てないなんて可哀想だから種明かしするか。

「あのゲームってアリサに借りた奴だろ」

「うん」

「実はな俺はアリサの家でやり込んでたんだ」

そう・・・

「毎日8時間1ヶ月もの間まるで廃人のごとく!!!」

「お前か!!!」

「げふ!?!」

俺の頭にグラーファイゼン!!

「何をしてるのだ。雨宮」

「お帰り、シグナム！！」

「ああシグナム。お帰り」

そして俺の意識もお帰り。

「それでなんで雨宮が？」

「お前に会いに来たんだよ」

「私に？」

「ああ、実はインターミドルって大会に出るんだが、俺の監督をしてくれる奴に目に物を見せてやろうと思って、剣を使う人に師事しようと思って」

「お前は碌なこと考えないな」

「よせやい。照れるじゃねえか」

「楓くん。多分ほめてませんよ？」

「200倍の重力に耐えられる剣士を考えたらシグナムくらいかと」

「そんなことはないぞ。騎士足るもの200倍の重力に耐えられるぞ」

「そんな訳ないじゃん。嘘つくなよシグナム。そんなこと出来る訳ないじゃん。なあシヤマル」

「えっヴィータちゃん出来ないの!？」

その時俺とヴィータは同じことを思った……………

……………シャル恐ろしい子!!

「いいだろう。仮もあるしな。手伝う」

「ありがとうシグナム」

俺はシグナムの手を握りブンブンと振り回す。

「離せ離せ!!

「あつごめん」

俺はすぐに手を話した。

「では、いつ修行をするんだ？」

「うん……………」

考えてたんだけど……………片方を午前中、もう片方を午後がい  
いんだけどな

よし、

先にシグナムだ！！…… ルートに進む

いや、璃玖だな…… ルートに進む

## 75話 巨乳の騎士と孤独なガンナ (後書き)

「D J雨宮の今日もお疲れさん」

D J雨宮「昨日のことは忘れよう。明日のことは忘れよう。D J雨宮の今日もお疲れさん」

はやて「ぶつぶつ・・・八神はやてです」

D J雨宮「どうしたんですかはやてさん」

はやて「どうしたもこうしたもあらへん！！せっかく家がでて来たのに私の出番がないんや！！」

D J雨宮「それは尺の問題でしょ」

はやて「考えてみれば私が最後に登場したの70話やないか。このシリーズに入って出てないメインキャラなんて私くらいやないか。それはアリサちゃんもすずかちゃんも出てないけど、2人は結構出番からあれやし、リインフォースは次のシリーズのメインやから出番がなくてもいいけどそれにしても、今後個人ルートがない私にも出番があってもええやん！！そもそも闇の書編も私がメインなはずだったのに全然目立ってへんし、そもそもこの物語の主人公の・・・」

D J雨宮「はやてさん？ああ、聞いてないや。はやてさんが自分の世界に入っているので今日はここまで。じゃあね」

次回予告

始まった修行

楓の重力との戦いが始まる

次回「ハプニングは男女問わず」

76話 ハプニングは男女問わず(前書き)

今回は ルートと ルートに分かれています、どちらを選んでもその先の展開には変わりません。



## 76話 ハプニングは男女問わず

ルート

「これはすごいな」

楓たちがいる訓練室の中央にある巨大なプロジェクターを見てシグナムがまじまじと答えた。

「俺の知り合いに作ってもらった重力発生装置さ」

「これが……」

「製作期間が1日だから200倍の重力しか操れないけどな」

「そうか。じゃあ始めるか」

そうシグナムが言ったとたん部屋に100倍の重力がかかり楓がしゃがみ込む。

「ぐっ。さっすがに重いな」

「両宮これくらいでギブアップか？」

「これくらいだと？最強のサイヤ人だって宇宙の帝王との戦いじゃこの程度しか修行してなかったぜ」

「でもやるんだろ？」

「もちろん！！」

楓は体をピンと保ち立ち上がる。

「二等空位尉、烈火の将シグナムと炎の魔剣レヴァンティン」

「本局執務官、雨宮楓と聖剣トワイライト・アクイラ」

「「参る！！」」

ルート

「さすがだな」

楓たちがいる訓練室の中央にある巨大なプロジェクターを見て璃玖がまじまじと答えた。

「昨日ジェイルに作ってもらった重力発生装置さ」

「ずいぶんとでかいが1日だとちゃんと機能があるか心配なのだが」

「ああ。さすがに1日じゃ200倍が限界だったらしい」

「そうか。しかし、200倍あれば十分だ。始めるとしよう」

そう璃玖が言ったとたん部屋に100倍の重力がかかり楓がしゃが

み込む。

「くっ」

「さすがのお前もきついかな？」

「まさか。1日1万回正拳突きする訳でもねえし、これくらい騎士にとっちゃあたりまえさ」

「そうだな」

「そうさ」

楓は体をピンと保ち立ち上がる。

「武装組織『白き剣』副隊長、傭兵、柊璃玖と聖銃マリア」

「武装組織『白き剣』隊長、執務官、雨宮楓とアクイラ」

「行く」

Side out

ルート

「どっ」

「はっ」

ガキン！！

何度もアクイラとレヴァンティンが交差する。

フツ！！

楓の首元を剣が横切る。

「危ね！？」

「落ち着いてる暇はないぞ」

ビュー！！

（上だ）

楓は足に力を込める。

（ヤベ！？体が重すぎて飛べない！？）

飛べないことに気づき床を横に転がった。

「飛べないと気付いてとっさに体勢を変えて転がったか。いい判断だ」

「気づかなきゃ死ぬだが」

「いや、非殺傷設定だから大丈夫だ」

「そこはもう少し、『死ぬくらいじゃないと強くはなれないぞ』的なセリフくらい言おうよ」「」

「そうだな。なら技も混ぜて行くぞ」

ルート

「うらー!」

バシー!

璃玖の聖銃マリアから放たれる弾丸を楓はアクイラのロッドフォームで弾き返していく。

ビシユン! ビシユン!!

放たれる銃弾を撃ち落としていく。

「もういっちょ」

「なら、もう一丁増やすぞ」

「なっ!? ヘル!?」

璃玖の手に握られたのは璃玖のハンドガンで一番殺傷能力の高いヘル。

「やばい! アクイラカートリッジロード」

「Yes・master」

バシユン！！

楓がアクイラを鞭モードに変えて銃弾をたたき落とす。

「攻撃を続けながら防御力を上げるために凡庸性の高い鞭を選んだか」

「正直、ロッドも鞭も苦手なんだけどな。まあ、騎士なもんで」

「ふっ、そこまで苦手な武器で戦うのも修行か？」

「もちろん」

「なら俺も多少本気で行かせてもらおうか」

璃玖がゴーグルをかける。

「行くぜ。フォール・ランサー」

「なっ」

「誤射は期待できないと思え」

ルート

「紫電一閃！！」

「ぐあー！！」

ガキンとアクイラとレヴァンティンの衝突の音が鳴り、楓は地面に

体をぶつける。

（体が重くて技が使えない・・・ひとまずシグナムの武装を解除しないと・・・）

楓がアクイラの剣先をシグナムに向ける。

「その剣の本質は突くことでなく斬ることだったはずだ」

「その通り。重力の重いこの状況じゃ俺の技はほとんど使えないんでね」

楓が走り出しシグナムに抱きつくと同時にアクイラが蛇腹剣となり楓とシグナムは巻き付かれる形となった。

「何のつもりだこれだ」

シグナムが少し赤色のかかった顔で言う。

「俺の技がほとんど発動出来ないこの状況かで俺の判断はただ一つそれは」

楓は重い口を開いた。

「あなたの武装を解除することさ」

手に魔力を込めてバリアジャケットに触れる

「風花武装解除（フランスエクサルマテイオ）！！」





なら・・・行ける!!)

楓が前方に手を構えながら走る。

(がつ!? 幻想殺しの発動中は能力が使用できないんだよな・・・  
そうだ)

楓が足を踏み外したと思うと・・・

横に転がり始めた。

「爆天コロコロアタック!! (+ 幻想殺し)」

「なっ!?!」

さすがに璃玖も驚いたのか思考が一瞬送れた。

「幻想殺し!!」

その瞬間楓の右手が璃玖の左足に触れた。

ルート



ルート・・・璃玖と温泉編に続く  
ルート・・・シグナムと温泉編に続く

## 76話 ハプニングは男女問わず（後書き）

～DJ雨宮の今日もお疲れさん～

DJ雨宮「今日の話終わり」

はやて「早すぎるやる!!」

DJ雨宮「ふげぶら!!」

はやて「せつかくの私の出番を楓くんのおまぐれで潰されるなんてあかん」

DJ雨宮「だってこっちには ルートと ルートの二つのルートを通時進行だけ。なに涼宮 ルビの驚愕買ってやるきだしてんだよ」

はやて「でも画期的やん」

DJ雨宮「でも、俺のKO負けだろ。こっとなったら」

ルート

楓はなのは、フェイト、すずか、アリス、はやてと淫らな日々を過ごしました。

完

はやて「楓くん……?」

D「雨宮」はい？」

はやて「ラグナロク」

D「雨宮」お許しを！！ぎゃあああああ

はやて「まったくなんで私だけじゃないねん」

次回予告

午後の修行の方は無事に終わり楓は露天風呂でくつろいでいた。

しかし、彼に平穩は与えられない。

次回「大きいお山と海の灯台」

次話には下ネタが含まれています

77話 大きいお山と海の灯台（前書き）

今回は卑猥なネタが入ってるので苦手な方はバトルが入る次話にジャンプ！！

## 77話 大きいお山と海の灯台

ルート

シグナムにボコボコにされた後、俺は転送ポートで移動し、倭と訓練を行った。

そして、その疲れを癒すために露天風呂に使っています。

「いい湯だな」

「そうだな」

あれ？声の一つ多いような？

「どうした楓。そんな一人で風呂に入ったはずがいつの間にか他にも人間がいるという反応は？」

「まさにその通り！！お前は知られざる英雄か！？」

「そんな驚くことではなからう。プロのスナイパーは同じところで数日も息を殺しているという」

「プロのスナイパーは化け物・・・だな」

俺はひとまず納得した。

「しかし、今日の修行はどうだった？」

俺は率直な感想を言った。

「全然だめだな。肉体強化を使っただけだと言っただけでもスピードが遅すぎる」

「それが当たり前だ」

「だけど俺は強くなりたい」

「無理して強くならなくてもいいさ」

予想外だった。いつも俺が強くなって正義の味方として国際的に活躍し、世界を飛び回ることを期待していたはず（そこまでじゃないby土屋ハヤト）の璃玖がこんなことを言うなんて。

「勘違いするな。進む道が高ければそれだけ体に負担がかかる。今のお前みたいにな」

「そつだな」

俺はその言葉を聞いてある人のことを思い出していた。

「なんかさ・・・」

「なんだ？」

「イヤ！やっぱ、なんでもない！」

「言いたいことがあるなら言え。なんでも背負い込むのはお前の悪



いところだぞ」

「ああ」

俺は話すことにした。

ルート

璃玖の目の前で吐き散らし、ヨレヨレの体で転送ポートから移動し、シグナムと修行し、俺は疲れを癒すために、露天風呂に浸かっています。

「いい湯だな」

「そうだな」

あれ？声の一つ多いような？

「どうした雨宮。そんな一人で風呂に入ったはずがいつの間にか他にも人間がいるという反応は？」

「まさにその通り！！あとお前なんでここにいるんだよ！？」

「お前と親睦を深めたいからに決まっているだろう」

「だけど……」

「タオルは巻いてあるから心配するな」

「いや、男女が2人きりでこんなところで」

「女湯に入るのは初めてではないだろ」

「その言い方やめて！！温泉の時はしょうがなっただから」

「ふっ。そうだったな」

俺は赤面になりながら顔を温泉に埋める。

「照れるな。お前らしくないぞ。騎士なら堂々としろ」

「堂々としろって……………」

無理無理。ただでさえ体勢ないのに……………

そりゃ文化したら大丈夫だけ？だけど……………

「苦手なんだよな……………」

「苦手？」

「いや、なんでもないさ」

「何だ？面白そうじゃないか」

はあ。シグナムさんにこう言われると断れない男ですよ。

「実は俺年上の人とのコミュニケーションがあまり得意じゃないん

だ

「そうなのか？しかし、リンディ提督などとはよく話しているじゃないか？」

「俺の話かたで大人なみなさんとなのはたちの違いが分かりませんか」

シグナムさんは深く考えこむ。

「敬語か？」

「ご名刀。別につらい話しじゃないんで話しましょうか」

ルート

「なんか、お前似てるんだよ」

「似てる？」

「俺の姉」

「姉？」

「そう、4歳歳上の姉さん」

「……………」

複雑な面持ちのままこう言った。

「複雑な気分だ」

「そうだな。雰囲気だけだ。それ以上言ったら姉ちゃんに失礼だ」

「クフフフ・・・」

いつもはあまり笑わない璃玖が突然笑い出す。

「おい、なんだよイキナリ。気持ち悪い」

「悪い。お前はホントに姉が好きなんだな」

「ああ、俺の大好きな最高の姉さんだ」

「シスコン」

「なに!？」

ルート

「実は俺には姉がいるんです」

「姉? そう言えばお前の御両親は無くなったと聞いてるが」

「ああ。両親は事故でね」

「姉君は?」

「ああ・・・」

事故にあつて親も俺も巻き込まれている訳だからこう考えるのも当たり前か。

「姉は健在だよ」

「そうなのか？」

「まあ、姉ちゃんは親と縁を切つて世界を放浪してるんだ」

「縁を切つたとは御両親となにかあつたのか」

「父と色々ね」

そう言えば父さんがあんなに怒つたのを見たのはあの時だけだったな。

「でも、なぜその姉君が原因なんだ」

「実はさ、姉ちゃんはかなりのブラコンでたまに家に帰ってくると思ったら俺と絶対に風呂に入らなくて甘えて、しかも買い物に出かけると腕組んできて、それに色んな人に俺を彼氏と呼ぶわ色々あつてドンドンと苦手になつて」

あれは大変だった。

「そして、ドンドンと年上が姉ちゃんのような人じゃないのかと思つて」

「それは大変だったな」

「年上が年上の女性がみんな車を凸ピンで吹き飛ばすと思い込んで」

「待て・・・お前の姉君は何者だ」

「えっと、3歳の時点で大学生レベルの学力を持ち、スポーツではほとんど測定不明。才色兼備で大人な女性。しかも、自己中心で自分の気に入らないことは全て曲げてしまうほどの力の持ち主。つてところかな？」

「雨宮・・・お前の家族は化け物か？」

失礼な。雨宮家で化け物は姉ちゃんだけだ！！まあ友達に同じ程の超人がいるけど・・・

ルート

「さてと」

璃玖が腰を上げる。

「あれ上がるのか？」

「長風呂は得意じゃないんでな」

「待て俺も上がる」

立ち上がったその時だった。

ツル！！

「あれ？」

俺は足を滑らせて前に体が倒れる。

「おわわわわわー!!」

俺はどうにかしようとして手を前に出した。

ズル!!

「ぶほへヴあ」

俺は顔を床に打ち付ける。

「いてて」

俺は顔を上げるとそこには。

「何をしてる？」

璃玖のバベルの塔が俺の目の前に建設されていた。

「いやああああああ」

露天風呂に俺の叫び声がこだました。

ルート

「やっや」

シグナムさんが腰を上げる。

「あれ？もう上がるんすか？」

「ああ。風呂は好きだがもう遅い。そろそろ帰らないと主はやてが心配するしな」

「送りますよ」

立ち上がったその時だった。

ツル！！

「あれ？」

俺は足を滑らせて前に体が倒れる。

「おおわわわわ！！」

俺はどうにかしようとして手を前に出した。

ズル！！

「ぶほへヴぁ」

俺は顔を床に打ち付ける。

「いてて」

俺は顔を上げるとそこには。



「ああ・・・あわわ！」

そこには顔を赤くして手で二つの山を隠すシグナムさんがいた。

「いやああああああ」

露天風呂にシグナムさんの叫び声がかたました。

## 77話 大きいお山と海の灯台（後書き）

「DJ雨宮の今日もお疲れさん」

DJ雨宮「はい。DJ雨宮です……」

はやて「どないしたん？」

DJ雨宮「最近俺酷い目に会ってばかりだと思って」

はやて「出番があるだけマシやる？」

DJ雨宮「でもさ俺主人公だよ。最近活躍もしてないしさ、今回で  
実質インターミドル編前篇終わりだぜ」

はやて「確かにそんなところもあるな」

DJ雨宮「せつかくチートを使わず闇の魔法マジック・エレミアくらい習得できると思  
ったのによー！」

はやて「それが本音かい！！」

・次回予告

ついに来た倭の師匠との対面の時

修行の成果は出るのか

次回「上のさらに上に行くもの」



## 78話 上のさらに上に行くもの

第67管理外世界ウルフェスト

「ふう」

『どうしたんですかマスター』

「アクイラ待ち合わせ時間まで何分だ？」

『10分です』

「10分か・・・なあ、アクイラ」

『はい？』

「突然折れて」

『まさかの無茶ぶり！？そんなに簡単に折れてたら刀身が持ちませんよ！！』

「うまい！！座布団3枚」

『大喜利ですか！？』

そんな他愛もない話をしていると、誰かの声が聞こえてくる。

「楓ちゃん」

やっぱり聞こえる。倭の声だ。

「おい楓ちゃん」

右を見て、左を見て、もう一度右を見て、一回回って、手を叩いてポーズ。

『マスター』

？

『上です』

空には超スピードで折れた柱に乗っている倭がいた……

って、落ち着いてナレーションしてる場合じゃない!!

「創造」

俺は手を合わせる。あれ？こんなポーズしてたかって？いや、こっちの方が見栄えがいいじゃないですか。

「銀鞭下りて五手石床に墮つ」

俺は銀の小さな筒を取り出し俺と倭の延長線に靈力を込めて放り投

げる。

「五架縛」

俺の前に巨大な盾が現れた。

だが、その盾にもひびが入る。

「さつてと、避難、避難」

俺が離れると同時に五架縛は無残にも砕け気散った。

そして、地面にはクレーターが出来ていた。

「おい倭生きてるか？」

「はいはい元気!!」

地面からぴよこつと出てきやがった。なんて生命力だよ。1人見たら30人はいるかもしれないな。

「で、倭この滝が入口か」

俺たちは滝の様な場所に立っていた。

「だけどこれは水じゃない・・・」

滝つぼに触れると水が付かない代わりに手がドツと重くなったり軽くなったりを繰り返す。

「そう。正しく言うと滝でもないんだよね」

倭も水の滝つぼに触れる。

「重力の滝。この滝に流れてるのは重力なんだよ」

「やつぱり・・・」

多分この見えるのは重力変動で歪みきつた景色か。

「この先にある空間は重力バランスが乱れていて外界とは完全に切り離されてるんだ」

「ちなみにお前意味分かって言ってる？」

「師匠の受け売りだ!!」

馬鹿なこいつがこんな難しいことをいえたことに納得だ。

「来たよ」

滝を包んでいた重力が上から消えていく。

「よう。お前がグレアムの糞ジジイが寄こした生徒か」

滝の流れていた先から武道着を着たおそらく20代に見える目つきの悪い男だ。

「初めまして。時空管理局執務官雨宮楓です。先輩執務官クロノ・ハラオウンの要請によってここに参上しました」

「そんな前置きは必要ない」

寡黙な目つきだった目が少し笑った風になる。

「俺は強い奴にしか興味ねえ」

「それはあなたを倒していいってことですか」

「ビュー!!」

「そうだな」

「ガァ!!」

気が付くと俺は後ろにあった岩に体を思いきり打ち付けられた。

いや、一瞬で目の前に現れて腹に掌底をくらったただけで岩に衝突した。

「倭聞いてた話とは違うぞ」

重力系のスキルの使い手だと思っていた。重力系のスキルの持ち主は大抵スピードが遅いというデメリットを持ってたり、大型武器を使うためにそのスキルを使うと相場が決っている。



「師匠は根っからの武道家だからね」

「にしても早すぎだろ・・・だけど・・・」

俺はアクイラをグローブモードに変える。

「着いていけない早さじゃない!!」

「かかってこい」

「はっああああ!!」

俺は拳を叩きこんだはずだった。

「オイオイ期待外れでせ小僧」

俺の拳はやつの右手に握られていた。

「俺が拳を使うまでもないぜ」

「わっ!?!」

そのまま腕を掴まれ投げ飛ばされるがうまく着地した。

「おっ。思ったより身軽だな」

「重力トレーニングはしてきたんでね」

「そうか。お前は重力がお好みか」

そして倭の師匠が手を上げた。

「100倍」

「グッ!!」

落ち着け。重力に適應するトレーニングは積んできた。息を吸って体を重力に合わせるんだ。

「ふう」

「へーすごいじゃないか。100の重力にこんなにあっさり適應するなんてな」

「あんたを倒すために200倍の重力で修行したんでな」

アクイラを双剣モードにして構える。

「行くぜ」

「そうか」

「平伏せ」

俺はあいつに平伏す姿になっていた。

「体が動かない!？」

「お前は俺の操れる重力の限度が200倍だと俺に聞いていたんだろ」

「ああ、だけどこりゃ」

俺は悪い仮定にたどり着いた。

「まさかお前」

「そつだ。俺の操れる重力は700倍だ」

700倍……

思いもしなかった重力に俺は今の言葉が聞き間違いかと疑った。そもそも700倍を耐えられる奴なんているのかよ。

それまでへらへらしていた俺ですら驚きの表情を隠せずにした。

「し、師匠。お、俺そんなこと聞いてないよ!!」

「それは言っていないからな」

ちなみに俺も倍の重力を掛けられている。

「ちなみに今俺がお前に掛けている重力は220倍だ。20倍違う」

だけでこのざまだ。お前の修行はなっちゃいない」

「どうやら俺は覚悟を決めないといけならしい。」

「降参です」

俺は徐に両手を上げた。

俺は勝てない。

全力で臨んだつもりだった。

でも、勝てない……

だから……

俺は今までと変わる

「俺に戦い方を教えてください。真っ直ぐな戦い方を!!」

「肝が据わってるな。今はこんなだが倭と最初に会った時のことを思い出した……」

「今はこんなって何!?あと解放して!!」

「宜しくお願いします」

「ああ」

そして、俺は鍼に弟子入りした。



78話 上のさらに上に行くもの(後書き)

・次回予告

鍼に弟子入りを志願した楓。

倭とともに修行を始めた。

次回「修行！修行！修行！」

79話 修行！修行！修行！（前書き）

意欲が・・・誰かオラに意欲を分けてくれ・・・

79話 修行！修行！修行！

さてさて、倭の師匠、鍼さんに弟子入りした訳ですが……  
何でこんなにつになくテンションの低い始まり方をしているかとい  
うと……

「今俺は後ろから崩れていく橋を200倍の重力を掛けられながら  
全力疾走しているのです」

『マスター。ただいま崩落1メートルです』

「こんなこと言ってる場合じゃねえ！！」

俺は能力無し、魔力無し、そもそもチート無しで全力で走る。

しかし、何で俺と同時に走り出した倭がこんなに先行しているんで  
しょうか？

「ハッハッハッ……」

目が霞む。たまに足が落ちそうになるほど余裕がない……

『マスター後10m！！』

あと少し……

『……』



ガラ！！

俺の足場が砕けた。

「楓ちゃん！！」

『マスター！！』

「はっ！！」

俺は崩れた地面を思いきり蹴って飛ぶ。

「届け！！」

「ふう……」

俺は何とか崖を掴むことに成功した。

「あとは上がるだけか……倭、手貸してくれ……体が重くて  
ままならん……」

俺の目線の先には無表情だがその裏に何か黒い思いを秘めた鍼さん



『マスター!! 気を抜いたら!!!』

「ぶっばらばらばけびゅべ!!!.....」

『マスター!? マスター!?』

さらにその次の修行は荒波に向かってボールを蹴るものだった。

「アクイラ.....」

『駄目です。私もツッコみたいんですから』

「でも.....」

『駄目です。出番が少なくてこんなチャンス滅多にないのにツッコミを我慢してるんです』

「でも.....」

「『タイガ ショットかああああああああああ!!!』

楓の苦難はまだまだ続くのであった。

「はぁ……」

楓は海岸で火に薪をくべていた。

『どうしたんですかマスター。そんなため息なんて似合わないことをして』

「うるさい。後、一言多い」

楓は自分の近くにあった飛び出た岩に腕輪を打ち付ける。

「昔の修行を思い出してな……」

Side  
楓

（回想）

あれは俺が転生してすぐの話。

Xグロープのダメージで体を壊してから1週間後のことだった。

「さぁ、走れ……」

「あのレイリルさん。みなさんに状況を説明させていただきませんか？」

「手間省きたいから私がやるわ。雨宮楓は体にタイヤの着いたひもをくくりつけられて、番犬ケロボロスちゃんに追いかけられる特訓

だ  
」

分かりやすい説明……

「な訳あるか!!!!!!!!!!!!!!」

俺は全力でケルベロスちゃんから逃げていった。

〈回想終り〉

『しょうもない回想でしたね』

「そうだな」

『そう言えばあの時のケルベロスちゃんは何処に行ったんですか?』

「ドゥーエが飼ってるよ」

『似合いますよね』

「だろ」

そして、苦難はまた始まった。

「……………」

「……………」



79話 修行！修行！修行！（後書き）

「DJ雨宮の今日もお疲れさん」

はやて「楓くん・・・私出来ちゃったの・・・」

DJ雨宮「はあ〜い。今回のお便りです」

はやて「無視！？私の重大発表無視！？スル！？」

P.N.『明日から頑張ろうさん』のお便り

創作意欲をください。

DJ雨宮「はい。明日も頑張ってください」

次回予告

なんやかんやで終わった修行。

楓は海鳴に戻ってきた楓。

インターミドルの前にはばしの休息を取ること・・・

次回「休息 - the neighborhood」

80話 休息・the neighborhood・(前書き)

すみません。色々忙しくて執筆時間がとれませんでした。

いや、学業が忙しかったり、少し早いですが文化祭の準備もあつたりと……

ちなみに授業中は楓くんの絵を描いて楽しんでます(良い子も悪い子も真似しないでね)



80話 休息 - the neighborhood -

Side なのは

こんにちは、高町なのはです。

久しぶりの私視点なの。

今日は局のお仕事はお休みなんです。

暇だったので何処かに行こうと考えてたのだけど、フェイトちゃんはやてちゃんは局のお仕事で、本局に。アリサちゃんとすずかちゃんは何故か連絡は取れないの。

「暇だね〜」

こんなに退屈なのは久しぶりなの。クロノくんにも「たまには休むことも任務の一環だ」って言われたからお仕事も出来ないし。

「ねえ。レイジングハート。何しよう」

『マスターのお好きなことを』

だよね〜





空を見ると楓くんが目を回して落ちてきました。

S i d e  
楓

「で、どうして落ちてきたの」

頭に瘤を作りながら聞いてきた。

「話すと短くなるから良く聞いておけ」

「初めて聞いたの。そんな前置き」

俺は話し始めた。

「倭に投げられた」

「今の一言で分かるのっておかしいのかな」

「多分俺もお前と同じ側なら同じことを考えてる」

「じゃははは」

どうしようもない顔でなのはが笑う。

出沒！アマミヤ町ク天国

「さっそくベスト1からの紹介です」

1

「翠屋。オシャレな通りの一角にある海鳴市にあるオシャレな喫茶店。オシャレなテラスでコヒ を飲みながらケーキを頂くのはいかがでしょうか？」

「楓くん。何言ってるの？」

「以上看板娘の高町なのはでした？」

「なんで疑問形なの！？そこは肯定してよ！！！」

「と言うことで土郎さん！桃子さん！こんにちわ！！！」

「やっぱりなのは全面的に無視なの」

「あ、うん」

「本気！？」

「楓くん久しぶりね」

「すみません」

「いいのよ。楓くんも忙しいんでしょ？」

「はい」

「楓くんは倭くんのお師匠さんのところで修行したんだって」

士郎さんが手ぬぐいで手を拭きながらレジに立った。

「大変でしたよ」

「見れば分かるよ。筋肉の付き方が今までとは違う」

「えっ？」

俺は意味がよく分からず声を上げていた。

「筋肉のが柔軟性を上げている……」

「あのお、士郎さん。筋肉をマジマジ見ないでください」

「いや、ごめんごめん……」

「ところで美由希さんと堕天使恭也は？」

「美由希はお友達とお買い物もので恭也は忍さんの所なの」

「大丈夫なんですか？」

「ピークは過ぎたからね」

しかし、夕どきになるとまたお客が増えるはずだ。

「なのは、ちょっといいか」

「うん。いいよ。多分同じことなのはも考えてたから」

よし。流石なのは。

「土郎さん!!」

「どうしたんだい？」

「俺もお店を手伝います！」

「そうしてもらえると助かるけど大丈夫なのかい」

「何言ってるんですか。人助けが俺の性分ですよ。な、なのは」

「うん」

俺は右手を前に突きだす。

「ミッションスタートだ!!」

ケーキを作れ。

「で、楓くん。まずどうするの?」

「材料をテーブルの隅においてくれ」

「うん」

なのはが小麦粉や卵を持ってテーブルに一つずつ置いていく。

「そして、この材料の上にこの特殊な魔力により俺の作った空間に繋がっている何の変哲のない布を被せます」

「全然普通じゃないの!？」

「そして1、【ボワン】ケーキが出来ました」

テーブルの上には色とりどりのケーキが。

「楓くん今失敗したよね!？あと誰が作ったの!？それと端で動いてる緑の生命体は何?」

「……………とにかくミッションコンプリートだ」

MISSION COMPLETE

「これでいいの!？」

「接客を始める」



俺は偶然持っていた執事服を着て（何故持っていたかは気にするな）を着て、こちらも何故か偶然に持っていたメイド服をなのはに着せた。（ええい！！だから気にするなと言ってるだろうが！！）

「なのは？」

なのはが俺を見つめながらぼーっとしている。

「起きてるか？」

なのはの前で手を振ってみる。

「無反応か・・・」

今度は頬を右に左にグルングルン赤くなるまで回し続けた。

「うーん・・・どうしたんだ？」

もっと遊びたいが仕事がある。

「楓くん、接客いいかしら」

「はい。」

しばらくするとなのはの「じゃああああ」と言っ悲鳴が聞こえた。

「いらっしゃいませ」

「む」

頬っぺたがまだ痛い・・・

「どうしたのなのは？楓くん見つめて頬っぺた赤くして」

「若気の至りってやつなの！」

「なのは使い方間違ってるぞ」

「にゃあ！？」

聞かれてたの！？

「さっさと仕事しろ。もうすぐ夕方だ。稼ぎ時だヒヤホオ」

お金が関わってるとき一番目が輝いてるよね・・・

S i d e  
楓

「お疲れさまでした！」

「今日はありがとう」

「お父さんお母さんなのはも先に帰るね」

「気を付けてね」

「うん」

俺となのはは2人で翠屋をでた。

ちなみに32万は稼ぎました

「楓くん。インターミドルの練習ってどんな感じ？」

「大変だな。まあ、それくらいしないと勝てない訳だが」

「そんなに相手って強いの？」

「多分地区予選で負けるな」

「楓くんでも負けちゃうの!？」

「な〜に人を完全超人兵器みたいに見てるんだよ・・・」

「・・・」

「否定くらいしろよ!」

「じゃはは」

「ったく」

俺は少し気を抜いた。

「そう言えばこうやってお前と話すのは久しぶりだな」

「そうだよな」

「それだけ俺もお前も忙しくなったってことだよな」

「楓くん無理しないでね」

ポカ!!

「何で急に殴るの!」

「ったく。お前が言えることじゃねえだろ」

「そんなことないよ」

「素直じゃねえな」

「お互いさまなの」

「そつなのかな」

俺となのはは意外と似ているのかもしれない。一途で目の前にことを何とかしたくて突っ込んで行く。

だから、きっと俺たちは友達になれたんだ。

80話 休息・the neighborhood・(後書き)

♪DJ雨宮の今日もお疲れさん♪

はやて「今回は楓くんがいないので私が質問に答えます」

?「……………ウグ」

P・N・『桃色瑠璃色さん』からのお便り

楓が一番好きなのは誰ですか？

はやて「もちろん私や」

?「ウブ!……………ウググ!……………ウブ!」

はやて「外が工事で変な音がするので今回の収録は終了です」

?「ウグ」

次回予告

雨宮楓には2人の弟子がいる。

その2人と楓の模擬戦が……

次回 『指南』The apprentice wants to  
exceed the master.』



みなさん元気ですか？

私はやつれてます。

今回は日常編 part 2です。

後、扉絵を書いてみました。

楓くんの無防備な姿をどうぞ。



「とじゃあ」

楓は燃え盛る炎の結界の中で戦っていた。

「紫電一閃!!」

楓の紫電一閃は虚空を切った。

「ちっ!」

楓は戦っていたのだ。

見えない敵と……

(気配がほとんどない。俺のミスディレクションと知られざる英雄  
並みだ)

楓は少しずつ足を動かす。

「影の裏切り(ビトレイアル アヴ シャドウ)」

「危!!」

楓の陰から無数の黒い刃が襲ってくる。

(アクイラで防ぐ!!)

楓が刃の方向に盾形態にアクイラを変えた時……

「グバァ……」

胸に痛みが走り口から吐血した。

(そうか……)

後ろから黒い刃突き刺さっていた。

「私の勝ちだね、楓くん」

影の中からすずかが現れた。

そう、楓が戦っていたのは親友月村すずかだったのだ。

「強くなったでしょ。猛練習したんだから」

「確かに強くなったな・・・」

「でしょ」

「ああ・・・」

(確かに・・・)

「俺の分身を倒せるくらいにはな」

「えっ!?!」

ボン!!

「嘘!?!」

すずかは周りを見回す。

(いない!?!?ってことわ・・・)

「上!?!」

すずかが上を見た時アキラの銃形態を構えていた。

「カートリッジロード!?!」

アキラから弾薬が射出される。

とっさにすずか影に潜り込む。

「遅え！！！」

アキラの銃口に小さな電気の球が8つ円を描き回転を始める。

「這いよる雷蛇」

巨大な光とともに現れた蛇は大地にぶつかり影を消し飛ばした。

「負けちゃった〜」

すずかが残念そうに肩を落とす。

「俺の分身倒せたんだ。Bランク魔導師と互角にやりあえる力はあるんだ」

「うん」

楓は左手の指を鳴らし、周りに張っていた封絶を解除した。

「さてとアリぼおらぶえ！！！」

ドロップキックが腹にめり込んだ。

バタバタ！！バタバタ！！

「ア、アリサちゃん!？」

「アリサてめえ何しやがる!！」

「あんだ私がどんな気持ちか分かる？」

(分かるか。別に分かりたくもない)

「せっかく今章ではバトル パートに進出できそうだったのに私今章初登場って、どういうことよ。しかも、まだ戦えないなんて酷いじゃない」

「いや、いきなり蹴ってくる奴が酷いなんて言えない……」

「うるさい!ーうるさい!ーうるさい!ー」

(わーフレイムヘイズが見える)

「しょうがないだろ。お前のパートナーが見つかってないんだから」

「じゃあ、早く探してきなさいよ」

「探してきなさいよって、こっちは大会前でしかも、お前のパートナーを探しにアマゾンまで行ったんだぞ」

(まあ、見つからなかったが)

「なら修行くらいには付き合いなさい」

アリサが楓が与えた剣『妖刀火聚焰』を構える。

「ったく」

楓はアクイラも武器も出さずに静かに構える。

「ふざけてるの？」

「ふざけてないさ」

楓はアリサに向かってほほ笑む。

「は!!」

アリサが斬りかかる。

「おっ」

楓がゆらりゆらりと避けていく。

「ハア!!ヤア!!」

「おっと、うおいつと」

(何で!?!何で当たらないの!?)

アリサは何度も踏み込むが、まったくかすらない。

「ちゃんと俺がいない間レイリルの修行を受けてたらしいな」

「もちろん!!」

今まで真っ直ぐだったアリサの瞳が

「辛かったわ……」

未来を失った。

「あゝ同情するわ。どうせあいつ手加減せずに修行させたんだろ？」

「うん」

「まあ、でも太刀筋がレイリルに似ている」

「でしょ」

興奮したアリサの前に楓が冷徹な顔で左手を向けた。

「魔法の射手 雷の矢」

ビシユン!!

「アアアアツ!!」

アリサが吹き飛んで行った。

「アリサちゃん!？」

倒れてるアリサにさすがが駆けよる。

「大丈夫よ、すずか」

「楓くんどうして」

「何言ってるんだ？これは練習試合じゃなくて戦闘訓練だぞ？本当の戦闘では正々堂々と戦ってくれる奴なんてほとんどいない」

アリサもすずかも黙る。

「アリサお前の戦い方の習得の仕方は俺並みだがそれはコピーにすぎない」

「コピー……」

「レイリルの戦闘法は相手のリズムを読み避け、相手の攻撃のリズムを崩す戦い方だ」

「でも、楓くんアリサちゃんはそれは出来てたんじゃないの？」

「ああ、問題はアリサじゃなくレイリルだ」

俺はポケットからレイリルの剣を取り出す。

「……楓どこから出したのよ」

「アリサ今は結構真面目なパートだから」

「しゅめん」

楓はゴホンと手を口に当てて咳払いをする。



「レイリルのこの剣は魔力を吸収する能力がある。だからとっさの攻撃にも対応できる」

「そうか！」

「さすがポンと手を叩く。」

「レイリルさんの剣は魔力を吸収するってことは防御が必要ない。だから違う性質の剣を持つてるアリサちゃんじゃ使いこなせない」

「さすがですか。アリサのこの剣の性質はレイリルの剣とは全く逆の性質。放出だ」

「じゃあ私はどうすればいいのよ？」

アリサの顔が暗くなる。

「んな、暗い顔すんなよ。お前が暗い顔すると雪がぶるじよわ！！」

「殴るわよ……」

「だから殴る前に言って」

涙目で楓は叫んだ。

「ともかく、今からの方針は2つ。まずは戦い方の修正。まあ、こっちは璃玖って男がいるから紹介してやる。俺の弟子だったらOKしてくれるだろうしな。もう一つはアリサの戦い方の確立だ」

「確立つてあんた私の戦い方はパートナーが見つかってからって言うてなかった？」

「どうせお前我慢できないだろ」

（う、うっ。反論できない）

「だからアリサが持つてるエネルギーで最低限の修行をしてもらっ

楓は地面に置いていたカバンを持った。

「行くぞ」

「行くつてどこによ」

「ハラオウン家にだ」

~~~~~  
~~~~~

ピンポーン！！

「はい」

（この声はリニスか・・・）

「新聞w【ガチャ！！】ちょ冗談だよ！！俺だよ俺」

「なんだ楓ですか」

「わー。呆れられてる〜」

「あつ。申し訳ありません。いらっしやいませすずかさんアリサさん」

「あれ〜あつからさまに態度が違うぞ〜。差別反対！！ブ　ブ　ブ　！！」

「差別じゃありません。分別です」

「まさか俺ゴミ」

「気づきませんでした？」

「楓くん気付かなかったの？」

「ってかあんた。ゴミと言うかカスでしょ」

「わー。敵は一人じゃなかったー」

リニスが仕切り直す。

「本題はここまでにしてどうしたんですか？」

「本題か！！じゃなくてお前に用があつてな」

Side　アリサ

私の新しい先生はリニスさんか。フェイトの家に遊びに来た時に会

うくらいだったけどフェイトの先生だったのよね。

「んで、カクカクシカシカで」

「分かりました。カクカクシカシカですネ」

カクカクシカシカって通じるものなの？

「それではアリサさん。明日はここに来てください」

「はい」

緊張するな……

「頑張れアリサ……死なない程度にな」

「大丈夫ですよ。ギリギリでやりますか」

えっ。

「あつ。すずか。今から墓石見に行くんだが行くか？」

「うん」

私死亡確定!?

そして私の地獄が始まった。

81話 指南 | The apprentice wants to exc

・次回予告

たまにはこんなゆるい日もいいじゃないか。

・ゆるいか？

次回「数の子 | Numbers |」

## 82 話数の子-Numbers- (前書き)

更新遅くなって申し訳ありません。

実はこれでもテスト2日(更新時間的にもうすぐ1日です)。

とまあペースを出来る限り上げたいです。

## 82 話数の子 Numbers I

【ウーノと一緒】

Side 楓

カタカタカタ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

部屋は静まりカタカタカタとキーボードを打つ音しか聞こえない。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

うああああああああ！！何この沈黙！？何で話しかけてくれないの？この空気俺から話せみたいな空気じゃねえか！！絶対スベル！！

でも、やらないと俺沈黙で壊れちまう・・・・・・

そうだアクイラ！！

『アクイラ！！何か話題を』

.....

アキラ整備中でないんだった!!

ふう、クールになれ雨宮楓。俺は出来る俺は出来る。

「いや、今日は暑いですね」

「ク　ラは26度よ」

「このまま熱くなったら冬には50度位になるんじゃないかな」

「9月には平均気温が27度まで下がるわ」

「そうなんだ」

「.....泣いてもいいですか。」

【ドゥーエと一緒】

あの空気に耐えられなくなり

「楓じゃない」

「あれ？ドゥーエさん。ここにいるなんて珍しいですね」

「今日はメンテナンスなのよ」

「だからジェイルが忙しく走りまわってるのか」



「楓はどうしたの？ドクターからはインターミドルに出るから鍛えてるって聞いたけど」

「今は休息中ですよ。鍛えて極限まで身体レベルを強化して疲れた体を回復させるんだ」

「あなたも忙しいわね」

するとドゥーエの顔がハツとなる。

「そう言えばトーレが探してたわよ」

「トーレさんが？ああ、試合の相手か」

「そうね」

トーレも戦闘狂だからな……

「じゃあ俺行きます」

「じゃあまたね」

「はい」

「今度は布団の中でね」

「何さらつとセクハラ発言してるんですか!？」

魔性の女ドゥーエであった。

【トーレと一緒】

「ハッ！！」

「フッ！！」

俺の持つてる短剣とインパルスブレードが交差する。

「遅いぞ」

「早すぎるんだよ！！」

俺は部屋の隅に逃げ詠唱を始める。

「ラス・テス マ・スキル マギステル。風陣結界！！！！」

風の結界で突っ込んできていたトーレが吹き飛ばす。

体勢を立て直したトーレの首に短剣を当てた。

「俺の勝ちだな」

「これで13勝15敗7引き分けだな」

「律義に数えてんだな」

俺は創造で作っていた短剣を消す。

「しかし、楓。強くなったな」

「そうか？」

「ここでお前が修行してた頃から目まぐるしい成長だ」

トーレが俺の胸を拳で小突く。

「あれから強くなれたのかな」

「ああ」

俺は守らないといけない。皆をこの世界の歪みや世界の歪みから。

「トーレ。これからもよろしくな」

「私でよければいつでも相手をするぞ」

「いや、それは勘弁」

俺、戦闘狂じゃないから。

【クアットロと一緒に】

さてと次の【チンクと一緒に】にレッツ・ゴ。

「待ちなさいよ。なぐにスル しようとする訳かしら？」

「ワタシ、アナタコワイ」

「何で片言？」

「ともかくお前と話すことなんぞない!!」

こいつと話して何か得をしたことのためしがない。

「そんなこと言わないでお話しましょうよ」

「そんなこと言ってどうせ俺を眠らせたりして何かする気だろ」  
するとクアットロが後ずさった。

「何でそこで後ずさる」

「ソナナコトハナイワヨ」

「何で片言だ・・・」

「シルバーカーテン」

突如クアットロの姿が消える。

「あっ!!逃げやがったな!!」

クソ、絶対に見つけ出す!!

結局俺とクアットロは似た者同士なのだ。不本意ながら。

【チンクと一緒】

「チンクの乗せ心地がいいな」

俺は胡坐をかきながら簡易デバイスでテレビを起動し、足の上にチンクを乗せていた。

「ええい！！早く下せ」

チンクがもがいているがとりあえず無視しよう。

「グへへ、どう足掻いたって無駄だぜ」

「私じゃなかったら通報してるぞ」

「しょうがないな」

「待て待て！言葉と行動があってないぞ。どうして私の髪を弄るのだ」

「嫌〜髪はいいね〜」

ええ、髪フェチですが何か？

「まあいいが、いや、良くはないが楓。ここにはいつまでいるつもりだ？」

「今日はアクイラのメンテが終わったら帰るよ」

「泊まって行きたいのは山々なんだけど、一人で寝ると危険だろ」

「まあ、危険だな姉たちが・・・」

「ゼストさんも今日はいないらしいし一人で寝るのは恐ろしいから」

「本当に家の姉が済まない」

「チンクは悪くないだろ。悪いのはドゥーエさんとクアットロだから」

俺はチンクの頭を撫でる。

「あ、頭を撫でるな!」

ヴィータならこうすればふにゃってなるのに。残念だ。

いや、俺ロリコンとかじゃないから!!

【おまけ】

「サンキュー、ジェイル」

左腕にアクイラを付けてジェイルに言う。

「しかし、メンテナンスだけでよかったのかい？」

「ああ。今回は死合じゃなくて試合だからな」

「文字じゃないと分からない言い回しだな」

「じゃあなジェル」

「ああ、応援してるよ」

「アキラ、調子はどうだ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「分かった。聞かないことにしておく」

きつと辛い目にあっただらう。

「楓くん!!」

ん？この声は？

「メガー又さん？」

「ちょっとメーガー又!!どこに行くの!!」

「クイントさん」

「楓くん？」

現れたのはメーガーヌ・アルピーノさんとクイント・ナカジマさんだ。

彼女たちとであった馴れ初めは話し始めると早くなるので日常編に回すとして……

「楓くん今日はどうしたの？」

クイントさんが疑問そうに聞いてきた。

「ジェイルの所に言ってたんですよ」

「Drの所に？」

「何々？何か面白いこと！？」

メーガーヌさん顔近い！！

「いららら。楓くんが困ってるでしょ」

クイントさんがメーガーヌさんの服の首袖を掴む。さすがクイントさん何でも言っべきか。

「で、どうしたの？」



まあクイントさんだ。

「実はインターミドルに出ることになって、アクイラの最終調整を  
してもらってたんですよ」

「インターミドル!?!」

突然2人の目の色が変わる。

「どうしたんですか!?!」

「嫌、実はね私たちもインターミドルに出て決勝戦で戦ったことも  
あるのよ!」

「……本当ですかクイントさん」

「本当よ」

「クイントさんが言うなら本当か」

「あれ疑われてたの?」

あなたが言ってることはシリアスパートじゃないと本当なのか冗談  
なのか分からないんですよ。

「私たちも若かったわね」

「まだまだ若いわよ」

この2人はマイペースって言うかなんと言うか。だけど今のうちに

逃げておかないとこの空間に引きこまれたら一貫の終りだ。

「じゃあ俺はこれで」

「楓くん泊まっついていきなさいよ」

「クイントさん。嬉しい話しではあるんですがレイリルって料理が出来ないんで俺が帰らないと……」

「大丈夫。レイリルちゃんに連絡したら隣にやっかいになるって」

メーガー又さんの笑顔が怖い。

「じゃあ行きましょ」「」

「わあああん!! 堪忍してや!!」

俺は2人に腕を掴まれ、2人の寝室に連行されたのであった。

## 82 話数の子-Numbers- (後書き)

・次回予告

ついに始まるインターミドル・チャンピオンシップ。  
集まった面々。

そんな中楓は……

次回「インターミドル・チャンピオンシップ開幕」

・6章はゲームの発売待ちなので7章の予告

インターミドルより1年後。

管理局にとある命令が発せられた。

『SSS級広域次元犯罪者……』

それは……

驚愕の内容だった……

『雨宮楓を抹殺せよ』

・第7章お楽しみに。

83話 インターミドル・チャンピオンシップ開幕（前書き）

テスト終わった〜

俺オワタ〜

ごめんなさい。

今回からインターミドル開幕です。

### 83話 インターミドル・チャンピオンシップ開幕

さうで、久しぶりの自問自答だ。

Q1・今日は何の日？

A・インターミドルの選考会の日。

Q2・ここは何処？

A・会場のトイレの中。

Q3・俺は何をしている？

A・お腹を下している……………

「何一人で自問自答してるんですか？見知らぬ人が見てたらただの気持ち悪いひとですよ？」

「司？整腸剤は？」

「マルコ先生に頂いてきました。まったく何でここぞって時にこうなるんでしょうかね先輩は」

「いや〜そんなに寝めても何も出ねえぞこの野郎。とりあえず帰りに寿司食いに行こう。」

「褒めてません。後、奢る気満々じゃないですか……」

とりあえずドアを開け、瓶を受け取る。

「あのこの緑のまるでスライムを瓶の中に凝縮した飲み物はなんだ？」

「スラ・・・整腸剤です」

「スライムだろ!!」

「四の五の言わずに飲んでください」

「明らかにスライムって言ったものを飲めるわけないだろ!!」

「いいから」

「ぶバラが、苦い、あれ？背中から手が生えてきた！？目玉が落ちた!?!」

「みなさん一生懸命頑張りましたよ」

ドームの中心に拍手や喝采が聞こえる。

「よう楓ちゃん!!」

「……………」

「ガン無視!？」

「あつ? 倭いたの?」

ウザすぎて気付かなかったわ、マジで。

「しかし、強そうな奴いるよな」

ちよつと待て?

「お前出たことあるんじゃないか?」

「ん? いや、去年は山で寝てたら3日遅刻しちゃってさ」

それはすでに遅刻と呼んでよいレベルなのだろうか?

「つーことは」

「ああ!! めっちゃ初心者だ!!」

自慢げに言うな。

「だけどお前の言うように見たところだけでも俺たちと同レベル、それ以上の人間が8人はいる」

このピリピリした空気はシグナムさん、璃玖、鍼さんとのトレーニングで味わった重ったるい空気。

「例えば？」

俺は言われて指を指す。

「まず、あの大会のルール本を見てるメガネの男」

「あの細い優男？」

「ああ。あいつさつきからこの人が入り乱れてる中で誰ともぶつかってないんだ。おそらく視野が広がったり、魔力を読めたりするんだろうな」

次は剣を持った女を指す。

「あいつは気が感じられない」

「感じられない？」

「正しくは体から放出される強大な魔力を抑え込んでる」

それもかなり強い。正直あのタイプと戦って勝ったことがない・・・

「特徴のあるのはそいつらかな？後の奴らは体の出来と魔力の高さから見た」

「そうなんだ」

強いメンバーはいるがどれもパワータイプかテクニクタイプだ。



それに他は変な奴らしかない。

マントを深く被った男や、寝袋に入った男や、ラップに包まれてる男がいるからな。

って変な奴しかいねえ！！

マントを被った男は王道バトル漫画にはよくいるけど他の奴らはなんだ？やる気あるの？他にも腰にファブリズを付けてる奴もいるけどファブリズでどうやって戦うんだよ！？あれなの？『お前の匂いはもう消えた・・・俺の勝ちだ・・・』みたいなことでもするの？

戦い前から疲れてる気がする・・・

（選考会数分前）

「雨宮先輩。もうお腹の調子はいいんですか」

「ああ・・・さっきのが嘔くらいに落ち着いてますもんね」

さっきこの緊張感は嫌いじゃないな・・・

「先輩・・・出番です」

俺は顔をパシン！と叩く。

「シャアー!」

Side フェイト

今私となのは、はやてとクロノとエイミィの5人で選考会を見に来  
てます

「フェイトちゃん！フェイトちゃん！楓くんだよ!!」

「どう?」

「Cリングや」

なのははやての指の先を見るといつものバリアジャケットの楓が

いた。

「なのは、フェイト、はやて、お茶買って来たけどこれで・・・」

「「遅い（の）！！始まる（）ちゃうの（）！！」」

「ぼ、僕が悪いのか!?!」

クロノがなのはとはやてにお茶を渡し、私も受け取る。

「ありがとう。クロノのお兄ちゃん」

「だからお兄ちゃんは・・・」

「クロノくん照れてる照れてる!?!」

「エイミィ!?!」

クロノと兄弟になって1年半。家族ってとても暖かいと今では感じることができる。

楓がこの幸せを導いてくれた。

アルフがいて、リニスがいて、リンディ母さんがいて、クロノお兄ちゃんいて、エイミィいる。

楓のおかげだよ。

だから今日はしっかり応援するね。

S i d e 楓

来るなって言ったのに。でも、応援はいいか。

「オイ！！何よそ見してやがる！！」

俺の目前には向き向きなマッチョなおっさんがいた。ってかお前ホントに10代か？

「俺の名前は豪鬼！！」

なんか路上で戦ってそんな名前だな。

「お前を倒しにきた」

セリフが三下？

「ぼっこぼっこにしてやるぜ」

古い！！すでに絶滅しかけの生物なみに古いぞ！！

「ガキはしょン便でもしてな」

「トイシなら行ってきた」

「俺に倒されたいようだな」

「ったく」

Side out

豪鬼が楓に突進する。

「一撃KOだ!!」

楓は突っ込んできた豪鬼の腹に軽く魔球が3つ取り囲む拳をあてた。

「雷華崩拳」

「ぶああアアア!!」

叫び声を上げながら豪鬼はリング外の外の壁にめり込み、漏らしていた。

「ガキはしょン便でもしてな!!」

Cリング 勝者 ゼッケン1475 予選8組!!

83話 インターミドル・チャンピオンシップ開幕（後書き）

・次回予告

予選1回戦開始

楓は戦いぬくことができるのか？

次回「鞭は叩かれるより叩く方が好きそれが私」

・次章予告

「誰か！！助けてくれよ！！」

雨宮楓

敗北

次章『雨宮楓 逃亡編』お楽しみに。

84話 鞭は叩かれるより叩く方が好きそれが私

「「「「「カンパニー!!」「」「」」

「楓くん。いちご牛乳持ってきてなの」

「楓。コーラある?」

「楓くん!!早く小麦粉持ってきて」

「あつ、はやて。この夕「焼きおいしいじゃない。楓、私もコーラ」

「みんな落ち着こうよ。楓くん、私はアップルティー」

「はい。かしこまりました」

「って、違うだろ!!今日は俺の選考会の祝賀会だろ!?!何で俺が  
キリキリ真面目に働いてるんだ」

今日の選考会が終り、俺たちはクロノ、エイミーさんと別れ（俺は





「メタ発言やめれ」

楓の発言を無視しながら司はデバイスの昨日でスクリーンを出す。

「今回の相手はブルーム・アルクロス。鞭使いです。これまでの参加成績は都市戦の2回戦まで出場。前回の大会では大会優勝者に敗北。予選8組の勝利者候補です」

「何で俺だけこんなのに当たるかな？」

「先輩はとことん運が悪いですね」

確かに転生してる時点で運がいいのか悪いのか……

「先輩対策はできてるんですか？」

「ガンガン攻める！！」

「はっ？」

楓の発言に司は口をぽかんと開けた。

「先輩もう一回聞いていいですか？」

「ガンガン攻めるってんだろ」

「呆れた……作戦を考えてないとは思ってなかった」

「何言ってるんだよ。それが作戦だよ」

「え？」

「まあ見てろって。にひひひひひ」

楓は二やりと歯を見せた。

『D S A A インターミドル地区予選！！』

次の試合は予選8組第一試合！

I M 6年目の熟練者ブルーム・アルクロスと初参戦で噂の最年少天才執務官 雨宮楓！

これは分からない対決です。

1 開戦は4分4R

規程ライフは12000!

8組第1試合の開始です!!』

(こいつ・・・強いぞ・・・)

「ハッ!」

ブルームが鞭を出そうとした瞬間楓は瞬動で相手の手を掴む。

「なっ!?!」

(これが鍼さんとの修行の成果だ!!)

そして、手を掴みながら横から蹴りを入れる。

「虎破拳6ノ型 爪脚牙!!」

「グア!!!!!!」

ブルームがリングの淵まで飛ばされる。

(決った!!!)

虎破拳は鍼から楓が継承した技である。

蹴りとともに足首に溜めた力を一気に放出する。

そのためダメージが一転に命中する。

破壊力の高い技だ。

「中々いい蹴りだな」

「なっ!?!」

ブルーム・アルクロス    D A M A G E - 4 0 0    L I F E 1 1 6 0 0

立ちすくんでいたブルームの腹は無傷で傷の代わりに螺旋状に巻かれて  
いる魔力鞭があった。

「なんで」

(鞭は止めたはず……)

「はっ!?!」

「気づいたみたいだね」

(こいつ鞭を複数持ってやがる)

「俺の鞭の数は5本だ」

ブルームは先ほど楓に掴まれた鞭を手にする。

「俺の鞭から逃げられるかな」

パシン！！

「危な」

鞭は容赦なく楓の足元を狙ってくる。

「もう一発！！」

楓がブルームの攻撃を避けようとバックステップを踏む。

「ガハ！！」

楓の背中に痛みが走る。

楓が視線を戻すとブルームの手には2本目魔力鞭が握られていた。

雨宮楓    D A M A G E - 3 0 0 0    L I F E 9 0 0 0

クラッシュエミート    背部打撲

「アクイラ！！」

「了解です。マスター」

「『アクイラソード形態!!』」

楓は足に魔力を溜めてブルームに斬りかかる。

(攻撃される前に斬り裂け)

「白夜殲滅剣!!」

楓が目にも止まらぬ早業でブルームの魔力鞭を切り裂く。

「くっ、衝派連」

マズイと思ったのか3本の魔力鞭を振るったブルームのそれから大量の衝撃派が発せられていた。

「当たるか!!」

楓はその隙間を縫って力を溜める。

「これで終わりだ!!」

その瞬間ブルームの唇が歪んで釣り上がった……

「俺の……勝ちだ……」

## 84話 鞭は叩かれるより叩く方が好きそれが私（後書き）

「DJ雨宮の今日もお疲れさん」

DJ雨宮「はい。夏休み休暇から帰って来たDJ雨宮です」

はやて「夏込に八神家一同で楽しんできました八神はやてです」

DJ雨宮「しかし、夏も終わっちゃったね」

はやて「早かったな」

DJ雨宮「では今回のお便り……」

DJ雨宮「ですがお便りがないので次回予告です」

はやて「ないんかい!？」

・次回予告

白熱する予選第8組み第1回戦。

そして、別のところではクレイジーな男の戦いが始まった。

次回「クレイジーアンソロジー」

・次章予告

俺は戦う!!!

どんなに厳しい戦いだろうとも。



85話 クレイジーアンソロジー(前書き)

勉強って疲れますね……

## 85話 クレイジーアンソロジー

楓が激闘を繰り広げてる中別の会場でも戦いが幕を開けようとしていた。

「ZZZZZ・・・」

「・・・・・・・・」

「ZZZZZZZZ・・・」

「・・・・・・・・」

「ZZZZZZZZZZ・・・」

「いい加減起きろ！！このファツキン弟子！！」

「ゴボベラバ！！」

C会場に来ていたのは楓の現師鍼とバカである。

「後、10分しかないぞ」

「嘘、俺そんなに寝てたの師匠？」

「まったく……」

この倭のマイペースさには鍼も頭を悩まされていた。

「君たちそのコントは終わったかな」

2人の前に金ぴかのスーツを着た男が現れた。

「誰？」

「倭。こういう変な奴には関わるな。今でさえお前は変な奴なんだ。こんな奴と関わったらもつと変になるぞ」

「貴様このガレイオルスに変とはなんだ！！後、弟子にも失礼だぞ！！！」

「俺のことを心配してくれるのはいいけど君は何？」

「何？私のことを知らないだど？なら説明してやろう。私はリザード財閥の御曹司でさらに（略）」

「分かったから端折って説明してくれ」

「うぬの対戦相手だ」

（うぬとか言う奴初めて見た）

「しかし、私と当たったのが運の付きだったな。ゲラゲラゲラ」

「何がだ〜?」

「うぬは私に勝てないんだからな」

「そうなんだ」

「うむ。納得がいいことはいいことだ。まあ楽しみにしてるぞ」

手を振りながらガレイオルスは自分の場に戻った。

「オイ。クソガキ・・・」

「ふにゆ?ぶらば」

倭の顔に鍼の拳がめり込んだ。

「何言い任されてるんだ?」

「言い任されてなんかないよ〜」

「じゃあ今のはなんだ」

「だって無駄な労力は使いたくないんだよ、ほらもう時間だよ」

「おい、待て!!まったく。俺もあいつの方に行った方がよかったな。あ〜心臓が痛い」

きつと彼のストレスの8割は倭なんだろう。

『D S A A インターミドル地区予選!!』

こちらの会場で行われるのは予選3組第一試合です。

IM2年目にして雷王との通り名を持つガレイオルス・リザードと、相対するのは昨年のIMでは寝坊で3日の遅刻をすると言った新たな伝説を打ち立てた問題児。クレイジー!!嵐 倭!!

一体どんな戦いになるか神にも分からないでしょう。

1開戦は4分4R

規程ライフは12000!

3組第一試合の開始です!!』

「行くぞ!!らいこうだん雷光断」

先手を仕掛けたのは雷を纏った大きな斧を振り降ろすガレイオルスだった。

「がああああ！！！」

それに直撃する倭。

「ハハハ！！この程度か」

「痛てえじゃないか！！！」

「グボラバラ！？」

倭のアップパーがガレイオルス顎に直撃し、吹き飛ばす。

「ったく」

（な、な、なんだあいつ！？私の雷光断を受けて）

嵐倭    D A M A G E - 2 0 0    L I F E 1 1 8 0 0

「あゝ痺れた痺れた」

（この程度なのか！？）

「早く来いよガレビオス」

「五月蠅い！！私はガレイオルスだ」

ガレイオルスは無暗に斧を振り回してゆく。

「アアアアアアアアアア!!」

「それぞれそれ!!」

「くっ。ちょこまかと!!避けるな!!」

「それは無理な相談だよね」

倭はガレイオルスの腹を殴る。

「ぐば!!」

(なんだ!?我は今まで80%以上の戦績を保っていると言つのに)

「化け物……」

「よく言われる」

リングの外で鍼は試合を眺めていた。

Side 鍼

これは決つたな。

そもそも、倭に勝てる訳がないんだ。

あいつは嵐倭をまったく分かってない。

倭には能力がない。

だが無能と言う訳ではない。

能力が足りないほどに強い。

能力だよりの小僧に勝てるはずがない。

「終わらせようぜ」

「そんな・・・この我が・・・」

さあ、終わらせる。

「碧眼流奥義 鎖天骨!!」

「ブア」

鎖天骨を受けた男が飛んで行く。

ガレイオルス・リザード

DAMAGE - 70000  
LIFE 0



『試合終了!!』

優勝候補は無名の選手

クレイジー 嵐 倭だ!!』

嵐 倭 1回戦突破!!

〜楓の会場に戻る〜

「なに〜」

「捕まえた」

俺は確かに攻撃を避けながら懐に入ったはずだった。

なのに

俺は体をバインドで拘束されていた。



85話 クレイジーアンソロジー（後書き）

・次回予告

拘束された楓

戸惑う中ブルームの反撃が始まる

楓に反撃の術は？

次回「囚われの楓」

・次章予告

逃げる……

俺は逃げ続ける……

## 86話 囚われの楓（前書き）

更新遅くなってすみません！！

実はテストとかテストとかテストがあっただんです。

赤点を取らないために頑張りました！！

テストの度に更新が遅くなってすみませんが温かい目で見守って貰えると行幸です。

## 86話 囚われの楓

Side 楓

なんでこうなった……

俺はさっきまでのことを考えていた。

俺が懐に入ったところであいつは右の人刺し指を上げただけなんだ。

あいつは鞭を使ってない……

分からねえ……

判断材料が少なすぎる。

「よそ見してる暇があるのかよ」

「なっ」

その言葉で現実引き戻された俺だがすでにブルームの鞭の射程に入っており強い力に俺はリングから落ちそうになるが虚空瞬動を使いリングに飛んだ。

雨宮楓    DAMAGE - 4000    LIFE 5000

「おしいな、チッ」

ブルームが小さく舌打ちをする。

「まあ、いいか。それなりに強い奴と戦えるんだ」

俺はブルームの背後に回る。

「紫電一閃！！っ！！」

アクイラを振り被ったとき俺の真下の地面から鉄鞭が現れ俺の顔をかすめた。

「うっ！！」

俺は反射で背後に距離を置いた。

「あぶねえ・・・」

不用心だった。無策に突っ込めばこうなることくらい分かってるんじゃないかったのか？クソ、調子が狂う。

「アクイラ！！弓モード！！」

『弓モード』

俺はアクイラを弓モードに変えて空へと構える。

「光の雨ヒト・レーゲン！！！！」

アクイラから放たれた無数の霊子の矢がブルームに降り注ぐ。

「よし！！決った！！」

全ての矢が降り注いだ後、砂煙が立ち上る。

「くっ」

「えっ！？」

砂煙から出てきたのは魔力の糸でできた繭だった。

「おしかったな」

ブルーム・アルクロス    D A M A G E - 3 0 0 0    L I F E 8 6 0 0

「何だよ……繭から第二形態のお出ましか……」

「残念だが第一形態だ」

そして、鉄便に持ち帰る。

「衝撃連！！」

ブルームが走りながら衝撃派を6つ放つ。

「うっ！！」

1つ、2つ、3つ避けた時背中に痛みが走る。クラッシュエミートの背中打撲のことをすっかり忘れてた。

そして、残りの3つの衝撃派が俺に直撃する。

「カハッ!?!」

雨宮楓    D A M A G E - 4 0 0 0    L I F E 5 0 0 0

俺は向かってくるブルームから距離を取るため

避けようとしたその時・・・

「バインド」

いつの間にか俺はバインドに拘束されていた。

「オラ!! もう一本!!」

「ウツ!?!」

その痛みの強さに声が出ない。

「油断してるからこうなるんだよ」

本当に油断してた。しかもこいつクラッシュエミュレートしている背中を的確に狙ってきた。

「痛そうだな」

笑いながら俺に近づいてしゃがみ込む。



「とどめだ」

やられ・・・

カーン！！

「っちゴングか」

ブルームは俺に背を向けて自分のベンチに戻った。

「先輩大丈夫ですか？」

「ああ・・・」

「大丈夫じゃないみたいですね」

「ぐっ！！」

こいつこの状況を楽しんでやがる。

「ほんとお前性格悪いよな・・・」

「そうですねか？フフフ・・・」

笑い終えた後、司の表情が変わる。

「あのトリックには気づきましたか」

「そこが分からねえ」

「簡単な話しですよ」

「簡単・・・？」

「先輩は見逃してるんですよ」

指を立てて司が言った。

「ズバリ、リサイクルです」

「リサイクル！？」

## 86話 囚われの楓（後書き）

・次回予告

司の話しを聞き新たな作戦に出る楓

楓はブルームを破り1開戦を突破することができるのか!?

次回「演武」

・次章の次章予告

楓VS?????

## 87話 演武

「リサイクル？」

楓は司の答えを聞いても回答を導き出すことが出来なかった。

「その通りです」

「しかしな……」

楓の思考はドンドンと深くに堕ちていく。

「あまり考えないでください。単純な話です。先輩の友人にリサイクルという言葉がふさわしい人がいるでしょ」

リサイクル……

「何でも買って何でも売ります。雨宮サイクルショップ」

「そんな副業してるんですか？」

「現在海鳴に2店舗展開中」

「さりげなく宣伝しないでください」

「冗談だ」

「冗談なら目を（¥・¥）から元に戻してください」

楓は目に手を当てて元に戻す。

「しかしな……」

楓はまた再び深層世界に入る。

「……そ、そうか白いあk……なのはか」

「今変なこと言いませんでしたか？」

「気の所為だ」

「まあ、でも先輩の考えは間違っでは無いですよ」

「あいつのリサイクルって言うとスターライトブレイカーか」

「はい。一度使ってしまった魔力を集束して打つ技」

「つまり一度使ったものを使う技……」

楓が考えて出した答えは……

「分からない」

「なんで分からないんですか！？先輩頭いいでしょ！！」

(いや)。大事なことの時は大抵答えを出す者を使ってズルして  
からな)

「つまりブルームのトリックはこうです。彼はレアスキルによって  
衝撃派を魔力に変換したんです」

「変換か」

「避けられて、衝撃派としての役割を失ったものが魔力に変わり、  
追尾性のバインドに変わるんです」

「そう言えばあの技の後にいつもバインドが発動していたもんな」

「しかし、問題はここからです。この技の対策は衝撃派を排除しな  
がら敵に近づきつつ大ダメージを当てることです」

「剣形態は・・・駄目だな。あれはフルじゃないと使えない。背中の  
傷がある今の状態じゃあんな重いもの触れられないし、他の武器で  
衝撃派を止められるものは・・・あれしかないな」

楓の口元が吊りあがった。

『さあ、インターバル終了現在2人の回復が終了しました』

雨宮楓 L I F F E 9 0 0 0  
クラッシュエミュート 背中打撲

『現在、劣勢の雨宮選手。ここから巻き返しなるか』

ブルーム・アルクロス L I F F E 1 2 6 0 0

『一方優勢なアルクロス選手はそのまま逃げ切ることが出来るのか？』

楓とブルームが再びリングで向かい合う。

「棄権すればいいものを」

「棄権だって？俺が逃げるのは負けるためじゃない。何かをしないといけないと木だ。だから今は逃げる時じゃねえんだよ。鞭野郎」

『それでは試合再開です』

カーンと金属音がリングに響くと同時にブルームは距離を取った。

（動かない？意外だ。あいつの戦い方からしてあいつは遠距離戦よりも近距離戦を得意にしていると思っただが。なぜ攻めてこない）

「距離を取らなかつたのがそんなに変か？」

「なっ！？」

心を見抜かれたブルームの表情が変わる。

「攻めに向かわなかったのがそんなに变か？」

楓は腕輪を前に向けた途端、アキラの形態が変わる。

「・・・棒？」

「ロッドフォーム・・・行くぞ」

楓はブルームの立つ場所に向かい歩き始めた。

それは静かに流れる川のような動きだった。

「衝派連！！」

その行動に目を奪われたブルームだったがすぐに鞭を振るう。

それを棒で受け流し衝撃派の方向を変える楓。

「なっ、だがそのままだとバインドが」

バインドに変わった衝撃派が楓に近づいた途端バリンと音を立てて消えた。

「俺の武器アキラの能力は魔力相殺。魔力を振動させて魔力を切り裂く魔力殺しの武器だ。このロッドフォームでそれを使えばバインドを破壊するなんて簡単だ」

「クソ！！」





「お前のライフももう風前の灯。次で終わり・・・」

「次は無い・・・」

「なっ」

「解放！！魔法の射手戒めの風矢！！」

楓の手から光が放たれると帯がブルームの体に巻き付いて拘束する。

「確かに肉弾戦じゃ勝てないかもしれない。でもこれは魔法格闘だ。だから俺は俺に出来ることをやる。肉弾戦が駄目なら魔法を使えばいい」

そつとブルームの体に触れる。

「あなたの敗因は相手をなめきつたことだ。人間変わろうと思ったら変わるんだ」

そして、最後に告げる。

「来れ雷精風の精！！ 雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐」

「クソ！！こんなことが」

「雷の暴風！！！！」

会場に現れた嵐は天井近くまで伸びて消えた。

残ったのはダメージを受けて倒れた少年と力を使い呆然と立ちすくむ少年だけだった。

ブルーム・アルクロス    D A M A G E - 1 0 6 0 0    L I F E 0

『楓選手KO勝利!!まさかのどんでん返し!!自身もエミュレートで劣勢な状況から10000以上のダメージで勝利しました!!』

『アルクロス選手も雨宮選手をテクニカルな策で雨宮選手を翻弄するも及ばず』

『よって1開戦勝者雨宮楓です!!』

87話 演武（後書き）

・次回予告

1 開戦を通過した楓。

そんな彼に接触するものが。

次回『いわゆるこれって黒のバスケット』

88話 いわゆるこれって黒のバスケ

「ほれ」

俺は自動販売機で買ったコーヒーを司に投げる。

「ありがとうございます」

司がクピクピとコーヒーを飲み始めた。

「でも、今日は災難でしたね」

「さすが星占い8位だ」

「何で星占いの話ですか」

「じゃあ試合の後にトイレに行こうとしたら天井が崩落してきた話か？」

「なんの事件に巻き込まれたんですか」

「大丈夫。秘密裏に犯人は連行したからさ。一応、執務官だし」

「心がけはいいんですが・・・」

「まあ、試合は大変だったな」

「なに本題をあつさりと終わらせるんですか」

俺は空き缶をゴミ箱に投げ捨てた。

「冗談だよ」

それを切っ掛けに話を切り替える。

「よくさ。訓練と実戦は違っただって漫画であるだろ？でも、その逆もありきなんだよな」

「そうですね」

「まあ、でもこんな戦いもいいな」

俺は空を見た。

「今日のことを教訓に2開戦も勝つ……………」

突然、視線を感じた。

それは今までいなかったものがいたような……

そう。漫画のキャラクターが漫画の外の読者から見られているような違和感。

はっきりしたことは分からないが歪んで見える。

そう。いつしか俺たちは3人で歩いていた。

「はっ!?!?」

「先輩。どうしたんでs!？」

俺が声を上げたのと同時に司も気づいた。

俺たちの隣にはメガネを掛けたスーツの男がいた。

「ようやく気付いたか・・・」

「ようやくって・・・」

その言葉を聞いた瞬間背筋が凍った。

こいつはいたのだ。いつの間にか俺たちの隣に。ずっと俺たちと一緒に。

もし、その考えが本当であるなら俺たちはそれを見逃していたんだ。

気配を消す能力に俺はいくつか覚えがある。いい例は『ミスディレクション』や『知られざる英雄』だ。

『ミスディレクション』は元の薄い気配をさらに薄くして、他の場所に注意を向ける技。だけど、そうじゃない。この男は整った顔立ちをしているし何より白い髪と顔がうまく合っており美形と言える。町で見れば何人も振り向くだろう。

『知られざる英雄』は自身の存在を他人に一切認識させず、本気を出せば人の記憶から存在した事実や接触した経緯をも消すことが出来る異常性だ。だがこれも違う。認識できないのは影の薄さ故ではなく、誰もが目を逸らし忘れたくなるほどの破壊的な強さ故である。だが、この男は強くない。力を感じない鍼さんや璃玖とはではなく司の様な人間だ。



つまり、異常だ。

俺と司は数秒間の思考の旅を終えたと同時に間合いを取った。

「先輩。どういふことなんですかねえ」

「分からない」

本当に分からなかった。

そう、俺はすでに答えを出す者を使っていた。なのに答えがない。

いや、ない訳じゃない。答えは数個出てきてる。しかし、それのどれもが非現実的な、非世界的な話だ。この世界の原理を根本的に覆すような。

「お前・・・誰だ」

「名乗るものじゃないさ」

「名乗ってください。さもなければこちらから仕掛けますよ」

そう言つて司は簡易用の銃型デバイスを起動する。

「君らに俺は傷つけられない」

「トワイライト・アクイラ set up!」

俺はアクイラを構える。

「舐めやがって……」

「先輩……行きますよ」

「足引つ張るなよ」

「善処します」

「「ggO……」」

俺と司は一斉に走り出した。

「俺は右翼、お前は左翼から攻めろ……」

「了解です」

「気絶して貰うぜ……！スタンスラッシュ……！」

「眠って貰います。スタンバレル……！」

そして俺たちの攻撃は……

「斬れない……」

俺の斬撃は男の目の前で止まっていた。

「何なんですかこれ……トリガーが引けない」

おかしすぎる。力が入らない。まるでここだけ世界から切り離されたように。

「だから言っただろお前たちは俺に傷を付けることはできないと」

駄目だ……答えが見えない……

「さてと」

男は俺たちに背を向けた。

「オイ、どこに行く気だよ」

「俺は本来傍観者だ。ここに留まる理由はない」

「待て!!」

司が叫んで動こうとしたが足が動いていなかった。

しかし、司の声は虚空に響いた。

男はまた消えた……

S i d e  
司

これが始まりだったのかもしれない。

この事件が僕を

先輩を

世界を変えることになったのかもしれない

88話 いわゆるこれって黒のバスケット（後書き）

・次回予告

男の正体も掴めないまま始まった2開戦当日。

2開戦の相手とは。

次回「私は嫌いです」

## 89話 私は嫌いです

時が流れるのは早くもつ2開戦当日となった。

この2週間は目立ったこともなく俺は鍼さんのところで倭と修行に専念していた。

正直この前のことは今も胸に引っ掛かっているが俺にはどうすることも出来ないし、こんな気持ちで試合をするのは、試合をする相手選手や修行してくれた鍼さんにも失礼だ。だから今回の件は殆ど司に任せている。まあ、これも執務官のいい訓練になるだろう。

「ところで鍼さん。今日はこっち？」

「ああ」

隣にいた鍼さんに声を掛けた。

「倭の試合にはこの試合が終わって少し遅れるがあいつのことだ。あんな相手には負けないだろう」

「倭の次の相手？」

「キレレス・フルム。所属不明。初出場。1開戦は相手が怪我をして不戦勝だ」

「弱そうなのか」

「ああ。見ただけでも本戦メンバーではクソ弱いだろうな」

「鍼さんがそう言うならそうなんだろうな」

この人の相手を見る目はすごいからな。

「なんで、あんなクソ雑魚童貞野郎が・・・」

この礼儀の悪さだけをなんとかしたらいいのに。

俺と鍼さんが会場に入ると飲食スペースでコーヒーを飲みながら書類と睨めっこしている司とクロノを見つけた。

「司、クロちゃん」

「クロちゃんって何だ!!」

「忘れちゃったのクロちゃん・・・」

「忘れる前にクロちゃんなんて呼ばれたことない」

「クロちゃん先輩。話が進まないんで突っ込むの止めて貰えますか?」

「僕が悪いのか!? しかも、君もそれで呼ぶのか」

とりあえず俺・司・鍼さんはクロノを無視して話しをする。

「しかし、雨宮。藤林がここにいるのは分かるが何故クロノ坊がこ

「ここにいるんだ？」

「鍼さん。実は……」

俺は鍼さんにあの日のことを話した。

「攻撃が出来ない能力なあ」

「心当たりは」

「俺の知るあたりではないな。あつて操作や催眠、暗示の類じゃないか？」

「確かに直接脳に揺さぶりを掛けるレアスキルなら司のレアスキルに対抗できるからな」

「そうですね」

そう言つて司はクロノの手から書類を奪いりテーブルに置く。

「この1週間奴が何者かあらゆる方面から調べてみました」

「あらゆる方面？」

「はい。鍼さんの名前もあります」

「俺の名前も？」

「達人。犯罪者。特殊な環境下の人間。管理局職員。全てを洗いざらい調べてみました」



「どうやって調べたんだよ」

そんなデータ俺でも楽には調べられねえぞ？

「不動先輩に調べて貰いました」

「確かに飛鳥なら」

「で、何か見つかったのか」

鍼さんの言葉に司は首を振った。

「いいえ。僕もかなり調べたんですが、かすりもしませんでした」

ジェイルの力を借りた飛鳥ですら見つけれなかった？やっぱり異常だ。

「でも、飛鳥先輩が楽しそうに調べていたので心配はいらないでしょうね」

そうだよな。無理に考えることはない。

「俺は自分の試合に専念するか」

「ホレ、そろそろ行くぞガキども」

「ええ、行きますよ先輩」

「オウー!!」

「僕が悪いのか・・・僕が悪いのか・・・」

俺たちは精神が崩壊したクロノを置いて行くのであった。

「しかし、さすがに予選入れると3回目だとなれるもんだな」

「先輩も成長したってことですよ」

「吐き気しかしねえ」

「前言撤回。まったく成長してませんよ」

「緊張しないコツは自分をクソ野郎だと思つことだ愚図野郎」

怒っっちゃ駄目だ、怒っっちゃ駄目だ、怒っっちゃ駄目だ。

「先輩。怒りを抑えて目から血の涙を流しているところ悪いですがお客様がきていますよ」

「お客様」

そこにいたのはクロノと同じくらいの年齢だが、袴を着ているまるで刀のように凜とした少女だった。



初対面の女の子に嫌いって言われた

「

89話 私は嫌いです（後書き）

・次回予告

突然嫌いと言われた楓

そして始まる2開戦

次回「俺は剣だけで戦うと誓う」

90話 俺は剣だけで戦つと誓つ(前書き)

スランプです。

## 90話 俺は剣だけで戦つと誓つ

「んだと……」

流石の俺もキレそうになる。

「貴様には武器に対する誇りがないのか？」

「誇り？」

突然脈絡のない話しをされて俺は反応に困つた。急に誇りやら何やら言われても、こんな突然人に嫌いなんて言う奴に言えるかよ。

「お前の試合を映像を見せて貰つた。正直お前の戦い方は嫌いだ」

「はっ？」

意味が分からない。

「私はこの剣に半生をかけてきた。だからこの剣は私自身だ。だから剣こそ私の誇りなのだ。しかし……」

そこで一層カレンの表情が険しくなる。

「だがお前は武器を変えてばかり恥ずかしくないのか？」

「別に同じデバイスならいいだろ」

「お前がそれならそれでいいが」

そしてカレン剣を抜き剣先を俺の喉に向けた。

「誇りのない男に私は負けない」

そう言ってカレンは自分のセコンドのいる場所に戻った。

「ホント先輩って嫌われやすいですね」

「うるさい……………」

武器に誇りか。考えたことがなかった。

「雨宮」

「鍼さん……………」

「どうせお前はクソ野郎なんだ。思ってることがあるなら実行すればいい」

「ありがとう」

鍼さんの言葉に背中を押され俺は一つの決断を下した。

「出陣だ」



『さあ、予選8組第2試合！！』

今回の2人は両名ルーキーだ！！

奔重流剣術の使い手オウド・カレンと多色の技使い雨宮楓だ。

今回はどんな勝負を見せてくれるのでしょうか？

では2開戦開始です』

ゴングが鳴り俺はカレン。

「オウド。ちょっと話を聞いてくれ」

「聞く耳持たんな」

「まあ、聞いとけって」

俺は勝手に話を続けた。

「さっき誇りの話をしたよな」

「ああ」

「俺にも誇りがある。それが魔法だ」

「魔法？それがどうして」

俺は淡々と語り始めた。

「すんげえ昔だ。俺は力が欲しかった。人を守れる強さを。俺が弱かったばかりに大切な人たちを守れなかった」

家族や友達……

「だからこうして魔法を手に入れて俺はどんなことをしても守りたいと思った。けどあんたの話を聞いて分かったよ」

「分かった？」

「ああ、俺は今新しい戦い方を始める時なんだ」

「新しい？」

俺はさっきの仕返しとばかりにアクイラの剣先をカレンの喉元に向けた。

「俺は剣だけで戦うと誓う」

そして、にやりと笑った。

「文句ないだろ剣士」

「よく言ったな。いいだろうっお前のことを少し見直した。剣士」

90話 俺は剣だけで戦つと誓つ(後書き)

・次回予告

楓とカレンの戦いが始まった。

次回「剣士と剣士」

91話 剣士と剣士(前書き)

テスト明けで意識が混濁しています・・・

## 91話 剣士と剣士

「ウラッ!」

「フッ」

楓の剣とカレンの刀が衝突し、衝撃派が発生する。

「なかなかの強さだな。さっきの暴言無礼した」

「お前だつて強いじゃん」

楓は受け止められたアクイラを逆回転の勢いで振るう。

「くっ・・・」

カレンは苦しい顔で受け止めた。

「その細身の刀で受け止めるとは・・・」

「お前こそそんな思い剣を横に振るって肩大丈夫か？」

ボールを投げる際、上から投げる投げ方があるが、その投げ方をする選手たちは多いのか？それはサイドスローやアンダースローは肩を壊す可能性があるからである。今楓はアクイラの剣形態で360度の横回転を行った。本来剣形態はそれを想定して作られていない。

そのため楓の若い体には大きな負担がかかっているのだ。

「い、痛くないね。俺はメジャーリーガー並みの肩のスペックを持つてるからな」

「ならいいさ」

「  
！！」

2人の剣がまた交わった。

Side クロノ

「クロノくん？」

「レイリルか？」

客席に座って、楓の試合を見ていると隣の席にレイリルが座ろうと  
していた。

「君は楓のデバイスなんだからセコンドに行ってもいいんじゃない  
か？」

「それならクロノだってその資格はあるんじゃない？」

「僕はここで十分さ。鍼さんと司があそこに座ってる時点で僕の役  
割はないからな」

鍼さんは僕の父に体術を覚えてくれた先生で、グラム提督の友人  
だった人だ。司も楓を超える天才と言われている新人だ。どちらもあ

る方面で僕を超えてる。僕に出来ることなんてない。

「私も同じよ」

「えっ？」

S i d e   レイリル

「私がマスターに教えることはもうない」

「アキラ、レイリル。力を貸してくれるか。俺の正義（偽善）を貫く為に」

マスターは強くなった・・・

S i d e   o u t

「オラッ！！」

アキラを振りかざすと同時に俺の胸の近くをカレンの剣先が掠った。

「遅いな・・・」

その瞬間俺の頬から血が滴っていた。

「嘘！？いつ！？」

「最初からだ」

その瞬間俺の体に痛みが走り、まるで鎌鼬が放たれたかのように体が斬り裂かれた。

「おいおい……」

今何が起きたんだ？

「……衝撃派？いや、違う早く斬ったのか……」

「よく分かったな。初見で私の技の正体を見抜いたのはお前で2人目だ」

分かったってか、答えを見るものでその可能性が高かったただけなんだけどな。

肉体限界が使えればまだ互角に戦えるんだけどな。

「不意打ちと言われるとあれだから今から攻撃するぞ」

「ウツ!!」

また……

早い……

Side レイリル

「楓!？」

となりでクロノくん叫ぶ。



マスターのバリアジャケットはすでに切り傷でボロボロになり楓の目からも光が消えていた。

雨宮楓 L I F F E 4 5 0 0

クラッシュエミュート 全身切創

オウド・カレン L I F F E 6 2 0 0

クラッシュエミュート 左腕打撲

「楓・・・大丈夫なのか？」

「マスターもうまくやってる。自分より実力のある相手と互角以上の戦いをしている。これはいい兆候かもしれない・・・」

「兆候？」

「今までマスターは戦うべき相手の力を知って、それから身を守れるように戦ってた。けどこの戦いは違う。未知の相手と予想を超えた戦いをしている。こんな戦いでは予想や予測は役に立たないわ」

「直感だな」

「何だ。知ってるのね」

「アリアとロツテに教わった。まあ、僕はそんな不確定なもの信じてないんだがな」

「それがいいわよ。直感と言わば最後の切り札」

マスターはもう考えずに体で感じてるんだろ。証拠に避けてはいるが防いでいない。アクイラ剣形態の持ち味、盾で防いで剣で斬ると言うバトルスタンスを捨てている。盾はもはや邪魔とでも言うようにリングの外だ。

戦っている彼女はまだ冷静さが残ってるが、余裕はもうなさそうね。さっきから斬る回数が落ちていく。マスターが与えた腕のダメージがあつて片手でしか刀が震えてないこととマスターのスピードが上がってることもその一因ね。

でも、この勝負長くは続かないわ。

もうすぐ終わる。

Side out

カレンは違和感を覚えた。さっきから手ごたえがなくなってきた。この戦いにより手が痺れ始め感覚が鈍り始めている。だが、まるで斬れてない……

「(……そうだ!? 斬れていないのか!?)」

カレンは大きな勘違いをしていた。カレンの剣技はスピード重視で、見て斬っているわけではない。相手を見た後にその感覚を立体的にイメージし、相手の体を的確に斬り裂く技である。

だが、この技の欠点は早く別の個所に何度も斬りつけるだけにその手ごたえは薄い。よって相手に数回攻撃を避けられても、すぐにその異変に気づくのが遅れるのだ。

よってもうカレンの攻撃は楓にはほとんど届かない。

しかし、楓の体力も3000をきり意識の混濁が現れていた。

「（血を抜きすぎた……）」

クラッシュエミュレート 出血多量

カーン！！

そして意識混濁の中インターバルの鐘が鳴った。

## 91話 剣士と剣士（後書き）

「DJ雨宮の今日もお疲れさん」

はやて「久しぶりのコーナーや!!」

DJ雨宮「テンション高いな」

はやて「だって・・・ただでさえ本編での出番も最近ないのに・・・ましてやこのコーナーに出れなくなったら私・・・」

DJ雨宮「急に卑屈になったな」

はやて「そつや・・・私はいらん子やもんな・・・」

DJ雨宮「落ち着け。はやて。進行のお前がそんなになったらコーナーが進まないだろ。テンション上げようぜ」

はやて「そつやね」

DJ雨宮「では、はやて進行を」

はやて「もうすぐインターミドル編も佳境です」

DJ雨宮「以上」

はやて「いや!?!お知らせとか無いんかい!?!」

DJ雨宮「作者英語赤点です。終了」

はやて「終り!？」

・次回予告

限界のギリギリに行く楓。

そんな楓を突き動かしたのは？

次回『あんた達に言われなくても分かってる』

92話 あんた達に言われなくても分かってる

Side 楓

「……………せ……………お……………」

ん……………声が聞こえる……………

「……………せ……………おき……………」

とても温かいものを感じる。

「先輩、いい加減起きてください」

顔に熱湯がかかるのを感じた。

「熱ッ!? 顔が焼ける!!! 融ける!? 消えてなくなる!?!」

「大丈夫ですよ。ただの熱湯ですから」

「ただの熱湯ですから……………じゃないだろ。軽く火傷するぞ!?!」

「そんなご謙遜を」

「してねえよ!?!」

「漫才はそこまでにしておけ」

鍼さんが割り込んできて話を区切る。

「まったく。先輩を弄るのが最近の趣味なのに……」

「お前……俺が上司だってことを忘れてるだろ」

「いえ、いえ。上司だからこそですよ」

「余計たちが悪いわ!？」

「それで先輩。意識はハッキリしてきましたか？」

「ん？ああ、そう言えば気を失ってたのか……」

俺は自分のバリアジャケットを見る。

「ボロボロだな」

「だが、そうでもないとお前はあのスピードに追いつけなかっただろ?」

「はい」

あの早さは見るだけで追いつける物じゃなかった。

早いと言う点では、フェイトやトーレも同じだけど、この2人と違う点はフェイトとトーレは早さを追求するために装甲を犠牲にした。ただカレンは早さを追求するために攻撃力を犠牲にした。だから戦い方がそいつらとは全く違うのだ。

「肉体限界さえ使えたら……」





もういいや。この人はこういう人だ。

「今朝から封印を解いたってどういうことですか」

「前回の試合を藤林から見せてもらって考えた。お前は2回で負けるとな」

確かに俺も恐れてはいた。

「お前はお前の全力をかけて一回戦のブルタゴン？」

「鍼さんブルームです」

「そうだったか？まあ、そいつとの戦いでお前がオウドと戦っても勝てないと直感で分かった。だから俺のポリシーには反するが全力でお前が戦えるように」

「そうだったんですか」

「まあ、それでもここまでの力差だとは思わなかったがな」

「でも、まだ勝ち目はあるんじゃないんですか？」

司がいつもと変わらない顔で話しを始める。

「先輩の肉体限界は常時開放型のスキルです。だからさっきの先輩は限界で戦っていました。でも、肉体限界の二つ目の力に、限界突破があります。それと大技を融合させれば先輩の勝ちも見えてくるでしょう」

「だが剣だけの戦いでお前の大技も目に見えてるのが問題だな」

俺たちは行き詰った。ここで繰り出せるような技がない。

「済まなかったな。俺は安定した戦い方を求め、お前に大技を教えなかった」

「先輩。いまさらですがあの約束は……」

司の言いたいことも分かる。だけど……

「俺は……」

俺がそれを言いかけた時後ろに2人の影が立った。

「その必要はない」

「そつちの方面では私たちがカバーしたからな」

その2人は……

「璃玖……シグナムさん」

「まったくお前は……」

璃玖が俺に呆れているのか頭を押さえている。

「私は今回の試合嫌いじゃないぞ」

そうでしょうね。むしろ自分が戦いたいんですよ、あなたは。

「でも、お前の試合だ。我慢する」

あたりまえです。

「それより楓。勝つ方法は見つかったのか？」

「何当たり前のこと言ってるんだよ璃玖。俺作戦の一つも二つも考えてない訳ないだろ？」

俺は憎たらしい顔をしながら笑った。

「いつまでも勝ちに固執する。それでこそ俺の惚れ込んだ男だ」

「気持ち悪いから惚れ込んだって言わないで！？お前は強い奴が好きただけだろ！？」

「ふ、そう言うことにしておく」

「だから含みがあるセリフ言っな！！」

「済みません」

俺が璃玖にツツコンでいると大会の人が俺を呼びに来た。

「そろそろ準備してください」

「こんなこと言ってる間にインターバル終わっちゃったじゃねえか！？」

しかも、全然休めてない!?

「ホント先輩の知り合いはみんなこんな人ばかりですね」

人のこと言えないけどな。

「でも、みんな来てくれてありがとう」

「楓」

「雨宮」

「小僧」

師匠たちが最後のアドバイスをしようとするが俺はそれを制止した。

「言わないでくれ。あんたたちに言われなくても分かってる」

俺はそう言ってリングに向かった。

Side out

「遅かったな」

カレンが待ちわびたかのように立っていた。

「悪いな・・・」

「構わんよ」

「それじゃあ決着を付けるとしよつぜ」

「そうだな」

そして、俺たちは武器を構えて……

「うらああああ！！」

「はっ！！」

2人の最後の戦いが始まった。

92話 あんた達に言われなくても分かってる(後書き)

・次回予告

再開し戦い。

その結末は最後の1撃に委ねられた。

次回「受け継いだ力」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9994m/>

---

魔法少女リリカルなのは～正義の味方～

2011年12月11日16時49分発行